

第拾四年 第七號


東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候に〻小包郵便にて發送仕ろ可く候尚は註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覧被下候様希上候

新意匠

羽衣コートの御披露

一羽衣コート甲種金二圓六十錢以上

一羽衣コート乙種金一圓九十

各種

御望の方ハ御報次第說明書并に[illegible]



一呉服物一式并ニ御禮式御衣裳

其他新柄仕立ト本ノ服品々

一男女御袴 寸尺別ニ調製有之候

東京市麻布區飯倉町四丁目

發賣元 萬長呉服店

電話新橋千百六十七番

日本海・ショー

クイーン水

日本陸・ショー

クイーン白粉

本品ハ原料ヲ英國ニ仰キ精製シタル高尚優逸ナル他ニ比類ナキ絕品ニ御座候

東京日本橋區新和泉町

輸入發賣元

花陽堂

取次所ハ至ル所小間物化粧品店ニアリ

女鑑 第拾四年 第七號 目次

女學校……一一六

雜錄……一二六

小說……一五六

文林……一七三

教の庭……一七七

彙報……二〇八

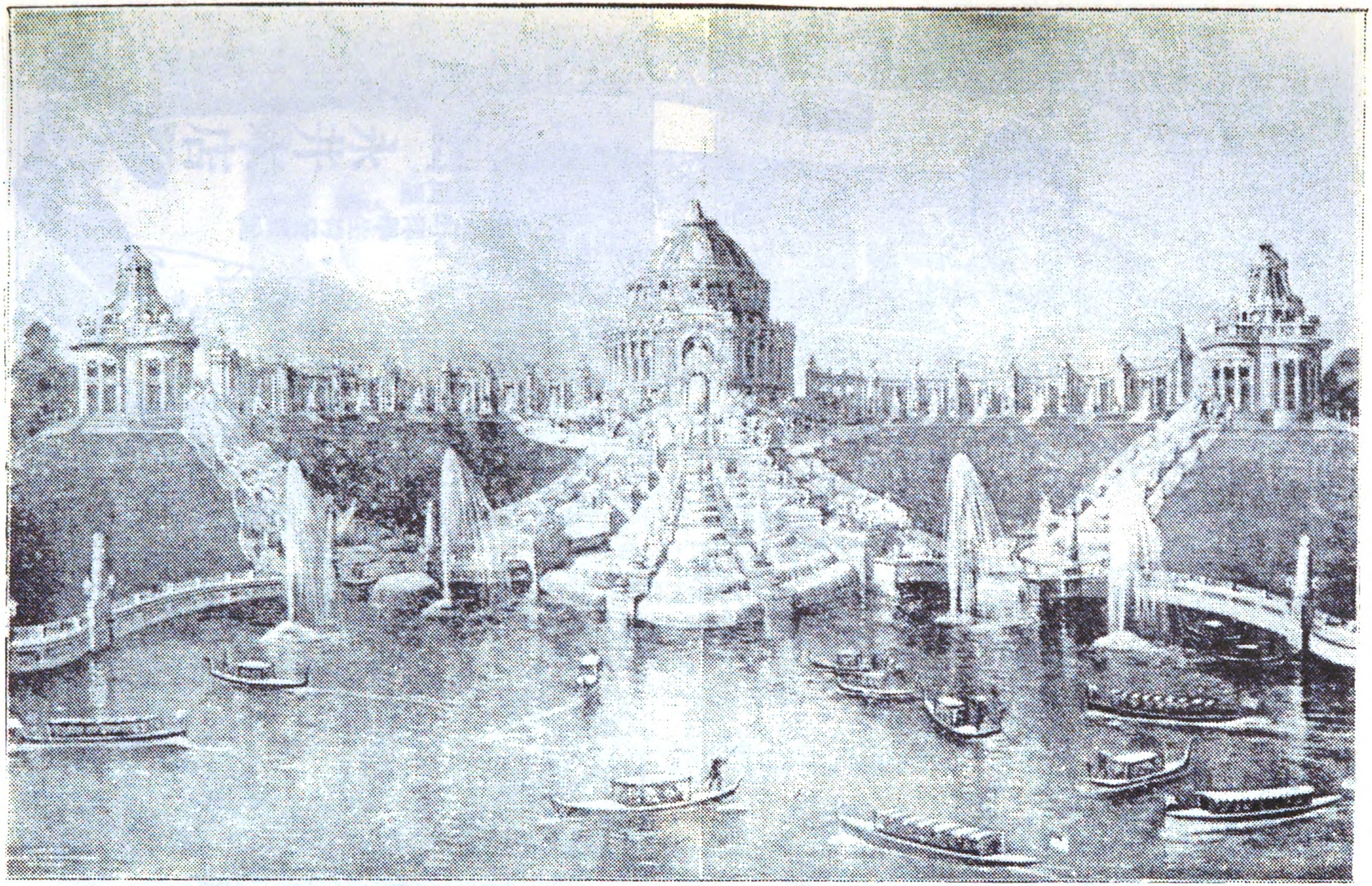

小町印
商標
帝都斯業界
唯一の受賞袴
價格比極て低廉なると親切を主眼と致します
小町印學生袴發賣元
御問屋
永井本店
東京神田區南神保町二番地
卸小賣部
永井支店



第一師團長伏見宮貞愛親王殿下



妃利子女王殿下



聖路易萬國大博覽會場の噴水池

マギー夫人の家庭

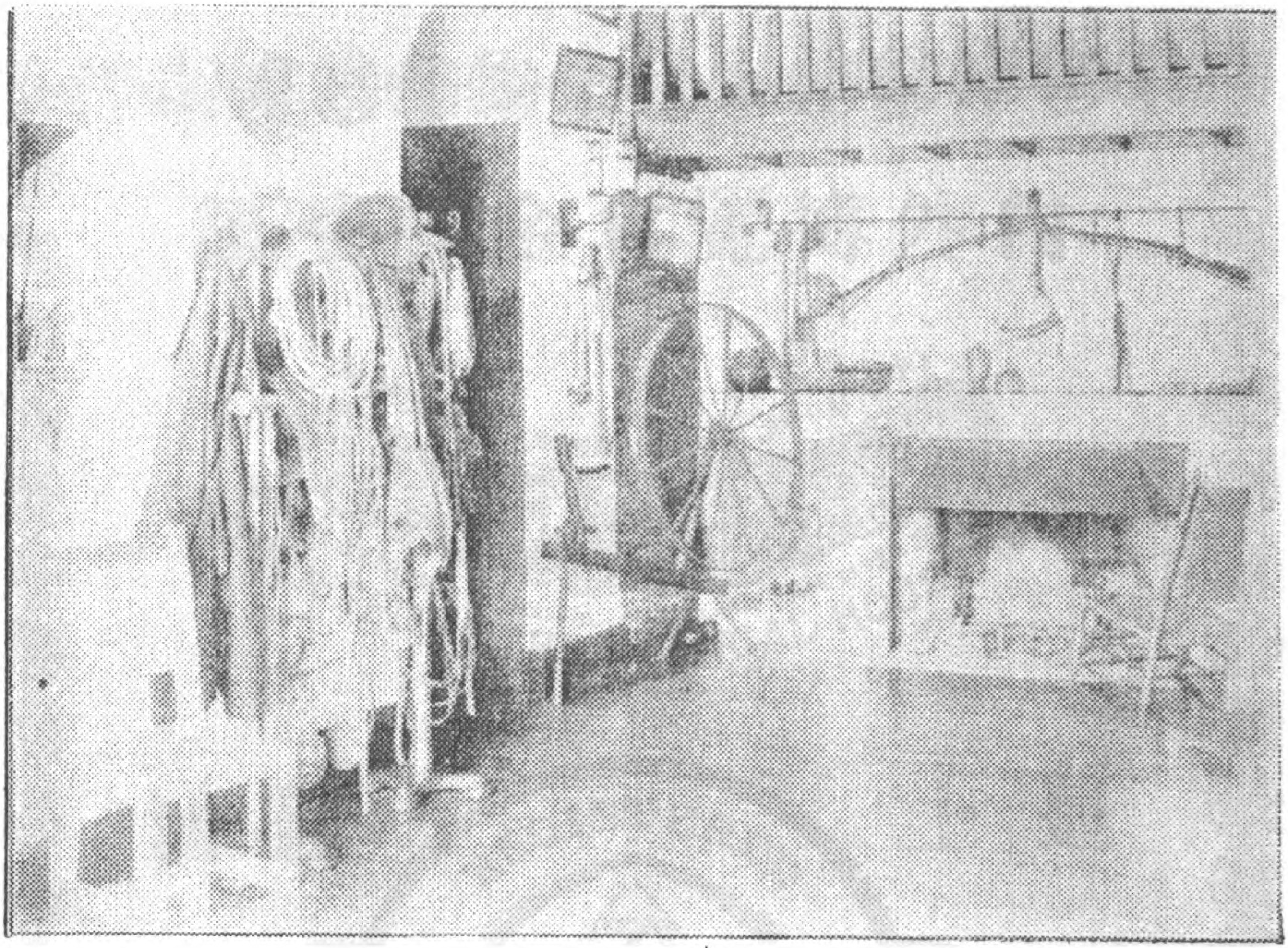


（上列は夫人の父母、下列は夫人夫妻なり）

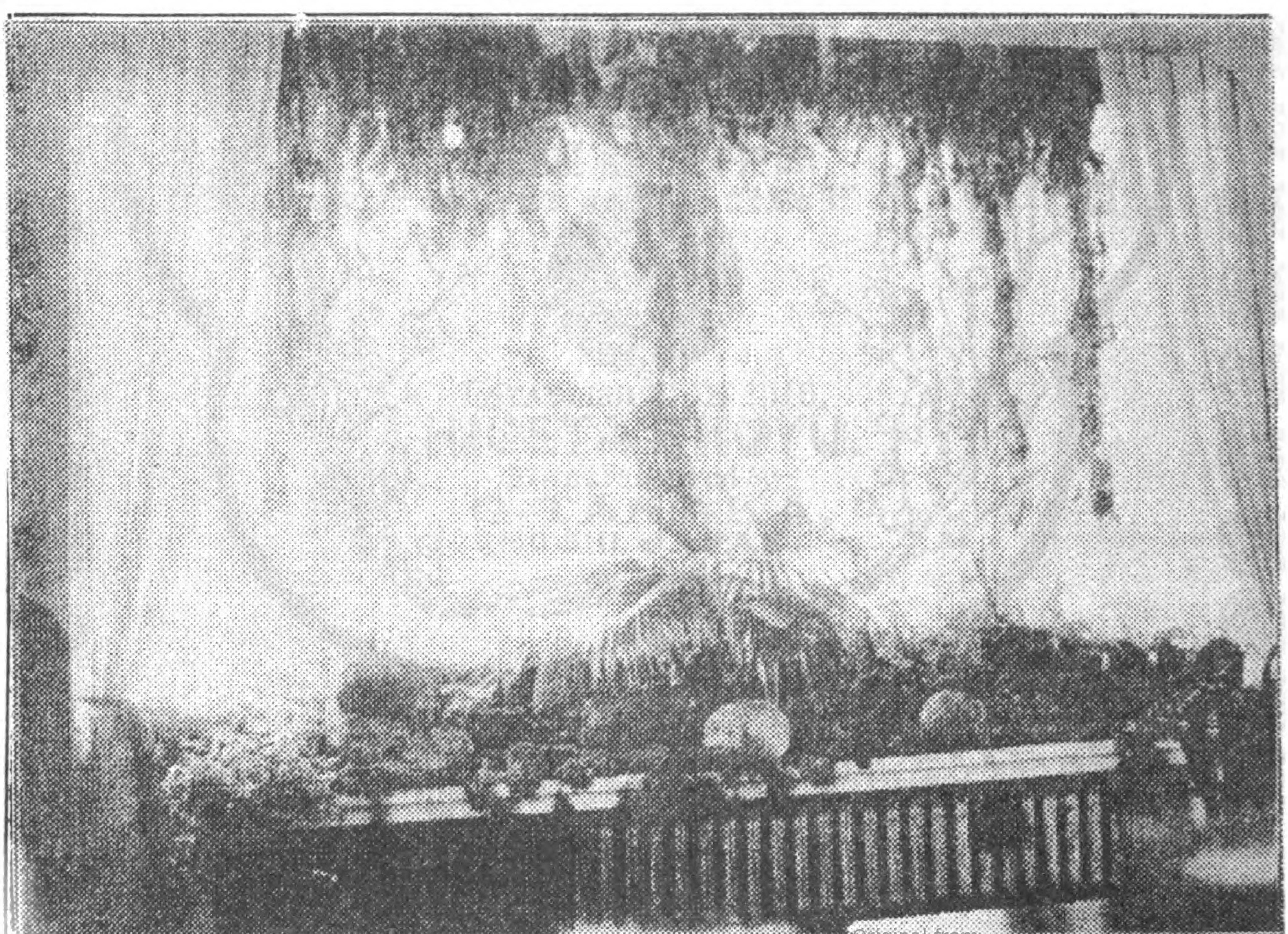
マギー夫人の邸宅



マギー夫人邸宅の玄關



庭園



●家●庭●の●良●友

割烹大家 赤堀峰翁
日本女子大學教授 赤堀峰吉
東京女學館教授 赤堀菊子 共著

家庭 十二ヶ月料理法

和装美製全二冊
定價
上 上巻金五十錢
下 下巻金五十錢
郵税一冊ニ付八錢

新刊

本書は著者が多年各女學校に於て實地に教授せる本料理法及菓子製造法を詳密に記載せるものにして普通一般の料理法は勿論日常の**惣菜料理懐石料理、儀式的献立、祝祭節句料理**に至る迄各四季十二ヶ月に分ち家庭を主とし貴婦人令孃が實地に試み得るやう懇切に説明を施し又**漬物加減法、食物原料論、食品の説明**及**分析**等をも示し且つ行文努めて平易なるを以て如何なる人と雖も一度本書を繙かば直ちに著者に親炙して傳授せられたると異なる事なし

龜屋主人松本新造著
● 増補日用 **西洋料理法**
洋装全一冊 正價金四十錢 郵税六錢

華族女學校教授 小野鷲堂編並書
● 増訂 **女子手紙之文**
和装全一冊 正價金四十錢 郵税四錢

關根正直著 坂正臣著並書
● 新刻 **筆のゆきかひ**
和装全二冊 上下各金四十錢 郵税各四錢

落合直文君 小野鷲堂書
● 女子消息 **雁のゆきかひ**
和装全二冊 上下各金四十錢 郵税各四錢

發行所 東京日本橋通一 **大倉書店** 電本一四一四番

第五回博覽會褒賞受領



登録商標 八

小兒虫一切のお藥

本方奇應丸

東京市京橋區銀座三丁目

發賣元 松澤商店

賣捌所諸々藥店賣藥店にあり

登録商標

月やはらひ

回春通經丸

定價
一日分 金六錢
三日分 金十五錢
七日分 金三十錢
二週間分 金八十錢

◉主治効能 第一氣血を養ひ腹中を調へ婦人血の道月經不順によし。月經閉止五ヶ月或は一二年に至たる者。血塊病と唱へて數年月經を見ざるもの。處女年頃に至りて經水を見ざる者。產後汚血滯りて腹痛する者。等に大効あり亦顏色あをざめ氣ぶんふさぎ。或はながち血おり血の後及び病後身體おとろへたる者小量にして持藥に服用すべし

○此御丸藥舊來は御婦人方月經不順を患ひ毎月上旬に御服用被成通稱朔日丸と唱候得共今般一層製錬に改良を加へ廣く發賣致候間舊に倍し御信用の程奉希候

東京市兩國米澤町二丁目一番地藥舖

調劑所 本舖 萬珠堂 吉田安五郎謹製

此回春通經丸各地有名藥店に悉く差出し有之候間名標等能々御改の上御需を乞ふ

本年九月入學セシムベキ當校私費數學物理化學專修科生二十六名ヲ募集ス入學志望者ハ來八月廿五日マデニ願出ヅベシ尚詳細ハ五月二十四、五兩日ノ官報又ハ當校ニ就キ承知スベシ

明治三十七年五月

女子高等師範學校

金製指環

●川端玉章先生考案並畫

●加納夏雄先生考案並畫



●一號ヨリ八號ニ至ル十八金目方三匁付片切彫刻價十八圓ヨリ二十三圓迄●同十八金目方三匁付平象嵌入價二十三圓ヨリ二十九圓迄●同二十二金目方三匁五分付片切彫刻價二十五圓ヨリ三十七圓迄●同廿二金目方三匁五分付平象嵌入價三十一圓ヨリ四十七圓迄(市外遞送料金廿錢)

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地

●電話番號新橋三百三十三(長距離加入)

時計寶玉類貴金屬美術品及銃砲火藥商 天賞堂

天賞堂出張所々在地

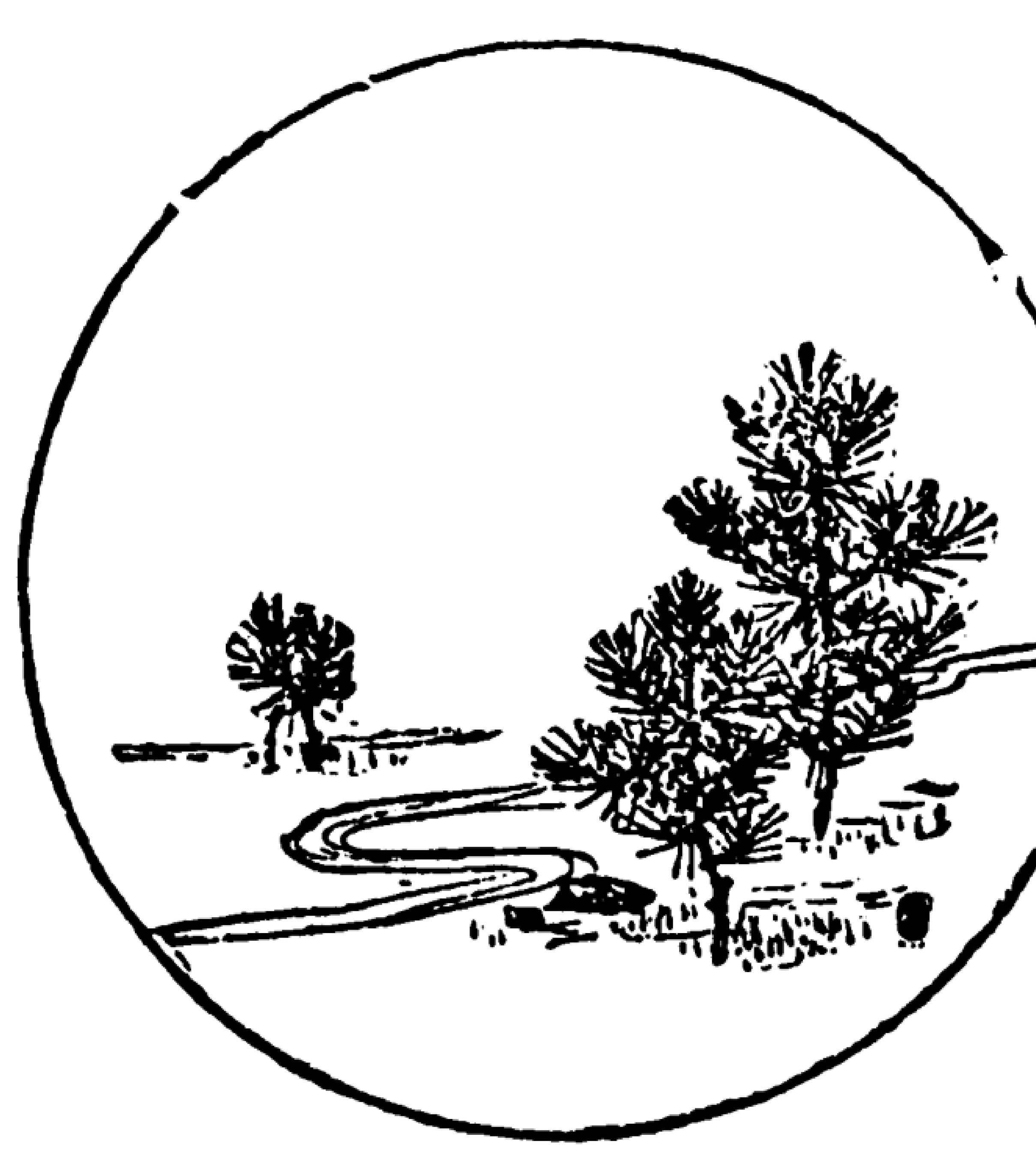
●東京市神田小川町●横濱市●名古屋市●大阪市●廣島市●熊本市●長崎市●小樽臨時

盃類圖案一班

(金、銀、輕白金、白銅、安質母尼杯及木盃製作應用)

●玉田先生畫

稚松細流圖



生誕ノ祝賀若クハ還暦ノ祝賀ニ適用ス

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地

時計寶玉類貴金屬美術品及各種銃砲火藥商 天賞堂

(特電話新橋三三三)

天賞堂出張所々在地

●東京市神田●長崎臨時●名古屋臨時●大阪市●廣嶋市●熊本臨時●長崎卅●小樽臨時

●無料贈呈 天賞堂營業一覽(送料四錢)

村田陸軍少將夫人千代子

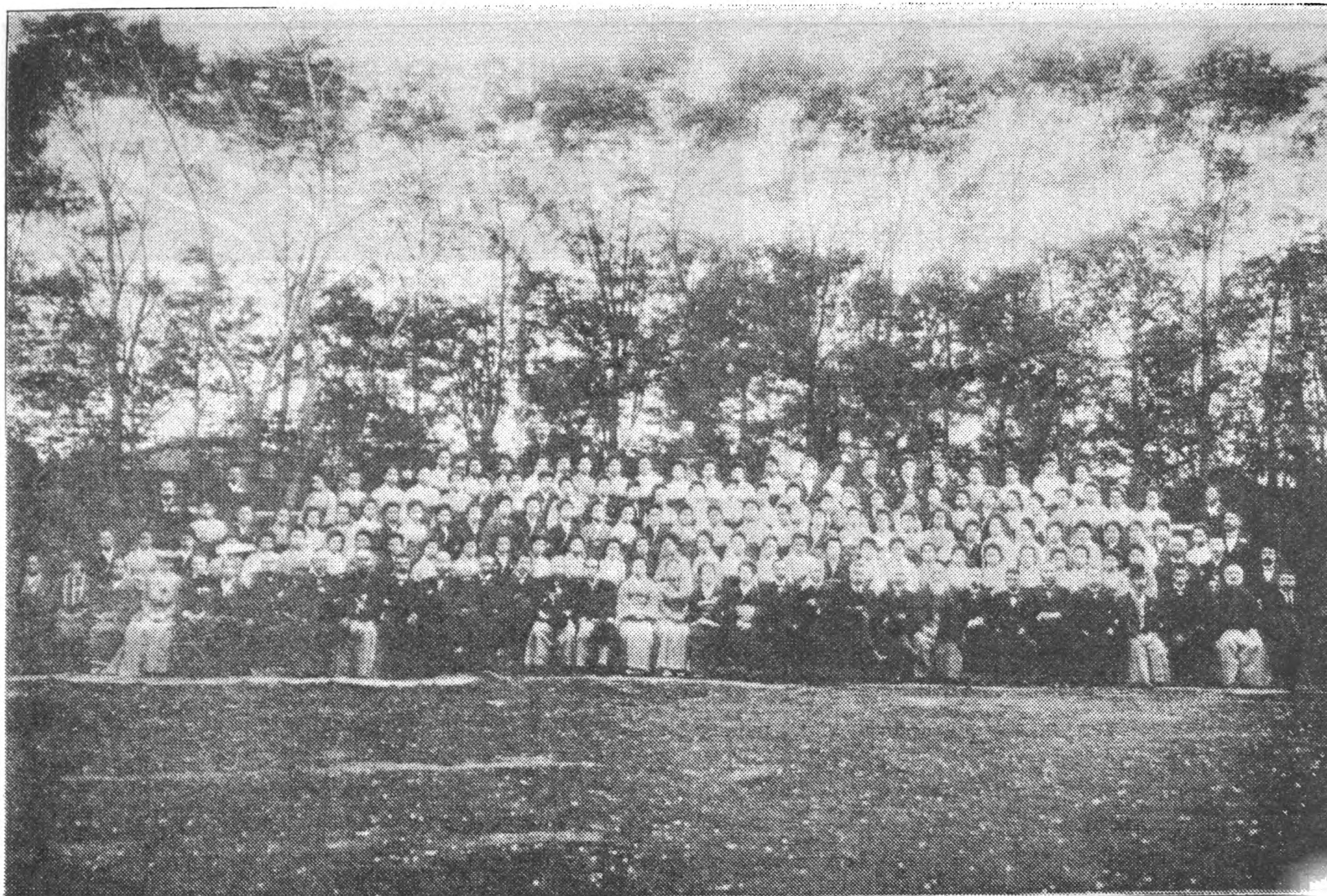




令孃糸子



村田少尉



日本女子大學第一回卒業生及職員並創設者諸氏

宮中御歌所寄人　中邨秋香先生新著

古今集詳解

（最新刊）

美術的製本 和裝　全四册

巻壹巻貳製本既成

巻一 序 春 定價卅六錢 郵税四錢　巻二 夏、秋、冬、賀、雜、別、羇旅、物名 定價四拾四錢 郵税六錢　巻三巻四續刊

本書は國文界の泰斗中邨秋香先生が多年の研鑽になりたる大著にして、詞に顯はれたる一首の心、詞の組合せ、風調、語勢に依て生する餘情等を懇切に説き分け、一首の妙處を示したる、古人未發、未曾有の解釋、一讀忽ち歌の秘訣を悟るべく而も講義筆記體總振かな付にせられたれば、國歌國文初學者は勿論我國文學の花を味はんとする者は是非一讀すべき也

中村邨秋香先生新作
小野鵞堂先生浄書

新編手紙

木版半紙摺男女各一冊定價四拾錢郵税四錢

（男子用）

女子消息文乃ちらし書

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用文題百餘程を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

中村邨秋香先生著

文鑑 手草の錦

菊大判三百頁余和裝定價五拾錢郵税八錢此書は中邨秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中、金玉の響あるものを抄録せられしが、積んで數十巻と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論説、消息、物語體等無慮數百編を撰出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、殊に上段には要語數萬を載せ作習の模範と應用とに供せられたるは他に其比を見ざる最良の文鑑なり

發兌元　東京市日本橋區箱屋町　前川文榮閣

新學期開始



自宅

獨習

高等小學卒業生の中、中學校入學の希望を有し乍ら、色々の都合で志を空くする者は日本中で每年二拾萬人も有るです、此等の人々は獨習で講學が出來たらさぞ滿足であらう然らば適當の講義錄を撰む必要がある世間で中學の講義錄は隨分多い乍併教育の考へなき學者の手になりて中學教育の特殊の目的に頓着せず生徒の心力を斟酌せず統一なく、興味なく殆ど教科書の分本の樣なのが多い、中には拾數年前の講義を其儘配て學術日進の勢を更に顧ない者がある本會は以上の諸件に鑑みて最進步せる形式により、最も完全に文部省所定の中學科を修學させる爲に其の講義錄を發行するのである

國民中學會

會員募集

▲本會講師は文部大臣直轄なる**東京高等師範學校**の中學教育を擔任せらるゝ先生方なれば會員諸君は實際此の全國の**模範學校**に入りて**文部省**所定の中學課程を修むると同樣の教育を受くる事を得▲講義が判り易く興味があつて**獨習用に極めて適切**なり▲學術と教授の方法が最も進步したる者なり▲**科外講演**、**論評**、及**雜錄**の欄を設けて各科講義の外、朝野學者名士のなせる青年國民に稗益ある教訓論議を掲げ興味饒かなる雜誌的材料を滿たし**文林欄**、**俱樂部欄**ありて練文交詢に便し尤も完全進步せる中學講義錄と**有益多趣味なる青年雜誌とを兼しむ**是れ幾多講義錄中**本誌の獨特**▲此の際特に**日露戰報**の一欄を設けて**壯快なる戰況**を報導す▲本會の會費は他のものに比し**最も低廉**なり

▲學期を三學期に分ち各期每年四月に始り翌年三月に終る▲入會金參拾錢會費每月卅五錢▲講義錄は每月二回發行▲修業證書卒業證書を與ふ▲自由に質問する事を得▲壯麗なる徽章と帽章とを送る▲特待生及優待生の特典あり▲見本第一號に限り拾錢郵券にてよし▲詳細規則は最寄の高等小學校長に問ひ合すか又は直接に本會へ申込め無料進呈

東京本鄉區湯島六丁目七番地

大日本國民中學會

● 新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍增し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり(附錄)腐敗酒直し法、醬油參倍增法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變する法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案內……右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あるを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に倣せて怪しき無効の偽法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して偽傳者に欺かるゝこと勿れ……(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授產館**

● 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくくだし 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ケ月間滯りたる月經にても忽ちキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似偽藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



● わきが（腋臭症）根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事(電話下谷五四六番)以上貳藥

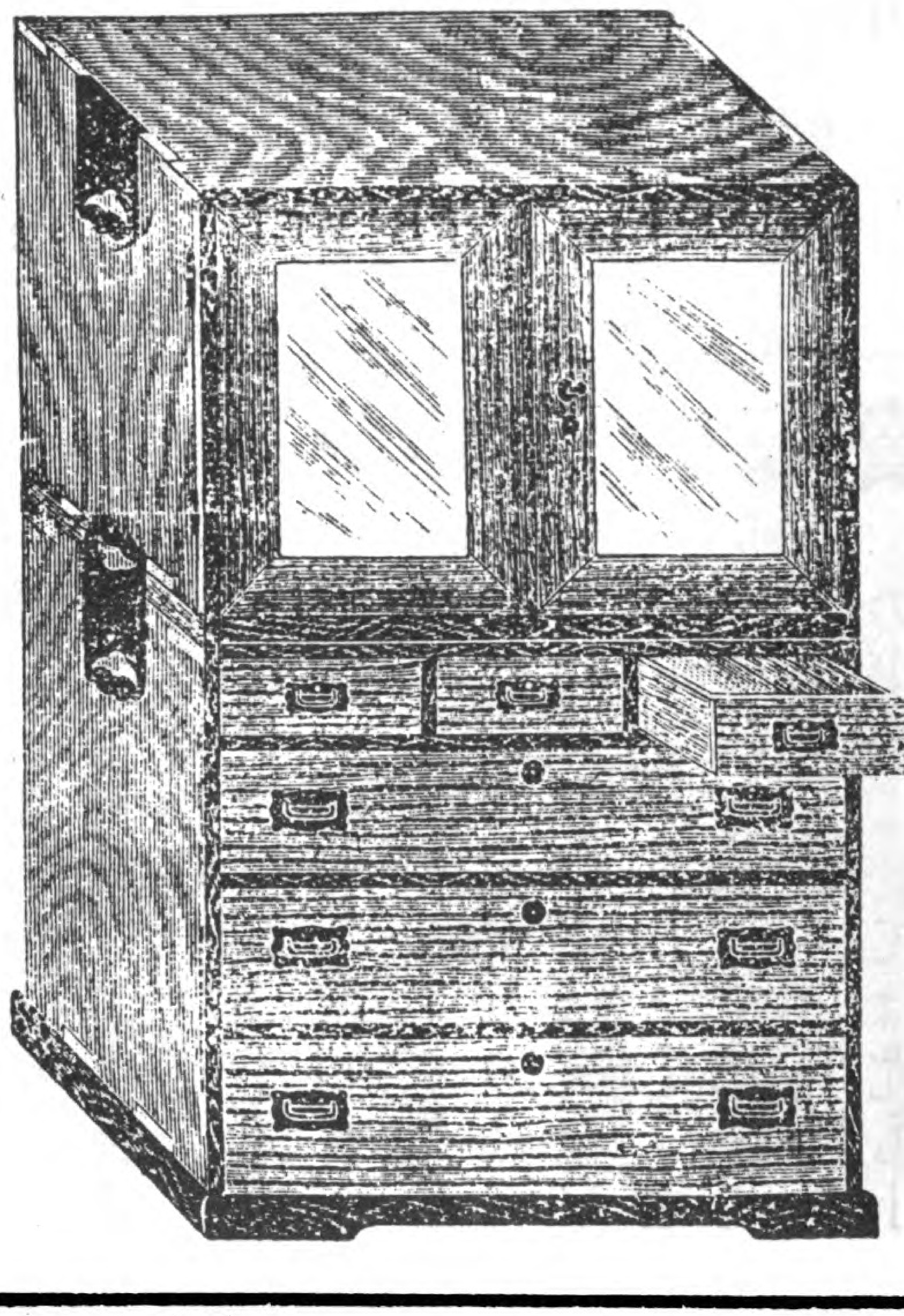
專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

第五回内國勸業博覽會

賜二等賞銀牌

簞笥御注文の御思召ある御方には完全美麗なる「たんす」
目錄御申込次第進呈仕候（但し郵券二錢封入の事）

簞笥長持
御婚禮用
道具一式
入念調製



東京本店

東京市京橋區水谷町一番地角

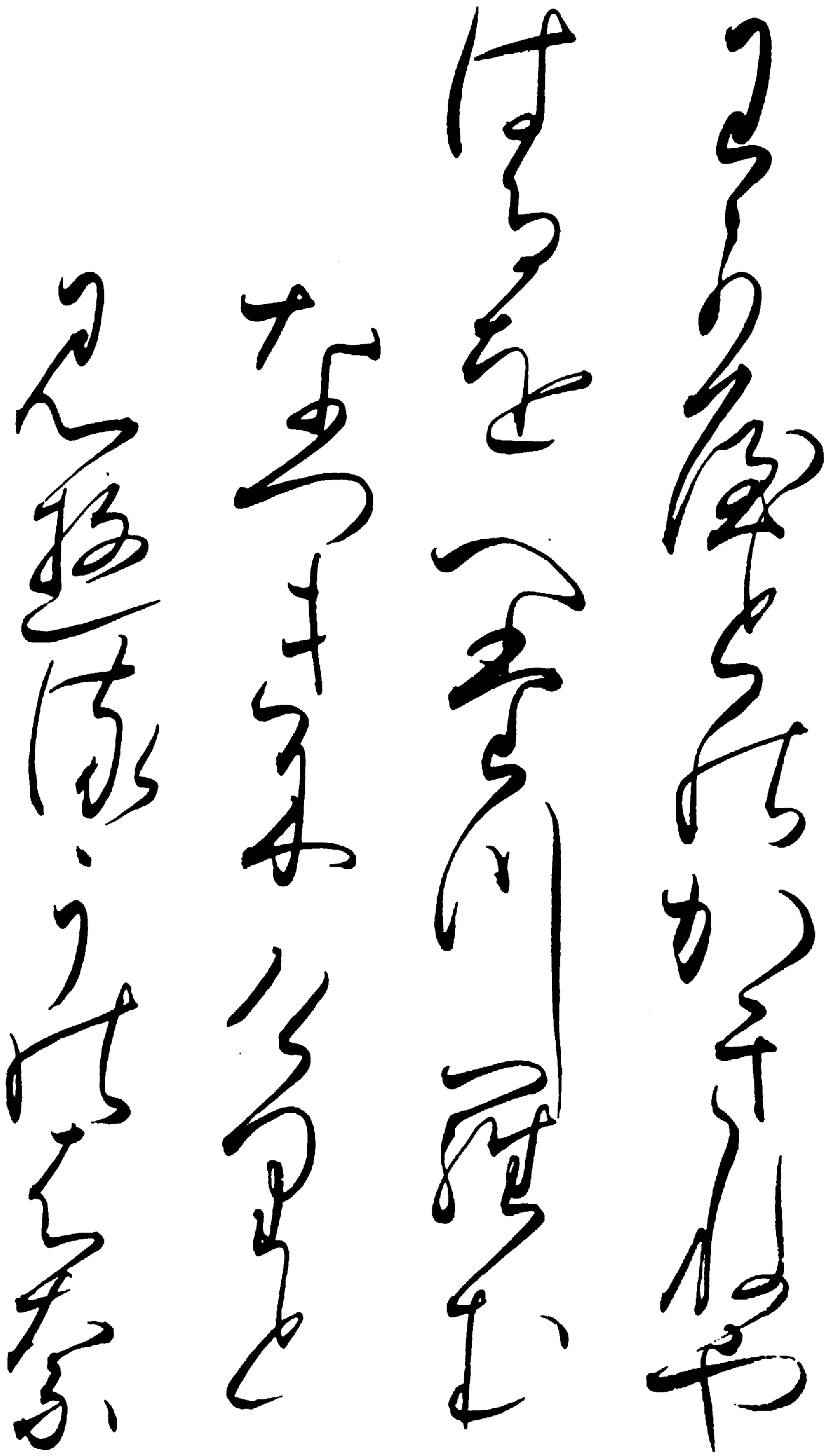
鷲塚簞笥店

（越中屋號）

（電話新橋五百七十一番）



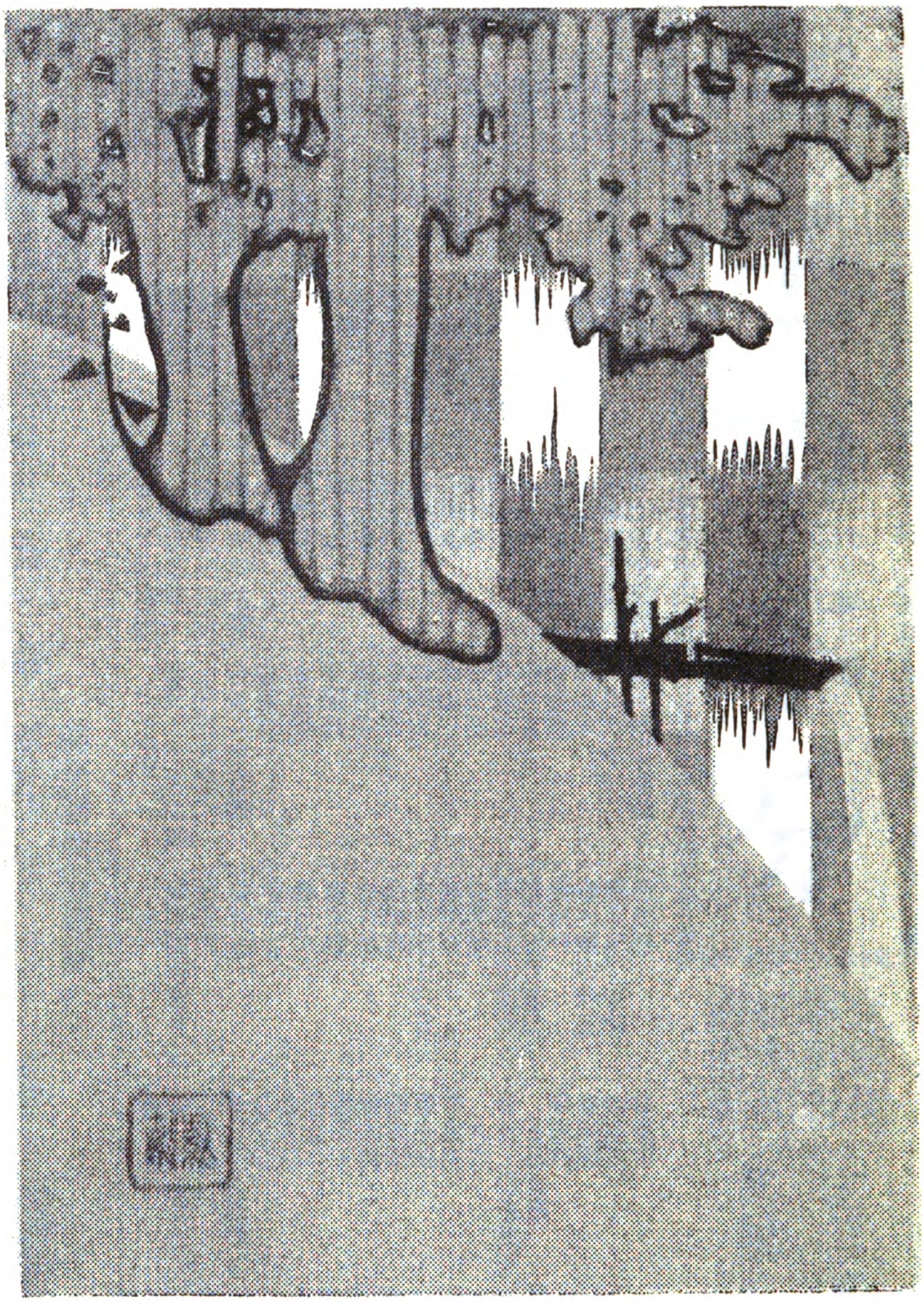
愛國女學校職員並卒業生



宮里三木枝子書

京都

岡田紫郎寫



吉丸文學士編

名家修養談叢

○哲學者の進境及一貫の精神……文學博士　井上哲次郎
○數學的智識の必要……島田三郎
○常道論……文學博士　元良勇次郎
○日本の人種の言語……法學博士　田口卯吉

菊判洋裝美本全一冊
定價卅六錢郵税六錢

○快樂……文學博士　加藤弘之
○善良なる市民……安部磯雄
○吾人青年の三大急……農學士　志賀重昂
○苦學生に告ぐ……文學博士　村上專精
○言論文章に就て……島田三郎
○國民氣質と英吉利風……文學士　山田一郎
○青年を誡む……文學博士　加藤弘之
○學問、出身、目的、手段……島田三郎
○兩極主義……文學博士　藤井健次郎
○苦學……文學博士　根本通明

○實學……島田三郎
○無窮的進步……海老名彈正
○讀書と修養……松村介石
○進化論と現今の日本……元良勇次郎
○ベーコン、ルッソー、及びバーゼドーの教育思想……尺秀三郎

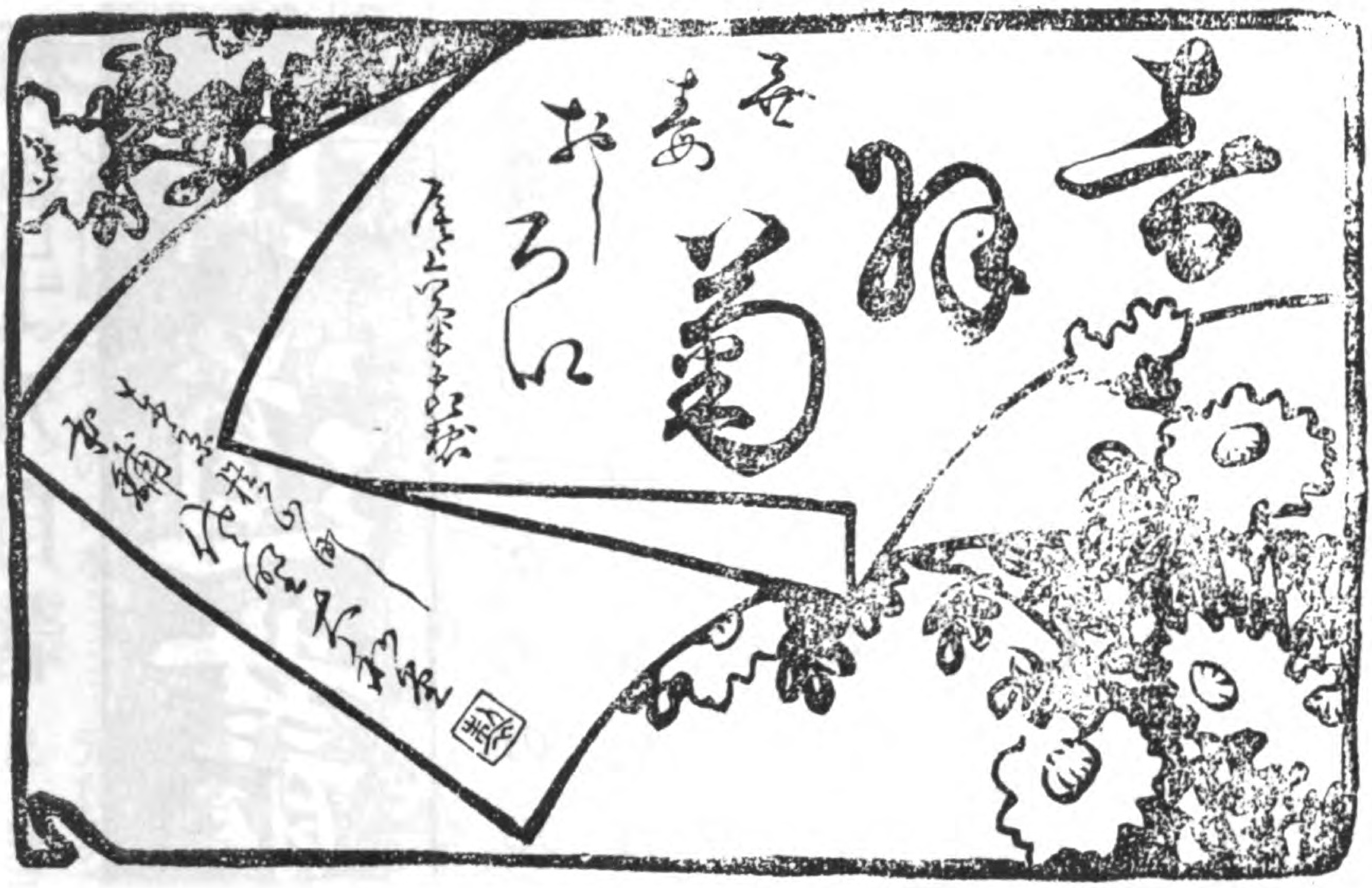
○歷史的國民と非歷史的國民……獨逸文學博士　長瀬鳳輔
○慾望……文學博士　元良勇次郎
○苦學生に望む……片山潜
○福澤諭吉翁……島田三郎

東京築地　國光社發行

小松宮彰仁親王殿下題辭
内務大臣内海男爵題辭
前内務大臣樺山伯爵題辭
賞勳局總裁大給子爵題辭

内務大臣官房編纂
明治國民龜鑑

菊判大和綴美本紙數一千餘頁
口繪授賞者肖像徽章石版色刷挿入
定價金貳圓郵税十五錢





定價•金五十錢•金廿五錢•金十五錢•金十二錢

女鑑
第拾四年
第七號

日本武士と女子教育

都下の某女學校生徒が、頃日軍人袋といふを製し、之を恤兵部に献納して、軍隊に贈りたるに對し、某艦長が、其學校に寄せたる謝辭を見るに、洵に予輩の意を得たるものあり、其辭に云ふ、謹みて諸嬢の厚意を感謝す、願ふに吾等軍人たるものは、唯一死を以て國家に報ゆべきなり、諸嬢幸に學を修め德を研きて、忠良なる第二の國民を作り、以て吾等の後繼者たらしめよと、其語は簡なりと雖も、其意は甚だ深し。矧んや今日に當りて、之を軍人の口より聞くに於て、特に一層の感懷を催ふさゞるを得ざるなり。

それ第二の國民といひ、後繼者といふものゝ、國家の盛衰、國運の消長に大なる關係を有することは、古今東西の歷史の明示するところなれば、今茲に之を云ふの必要なしと雖も、第二の國

民たり、後繼者たるものを作るは何人の務なる乎、又如何にせば之をして健全なる發達を遂げしむるを得べき乎に就いては、一般の女性、殊に將來國民の母たるべき女學生に向つて、深く反省を求めざるを得ざるなり。今某艦長が、一死殉國の志を抱きながら、猶ほ身後の希望を女生に囑したるの意は、蓋し之に外ならざるべし。

然らば第二の國民を作りて、現代國民の後繼者たらしむるに於て、最も直接の關係を有するは何人なるか、是れ云ふまでもなく一般女性ならざるべからず、子を產むも女子の務にして、之を育つるも亦女子の務なり。而して之を生み之を育つるは、即ち第二の國民を作りて、後繼者たらしむる所以なり。去れども唯產むといひ、育つるといふは、未開野蠻の人類も尙ほ之を能くし、人類ならざる者もみな之れを能くせざるなし。否な往々人類よりも多く生み、能く育つる動物もあるなり。さればたゞ生育するといふのみにては、頗る無意味の事たらざるを得ず、無意味の事を以て、文明國の女性に囑望するは、又甚だ無用の事ならざるべからず。故に予輩が玆に言はんと欲するところは、健全なる國民を作りて、忠良なる後繼者を見んとするにあるは無論なり。

兒生れて三歲なれば、母の懷を離るれども、猶母を慕ふて已まざるなり、六七歲に及びて、始めて學校に入れども、朝夕起臥共に概ね母の身邊を去らざるなり。此間に於ける母の感化が、其兒の生涯に及ぼせるもの丶深く且つ大なるは、推して知るべきにあらずや、若し俚諺云ふところ

の如く、三ッ子の魂百までならしめば、他の凡ての大小學校の教育よりも、社會朋友の薫陶よりも、此の僅々の歳月に於ける母の感化の如何に優りたる影響を兒童に與ふるや殆んど疑を容るべからざるなり。况んや兒の體格の强弱は、全く母の健康如何に在るを思はゞ、母の兒に及ぼす責任の一層大なるを知るに足るなり。又た善良純潔なる家庭が、兒童教育の上に於て、甚だ必要なりといふも、畢竟するに、家庭の主人たる母の言語動作が、家庭の樞軸となりて、日常百般の上に顯はれ、遂に一家の風習を養成し、知らず識らず兒童に薫染して、其の一生を指導するを謂ふに外ならず。而して此の兒童は實に第二の國民にして、即ち現代國民の後繼者たるを思はゞ、女子が間接に國家に及ぼす關係は、實に畏れ且つ恐るべきものあらざらんや。

兒童の母に於ける關係の深甚なると斯の如く、而して其の兒童は則ち第二の國民なりとすれば現代の國民が、女生に負ふところの至重なると共に、女生が第二の國民に對する責任も亦至大なるを知るべきなり。是に於てか、賢良なる女生教養の必要生じ、隨つて女子教育の必要を感ずること、最も多大ならざるを得ず。若し女子教育にして等閑に附せられんか、如何にして賢良なる女子を養成し得んや、賢良なる女子なくして、如何で忠正なる兒子を擧るを得んや、忠正なる兒子なくして、如何で健全なる國民を見るを得べきぞ。

されば第二の國民をして、健全なる發達を遂げしめて、忠良なる後繼者たらしむる上に於て、女

子敎育を隆盛ならしむるは、一般國民の義務にして、又た女子自らの責任ならざるべからざれば父兄たるものは進んで、其の女子をして善良なる敎育を受けしめ、女子たるもの亦自ら進んで、善良なる敎育を受けて、完全なる母となるの覺悟なかるべからず。若し父兄にして、其女子の就學を怠るあらば、則ち其子を誤まるものにして、又國家に對する報効の念薄きものといふべく、女子にして學業を以て、たゞ身を修飾するの具に過ぎずと心得るが如きあらば、自ら輕んずるの甚しきものといふべきなり。

然るに日露戰爭の始まりしより以來、高等女學校程度以上の學校に入學するもの例年に比して其數甚だ少なく、且つ往々中途退校廢學するものもありて、敎育當局者の憂慮一方ならずといへり。是れ獨り敎育當局者のみならず、國民の齊しく慨嘆すべき現象なり。戰爭の一般經濟に影響する結果として、民間經濟も亦影響を蒙むらざるを得ずして、爲めに子女の學資支出上多少の困難を生じたる事情もあるべしと雖も、尠しく眼を遠大にし、その子女をして敎育を受けしむるの結果如何に思到りなば、軍資、恤兵等に關する一時の義擧よりも、更に大なる貢献を國家の將來に爲すものあるを悟らずんばあらざるべし。軍資恤兵は、現時に於ける一時のものたるに過ぎず、女子敎育の結果は、將來永遠に重大なるものあると斯の如くなるが故に、若し戰時たるの故を以て、女子の敎育を等閑に付するが如きあらば、本末輕重を知らざるものといふも、決して辯解の辭

なかるべし。

目下の戰爭が終局を告げて、平和克復の日を見るの時は、果して幾歳月の後に在るか、今之を豫測すべからずと雖も、思ふに三年五年の後にありと覺悟せば大差なかるべく、之が爲めに蒙むるべき世の不景氣は、日に增て甚しきを加ふべきことも推知するに難からざれば、其の結果として民間の經濟愈々逼迫し、社會百般の事を擧げて、今日に陪從せる影響を見むも亦知るべからず。戰爭開始の今日に於てすら、已に前述の傾きありとすれば、一年二年の後に於て、女子敎育の之が爲影響を受ること幾許なるべきか、是れ予輩の尤も憂慮して措かざるところなり。而して戰爭の結果が、吾國の捷利に歸すべきは、火を睹るよりも明瞭なりと雖も、戰爭に勝ちて、敎育に敗を取るが如きあらば、戰捷國民の後繼者たるべき資格ある第二の國民は、之を將來に求むるに由なからん。然らば則ち、如何にして戰捷國の名譽を永遠に維續して、內は國家の體面を保ち、外は列國と相對峙するを得べきや。

要するに、日本武士の精神面目は、千萬年の後にまで傳へざるべからず、而して之を永遠に傳へんとせば、唯劍華砲響の間に於てのみならず、平時に於ても其の威嚴を保たざるべからざるなり。戰爭已に終結して、無事太平の日に至りては、日本武士の精神面目は、愈々平和の事物に顯はれて、列國をして敬畏せしむるに足るものなくんば、如何ぞ國家の强盛を望むを得んや。是を以て

戦時に於ても、平時に於ても、よく日本武士たる資格を有する男子の母を養成するは、今回の戦争に據りて、一層の必要を感ぜざるを得ず。世の父兄たる人々は、國家の將來に眼を注ぎて、子女の教育を重んじ、子女自身亦た其の任責の重大なるを思うて、自ら輕んずるなくんば、今日の日本武士は、その後繼者たる後日の日本武士を得て、長く其の面目精神を傳へ、以て國家の富强繁榮を永遠に保持するを得べきなり。



貴婦人と恤兵事業

論議

石黒男爵述

記者一日陸軍軍醫總監石黒男爵を訪ひ、談時局問題に及び、語次戰時に於ける女流の恤兵事業につきて垂教を請ふ、左に錄するは、當日男爵の親しく記者に語られたる高話の大要なり。

近頃は何處も同じ戰噺で持切て居るが、併し大抵は異口同調で、あまり變つた事も聞えないやうだ。今日は折角の御來訪なれば、氣の付た儘貴婦人の恤兵事業といふやうな事柄に關して少々話して見やうと思ふ。御承知の如く戰時行ふべき婦人方の恤兵事業にも方法が種々あつて、中には金で盡す人もあり、物で盡す人もあり、心で盡す人もあり、力で盡す人もある。いづれも皆國民の義務を盡すことなれば各自便宜な手段を執りて宜い譯である。故に貴顯紳士の夫人令孃なりとて、必ずしも金力にのみ依賴せねばならぬといふ道理はない。例へば恤兵事業にしても、貴婦人方の力や心を煩はさねばならぬ事業が澤山ある。近年愛

國婦人會が出來て、頗る盛になつて來て、事業も着々進むは感心するが、兎に角我國婦人の恤兵事業として始めて端緒を開いたのは、赤十字社の内に設けられて居る篤志看護婦人會といふ一團體であるのだ。此會の創立は明治二十年五月にて、有栖川宮妃殿下の台旨に依り故佐野伯爵、花房男爵、橋本男爵並に拙者などが發起者となり、各宮妃殿下並に三條毛利兩公爵夫人、鍋島蜂須賀兩侯爵夫人を始め、其他二十九名の貴婦人の賛助を得て之を起したのである。然るに會員は二十七八年役及北清事變の際には、鋭意恤兵事業に盡して著るしき効果を奏し、今日に至ては本會の外三十餘の支會を全國各地に設けるやうになつた。又會員中規定の學科を修了せる者昨年末已に六百八十餘名に達し、此外現在の修業者約五百名居るさうである。而して會員の將來益々增殖すべきは自然の勢であらうと思ふ。這回兩陛下並兩殿下より莫大なる御下賜金ありたるは、全く同會既往の功績を御嘉尚遊ばされての御事ならんと察し奉る。予は會の創立の時には隨分熱心に骨を折つたが、事成就して會の盛になりたると共に姑らく隱居して關係しなかつた。然るに先日小松宮妃殿下の台旨に依り、同會の商議員といふものに列する事になつた。又世間には赤十字社に篤志看護婦人會なる團體設けられてある事を知るも、其團體が果していかなる目的の下に結合されたものなるやを解せざる人が多かるべければ、余が先日篤志看護婦人會の總會にて述たことを此にお話しする事は無用でなからうと思ふ。

十八年前篤志看護婦人會を創始した時の趣旨は、

第一　看護婦の位置を高める事に勉める事

我國では光明皇后が看護を遊ばされし歴史はあるが、昔の話として、近くは看護婦といふものは明治維新の戰時に出來始まつたもので、其時の看護婦といふものは頗る賤い身分の者で、病人の小使同様のも

のでありしが故に、看護婦を敬重する風が絶無であつた。敬重するどころではない男の看護人よりも却て之を輕んずる風があつた。隨つて看護婦になる者は身分ある者が少い。其頃獨乙に留學して居た我國の一官吏が病に罹り、伯林のアウグスタ病院に這入つて治療を受けた。然るに看護婦の取扱振はいかにも懇切周到である。偶々見舞に行つた日本の一高官が之を見て痛く感服し、心許りの謝金を贈りたいと思ひ、先づ患者の友人に看護婦の身分を尋ねた。處ろが其看護婦は伯爵夫人なりと聞て、該高官は意外の感に打たれ、迂濶に無禮をしては濟ぬと思ひ、贈金をやめて歸つたさうだ。當時我國の看護婦が、いかに世人より蔑如されて居たるかは、此等の話に依ても略々推測することが出來る。然るに看護といふ事は女子には特有の業であつて、高貴の人でも之を爲すものだといふ事を一般に知らしめるには、先づ階級高き人とか、富豪の人とかの夫人や令孃が此看護といふ事を學び、此看護に從事する時には、必ず看護婦といふもの丶位置が高くなる。高くなればよき人が出來る、此風を興すには高貴の婦人が看護婦になる、看護婦にするのが必要であるが、直ぐ左樣な事は出來ぬから、先づ篤志者を募りて、一種の篤志看護婦人會を設け、之が會員を養成し、又時としては普通看護婦と混用して以て一般の看護婦の位置を高めやうといふ考であつた。

此事は頗る其功を奏した。其證例は妃殿下方を始め、貴婦人が看護婦會に入り、看護の事を御學びになり、又折々實務に從事なされ、又二十七八年役には皇族妃殿下を始め奉り鍋島侯爵夫人其他がセツ〳〵と繃帶を製作なされる。仁禮子爵夫人並に土屋海軍機關大監夫人其他が特に廣島に來り、普通の看護婦の伴に入り起臥を共にして看護に從事されたる故に、一面には患者をして殊に看護婦に對する崇敬の念を起さしめ、一面には一般看護婦をして自重の念を起さしめたのである。又此時に方りて此篤志看護婦

人會員たる小笠原伯爵夫人、田中子爵夫人、裏松子爵夫人其他は殊に捕虜患者を看護されたる故に、外國に對しても、此戰時負傷者の看護といふ事に、我國婦人社會がいかに力を盡しつゝあるかといふ事が明らかにされたのである。

第二　我國婦人の交際といふ事に付ては是非改良を要するが此會に於て婦人交際の一部を改良したき事

此事に付ては、此會に予は毎會出ずに先にも述たる如く、久しく遠かつて居たるが故に、いかに奏効したかは申述られぬが、會創立時の主旨は、普通婦人會の通弊たる衣服の競爭、人の身の上に付ての談話時刻の不正、尊卑の區別、宗教若くは黨派の隔意等を全然除き去て、此會には集るも散ずるも時刻を正くして、其各自若くは夫の身分とか資産の多寡とかいふ事を少しも鼻にかけず、平等一體に懇ろに交りて、衣服は平素の儘各々分限々々に相應した物を着してといふ事であつたが、過日此會を閑院宮殿下の御邸に開かれ、殿下が御喜び遊ばして御邸を御貸になりしも、全く此意に外ならぬので、高貴の婦人方も一定の制服を着て、會員と共に此業に御就き遊ばさるゝに付ても、此主旨は實行されてあることゝ信ずる。

第三　赤十字社の事業を幇助する事

赤十字社の事業は、彼我の患者をして其苦痛を輕減せしむるに在る故に、其資産は益々多くして益々可なり。故に篤志看護婦人會は力によりて、若くは資金によりて、同社の業務を幇助されねばならぬ。例へば普通看護婦なれば日給、食物、衣服を給して看護に從事せしむるに、篤志看護婦人にては固より食物衣服等も自辨にて、また患者慰問の爲め物品を贈るにも、遠方に往て慰問するにも、若くは遠く往て看護するにも皆其自費又は各々から醵出して會に備へたる資金を以て之を辨ずるので、普通社員より集

めたる同社の資金よりせざるを要するのである。

第四　此會に入る人をして看護學を修めしめ戰時患者の看護のみならず平時各々家に在て自家に病者あり たる時の爲に益あらしむる事

此事を教ふるには、會員中には妃殿下始め高貴の御人もある故に、教師たる人は必ず身分のある人でないと適せぬ。温良の人でないと適せぬ。風采もよくないと適せぬ。學識が新しくして高くないと適せぬ。年齢が五十已上でなくては適せぬ。會がまだ富ぬから多額の報酬は出せぬ。そこで足立軍醫監を撰びて同君に此教授を托し、山上軍醫正を副たらしめ、又其教科に付ても種々相談し、負傷者の事ばかりでなく、育兒の事、產婦の事なども加へて講授するのである。

此事は頗る効果を奏したので、現に此會にてよく講義を御聞になつた方々は、其の御兩親や御良人や御子供が御病氣の時にも、其看護は勿論、此の講義を御聞になつた御夫人に對しては、主任醫が誠に目的通りの治療も出來得るし、看護婦も頗る其の看護を致し易いと申して居る。又近い例に、先日鍋島侯爵夫人の御噺に、赤十字病院にて繃帶を製作するに、中には子供を同伴されたり、又はたまたま髮の垢染たまゝの方も見受けたから、誠に其御志の篤きに對しては何とも御氣の毒なりしも、此の繃帶は無毒が主旨だから、此場へ子供を同伴したり、又は垢染た髮のまゝでは、御出席を斷はると申述たとの事故に、予は直に夫人閣下は此講義を長く御聽なされ、よく御了解になつたからこそ、其事が御氣付きなされたのだと申した事である。

第五　戰時には此會を利用して其親族の病床に侍する事

會員の親戚殊更夫とか子とか兄弟の方が、戰争に出て傷を負ひ、又は病に罹りて歸國入院されて居る時

分に、其身に看護學の心得なき人は、親しく病床に侍する事を望んでも出來ぬけれども、一旦之が教成を受けられた方ならば、或事柄までは、醫師又は看護婦に代り、其手を煩はさずに御自分で親しく患者を介抱することが出來る。御互に安神であるばかりでなく、若し看護者不足の場合抔には種々な便宜を與へる効がある。病氣の際にはいかなる勇將猛卒とて親を呼び子を呼ぶのは人情で、看護の素養ある妻女の看護が、奏効著るしき事は疑ふべからざる事である。

已上の主旨で此會が成立したのであるから、會員諸氏はどうぞ此主旨を御忘れなく、御勉强相成たい。又全國の篤志婦人は進んで御入會の上御盡力を願ひたい。石黑も商議員を御受した已上は、折々持前の苦言をば呈上しますだろふ。終に臨みて一言申上ますが、先年予が獨乙の某王國の王室の夜會で、或妃殿下の御傍へ參りました處、其妃殿下が、貴下は何れを經て來たかとの御問故に、維也納を經て來ましたと申上たら、墺國では婦人の粧飾が極めて美麗であつたろふが、我國ではあまり光輝ある飾は好まぬ、併し我國の婦人は仁慈といふ最も美しき物を最も好む、赤十字事業に熱心なる如きは、其一つの徵であると語られた。我が篤志看護婦人會員の諸氏にも、予は直ちに其語を移して望を屬するのである。赤十字事業に御盡しありて、彼の金剛石や、金銀珠玉の粧飾に打勝つことを御心懸あらんことを望むのである。



花明柳暗録

日本女子大學校教授　松浦政泰

◎**結婚の資格**　今や花明に柳暗く、人の心もおのづと春めきて、華燭の典のこゝかしこにいと繁く擧げらる、時期なれば、婚儀に關して少しく言はむに、米國の『青年女訓』といふ書は、結婚の資格につき、七ケ條を擧げ、此内一つを缺ぐとも容易に婚儀を擧ぐべからざることを警戒せり。其七ケ條は、(第一)教育の十分なること、(第二)身體の成熟せること、(第三)意氣投合すること、(第四)健康なること、(第五)體質の異なること、(第六)兒女を擧ぐる心あること、(第七)宗教上道德上の思想の一致すること是れなり。

◎**結婚の目的**　に就て、ライマン、ビーチャー、スパリー氏は、其著『夫と妻』に於て論じて曰く、(第一)理想的結婚の基礎は戀愛なり、電磁氣は無機的なれども、戀愛は有機的なり、戀愛は理學又哲學より古るくして、又理學や哲學の説明し盡す能はざるものなり。又眞の戀愛は、感情以上なり、尊敬以上なり、好意以上なり、嘆賞以上なり、否此等を悉く集合すとも、尙それ以上なり。(第二)結婚の第二の理由は、家庭の快樂なり、新郎新婦自から經營して、清福を享受せんが爲なり。(第三)は子女を設けて、人類の繼續を計ることなり。

◎**結婚期**　同氏は又男女發情期の遲速を研究して、新婦の年齡は新郎のそれよりも、二年乃至五年若かるべきことを斷定したり。而して結婚年齡は、米國にては男子は二十七歲乃至三十歲、女子は二十四歲乃至二十八歲を可とすとは、一般の公論なり。又『女子問答』にも、英米にて最も結果の好良なるは、男子は二

十二歳乃至二十八歳、女子は二十歳乃至二十五歳なりとあり。佛國には早婚流行すれども、統計の示す所を以て判ずれば、二十一歳を最可とせざるを得ず。二十歳以下にて結婚せる女子の、概して短命にして終るは、蔽ふべからざる事實なればなり。

◎婚式●　事の序に泰西に行はるゝ結婚紀念式の事を記さんか。去る廿七年三月九日、九重深き處に、大婚二十五年紀念の御式を擧げられたりしより、銀婚式又金婚式など、漸く都鄙に行はれんとする傾向あれば茲に其名稱を記るすも贅ならざるべし。

△婚後滿一年　綿婚式。△同二年　紙婚式。△同三年　皮婚式。△同五年　木婚式。△同七年　毛婚式。△同十年　錫婚式。△同十二年　絹及リンチル婚式。△同十五年　玻璃婚式。△同二十年　陶器婚式。△同二十五年　銀婚式。△同三十年　眞珠婚式。△同四十年　紅寶石婚式。△同五十年　金婚式。△同七十五年金剛石婚式。

我國の統計年鑑が、金や銀はおろか、皮にも紙にも及ばぬ先に、覆水盆にかへらざる不幸の多きを示せるは將に世界の第一等國とならんとする我國に取て、いと〳〵嘆かはしき事共なり。是れ結婚資格に欠くる所あるが爲か、結婚の目的を熟知せざるによるか、將た又結婚の方法宜しきを得ざるに因るか。或人のいふ如く、これ必ずしも女子が不徳の致す所にもあらざるべけれど「唯責むべきは己れのみ」との格言を守り、以下二三の重なる女徳に關して、少しく述べ、轉ばぬ先の杖とすべし。

◎勤勞●　我國の婦人の缺點は、優柔爲すなくして日を送ることなり。働け働け、骨を粉にして働け、心を砕いて働け。（第一）働は强健を來す。鼻垂れ小僧を背に負ふて、汗水流しつゝ、夫が車の後押をする色黒

の嬌、の體は金鐵の如く、幽閨の裡、香を燒き琴を彈じて、紅帳翠幃の間に起臥する上臈の、清艶楚々風に堪へ難きを見ても、明かにして、心も亦之と同じ(第二)働は發達を來す、右の手の左の手よりも大なるは、其の多く働くが爲にあらずや。都の者は敏快なるに、田舍の者の概ね迂にして鈍なるは、心を働かす機會の少なきが爲にあらずや。働らかざれば何ものも用をなさず。北米のマムモスといふ大なる暗洞中の生物は、終生日光を見ざるが爲に、兩眼終に用をなさずして、蟲蟻も盲目、鮒も盲目なり。(第三)閑居不善をなす、豈に獨り小人のみならんや。閑暇となると、惡念邪情が群がり起るものなり、心は常に働くものなれば善に働かざれば惡に働く、心を養ひ德を磨くといふも、畢竟善き考を心に充滿させて、惡き思を排斥することのみ、道路も踏まざれば草生じ、小刀も使はざれば錆生ず。働け働け、働けば弱き體も強くなり、惡しき心も善くなるなり。『勤めても勤めても又勤めても、勤め足らぬは勤なりけり』。

◎謙遜　家康が人の心得を假名七文字でいへば『みのほどをしれ』又五文字でいへば『したをみよ』といひしといふ話あり。大工が井戸側を造つて居る時、屋根屋を仰ぎ見て『高いのう』と叫びしに、井戸堀が井戸の底から『御前も高いのう』といひしとぞ。實に上に上あり下に下ありて、上を見れば驕慢の罪を犯し易く、下を見れば自から謙遜の德を養ふを得るなり。人は自から高しと思へる時は、其實低しと知るべし。稻の穗を見ずや、低く頭を垂れたるものは、善き穗にしていと美はしき粒の充てるが爲にあらずや。殊に年頃の女の鼻の高きは、挫がまほしき感を人に與ふるものにて、低く兩手をつくこそ、いと優さしく見ゆるものなれ。

◎犧牲　何事にも自から隱れて我物顏に振舞はず、己れを殺して差出がましくせざるは、女の美德にして、石鹼の如く己れは無くなつても、物を潔め世を善くするやう心掛くべきなり。されど倘一歩を進めて、人

の罪をも己れがかぶり、我が身を他の犧牲に供する如き精神なからざるべからず。昔京都の或絹屋に、家内大勢暮らす内、半季居の飯焚お杉といふ人ありて、家内中の不調法を自身獨りして引受けたり。南京の鉢が割れて『是は誰が割つたぞ』、お杉が出て『ハイ此間私が不調法しました、御免なされて下さりませ』。其後又重箱の緣が缺げしに、お杉が出て『それは私が缺きました』。又旦那殿の衣服に油が掛つてあれば、お杉が出て『私が麁相でござります』。旦那殿は御家樣に『偖々杉はきつい麁相者じや』と、機嫌頗る不の字なり。然るに或時床の間の壁に疵が付てあり、旦那殿大立腹にて、吟味すれど仕人が分らず、矢張お杉が罪を被りしに、旦那殿大に怒り、直に解雇の宣告を與へしに、七ツ許りのぼん樣が出て『床の壁は 私 です、杉じやありません』。そうすると丁稚が出て『先日の南京の鉢は私が割りました』。男衆が出て『重箱の緣は私でした』。又腰元衆が出て『御小袖の油は 私 でした』。皆お杉の善に化せられ、銘々白狀したりしなり。此お杉は終に八年つとめて、御家樣の病氣の介抱も殘る所なくつとめたれば、御家樣の遺言にて、其飯焚が御家樣になり、幾久しく家富み業榮へしとぞ。一家の主婦たる者にして此精神だにあらんには、家焉んぞ治まらざらんや、舅姑焉んぞ生みの親と同じからざらんや。

◎柔順　抑へて勝つは男子の事なり、婦人は宜しく從ふて勝つべし、勝て勝つも惡しきにあらねど、負けて勝つも亦面白し。羅馬の皇帝アウガスタスの皇后リヴイヤは、痛く帝の鍾愛を得て、何事も其の言ふが儘なり。羅馬の貴夫人連『如何なれは此くも良人を自由にせらるゝや』と、其秘訣を問ひしに、皇后は笑て『唯柔順なることに由て』と答へたりしは、大に味ふべきことなり。又た奥田在中が『道の話』に一條の話あり今は昔、權八といふ男、他に增す花を拵へて、女房を出そうと思ひ、之を怒らせんと、色々難題をいへど、女房は常に莞々と只管詫る計り。今日こそはと思ふて、足音荒く歸つた處、『よふ御歸りなされま

した」といふと、權八は『己が內へ己が歸るに、善いの惡いのといふ事があるものか、白痴面奴、見つともない面。すつこんで居ろ」といふても『眞に私が惡ふござりました、何ぞ御許下されませ」といふ。『何だと、何が惡いのだ、我に惡い事は一つもない、人を當つける」と逆捩に捩つけても『何ぞ御免なされ」といふばかり『むつとして戻れば、庭に柳かな』で、獨り怒つても相手が柳だから、仕方がない。何でも女は姿を惡く言はれと怒るものぞと、『コリヤ先から我が顏を見て居たら、胸屎が惡く成たから、歌を詠んだ』。『ハイそりや、御耻うござり升が、そしてマア私を歌によんで下さるは有難うござります。』『イヤ有難い歌じやない、マアこうじや「燒餅は燒ねど顏が燻りて、鼻はひしやげて尻はぼつちり。」何とどうだ。』矢張莞爾と笑ふ顏を赤くして『御耻しうござります。』『コレ婦よ、歌を讀せて、御耻しいでは濟まね。返歌をせろせぬと叩き出すぞ。』『それ許りは』と泣て詫る。亭主愛ぞと怒鳴る。夫れでは今夜考させてと、翌朝になり『これで歌に成ませうか、何ぞこれで御了簡』と讀むを聞けば『有難や姿笑うて心をば、許し給はる君が情は。』惡に強いは、善にも強い。權八之に感心して心を入れかへ、仲睦じく暮せしとぞ。「あい〳〵の返事一つで天地も人も我身も丸うをさまる。」

◎謹慎● 能く考へて言ひ、能く考へて行ふべきに、女子は動もすれば胸に浮ぶまゝに舌を動かし、感ずる通りに行ふより「思慮が足らぬ」と人より惡口せらるゝなり。殊に輕々しく唇を使う弊ありて、多言に關する戒は、西洋にも東洋にも少なからず。書經にも『牡雞之晨、維家之索』とあり、詩經にも『婦人有長舌、維厲之階、亂匪降自天、生自婦人』とあるにあらずや。女の字を三つ集めてつくれる姦の字を『かしまし』と訓するなど兎角女と多言とは緣深し。英語の girl (娘) といふ文字は、羅甸語の garrulus とて、多言を意味する語より來り、又英國の諺にも『女の然と否との間には其間髮を容れず』と謂り謹むべき也。

法制の栞

陸軍教官　井澤喜太夫

諸嬢は、既に我が大日本帝國が古今東西無比の良國にして、此の天與の幸福を享受したる悦びは、晝夜旦夕、常に脳裏を離るべからざると同時に、之を尊ぶの意厚く、之を愛するの念も、亦た更に一層の深きを加へ居らるゝならむ。又、此の國は、遠き父祖より承けたるものにして、永く子孫に傳ふべきものなれば、克く忠に、克く孝に、諸嬢皆心を一にして益々國の光を揚げ、國の權利利益を伸長せむと望むは、諸嬢の深き情なるべし。然れども、諸嬢にして其の愛する所の日本帝國は、如何なるものなるかを知らざるときは、諸嬢の赤心より溢れ出づる愛國の熱情も、偶々以て國を傷ふが如き意外の結果を見るの恐なしとせず。去れば、第二の國民の母たるべき諸嬢は、斯邊の國家的感念をば、須らく、充分扶植培養しおかざるべからず。故に予は先づ日本帝國とは如何なるものなるかを説かむとす、乞ふ諸嬢よ、諸嬢は、決して輓近群をなす輕薄なる男女學生の如く、形式的素養に甘んずること勿れ。

日本帝國の如何なるものなるかを知らむと欲せば、先づ、帝國とは如何なるものなるかを知らざるべからず。帝國の如何なるものなるかを知らんと欲せば必ず先づ、國家の何たるかを解せざるべからず。

何を指してか國家と云ふ。日常諸嬢の足下に踏まるゝ土地を謂ふか。土地の上に生活する人を謂ふか。土地人民を統治し給ふ　天皇陛下をいふか。抑亦た　天皇陛下が有し給へる最高無限の權力を指すか。曰く然らず。夫れ、土地人民は國土たり國民たるのみ。未だ以て、國家と謂ふを得ず。　天皇陛下は之を國君と謂ふを得れども、未だ直に國家と稱するを得ず。其の有し給へる最高無限の權力は、國權にして國家にあらず。然らば則ち國家とは何ぞ。國家は大なる家のみ。諸嬢の家は各一定の土地を占め、諸嬢は父母兄弟姉妹等と共に家族となりて其の上に住

み、諸孃の父兄は戸主となりて其の家内を統督し居るなるべし。即ち家とは、一定の土地一定の家族の上に、戸主の權利を以て統治する團體なり。唯此の一定の土地は、家にありては宅地と謂ふも、國家にありては國土又は領土と謂ひ、此の一定の人は、家にありては家内又は家族と謂ふも、國家にありては國民と謂ひ、其の上に行はるゝ權利は、家にありては戸主權と謂ふも、國家にありては國權と謂ふの差あるのみ。即ち國家とは、國土と國民との上に國權を以て統治する團體なり。

諸孃の家は、其の父兄の行ふ戸主權によりて、能く一家の整理を保ち、又、其の宅地及び門戸牆壁等の限界あるによりて、盜賊兇漢等の侵入を遮り、以て一家團欒の樂みを助けしむ。又、諸孃等家族は、各自己れの身を愛し、譽を求むるの外、一家の利益を計り、一家の體面を重んずるによりて、諸孃の家は益々和樂繁榮するを得べし。之と同じく、國家は、國權によりて、能く其の秩序を保ち、之を組成する土地によりて、一方には他國の侵略を防ぎ、一方には自國人民の團結力を鞏固ならしむ。又國民は、各自己れの目的と生命との外に、國家の目的を思ひ國家の生命を重んずるが故に、始めて國家の生存繁榮を見ることを得べし。

諸孃は、以上に於て、國權とは、國家に缺く可からざる最強の權力なることを悟れるなるべし。是に於てか、國家は、國權の存在する點より觀察して、之を帝國、王國、共和國の三つに分類することを得、之を國家の國體上の分類とす。

世界何れの國と雖、國權の性質は皆同一なり、然れども其の國權を行ふ人は國によりて必ずしも同一ならず。即ち國權が皇帝の手にある國を帝國と謂ひ、國王の手にある國を王國と謂ひ、人民國權を共有し唯便宜の爲めに人民全體の代表者として大統領を民選し、之に國權の執行を委ぬる國を共和國と謂ふ。然れども此の區別は、單に國權の存在する所による區別にして、帝國、王國、共和國の間、敢て強弱貧富

文野の別あることなく、唯各國歷史上の關係及び建國の有樣等により其の名稱を異にするのみ。例へば露西亞及び獨逸國の如きは、其の國主が羅馬皇帝の遠裔たる歷史上の關係によりて帝國と稱し、大不列顚國の如きは、是等の關係なき國なるにより始めより王國と稱し、佛蘭西、及び北亞米利加合衆國の如きは、其の立國の體制によりて共和國たるが如し。然れども是等諸外國は、皆屢々革命の內亂ありて、帝國も時に共和國に變じ、王國忽ちにして帝國となりし實例に乏しからず。獨り我國のみは、建國以來常に帝國にして、天皇陛下は、終始國權を掌攬し給ひ、臣子たるものは夢にだも之を窺ふの念慮を懷きし者なし。昔時政權武臣の手に歸し、其の勢實に强猛なりしが、尙天皇陛下に對し奉りては、臣子たるの分を忘れず、位階官職の如き、一に天皇陛下の授け給ふ所を拜受して己の尊榮を保つを喜び、嘗て反逆を企てたることなかりき。げに我が國は、獨り宇內の各國に擢んで丶、建國以來帝政の美を墜したることなし。吾等は幾萬世の後に至るとも、依然として此の精華を保續せむことを心懸けざるべからず。

國家は、又其の國權の行はる丶有樣によりて、立憲君主政體、君主專裁政體、共和政體の三つとすることを得。之を國家の政體上の分類といふ。

立憲君主政體とは、上に國權を掌握する帝王あるも其の意の欲ふ所に從ひて、擅に國政を執る能はず、帝王は、豫め一定不動千載不磨の憲法を制定して、執政の大方針を示し、其の定むる所に從ひて、人民の服從すべき國家の命令と、人民の負擔すべき國家の經費との中、重大なるものは、凡て選擧の結果によりて出でたる國會議員よりなれる國會をして、其の議に與るを得せしむる國家の政體をいふ。

君主專裁政體とは、憲法なく又國會なし、たゞ帝王國權を獨裁する所の國家の政體をいふ。

共和政體とは、一國の人民皆同じく國政に參與する權利を有すと雖、便宜上一人の大統領を選出し、國

民の代理者として、これに國政の執行を委托し、又別に立憲君主政體の如き憲法及び國會を有する國家の政體をいふ。

前陳記載の事項に於て、或は重複の嫌なきにあらずといへども、要は啻に國體上の分類と政體上の分類とを讀下して、確的の感念を添へしめんとする微意にあるのみ。而して我が國は、神武天皇御即位以來代を重ぬると百二十有一、歳を經ること二千五百餘の久しき間、君主專裁政體の國なりしが明治元年今上天皇陛下には、登極の初に當りて立てさせられたる、五箇條の御誓文中に、廣く會議を興し萬機公論によりて決すべき旨を天地神明に誓はせ給へり降つて同八年元老院を設け、同十一年府縣會を起し、漸次一般人民にも參政の權を與ふるに至り、同十四年詔して明治二十三年を期し國會を起さむと宣はせ給ひ、遂に明治二十二年二月十一日を以て憲法を發布し、翌二十三年國會を開設し、之と同時に憲法を實施し給へり。こゝに至りて建國以來の政體は一變して立憲君主政體の國家とはなれり。

然れども諸孃よ、諸孃は、國家は其の發達の程度によりて政體を異にするものにあらざることを辨へざるべからず。はじめ幼稚なる國家は皆君主專裁政體なるも、漸く進んで立憲君主政體となり、國家進運の極、遂に共和政體に達するものと誤解すること勿れ。國體が國家の階級を表はすものにあらざると同じく、政體も亦たゞ國權の行はるゝ有樣にしたがひて區別するに止り、決して國家發達の長幼、尊卑の階級を表はすものにあらざるなり。故に、諸孃は決して、我が國の今日立憲國となりたるを見、單に之れのみによりて我が國の進歩を誇ることなかれ、又妄りに君主專裁政體の外國を輕んじ、共和政體の他邦を羨望する等のことあるべからず。

こゝにまた歷史の力をかりて見るに、何づれの國を問はず、古昔君主は頗る強大なる權力を有し、其の權力の下に立つ人民の權利は、毫も伸長すること能はざるのみか、殆んどこれあることなかりしを知る。

此の時代の國家を野蠻國と謂ふ。然るに世の進歩に從ひて、人民の權利は漸次自然に發生し、君主も亦た其の有する權利を行ふに當り、昔日の如く、己れの喜怒愛憎によりて、妄りに人民を壓服せざるに至りしかば、君主の權、臣下の分は、おのづから一定の準繩に支配せらるゝに至れり。世が次第に進歩するに從ひ、人民の權利も亦た之れに伴ふて膨脹し、君主の自制によりて生じたる準繩はこゝに及んで益々明確たるものとなれり。此の準繩は即ち法律にして此の時代に於ける國家を法治國といふ。

我が國は前項に示せるが如く、憲法の發布、國會の開設ありて、法治國たるの基礎確立せしが、輓近重大なる諸種の法典は編纂せられ、今や諸般の制度施設整然として備はり、金甌無缺の法治國となれり。諸孃は、此の法治國の字義を誤解して、國内大小の事凡て法律によりて治めらるゝ國なりと信ずること勿れ。夫れ人の一擧一動盡く法律を以て定められむか、人民自由の行動は全く法律のために緊束せられ、農民は以て播收の季節を逸し、商估は爲に其の商機を失ふに至らむ。豈之を發達進歩其の極度に達したる國家といふを得べけむや。

法治國とは、決して法律を以て治めらるゝ國といふの義にあらず、法のよく治まる國といふの義なり。上に、苛酷の法を出して民を塗炭の苦みに陷いるゝが如き秕政なく、惟れ命惟れ從ふ、國憲固く其の基をなして萬代動かず、國法宜きを得て能く上下の間に行はるゝ國、之を法治國とはいふなり。

予は既に國家とは何ぞ、國體とは如何、政體の何物なるかを主とし、併せて法治國の意義をも述べたるを以て、諸孃は正に日本帝國とは如何なるものかを知悉し得たりと信ずるなり。然るに予はまた、次に大日本帝國憲法のことに說き及んで終りを告げむと欲す。そも憲法とは如何なるものなるか、之を一言にして盡さむには、憲法とは、君主が定めたる國體政體の大原則なりといふにあり。

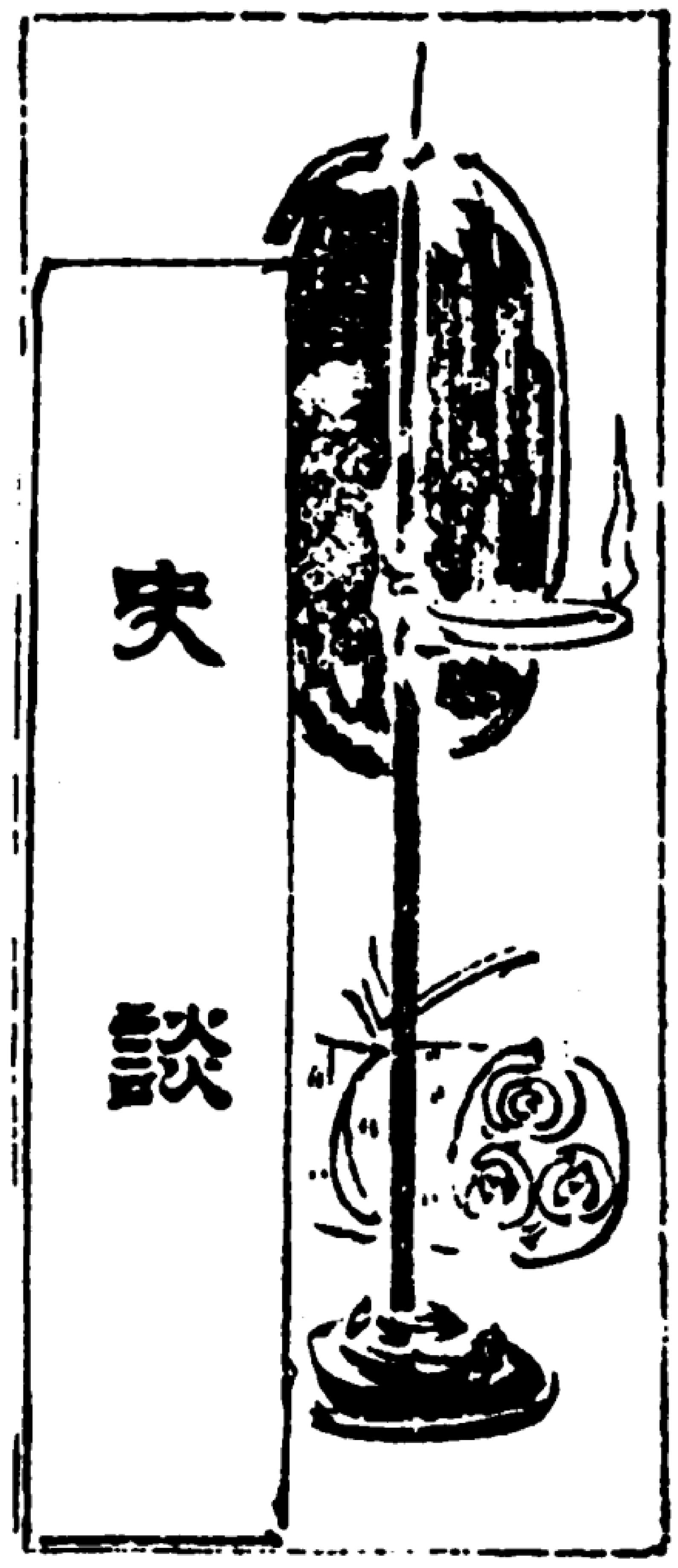
諸孃は、また前に於て我が國は憲法を以て其の立國

の大本を定められたることを知りしならむ。然れども若し諸孃に對し、我が帝國の憲法あるに至りしは何時なるかと質問しなば、諸孃或は應へて明治二十二年二月十一日なりといはむ。これ大なる誤りなり今憲法發布の時　今上天皇陛下が　皇祖　皇宗の神靈に告げ給へる御告文を見奉るに、我が此の憲法は皇祖　皇宗の貽し給へる統治の洪範遺訓を明徴にし、條章を照示するに外ならざる旨を宣はせ給へるなり。我が國神代の昔　皇祖天照大神の垂訓に『豐葦原の瑞穗の國は代々我が子孫の王たるべき地なり』と宣はせ給ひしは、恰も憲法第一條の『大日本帝國は萬世一系の　天皇之を統治す』との規定の根原なり、又　皇祖は　皇孫に三種の神器を授け給ひて宣はく、爾之を見ること朕を見るが如くせよと、蓋し鏡は照明の徳あるを以て智を表はし、璽は温容の徳あるを以て仁を示し劍は以て勇を示す。

爾來代を易へ年を歷るに從ひ、幾多の變遷に遭遇せりと雖、建國以來の大憲は千歲不磨にして、毫も變更せられざること、恰も建國の始めより歷代に傳へさせ給へる三種の神器の長へに變らざるが如し。而して明治二十二年發布せられたる憲法は、從來不文なりし憲法を文字によりて明示せられたるに外ならず。我が國體政體の大原則は、彰々として此の成文憲法によりて表はる、これその我が國憲法の歷史の大要を記し奉りしなり。我が憲法は、其の第一章に於て上　天皇陛下の統治權を規定し、第二章に於て下臣民の國家に對する權利義務を示し、第三章以下の三章には、立法行政司法の三權に關する規定を置き、第六章に至りては國家財政の法を定め、別に補則として第七章を最後に置き、以て此の憲法の改正等に關する規定を設けらる。

諸外國の憲法は、君民爭奪の極、腥風血雨の間に發布せられしも、獨り我が國の憲法は能く上下歡呼和氣洋々の間に其の發布を見る、豈東西未曾有の盛事ならずや。

（完）



筑紫の海

文學士　濱田紅於

我邦が外國と交際したのは、神代からの事であるが初めて外國と干戈を交へたのは、大凡紀元八百六十年、神功皇后の三韓征伐であらう、その以後千三百二十三年天智天皇の御宇に至るまで、四百六十三年の間、日韓間の干戈は、殆どやむ時がなかつたのである、天智天皇聰明英武の天資を以てして、唐新羅の聯合軍を如何ともすること能はず、終に三韓を放棄せられて、水城を倭の高安、讃岐の屋島、對島の金田に築き、消極的に防禦策を講じられた、當時の外國軍は頗る優勢であつて、我邦にとつては、ゆゝしき一大事であつたと思はれるが、史料に乏しいから、詳細な事は明でなく、我國民が如何なる態度を取つたかも、勿論分らぬのである、よしや分つたにしたところが、今日から千餘年前のことであるから我々には餘程耳遠いのである、故に私は中古以後の外國征伐について、三つばかり述べて見やうと思う。

まづ第一が元寇の際の外國征伐の企である、これは前號時事瑣談に一寸ほのめかしたから、こゝで少しくはしく云つて見やう、元寇の始末は世人の知悉して居られる所だから、略しておくが、當時の蒙古の境域を云つて見やうなら、亞細亞の大部分と南洋諸島を合せたもので今日の露西亞の領土に優るも劣ることはなかつた、而して當時の日本は、北海道や琉球臺灣が屬して居なかつた、この小島國と彼の大國とが對時したのだから、その紛擾は今日の日露戰爭以上であつたことは勿論であるが、その元氣著しく勃興したものがあつた。

此時龜山天皇の文永五年正月一日、高麗の使者潘阜等、蒙古の國書方物を以て、筑前太宰府に來た、その國書の中には、朕惟、自レ古小國之君、境土相接、尙務レ講二修睦一況我祖宗受二天明命一、奄二有區夏一、遐方異域畏レ威懷レ德者、不レ可二悉數一云々、日本密二邇高麗一、開國以來、亦時通二中國一、至二於朕躬一而無二一乘之使以通二和好一云々、冀自今以往、通レ問結レ好、以相親睦、且聖人以二四海一爲レ家、不二相通好一、豈一家之理哉、至レ用レ兵、夫孰所レ好とありて、今の露國の如き恫喝文句を幷べたる失敬極るものであつた、この時我邦の對外策に硬軟の二派があつた、硬派は鎌倉武士で、軟派は京都の公卿である、京都にては、後嵯峨上皇五秩の賀宴は中止となり、伊勢大神宮、山陵及び諸の神社に、勅使參向し宣命を奉りて、敵國降伏の御祈禱が初まる、又諸寺に命じて、厭攘法を行はしめ、熾盛光法を修せしめ、呪願文を作りなどして、只管神佛の力によりて、國難を鎭めやうとせられた加之動もすれば、蒙古に對して答書を與へむとの議もあつた、要するに文雅風流を生命とし、武力なかりし公卿衆の驚怖は、想像以上で、又この以外に策略はなかつたのである、併乍鎌倉の形勢は全く反對であつた、天下の兵に敵するに足ると稱せられた鎌倉武士は、顏の傷を無上の光榮とし、背の傷を無上の耻辱としたものであるから、胡賊の恫喝に畏れて、後を見せるやうな意氣地ないことはしなかつた、執權北條時宗は命を下して九州の海岸を戒嚴し、蒙古や高麗が脅嚇懷柔のあらゆる手段を盡しても、終始これを拒絶して、わくまでも强硬の態度を示したから、遂に文永十一年の大戰爭が起つたのである、その結果として、對馬壹岐は忽ち敵軍に占領せられ、敵艦九百隻筑前の今津に碇泊し、二萬有餘の蒙古勢は勝に乘じて博多に逼つた、我兵殊死して防戰し、會大風雨の起つたため、敵艦碎けて敗走し、遂に我が勝利に歸した、併し決して連戰連勝といふ譯ではなかつた「時にてつぱうとて、鐵丸に火を包で、烈しくとばす、あたりこわるゝ時、四方に火炎ほとば

しりて、烟を以てくらます、又その音甚高ければ、心を迷はしきもをけし、目くらみ耳ふたがりて、東西をしらずなる、これがためにうたるゝもの多かり」と云ふ次第であつた、又竹崎季長の蒙古襲來繪詞によるに、敵の軍艦は到底我が兵船の比ではなかつたこの故に我邦は軍勢に於ても武器に於ても、彼に勝ることの出來なかつたのにも關らず、怯まず怖れず、大和魂を振ひおこして、遂に終局の勝利を得たのである、露國は「モスコー」の愛國兵火や、「クリミヤ」戰爭に就いて、頗る誇揚して居るけれども、我邦にはそれ以上の實例があるのである。

加之我國民の武勇は尙ほ驚歎すべきことがある、文永の役は勝利を得たけれども、我が住民の虐殺せられたことは、旅順口や浦鹽斯德の我居留民虐待事件以上であつたらう、京都の恐怖は益々甚しく、敵國降伏の御祈は益々盛になり、而して鎌倉の決心は愈鞏固となつた、蒙古は懲りもせずして、又もや使者を遣はしたが、杜世忠等五人の者は、鎌倉の龍口の露と消え、周福欒忠等は筑前志賀島の黄土に歸した、かく我邦の決心は石よりも堅かつたのである、而して我邦は此度は防禦的態度を取るを屑とせず、進んで異國を征伐しやうとした、今日より觀れば、無論盲蛇の譏は免れまいが、その凜々たる武勇には、天下の何者かこれに加へんやである。

この計畫は建治元年十二月に、初めて顯はれた、鎭西奉行大友賴泰及び少貳島津の諸氏、幕府の命によりて、軍勢をその部下に催促し、二年三月頃を以て異國征伐を斷行しやうとしたのである、東寺文書に曰く、

明年三年頃可被征伐異國也、梶取水手等、鎭西若令不足者、可省宛山陰山陽南海道之由、被仰太宰少貳經資了、仰安藝國海邊知行之地頭、御家人本所一圓地等、兼日催儲梶取水手等、經資令相觸者、守彼配分之員數、早速可令送遣博多者也、依仰執達如件、

建治元年十二月八日　武藏守（義政）

相摸守（時宗）

武田五郎次郎（信時）殿

さて愈建治二年三月となると、軍議も愈熟したと見えて、軍勢催促も益嚴格になつて居る、野上文書に曰く、

異國發向用意條々

一所領分限領内大小船呂數幷水手梶取交名年齡可レ被ニ注申一、又以ニ來月中旬一迯付博多津之樣可ニ相構一事、

一渡ニ異國一之時可ニ相具一上下人數年齡兵具同可レ被ニ注申一事、

以前條々且致ニ其用意一、且今月二十日以前可下介ニ注申一給上、若及ニ遁避一者可レ被レ行ニ重科一之由其沙汰候也仍執達如件

建治二年三月五日　前出羽守（大友賴泰）

野上太郎殿（豐後球珠郡、飯田郷野上村）

この外武雄社文書に爲ニ異國征伐一被ニ遣武士一候、とあり、武雄社本紀に少貳經資蒙ニ征異之兵一巡檄とあり、薩藩舊記に、爲ニ高麗征伐一被レ遣ニ武士一候とあり、用意もなか〳〵周到で、決して向ふ見ずの企ではなかつたやうである、この催促狀に對する返書は、岩淸水八幡宮舊別當家たりし田中俊淸氏所藏文書中にあるのであるが、原書も謄寫も見ないから、明かに分らぬ、併し肥後國某々の地頭等が、その家人の口數武器馬匹などを書き出して居るのを觀ると、今日の國債應募のやうに、國民は奮つて幕府の命に應じたることが察せられる、然るにこの後外國征伐の實行せられた史料は見當らない、薩藩舊記には、建治三年丙子閏三月奉ニ久經公之旨一從ニ征高麗之役一とあるけれども、恐らくは誤りであらう、さて、この征伐中止の事情も史書に記されないから分明でない、その成敗の結果は別問題として、兎にも角にも我が武勇を輝かし得なかつたのは、殘念至極と云はなければならぬ。

この後五年を經て、弘安四年には、有名なる弘安の役があつた、今度はかねて覺悟の上であつたから、

海岸の石疊や兵士の配置も整のつて居り、北條實政總大將となつて、全軍を指揮して居つたから、三千五百隻の敵船、舳艫相啣んで至るも、遂に上陸することができなかつた、然るに恰も好し、七月一日の夜大風暴に吹きあれて、敵船多くは沈沒し、死者十萬、生き殘つた奴原は、匍々の體で逃げ還つてしまつた、我邦はこゝに於て最後の大勝利を得たのである、世人或は云ふ、弘安の大勝利は、專ら神風の力に藉ると、乍併非常の決意を以て困難に赴むき、逆襲をまで企てた日本武士は、神風の力をからずとも能く醜敵を打破つたにちがひない。

現今の我邦は軍勢に於て武器に於て、決してかの醜敵に劣る所はないのである、而して我々の祖先が、不完全極まる武器により、比較的少數の軍勢を以て敵の大軍を打破つた偉績を憶へば、我々は非常な覺悟を以て、祖先に耻ぢぬやうにしなければなるまい勿論干戈の事は軍人にまかせて、その以外に我々の事業は澤山ある、大和魂は朝日に匂ふ櫻花に比するのが例になつて居るが、私は一夜の風雨に散りゆく櫻たるを願はぬ、文永弘安時代の我祖先は、想像以上の困難に耐えて、能く大勝利を得たのである、これをおもへば、雪に撓まぬ梅の花、霜に萎れぬ菊の花、これこそ我々の理想とすべきものである、かの北米の水師提督ペルリは、我邦を寳石にたとへ、小なれど堅いと云つた、嗚呼洵に知己の言といふべしである。

象山先生の姉（續き）

梅廼屋主人

されば朴翁は痛く夫人が内助の行きとゞいて遺憾なきに打ち喜び深く夫人を愛したので、益々琴瑟和合して暮らせる中に、三男一女を擧げて、北山家は温かな美はしい家庭であると一藩中で誰れ羨まぬものは有ませんでした、實に夫人の如きは賢婦良妻の鑑として多大の尊敬を拂ふべき人では有ますまいか。

夫人つら〳〵當時の有樣を見て思ふやう、女子が夫を撰ぶにあたり、先づ第一に父母の意見に從ふべきに、其の厚い情を無にするのみならず、動もすれば、彼の人は貧し、此の男は醜しなど、いろ〳〵心に思ひめぐらして兎やかうと異存を申し立てるもの丶あるは、如何にも間違つたことである、偖また一代の苦樂を共にする夫の人物などよりは、衣服調度など、綺羅を盡くし贅澤を極めるものもあるが、是れまた大ひに愼むべきことではあるまひか、甚だしきに至つては、夫の家に傅づいて、贅澤をしたり樂をしたりして安樂に此の世を送らふなどと思ふ女子も少くないが、是等は殆んど沙汰の限りと申す外は有りません。まして彼の小説などの事實を夢に描いて、烟のやうな忘想を起すに至ては、其れこそ女子一代の大不幸を醸す可き下地なれと言ふ外はありますまいかゝる考の下に成立てる夫婦といふものが、いかで末長く幾千代を契ることの出來やうぞ。我が國の離婚の數多きは決して偶然の次第に非らず。申すも愚かながら夫となり妻となりて一生の苦樂を共に致すの覺悟なくば初めより人の夫となり妻とならぬが上分別で苟も夫の樂をたのしみ夫の憂をうれひ妻の笑にわらひ妻の悲になくの心即ち愛の極緻と云ふものが無くば、温い美はしい家庭などの出來やう筈が有りません。尤も此の愛と申すことは人々の心の思ひやうで色々の意味を爲しますが、最も下等な愛と申せば、生理的の愛情、所謂男女の性慾から起るもの。是れが一歩發達をいたせば、感覺的の愛情に進みます。彼の男女兩性のものが、其の容貌とか音聲とか色澤とか態度とか申すやうな眼鼻や耳などを喜ぶより生ずるもの。更に進んでは同情より起る愛情、即ち他の苦樂を己れの苦樂の如く感ずる情で、通常文明人の間に最も多く見る所のもので彼の妻の病に案じ煩うて無限の辛苦をさゝげて敢て辭せざるとか、夫の失意失敗を助けて身を粉にしても更に厭はぬとか申す親切を盡くすもの。而して愛の最も高尚なるものは欽仰より起る愛情で、心の働が十分發達した

後でなくては生じないものであります。彼の他人の知識道徳について之を賞讃し尊仰することが深い時は愛情に變るもので、此の種の愛情は下位のものから上位にあるに對して起る場合が多くあります。申さば己れの苦難を救はれたものが、其の救ひ主の高義に感じて愛情を發するやうなもので彼の

めづる心は何時しかに戀ふる心と打ちとくる

とは斯かる愛情を巧みに言ひ表はしたもので有らふと思はれます。

さて愛情の由て起る次第に於ても其の意味に於ても發達の有様が違ひ、程度もさま／＼に分れますが、一口に申せば人と人との愛情は眼や鼻から這入たもの即ち感覺的の愛と、心の上に働いたもの即ち精神的の愛との二つのものにつゞまるのでありますが、今日の弊は専ら感覺的の種類がはびこつて、所謂精神的のものゝ乏しいには只々歎息の外はありませんと、夫人は之が躬行實踐を努められたばかりでなく後年子女教育のことに鞅掌せらるゝに當りても此の心もて當時の弊風を矯正いたされました。

技藝家としての夫人

由來信州は地蠶がひの業よく開けて、明治の今日に及んでは、國家の一大富源地として稱へられて居ります。それ故此地では昔より何れの處に參りても手挽の生糸を産出することが數多ありますので、絹織物の業もまた到る所に盛んであります。彼の上田紬の如きは今日に至るまで、廣く其名を高うして居るのも偶然でありません。夫人また當時に於て、深く當國の地理、風土に考へて思へらく、我が信濃の國の如き、山又山の山國に住はん者は、此の山と戰うて、之を征服し、之を利用するに非らずば生活の道立ちがたし。況て其の氣候は寒さ最と嚴しうして、冬時は全く暖爐を擁するより致し方のない國柄なれば、然るべき室内の仕事を詮索して、一つには殖産の道を講じ、二つに怠惰の弊風を正すといふことになつたならば、所謂一擧兩得の方法であると考へて頻りに絹織物を研究いたしました。然るに當時の習

俗として士人の子女夫人などは機織る業などに、心を注ぐものは更にありませんのみならず、かゝる業は賤しい事とさげすみ百姓町人のなすべきことゝ斥けて、却て夫人をあざわらふものさへ多い有樣でありました。夫人はかゝる間に立ちながら、幾多の困難と戰ひ、先づ羽二重七子など織り出して、知人朋友の批評を乞ひ、改良に改良を加へて、羽二重一巻を藩主に献上いたしました。藩主御感斜ならず、深く賞詞を給はられたので、曩きに嘲笑ひし人々も今は夫人に倣うて、次第に此の技を研究するやうになりました。夫人は更に進んで、紋織摸様織の研究に取りかゝりましたが、其の初めは錦繍などの小切を端より解いて、如何に組み立てゝ織りなしたものかを調べ「アスビ」の掛け方を工夫して、遂に見本に違ふ所なきのみならず、頗る巧みな物を織り出しました。それ故便りある毎に、京都の西陣を首め、桐生、足利などより、織物の小切を取りよせ、其れに摸して樣々の織物を製し、屢々人の目を驚かすことがありましたが、夫人自らは之にも物足らぬ心地して、是非とも人の糟粕を甞めず、一種の新柄を工夫せんと、熱心に意匠を凝らしました。偖この意匠と申すことは、應用美術に屬して國の富源を開き、世の文明を進める上に、最と大切の要素であります。數年以來我が工業界でも、大いに此のことに注意するやうになつて、京都では應用美術、東京では圖案と云ふ專門の雜誌が發行されるといふ盛況になりました。昨年頃から進歩した高等女學校などに於ても圖畫科の一部に圖案科を加へ最新の習畫帖の中にも亦此の種のものをポツ〳〵見受けるやうに成つたのは誠に結構な次第であります。殊に女子は美の權化と申して一から十まで美的に成り立つて居るものですから、この圖案の觀念が乏しいと其れに比例して其の人格を下すことになりませう。それ故假令專門上の知識は無くとも一般的の研究を致しませんと日常でも帶の模樣とか、衣服の柄とか、其の外細かな附屬品の取合色合格構など自分の躰にうまくクッツ

かずしてあはれ花の姿もビーナスの神に見捨てられるやうに相成りませう。又一家の主婦としては、屋内裝飾、子女の教養など、光彩あり趣味ありて幸福圓滿の家庭を造らむには、是非とも此の種の知識が必要であります。

餘り枝路に走りましたが、北山夫人の如きは已に數十年の昔に於て書にも師にも便りなき時に自ら工夫して遂に其の織物の紋樣圖案に新工夫を表はすに至りましたが、今日より考ふれば唯々敬服の外はありません。松代町は信州に於ても生糸製造に名高くありますが、其の女工は多く舊藩士の子女が働いて居るので、其の風儀習慣など、全く他の製糸場の女工と異つて、更に人の賤みを受けるやうのことはないのです。其れ故此の地では善い家の子女が、進んで女工になると云ふ有樣は、私が曾て實見致した事實で、其の遠い素因は、北山夫人の力が預り居ると云ふことであります。

化學者としての夫人

嘉永安政時代の歴史は、頗る面白き面影を寫して、吾人の趣味を添えるものが少くないのですが、當時キリシタン教が追々這入こんで物理化學を應用して我が非科學的の眼に、不可思議な現象を示し、布教の手段に供へたので、我が同胞のものは痛く仰天いたしました。それでキリシタンといふ言葉は、不可思議といふ言葉の代名詞になつて、私などが未だ幼い時にも、キリシタンを使ふと云ふ言葉が有つて、之を使ふ人だなど、聞いた時は、神變不可思議の魔法と思はれて、ゾット致したことを記臆して居ります。然るに此のキリシタンを利用し、咀嚼し、消化して、我國文明の火蓋を切つたのが、佐久間象山先生であつて、其姉なる夫人が未だ朴翁に歸がぬ頃、先生が蘭書を讀まれる際に、化學上の說を聞き覺え、夙に西洋の染料法の大要に通せられました。折しも、此度織物に熱心してより、俄かに染料術の必要が生じましたから、床下に數多の瓶を置き、兼て聞き覺えた化學の染料法を實地に試み、さま〳〵の染料を

拵へ、種々の美しい色を染め出しました。然るに織物模様の配色より、折々染料の足らぬので、醫書若しくは本草學を研究し、山林原野に草木をたづね、或は樹木の皮を剝ぎ取り、或は草の花葉根實など採り來りて、其れを碎き煎じて、其の汁を取り、又それを和合して、美しい色を發明し、己れが思ふまでに出來ずば止まなかつたさうです。

かく夫人は織物に染料に力を注がれましたので、始めは皆々其の技藝の巧みなのに驚きましたが、後には其の熱心と發明とに敬服して、一藩の氣風を刺戟し、一振するに至りました。藩主眞田公また深く感せられて、屢々厚き下賜物もあつたさうです。私が曾て松代に遊び、夫人の墓に謁し、追うて其の功績を弔ひました折、慨然として思ひますには、古來我が國には、才媛才女の輩出少なからぬが、科學に熱心して、然かも其の應用の道に達すること夫人の如きは、三千年の歷史上、他に比類を見ないので、實に我が婦人界に於ける科學の神と申して聊か過稱ではあるまいと考へました。今や文運著しく進みて科學の發達せること當時の有樣と全く其の趣を異にせるにも係はらず、我が同胞姉妹諸嬢は依然として文學に偏重し、其の甚しきに至りては「冷かな科學の眼で見る云々」など、冷評蔑視の偏見を持たれる方さへありと、聞き及んで居りますが、少しく夫人の事蹟に鑑みられたならば轉た恥かしさの限りではありますまいか。殊に家庭と科學とは、頗る親密の關係を有するもので、あはれ實も花もある國民を造り出ださうとするには、科學と文學とが、並び進まなくては、健全に圓滿に發達することが六ケしからふと考へるのです。それゆゑ將來の家庭の中心に立つべき諸嬢の勤として、重きに失せず、輕きに流れざる修養をこそ深く希ふ次第であります。

節約家としての夫人

技藝家としての夫人、科學者としての夫人は、乾燥無味に思はれますが、夫人は決して無趣味の人ではなく、其實は柳櫻をこきまぜて織り出す錦とも申

すべき風情をもたれて居つたのであります。
或る冬の日夫人染料のことにつき、弟象山先生の許に音づれて、其の不審の個所を問ひ、いそ／＼暇を告げて我が家に歸らうといたしました。象山先生言葉を改めて、姉上にはよく織物並に染物について御研究なされるので、一藩のもの誰れ一人ほめぬものはありません、弟の私まで誠に肩身廣く感ずる次第でありますが、私は其れがために、第一朴翁殿に對して姉上の御つとめが欠けはせぬか。第二に子供の御教育に御心おちは無からふか。御如才ないとは存じますれど思ひ浮びのまゝ御心ぞえまでにとの姉思ひの眞心に、夫人は笑を漏らしながら、よく言ひて給まはれしよ。妾も此の家を出づる時父上母上より懇ろに夫に仕へよとの敎を被りしが、偖思ふに任せぬがちで、自らも心を苦めて居ります。人の妻として又母として、夫に仕え子女を敎養するこそ、第一の務めなれと、屆かぬながら心の怠りは無いつもりで、唯々其の間の時間を割いて、自分の嗜みを研究するばかりであります。家庭のつとめを蔑りにするなどは、つゆ思はねば心を安め給へと言ひつゝふと思ひついて懐より四五枚の反古紙を取り出し、この反古の裏に認めた、和歌は昨夜ものしたので、そなたに添刪を賴みまゐらせんと、持參しましたが、心のせかるゝまゝ、遂忘れました。之は毎夜二時間づゝ夫に乞ふて、婦人のたしなみにもと、詠じて見たものであります。といふて、其の認めた反古紙の歌を象山に渡されました。象山先生はつく／＼之れを誦み返し、詠歌の進歩せるのみか其の上、手蹟の美はしさに感心して、近頃の御すゝみ一と際おりつぱに拜見いたします。して、かく反古うらなどに御書きなさらずとも白紙に御認めなされては如何と申しければ、夫人もうなづきながら、風流のたしなみとして心を和らげるに、詠歌はいと我が心にかなふゆゑ忙しい間に少しながら樂み居るが、吾が樂のために白紙を費すなど本意ないことゝ思ひて、何時も反古うらに書きて居りますと、答へられた。此の一事に

よりても、夫人が萬事につけて如何に質素に倹約で有つたかゞ明らかでありませう。分けて平生着する所の衣服其他、身のまわりの細いものに至るまで粗品を用ゐて聊かも奢ることを致しませんでした。夫人はかやうに己れを奉ずると薄く、また善く家政を整へて、孳々として幾年月を經る中に、追々貯へも豐かになりしより、程善い使用の途を考へて居りましたが、慶應四年の夏、疫病が大いに流行して墓なき最後をとげるもの數多く、中には藥を購ひ得ずして慘狀目もあてられぬ者もありました。夫人、いたく之を憐み、此の時こそと廣く施藥を行ひて、許多の人を救ひましたので、死すべき命を拾ひし者も少くありませんでした。其等の人々は、何れも夫人を命の親とたふとび、世の人また其の惠み深きに感じて、夫人の徳をたゝへ合ひました。思ふに夫人の質素を守り、倹約を行へるは、其の側面に於て、慈善てふ大いなる徳の實現を覺悟されたので、彼の勤倹勵行の餘り、着るものも着ず、食するものも食せずに、其の上句己れの身心を害する樣な勤倹などとは、全く趣を異にして居ります。古語に用を節して人を愛すと言ふことがありますが、洵に夫人の行を言ひ盡した金言と申して差支ないと思ひます。（つゞく）

マダム、レカミエー

菊池雪子

冬枯のながめ淋しき師走のはじめつ方、ジャンヌ、フランソアーズ、ジユリー、アデライドといへるもの佛國繁華の一市街なる、里昴の或る町家に生れぬ、父をベルナールといひ、此市の公證人たりしが、年まだ若くして、道の邊の花に宿かる蝶の夢を驚かし、隣家の犬を追ひ廻はりて、石打の遊びに狂へる頃には、容貌いとゞ麗はしく、而も凜々しく氣高き風采は、自らそが擧動の上に現はれで、世にも稀なる美少年とぞ囃されぬ、されど才學の最と劣りて見えしは、是れぞ世にいふ玉に瑕の譏ならめや、母はジユ

リーといひ、天稟敏活のさがありて、殊には判斷力に富める婦人なりき、さればベルナールに嫁してより、いまだ幾歳をも經ざるに、ひたふるに夫を助けて、すばやく多分の財產を造るに至りぬ、ベルナールは、元來かゝる温和の性なれば、精神常に爽かにして、爲に艶かなる顏せも、一しほに麗はしう、荒む嵐はこのわたりを避きて、餘所吹くかとも思はるゝばかり、年老ふるに及びても、常磐の松の何時までも其顏の變らざりけり。

是れより數年を經たる後、ベルナールはそが妻の盡力に依りて、國庫掛の役員に撰ばれしかば、此時ジユリーも携はれて、共に巴里の都に移り住みぬ、ジユリエツト(ジユリー幼時の呼名)は、軈て父の妹許に其身を預けられしが、伯母は程なく之を宗教學校の寄宿に送りて、一先づ入舍せしむることゝなしぬ、是れジユリエツトが僅か七歳の時にてありき。

斯くてジユリエツトは、懷かしき父母の手元を離れて、寄宿舍なる窓の下に、座ろ螢雪の苦を積みけるも、僅か三年が間に過ぎざりしが、終に父母の膝下に呼ばるゝことゝなりて、始てホームの樂しき夢を結ぶことを得たり、母はジユリエツトをして、勉めてそが風姿を雅かにし、技倆を鍛へしめ、特に裝飾の撰方、洋琴、唱歌、ハルプ(琴)、舞踏なんど、心して學ばしめける程に、折もあらば、之をして交際塲裡に立たしめんと、偏に其機會の至るを俟ちにき。

偶まヴエルサイユ宮殿に於て、宴會の催しありし時、佛王ルイ十四世は、皇后マリー、アントアネツトと共に、衆多の皇子皇女を具して行幸ありければ、ベルナールは折こそよけれと、直にジユリエツトを伴ひて伺候せしに、忽ち皇后の御目に觸れられ軈て女官を以て、ジユリエツトを皇女の御側近う召寄せられ、厚き御言葉を懸けられ給ひにき、是ぞジユリエツトが、交際塲裡に花と輝きし初めにぞなんある。

されどジユリエツトは、自家胸中の安心を得んが

爲に、堅く宗敎を奉じ、屢々會堂にも出入して、偏に神の御惠に浴せんことを願ひぬ、交際廣き母は、斷えず故鄕人の訪問を受けゝるが、中にジャック、レカミエーとて、某銀行の頭取ありき。

ジユリエットは妙齡の春を迎へ、紅梅の莟春の風に綻びて、今しも紅脂一點の露滴らんばかり、其艶妖嬈麗なる風姿、殆んど見る人をして、坐ろに恍惚たらしめざるはなかりき、さればジャック、レカミエーは、此時齡既に四十一に達せしかど、素より深切快活にして、殊に愛嬌ある人なりければ、秋の宵空にきらめく新星の如き、ジユリエットと偕老の契を結ばんと欲し、ベルナール夫婦に其意を漏らしけるに、母は我子の歲の漸く三五の月の圓かなるに比ぶれば、餘りに其差異の甚しきに、暫し小首を傾けしが、元より温良貞淑なるジユリエットの、敢て之を拒絶するにもあらざれば、遂に侑めて合衾の式をぞ擧げしめぬ、こは是れ佛王崩御の後、僅に二ケ月を經し頃にして、革命の殺氣は國內に充ち滿ちたるに、王黨の一人なるレカミエーは、日々斷頭臺近くに進み行きて、親しく其刑場の有樣を目擊し、傾て禍の又身に及ばゞ、斯く斬首せられんかなど、語りしこともありけるとぞ。

然るに幸にしてレカミエーには、何等の事もなかりき、されば怖恐時代は早くも過ぎて、レカミエー夫妻の交際漸く繁く、彼が客室はいつも無數の賓客を以て充すに至りぬ。

夫人の年齡僅に十八、其美しさいはんやうなく、譬へば柳の枝に櫻咲かせて、吹く春風に靡く歩行のさま、卵の如き艶かなる顏、黑目がちの眼よりは愛嬌常に滴りて、婀娜たる其の姿質に美しくぞ見られぬ、されば罪なきエンゼルの半身は、其影疾くに夫人に宿りけん、彼が微笑漏すとき、氣も魂も脫殼の、只其人の形骸をのみ見るやうなりき、然るに夫人は先天的人望を得べく、斯の如く容姿優しき人と生れつきければ、却て其が爲に那翁一世の恨を買ひたるぞうたてなれ。

一千七百九十七年十二月十日のことなりき、伊太利より新に凱旋せられける那翁の爲に、市民は一大祝賀會を開かんとて、ルキサンブールに於て、極て盛大なる祝典を擧げたることありき、此日會するもの內閣長官、各大臣、有位有爵者を始めとして、朝野の貴顯紳士悉く參列し、レカミエー夫人も、亦母と共に此盛典に列なりしに、那翁の入り來りし時、レカミエー夫人は恰も他の人を見て、其人の許に至らんとて、只一人席を立ちたる折なりければ、並居る衆人夫人の艶麗なるに胸打たれ、滿場は此時頻にさゝめき合へりける、那翁は其餘に噪がしきを訝りつゝ、如何なる事の起りけるかと、靜に後を顧みれば、何ぞ圖らん、若き美婦人の席を立てるを見て、諸人の噪ぎ立つにてあらんとは、那翁はやがて氣色惡しく、譴責の鋭き視線を夫人の方に投げやりぬ、餘りの氣味わるさにレカミエー夫人は、身の毛もよだつばかりの思ひして、それよりは是事の長く胸の記臆より去らざりきとぞ。

かくて交際の端緒ひらかれしより、スタエル夫人とレカミエー夫人とは、其情交益々濃密となりき。されど心次第に虛榮に驅られて、奢侈を盡し、巴里近くに高閣を構へて、夏季の蒸熱き日には靑葉の蔭に逍遥ひ、日々宴會を張りては、朝野の名士を招待しける程に、そが中には彼の有名なる、スタエル夫人バルラを始め、那翁の弟たるルシアン、ボナパルトあり、其他內閣長官、詩人、喜劇作者等許多なりしが、獨りルシアンは夫人の美を愛でゝ、竊に之に懸想しけるも、夫人は巧に之を斥けて、遂に其意に從はざりき。

レカミエー夫人は、元來外見を飾るの才學と、其天性の美質とを備ふれども、而も婦人の徳たるべき貞操を守ること能はざりき、夫は又外事と遊興にのみ奔走して、只妻にのみ榮華を與ふる、情深きものに過ぎざれば、かゝるホームの爭で長く暖きを得べきぞ。

かくて夫人の交際は、次第に世の敗德に向て流れ

去りぬ、されど彼は其悪しきを知りつゝ、断乎として之を改めん心もなかりき、夫人の最も親友とせしは、皇族マチウ、ド、モンモランシー公なりき。夫人と交際を結べる人々には、モンモランシー公の外、従弟アドリエン、ド、モンモランシー公、ギーギユ公、ジヨセフヒンの子ウゼヌ、ボーハルネー、ド、ラモアギヨン、ドナルボンヌ、フシエ、那翁の兄ジヨセフボナパルト、ベルナドツト、マゼナ、モロー、那翁の妹エリザ、全カロリヌ等にして、いづれも當時有名の人々なりき。

ルシアンは夫人に對して失敗せしかば、それよりは常にレカミエーの親友として、只普通に訪づるゝのみなりき、嘗て那翁の執政を祝せんが爲に、ルシアンは一日盛宴を開きて、レカミエー夫人を招待せしに、夫人は客室に居りし那翁をば、ジヨゼフと思ひ誤りて、眼もて窃に之に挨拶しければ、那翁は不審の雲に覆はれつゝ答禮せしかば、レカミエー夫人は、此くと見て直に己れの誤りを知りしが、那翁は此時フシエの耳に囁きて、夫人を愛する旨を告げしめぬ、されば那翁は食堂に入りて、レカミエー夫人を己が側近く座せしめんとしたれど、夫人は常に之に遠ざかるの風を示しければ、那翁は忽ち怒氣を含み、ガラと云ふ老人を呼びて、其座に就かしめぬ、老人は軈て席を退きて後、レカミエー夫人に向ひ、折角君が爲め我が側近う席を設けしめしに、など來たまはざりつると詰れば、夫人は餘り恐れ多くてと答へしが、之よりは一層那翁に不満の色を増さしめぬ。

其れより後、夫人の父なる人、偶ま職務上の過誤ありて、拘留の身となりければ、夫人は那翁に向ひて偏すら嘆願せしに、累囚の愧は解かせられけるも更に其職をば免ぜられぬ、これぞ日頃の恨を晴さんとての那翁が下心とは知られける。

一千八百〇二年、レカミエー婦人は母と共に、遽に思ひ立つことのありてにや、英國漫遊の途に上りしに、全國の婦人よりは、殊の外優待せられて、翌

年歸國したりしかば、此くと聞きたる那翁は、早速フシエを遣はして、夫人に女官の位を授くべければ皇帝に仕へたまへやと、懇に云はしめけるに、夫人は氣強くも之に應ぜざりき。

斯る間に、レカミエの銀行には事起りて、之を繼續せん見込もあらねば、此上は皇帝の保護を仰ぐの外なく、已むを得ず御手元より數十萬金を借出さんと欲したれども、那翁堅く拒みて其願を容れざりければ、レカミエーは詮なく己が邸宅を始め、夫人の寶物の一切を賣り盡して、そが回復の機に至る迄夫人を瑞典國に逃がしやりぬ。

フロシア皇帝フレデリク大帝の甥、オグスト親王は、妙齢の好男子にして、而も智勇人に勝れけるがレカミエー夫人に向ひて、タトヒ一生を契らずとも御身よく我許に來らば、皇族の名を得らるべしと申込みしも、是亦辭して受けざりき、それより夫人は姪と侍女とを從へて、ローマの都見ばやと、軈て其遊覽の途に上りぬ。

夫人は皇帝の怒に觸れしより、終に破産を來たし身は放浪の辛苦を甞むること三年にして、忽ち那翁敗北の報を得たりしかば、漸く巴里に歸ることを得たり。

此時那翁は又もヴアテルローに敗れければ、英國の總大將たるヴエルリントンは、レカミエー夫人を訪なひて、そが室内の戸を叩きつゝ、我は御身が厭へる那翁を攻擊しぬと言ひければ、英人の口より斯る忌はしき語を聞かんことは、寧ろ憤慨に堪へずとて、堅く戸を鎖して之に應ぜざりき。

スタエル夫人病に犯され、遂に百年不歸の人となりければ、レカミエー夫人は悲哀やる方なく、オグスト親王に書を贈りて、夫人の死せる旨を報じ、併せて親王は夫人の著書を愛讀せらるれば、畫師にその肖像を畫かしめたまへと云ひやりけるに、親王はやがて名家ゼラールに命じて之を畫かしめ、後ちレカミエー夫人に贈られにき。

レカミエーは世事に長けたる人なりければ、又も

三年が間に元の財産を回復したれども、運遂に拙くして再び之を失ふの悲境に陥りしが、夫人はいと沈着に節儉を旨として、専ら夫の老後を慰めぬ。夫人の客室にはいつも名士をもて充たされしが、そが中にシャトブリアンといへるものありて、交際の日猶淺けれども、殊に夫人の親任はいと深かりしが爲に、他の疑を招くことすらありき。

夫人は侍女を伴ひて再びローマに行きけるに、その侍女忽にして病に罹り、身命既に危く見えしかば司祭を招きて新教徒なる彼女を改宗せしめ、かくて世を安らかに去らしめぬ、此度の旅行は姪シヴオク孃が、轉地療養の爲なりければ、所々を遊び歩きてナープルに至りしに、偶ま年若き文士來りて夫人に面會を求め、シヴオク孃と結婚せんと乞はれしまゝ、直に此旨諾ひけり。

レカミエー夫人は、計らぬ緣に由りて、そが最愛の姪を嫁せしかば、軈て旅裝を整へて巴里に歸りしに、偶ま彌生の二十四日は、聖金曜日とて基督十字架の上に、死去したまひし紀念日なるに、而も其日の午後三時、マチウ、ド、モンモランシー公は、聖トマダキナスの會堂に詣でゝ、十字架の下に祈禱し居りしが、如何なる譯にや其儘息絶えて死しければ、レカミエー夫人は斯くと聞きて、悲しき中にも榮ある其死を賞して、あゝ我もやがて公の死に倣はましやと嘆せりとぞ。

レカミエーは其後復び財産を回復して、宏壯なる邸宅を購ひけるが、程なく此の世を去りぬ。

六十の高齢とはいへど、夫人の若くして艶なる顔せを見ては、何れも驚嘆せぬ人なかりき、されど夫人自らは、道行く人の振向きて我を顧みることわらねば、我は早や年老ひてけりなど打嘆てり。

今はとて、夫人は靜に日を送らんと欲し、訪ひ來る有爵文士などに乞ひて、シャトブリアンの作なる、メモアールドウトルトンブを讀ませては、之を聞くをもてこよなき樂みとはなしぬ。

されば夏の日の熱きにも、冬の日風の冷きにも、

シャトブリアンは日々怠らず、夫人を訪ふを例とせり、次でまた人々の訪問せらるゝことありしが、東雲白む頃婦人は寝床を離れて、信仰の書を讀み、獨り默想するを常となしぬ、こはこれモンモランシー公の夫人に傳へし習慣なりき、正午の頃食事を終りてより二時半、即ちシャトブリアンの訪ひ來る迄は車にて郊外の散歩を試み、或は慈善の業として人々を訪らひき。

一千八百四十七年、シャトブリアンは妻を失ふに至り、レカミエー夫人に再縁を申込たれば、計らぬ請に夫人はいたく驚きて諾はず、明年七月、シャトブリアンは不圖病に罹りて、今は早や癒えずなりぬ、軈て甥とレカミエー夫人と、司祭とに枕邊を護られて、全く永遠の眠に就きぬ。

一千八百四十九年、虎列剌病の流行に際して、レカミエー夫人も又之に冒されければ、急ぎ司祭を乞ひ、悔悛を行ひ、神の慈心に一身を委ねて身まかりぬ。

夫人に於て一の感ずべく、而も世の婦人に抽んでたりし所は、深切ありて嫉妬の心なく、偏すら他人の立身幸福を助くるにありき。

（完）



學藝

庚子道の記評釋（四）

文學士　境野天華

午の時ばかり關にいたる。山のかひにはくきぬきしわたし、關屋には弓やなぐひなどきらく〵しうおかせたれば、ことなき身にもむねつぶれ、手足さへぞふるふ。かしこきかげとたのみつる笠も扇もとられたればつくろはぬおもてにふくだみたる髪のこぼれかゝりていかに見ぐるしからむとあせあへてけり。

正午時分になりて箱根の關に着いた。關所のありさまを云つて見やうなら、山と山との狹まりて居る處へは人の通行出來ぬやうに木柵を結ひめぐらし、關所の番小屋には弓のやなくひのと威嚴めしく恐ろしく並べ立てゝあつて、自分の身には何も犯した罪があると云ふでは無いが、此の所の狀を見ては流石女の心弱さであらう、胸打ち騷ぎ、手足震るへてどうなることかと思ひ惑はるゝばかりであつた。それに斯る時は唯一の賴み好き隱れ家と何よりも大事に思つて居た笠と扇と、いづれも關所を越ゆる時の天下の御法度に從つて、檢視の人の手して取り除けられたので堪らない、道中の事修飾もしない窶れた面貌に亂れかゝる髪の毛の如何に見つともないことであらうと思つて耻かしさに冷汗を流したことであつた。

山のかひ　山と山とが相接して狹くなりて居るところ、

やなぐひ　矢をつきさして背に負ふための具箙に類して其の輕粗なるもの、

かしこきかげ　枕草子にも「かしこきかげとさゝげたる扇をさへとり給へるに」とある。かしこきは頼みきりたるなど云ふ意に取りてよい。

ふくだむ　髪のほうけ立ち、そゝけて亂るを云ふ。

此の一段昔の關所越えの狀が、誠によく寫されて居る。殊に女の身には如何にもさうであつたらうと思はれる。

又誰に對してつくらふとも云はねど、姿を耻らうのは女のたしなみ、誠にふさはしい書き方と云ふべきであらう。

さはいへあそびくゝつのたぐひは人のほかなる定めありとていさゝかのさはりもなく通し給ひつ。うれしとやいはまし、かなしとやいはまし。けふは坂あまたこゆるに山籠もふえうなりとてあゆみくるしき石のうへをかちにてたどりけるまゝいといとうつかれこうじぬ。

檢視と云ふのに一寸は膽をつぶしたが然し、遊女舞姫の類のものは人ではない、人として待遇するには及ばぬ、從つて嚴しい詮議もするに及ばぬ官の御法度掟であるからと云つて少しの故障もなく關所を通さして下されたのは嬉しいが、嬉しい事であつたと云はねばならぬが、一つ心に濟まぬは人非人！如何にも輕蔑されたやうで悔しく、悲しい感じもあつた。然しこれも自分の身分の卑しいからの事で誰を恨むべきことでもない、致方もない事である。今日の山越え、坂越え、山籠は反つて不便である、要らないと云つて、ごちごちして步みつらい石の上を徒步で越したので其の疲かれ方は大抵のことでは無かつた。

あそびくゝつ　あそびは前にも出て居る。くゝつ

は普通に傀儡師(人形づかひ)を云ひ、又時に宿場女郎のことをも云ふが、玆處では後の場合の意味で用ひたものである。作者は白拍子である所からかく書いたものと見える。

畑、湯本、風祭、小田原。せちはさつきとかや、されど彌生の三日こそ心もはなやぎて桃の匂ひに空さへゑへるけしきは、あやめのながきねもかけておよぶましう覺えたれ。早川の瀬渡るほど巳の日のはらへおもひ出でゝ

早川にくだす鹽木をあまの子の
身のかたしろと人や見るらん。

畑の宿、湯本の宿、風祭の宿を過ぎて小田原の宿にもなつた。今日は春三月三日の桃節句である、昔から節句は五月五日の端午の節句を最も賞ではやすことになつて居るが、然し、今日の此の桃節句、うらゝかなる春光と共に人の心も陽氣に浮き立ち、駘蕩たる四方のながめ、今を盛りに咲きこぼるゝ桃花の見渡すかぎり空に霞み立罩めて居るけしき、さながら醉へるが如きのどけさにはとても五月五日の端午の節句などの及ぶことではない。五日の軒の菖蒲長き根を軒にかけて祝ふも面白いがとても今の此ののどけさには及ぶことではない。一年中の好季節は今日の三月三日の桃節句であらうと思はれた。早川の瀬を渡るとき彼の巳の日に行はるゝ祓のことを思ひ出して、かういふ歌が出來た。

(歌)鹽燒くための木を伐りてこゝの早川の瀬に上流から流して居るが、それを何であるとも知らぬ人達はあれは多分漁士の子どもが身の形代を流すのであらうと見ることであらう。

かたしろ　昔陰陽師等祈禱の際紙を以て人形を作り、人の身の災をこれにうつし川に流し、災難

を秡ふ儀式としたので巳の日の秡と云ふのも此の事を云つたもの、此の習俗は或る地方には今も殘りて居る。

畑、湯本風祭小田原、何れも昔の東海道の通路に當りた地名。此の一段は非常に省筆法を用ゐてあるので一寸文章が解りにくい。然しこれが爲めに强く響く處があるやうである。せちはさつきとかやと續けた所如何にも面白い書き振りと云つてよい。

川を渡れば酒匂といへる里なり。こゆるぎの磯ちかき笘屋の内にもひゝなあそびするをとめどもは、桃山吹の花などこちたきまで瓶にさしけふの日のくるゝををしと思へるさまなり。野に出でゝはゝこなどつむもあるはけふのもちひのためなるべし。

早川を渡りた向岸は酒匂の里になりて居る。酒匂の里につゞくこゆるぎの磯、小磯大磯の浦づたひたどる道すがらの海士の磯屋の中にも春は充ちて居て其處にも都と同じく雛祭りして遊び樂しむ海士乙女も通りがゝりながら見られた、見れば祭りてある雛の前には煩さい程もしつこく桃の花、山吹の花を折り來て花瓶につきさし、其の下に集りてさても今日の日の疾く暮ることゝ思ふて居る樣子が見られた。又一方には野外に出懸けて其處等に生へて居る母子草を摘んで居る乙女等も居たが、恐らくそれは今日の節句の餅を作る爲めであつたらう。

はゝこくさ　母子草、春より夏にかけ黄色の花を開く植物、三月三日其の葉を摘み取りて餅の中に交へ搗く風習は昔より行はれて居る。

七とせのむかし此所を過けるは九月九日にて、別れ來し親はからからのことなど

思ひ出でかなしかりしに、けふは一二日のうちに逢みんことをおもへば、うれしきあまり心さへときめきして、それとなくうちゑみかちなるを、かたへなる人らはものぐるほしきにやなども思ふらんよ。明日は府にまゐれば、おほやけわたくしのよういありとて、男のかぎり皆戸塚の宿にといそぐまゝに、ひとりのどかにも行かたくて、おなしさまにやどりに着きぬ。

思ひ起せば今は七年の昔、尾張に下向した時、此の里わたりを通過したのは丁度九月の九日菊の盛りの重陽の節句であッた。遙々と親に離れ、兄弟に別れて來たので頻りと都戀しくなり、そなたの思ひ出されて悲しかつたが、それとは反對に今日此の里を過ぎた時は、今一二日もすれば親にも兄弟にも逢つて互に親しく話も出來ると思つたら、さあ嬉しくて堪らない。嬉しさが餘りて心はちつとも落付かぬ。何につけ彼につけ笑顔を見せる。どうした事と他の人は怪しく思つて見たに違ひない。若しか氣が變に成つたのではと思つたのではなかつたらうか。兎に角に明日中には江戸に着くこと出來る。江戸に着けば公の事、私の事用事が多く忙しい事である一刻も疾くと男の人達は早く戸塚の宿までと急いで居たので自分獨りゆつくり長閑に搆へ込んで居る譯にも行かず、皆と一緒に其の戸塚の宿に着くことになりた。

三日の夜より雨ふりいでゝつとめても猶やまず。金川河崎品川などいふ驛々もたゞ過ぎにすぎゝて芝にまゐる。こゝより大路のさまたかきいやしき袖をつらね、馬、車たてぬきに行かひはえ〳〵し

くにぎはへるけしき七とせのねぶり一ときにさめしこゝちしてうれしさいはんかたなし、其夜は御舘にありて、三月五日といふにふるき家居にはかへりぬ。

三日の夜からかけて雨に降り出され、翌早朝になりても歇んで呉れなかつた。雨の旅、金川（神奈川）河崎品川と過ぎても何も眼には留らず、通り拔けの體で芝の御屋敷に着き、上へ伺候した。芝の御邸のあたり、都大路の有様貴となく賤となく、袖を振れ合ふて行ちがひ、馬や車は縱横に往來し、流石は江戸の賑合ひ如何にも目ざましい。久しく尾張の田舍に引込んで今度出府して自分には丁度七年の間永い永い惰眠を貪りて居たものが俄に目が覺めたやうな氣がして、其の心の嬉しさと云つたら。到着の其の夜丈は御邸に泊り、三月五日の日に自分の古巣、もとの住家に引下りた。

いふかひなけれどしそくのかきりちかきはをばいとこなど待あつまりて、とり〲に何事をいふもまつおほえず。

元より卑しき自分のこと取り立てゝ云ふも仰山らしいが、自分の身内の人達はたれも〲自分が久し振り家に還りたのを歡迎して呉れ、近い親類では伯母や從兄弟の人達が殘らず集りて來て前後左右から一時に話し立てられ、何が何やら一時は返答に當惑する程であつた。

幼き妹のありしもいつかねびまさりて、髮などあけたれば、わかかたには見わすれたるを、かれよりうちいでんもつゝましくやありけん。をばのうしろにかくれてなまうらめしくおもへるけしきに見おこせたるまゝ、猶心得ずして、そこにものしたまふはいづれよりのまらうど

にかおはす、ゆゝしげなることには侍れど過行はべりし母のおもかげに、あさましきまで似かよひたまふめるはとゝへば、かれはうつぶしになりてつらもたげず、をばもはなせまりてものいひやらず。みなはとわらふにぞはじめて心つきぬ。

自分が七年前尾張へ出發した其の時はまだ幼かつた妹も何時の間にか大きく大人らしくなりて髮も上げ立派な一人前の娘になりて居たので、自分の方ではつひ見それてそれとは氣が付かずに居ると、妹の方では流石年もまだ行かぬせいか、自分から名乘りて出るも氣後れしたのであらう、伯母なる人の影に小さくなり、なせ思ひ出さないだらうと思つたのであらう恨めしさうにして自分の方を上目つかひに見遣りて居るのを、自分の方では未だそれと氣付かないで、其處へお居でなさるお客樣は誰樣？どちらの方で？から申しては失禮かも知れませぬが何だか亡くなりました私の母親の顏にそつくりで居らつしやる、實によく恐ろしい程似てお居でになるがと云つたので、彼方は氣まりわるさうに顏を上げて居ることが出來なくなり、下を向いて仕舞つた。伯母の人も自分の云つた言葉に可笑しさにむせかへりて、ちつとも言葉を出さなくなつた。其場の可笑しな樣に一座の人は思はずはつと吹き出して笑つたのでさてはと初めて氣が付いてそれではやつぱし自分の妹であつた!!

かくて盃あぐるほど、老たる父のさゝ目にいますが、やがてまゐり給へりと、いもうとのいふ。

と云ふやうな具合で、久々出逢つた祝ひの爲め、よろこびの盃をやりとりして居ると程もなく、

只今さゝ目と云ふ處に住んで居らるゝ父上が自分の出府を聞きつけて態々此の家へ御出になりたとさきの妹が注進した。

さゝめ　江戸のいぬゐ（西北）の方六七里の所に當る地方、今の日本鐵道線の蕨と云ふ驛に近い所と云ふことである。

（完）

第六號　二十六頁　本分のさきに左の數行脫す。

娘はおのれにみつよつもおよすけしやうにおぼえたればおうなにやなりにけん。いかにえにしなどさたまりて子などもたるか、それとかたみにものなど聞えしことはなかりしも、旅衲の物さびしきにつきてかゝる人のうへさへ思ひ出られてこそなつかしかりしか。



MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

By A. Miyamori.

I. Letters. 書翰文

55 Sangenya Cho, Azabuku,
April 10, 1904.

Announcing a Bicycle Trip.

A. B. Clayton, Esq.,

Dear Sir:—

We beg to announce to you a bicycle trip arranged as follows:—

Date:— Sunday, April 17th.
Destination:— Koganei about 20 miles west of Tokyo, a place noted for its cherry-blossoms.
Meeting-place:— The ground in front of Shinjuku Station.
Starting-time:— Promptly at 9 A. M.
Expenses:— About 50 sen each for lunch & c.

Kindly send us word before Friday the 15th whether we may expect the pleasure of your company.

We remain,
Yours truly,
The Mita Bicycle Club,
Per A. Miyamori, Manager.

自轉車遠乘を通知する文

拜啓左記の通り遠乘會相催候間御通知申上候
日時、　四月十七日　（日曜日）
目的地、　東京の西凡二十哩にある櫻花の名所小金井
集合地、新宿停車場前
出發時、午前正九時
會費、　各自凡金五十錢但し晝食代其他
御同行被下候や否や十五日（金曜日）までに御一報煩度候　艸々敬具

三田輪友俱樂部　幹事
麻布三軒家町五五　宮森麻太郎

四月十日
クレートン殿
侍史

Answer to the Above.

A. Miyamori, Esq., Tokyo, April 14/04.

Dear Sir,

I regret exceedingly the fact that I have made an engagement to address some students at Aoyama on Sunday, and consequently shall be deprived of the privilege of joining your excursion. I am sure you will have a pleasant time, and hope you may have

fine weather.

Sincerely yours,

A. B. Clayton.

同上返事

拜復私儀日曜日には青山の學生に演説する事を約束致居候爲め遠乘に御同伴致すことを得ず遺憾の至に存候諸君は定めて愉快なるべしと奉拜察候同日は好天氣ならん事を奉祈候　早々頓首

四月十四日　クレートン拜

宮森麻太郎殿

Ditto. 同上

Thursday, April 14th.

Dear Sir,

Mr. Clarke is very sorry but he is unable to attend your bicycle trip on Sunday, as he is down with a very bad attack of influenza.

Yours truly,

J. Clarke.

同前

拜復良人儀惡性のインフルエンザに犯され打臥居候ゆへ殘念ながら日曜日の自轉車遠乘へ同行致すことを得ず此段御返詞申上候

四月十四日　ゼイ、クラーク拜

II. Pleasantries. 滑稽談

The Prudent Helpmate.

Mrs. Gaysett.— John, dear, we must begin to economize.

Mr. Gaysett.— Right, my love; when shall we begin?

Mrs. Gaysett.— Just as soon as I have picked out my Easter hat.

倹約なる内儀（オカミサン）

細君曰く『もし旦那是からお互に倹約せねばなりませんよ』

良人『そうだよ。では何時から倹約を始めることにせうか』

細君『私が基督復活祭の時にかぶる帽子を目附けてから直ちに始めませうね』

An Inquiry.

Astronomer.— Why, some of the stars travel hundreds of miles in a second.

Friend.— Really? Which of them holds the record?

質問

天文學者『一秒間に數百哩運轉する星もあるのです』

友人『へーそうですか。ではどの星が里程杯を記錄致しますのですか』

Some Misgivings.

Old Richman.— I hope you'll never have the gout, Norah.

Norah.— I hope uot, sir;— but the fortune-tellers always tell me that I'll be rich some day.

心　配

老人の金滿家『お梅やお前はおれの樣に痛風にならねばよいが』

梅『旦那樣私も痛風にならねばよいがと思ひますがト者(ウラナイシヤ)は私はいつか旦那樣の樣な長者になるだらうといつでも言ひますから私は心配ですよ』

After the Elopement.

Her Father.— Well, it can't be helped now, but it makes me tired to think of your marrying a man without a cent to his name.

The Bride.— Why, pa, how unjust! I *know* he paid for that telegram asking you to forgive us!

驅落の後

父『まゝよ今となつては仕方がないけれども一文の錢もない人にお前を結婚させることを考へると本當にいやになる』

花嫁『でも御父さんそれはあまりですよ。あの御方は御詫を言ふてあげたあの電報料は慥に拂ひましたよ』

War News.

" Another great naval engagement is going on."

" Yes? "

" Yes. The roar of the guns has been heard on Park Row.

戰のたより

甲『又大海戰をやつてゐますよ』

乙『さうですか』

甲『さうです。鐵砲の音が芝公園の方角に聞へましたよ』

III. News Items 新聞記事

Gensan, April 25. 2.10 P. M.

This morning three Russian warships, accompanied by two torpedo-boats, suddenly arrived here. Our residents immediately took refuge. The torpedo-boats afterwards left the harbour, while the warships are still staying inside the port.

四月二十五日午後二時十分元山發(電報)。今朝三隻の露國軍艦二隻の水雷艇を率ゐて當港に來り我居留民は直ちに避難せり。其後水雷艇は去りたれども軍艦は依然港内に留まり居れり。

Reward to Japanese Gendarmes and Police.

The Emperor of Korea has presented the sum of 300 yen to the Japanese gendarmes and policemen at Söul in recognition of their services during the recent fire at the Korean Imperial Palace.

日本憲兵及警官への賞與

韓國皇帝は過般宮城火災の際盡力せる在京城の日本憲兵及警官に慰勞として三百圓を下賜せられたり。

Departure of the U. S. Guards.

It is reported from Söul that 70 out of the 100 U. S. Legation guards left Söul for home on Saturday at 6 A. M.

合衆國護衛兵の出發

京城よりの報導に依れば米國公使館護衛兵百名の内七十名は去る土曜日午前六時本國に向け京城を出發したりと云ふ。

London, April 23.

A contract formally transferring the Panama Canal to the United States has been signed at Paris.

四月二十三日倫敦發(電)

米國に向けて正式に巴奈馬運河を讓渡すの契約は巴里に於て調印せられたり。

The Railway Strike in Hungary.

The Hungarian railway strikers number 30,000 men. The railways are almost paralyzed, negotiations with the strikers having resulted in failure.

匈牙利に於ける鐵道同盟罷工

匈牙利の鐵道罷工者の數は三萬人に達す。罷工者との交涉は失敗に歸し鐵道は殆ど休業の有様なり。

Settement of the Hungarian Strike.

The Hungarian railway strikers have accepted the Government's terms and returned to work.

匈牙利同盟罷工の落着

匈牙利の鐵道同盟罷工者は政府の條件に應じて復務せり。

Poles Plotting for Independence.

A plot has been discovered to secure the independence of Poland, and to blow up two new Russian cruisers now arming on the Neva.

波蘭人の獨立陰謀

波蘭の獨立を恢復し且つ目下ネバ河畔にて武裝中の二隻の露國新巡洋艦を爆發せんとするの陰謀發覺したり。

Dr. McGee and Party.

Dr. N. A. McGee and her party, accompanied by Surgeon Admiral K. Takagi (retired), visited the Japan Red Cross Hospital at Shibuya on the afternoon of the 25th inst.

マツギー博士一行

マツギー博士一行は休職軍醫總監高木兼寛氏に伴はれ去二十五日午後赤十字病院を參觀したり。

日本女子

（禁轉載）

水戸烈公 武家女訓（つゞき）

嫉妬の心あるまじき事

嫉妬はいづれもねたむといふ文字にて、女子たるもの、尤つゝしむべき事なり、それいやしき庶人のことを匹夫匹婦といふゆゑは、古へより夫一人に妻一人なるものなればなり、士より以上は妻の外に妾あり、それより大夫諸侯天子と、その位貴きに從ひ、妾、媵、嬪などいへる數もあまたあるべきは、天地自然の理にて和漢の常道なり、神の御代よりうみの子のやそつゞきといへる事あり、子孫の千歳にわたりて絶ざるをいふ也、もろこしの敎にも、子孫の絶ぬる事を不孝の第一といひて、わが血脈は先祖の血脈なれば、わが血脈を絶すは先祖の血脈をたやすにひとしきがゆゑ、不孝といふなり、貴き人の血脈は、殊に重きことわりゆゑ、貴きほど、その妾媵をも多くめしつかひ、血脈をひろむる事なり、庶人とても子孫たえてよろしきといふにはあらねど、天地の間に、女子の數もかぎりある事にて、億萬人の庶人みな妻妾を備る事はなり難きのみにはあらず、いやしき人家内多くしては、すぎはひもなし難きことわりゆゑ、庶人は匹夫匹婦

にかぎれるなり、然るに貴き人の内室又は妾媵となりてありながら、おのれ一人君の寵を専らにせんとて、他人を妬み遠けんとするは、貴人を庶人にひとしくするにあり、かつは不孝の道をすゝむることわりにて、いと〳〵あさましき事なり、たとへば賤きものは、其臣下といふもなけれども、位高きほど臣下も多きことわりなるに其家老一人にて權威をふるひ、外の家中をば主君に目見もさせまじきとおもふにひとし、女子たらんものは、此理をよく知りて、かしこき家老のおのれのみ權を専らにせず、もろ〳〵すぐれたる人をあまたすゝめて、共々に君に事へ、善政を行はむとおもふが如く、君父の心にかなひたる妾媵あらば、これをすゝめ用ひ、もろともに心を合せ、むつましくやはらぎて、主君の血脈さはに成ぬる樣にと心すべし、さて女子の心に、男子のみあまたの女をつかひて、女子はあまたの男子をつかわざるは、いかにとも疑ふべけれども、これ人の禽獸に異なるゆゑんなり、禽獸はその母はわかりぬれども、その父はいづれと定め難し、一人の女に二人の男ありて子を生んには、其父わかち難くして、禽獸とひとしかるべし、男子はたとひ幾人の女子をつかひたりとも、その女子どもの生ぬる子はかならずわが子なり、男子は妾媵をつかひ、女子はかならず一人の君夫を天と仰ぎて、あだし心なく、貞節を守るべき事、神世にして大國主の命の嫡后の御歌にも見えたり、これすなはち人倫の本にて、肝要なる事なり、然るに夷狄の國には折々女子をもて君とするありて、その女王は男子の妾をつかひぬるが如くに、あまたの男子をつかふとかや、しかる時は母は女王たる事しれたれ共、父をばいづれと知るべからず、これまさしく禽獸の道なり、されば嫉妬深くして人を遠ざけ、おのれ一人にて君夫に事へむとおもふは、よく〳〵たしなむべき事也、天と仰ぐべき君夫に事へながら、淫亂のふるまひあるは、禽獸の行ひなり、神の御國に生れ、萬物の靈とあるべきもの、いかで夷狄禽獸の行ひを學ぶべけんや。

胎敎の心得あるべき事

胎敎とは、婦人懷姙したる時、其行跡正しければ、生るゝ子も正しくして、器量人にすぐるゝことなれば、胎内より敎ゆるといふ心にて、胎敎といふ、されども懷姙せし時のみ行儀を正しくせよといふにはあらず、すべて人は父母の氣をうけて生るゝものなれば、いかに其父正しき人にても、母の心ざまよろしからず、其行ひよこしまなる時は、生るゝ子父の正しきには似つかず、母のあしきに似る事其ためし少からず、然る時は婦人の爲に其家の血脈をあしくすることわりなり、されば婦人は常々温順正直をもとゝして、懷姙するときは、殊更につゝしむべきこと、聖人の敎の如くすべし、胎敎ある事を知らず、懷姙の時、身持正しからざる時は、生るゝ子もよろしからざるのみにも、或は難產のうれへも有と聞く、今諸家の風を聞に、女子の家すぢ身がらいといやしくても、其容色うるはしく、淫聲などにたくみなれば、國主領主の妾となる事ゆゑ、妾とだにいへばいといやしきものゝやうにいひならはし、妾も婦德を脩むる事などは、露だに知らずして、たゞ奢侈をきはめんとのみ心ざし、たま〳〵君の心にかなひぬれば、下に向ひて權威をしめし、子を產むは、女の常成るを必死の役を勤めたる如き風情をなし、(女の初產は男子の初陣にひとしなどおもへるは、もとよりおろかなる事なり、男子は初陣のみ成らす、幾度にても戰場に出ぬるは、必死と思ふべき事成共、女子の子を產は、天地自然の道にて、常の事成ば難產といへる事はあるまじきことわりなり、難產は懷姙の時其行ひよろしからず、理にそむきたる事あるか、又は外の病のさし合によることゝしるべし、毒のさし合によりて、流產あるにてもおして知るべし、禽獸の產にて死ぬる事を聞ず、人はなまじひ智ありて是ばかりの不養生はさわる事あるまじきと、理にそむきたる事をして、千萬人の中

に一人二人產にて身うせぬるを聞て、產は必死のやうにおもふはひが事也、すべて女のなしうるほどの事にて、男子のなしえざる事はたゞ子を產むの一つのみなれば、產は全く女の持前にて、病氣にあらず、されば身の行ひを正うし、養生だにつゝしめば、かならず安產とおもひて、まよふまじきわざなり）女子心得かたわしき時は、胎教はさらなり、子を產たる後も、敎る事をしらず、はては廉中內室をないがしろにして、甚しきに至りては、異腹の子を惡みて、おのが生たる子を世嗣にせんとたくみなどするは、いといと惡むべき事也、賢くも御かどの中宮は、月にたとへ、女御其外は星の如し、いかに暗夜なりとて、星の月になりかはることわりやあるべき、本妻と妾の差別すべてこれにひとしければ、妾媵の身として、奢侈權威につれるは國家の大變なりと知るべし、されど本妻に男子なき時は、妾媵の生たる子も世嗣ともなり、又庶子にてありぬるとも、大名は云々大夫は云々夫々他家に養はれて、國家の主となりぬべきことなれば妾媵の家すぢ身からは、かならずえらびて召仕ふべき事也、しかれば人もこれをいやしまず、其身も婦德を修め、胎教をつゝしみ產みたる後も、男子は男子のやうにならはし、さすが武家の血脈といはるゝやうにそだて敎べき事なり、今太平の御代久しく武家も日々に柔弱になりゆき、男子と生れながら、雷の音、鐵砲の響をさへ嫌ふもの少からず、これ一つにはいとけなき時より、側に付たる女子どものあしく癖をつけぬるによれり、貴きも賤きも、幼年の時は婦人の手にて養育する故、養育する婦人の心得次第にて、强健にも柔弱にも成也、けなげに成長する時は、又其人妻妾等へも其心を以て敎ゆる故、代々けなげなる武士出來るべし、柔弱も同斷也、他家の事は嘆きても詮なけれども、かりそめにも、わが德川の家に事るものは皆家筋身がらたしかなるべければ、吾朝にて 楠正行の母、もろこしにては孟子の母などの事をはじめ、いにしへの烈女をしたひ、おのれもおとらざる意地をたて、生ぬる子をも、をしへさすべし、いとけ

なき時より、明君良臣の物語をも聞せ、夏は暑をいとはしめず、冬は寒をおそれしめずして、衣服などもいかにも麁末なるをきせ、とにかくに筋骨をきたひ、志を善にみちびく事を第一とすべし、畏れおれど、東照宮も武士は武士にそだてよ、とをしへ給ひ、又わが義公は、水戸の家中の子の如く、そだち給ひしゆゑ、文武の明君ともなり給へり、諺にもかはゆき子には、苦き物を與へよといへるが如く、子をよき人になさむとおもはゞ、いかにも艱難にならはしむべし、また無事無病になさむとおもはゞ、甘き物を減じ、苦きものをわたふべき事なり、武士の皮をかぶりて、柔弱卑劣に成行、又は日かげに生ずる青瓢箪の色をなし、夜は庭へ出る事をも恐るゝ如き子孫いできぬれば、父祖の耻のみならず、徳川の流れをけがし奉ることわりなれば、上に立ぬる女子どもはいふもさらなり、庶子に付ぬるものまでも、心あるべきことなり。

婦徳を修むべき事

もろこしの教に、婦行とて女に四つの行ひあり、一つには婦徳といひて貴賤にかゝはらず、すべて女の道を心に備へて、操正しく其行狀に法有て人に誹らるゝ事なく、人からよきにつきては、其徳にて容貌をはじめ、すべての事よく見ゆるをいふ也、二つには婦言と云て、天性の音聲の美惡にかゝはらず、女子のいふべき言葉を撰ていひ、似合しからざる惡語をいはず、其詞やさしくして、人に厭はるゝ事なきをいふ、三つには婦容と云て、生質の美惡にかゝはらず、すべて女は顔容うるはしきをよしとする事故、たとひふつゝかに生れたりとも、顔に垢のなきやうに湯をつかひ、口中に臭氣のなきやうにうちすゝぎ、衣服たとひ麁服なりとも、あざやかにいさぎよくして、なりふり垢拔のして見ゆるをいふ、しかるに容貌は天より受得たるものにて、うつくしく生れつきたるものは、さばかりとりつくろはねども、容儀うるはしく見え、

又みにくゝ生れたるものは、いか程おもひてもふつゝかなる筋骨をしなやかにする事なるまじければ、取つくろひてもせんなしとて、沐浴等にも怠り、衣服の垢つきたるをもかへり見ざるは、不心得なり、たとひ年よりても身を清淨にあらひ、塵穢のなきやうに心がくべきをいふ、四には婦功と云て、是れまた其生質の器用不器用にはかゝはらず、そのわざにたくみなると、つたなきとの差別ありても、たわむれを愼しみ、心を專らにして、女の手業をよくいとなむ事也、紡績、縫針の事は勿論、清淨に酒食をとゝのへて、祖宗の神靈にそなへ、家に賓客ある時は、みづから料理する心得にて心をつくしてあしろふべし、是は天下の女子の四行にて、後漢の班姬が女誡に見へたり、みやづかへの女子とても、女子の四行は如是ものと心得置くべき事なり、さて此四行の中にも、婦德をもて第一とすべし、いかほど容貌うるはしく、立居ふるまひ人にすぐれ、もの言ひすなほに其わざ人よりも器用なりとも、其心ばへねじけ、嫉妬ふかく、淫亂がましき聞あらんには、身も禍害をうくるにいたるべし、おそるべき事ならずや、うちまかせて婦德といふは貞節の心ゆるがずして、烈女といはるゝ女子ならば、婦言、婦容、婦功の三つもおのづからこれに從ひ、千に一つ足ざる事ありとも、婦德をさまたげざるべし、聖人も人の誰にもせよ道を學びだにすれば、君子とて能人に成べきものと敎へ給へば、女子とても其心一つ用ひ樣にて、世に類ひなき賢女といはるゝばかり成ぬべし、今の世の婦女子やゝもすれば、衣服又は髮の飾に美を盡さんとのみ心得て、德を修むる事をつとむる者少し、衣服髮の飾なんどは美にせんと思へば、いつ何時にてもたやすき事なれ共、行跡の惡きは癖に成て改め難く、貴人の女子は縫針のわざよりも、讀書手習歌道を學ふべし、いやしきものゝ女は、專ら縫針を勤むべし、しかはあれども家富てあまたの人をめしつかひ、佛信心又は活花碁將棊をもてあそび、あるひは戯作の草紙など讀むほどのいとまあらんものは、人の人たる道を書記せる書をよみ、婦

德を修めん事を思ふべし、然るに當時の風俗浮華淫樂を好むものは多して、婦言婦容を修る者少く、婦言婦容を修るものは、まゝあれども、婦功を學ばんとおもふものは少く、婦德を學ばんとする者は殊更にすくなきはいかにぞや。

學問に心をよすべき事

女子は婦德をもて第一とす、其婦德を學ばんとならば、和漢の道の大筋をしらざれば、事につけものにつけ、迷ひ疑ふことありて、われしらず道にそむく事あるべし、男子と違ひ、女子は人の家へゆくものなれば、ものを讀習ふも、十二三歲のころ迄に覺えざれば、其後はいかに習はんとおもひても、心にまかせず一生文盲と成て、佛道などに欺かるべし、吾朝にも、女子にて男子にもまさるばかりに、文道に達したる人もあれど、是はいとまれなる事なれば、誰もさばかり文道に達せよといふにはあらず、只もろこしの事も論語孟子をはじめ、烈女傳のたぐひ、大筋のわかりぬる程にはよむべし、我朝の書はかな文字多く、よみ安ければ、いにしへより近き世に至るまで、公家武家のあらまし、明君、良臣、烈婦、貞女の事などおほよそに覺えぬる程の事は、いかほど覺えあしき生れにても、かならずよみえらるわざなり、いやしきものゝ女子といへども、女大學、女四書などの大むねはしりてあるべきなり、女子は衣食のいとなみをはじめ、家事にいとまなきもの成ども、おのがすき好む事にはまゝ有物にて、小身者の妻女も佛道に迷ひぬるものは、朝夕いぬるひをもいねずして、もの參り、又は念佛題目とやらんとなへ、或は淫辭異端にも劣らぬ草ぞうしなどいへる、人を邪淫にみちびく書をよみ、左もあらざれば誠の道を學ばんとだにおもはば、それだけのいとまはあるべきなり、まして位貴きものほど、おのづからいとまも多き事なれば、學文の末には、

其身がらに隨ひ、風流の道にもたづさはり、書畫茶湯なども一とわたりしりてあらんは、中々にめでたかるべし、和歌も其道にのみ流れぬれば、いにしへ御かどの衰へぬるためしにて、戒むべき事なれども、月を見、花を見て、腰折の一つだによみえず、飲食ひのみしてあらんも餘りに無雅なれば、いとまあらば、歌にもせよ、から歌にもせよ、ものせる樣あらまほし、されどもこれらの事は、誠の道を心とし、婦德を脩めぬるあまりのことにて、誠の道をわすれぬれば、是等の業もなきにはしかざるべし。

貞節を守るべき事

女子は地道に本づき、婦德を脩るを第一とする事なれども、婦德といへるものゝうちには、すべて女の道こもりぬる事にて、又それが中に、貞節ほどかたき事なかるべし、それ人の身の上に正と變との差別あり、主君をはじめ、父母、夫、舅姑みな安穩にして事なく、目出度世を渡るを正と云、その目上の人々おもほえぬ災難にあひ、賤き人にていはゞ、身を失ひ貴き人にていはゞ、領國をも失ふほどの事あるを變といふ、正の時節にあたりては、温順の道を守るべきことといふまでもあらず、さて變にあひたる時も、女は柔和のみ守るべきと心得あやまりて、眼の前にわが目上の讐來りても、これを討ざるのみならず、或は讐の威勢さかんなるにおそれ、或はその財寶などの多きに迷ひ、其讐に頭をさげ、甚しきに至りては、身をも汚せる類ひは、人と生れながら禽獸にも劣れる心といふべし、さればいかに女子なりとも、かゝる變にあひたらん時は、鎗、太刀もて劫かさるゝとも、少しもさはがず、金銀もて欺かるゝとも、いさゝかもかへり見ず、紅の血しほに身をそむるとも、香しき名を後の世に殘さんとおもひさだむるぞ貞女の操なるべし、かくては温順柔和の道にたがひぬる樣なれども、これすなはち地道なり、其ゆゑいかにとならば、地は土也

土は柔かなるもの成ども、變にあひては銅鐵にもまさりて強きもの也、銅鐵さへも火にあひてはかたちを失ふ、只土ばかりは、いくたび火にあひても、其性を失ふことなきのみならず、かへつて其性ますく\かたくつよく成ものなり、これ地は柔にして貞の徳を備ふるものとしる也、貞とは定りてかはらぬ事をいふ、女子の變にあひて、其操を守るを貞女といふも、このことわりなれば、目出たき代にも、此心を忘るべからず、神國の風俗は萬國にすぐれて武勇たくましく、下賤の男にても一刀を帶せざるはなく、女子にても武門に於ては薙刀を持せぬはなし、戰場に出で功名せし女子もありつれど、武勇と貞節とは異なるものにて古へより武勇も貞節もかねたる女子はいとめづらし、板額の如く勇力ありても、貞節なきは女子の道にあらず、其上女子の天性すべて勇力あるべきにあらざれば、女子は專ら貞節を心とすべき事也、されどいかなる小身の妻女も、薙刀一ふりは必ず身にそふるは神國のならはしにて、さて持程の品の振様もしらずしては、おのが持する品却て敵のたすけとも成ぬべく、いとあさましきわざなれば、薙刀は必ず幼き時よりふり覺え、かの變にあひたらん時は、讐敵にもあれ、盜賊にもあれ、夷狄にもあれ、腕のあらん限り打振りて、一人つゝも薙たふさんとたしなむべし、さればはじめにもいへる如く、目出度世には柔和温順を專らとして災難にあひては貞節を失ふまじき事、女子の心すべき大すぢにて、まして宮 する者は和漢古今の文どもを讀み、善惡是非を心に納め置て、變事あらん時も、主君に忠を盡しぬること、即天地自然の道にこそあるべけれ。

(註)神國は尊とくして、外國とかはり、古來武を貴ぶ國風なれば、下人とても一刀を帶さゞるはなく、女子といへども、長刀短刀を持ものは、變わらん時の備に仕來れるものなり、右にて思へば、女子はもとより力あるは稀なれども、力入ずして勇力勝れたる大の男にも勝べきものは鐵砲なり、され

ば小筒の打様ぐらひは心得る時は、變に臨みて用立ぬべし、抑公家をはじめ、都下の人々の女は、父兄等衣冠束帶など着しぬる手傳も出來ぬるときけば、武門の女たりしは、甲冑の着様をはじめ、甲冑の手入玉藥の製法兵粮等、又は鞍の置様等父兄を軍に出しぬる手傳、婦人の手にて出來ぬるほどの義にて、心得に成ぬべき事は、兵書中より見出し、又は人のはなしするにも心を付、胸に留なば小臣者は殊更火急に臨みて、常にうか〳〵暮せる妻を持しと、又常に右様の事に心を用ゆる妻娘あるとは、大きに相違すべし、婦女の軍に出る事はあらぬとも、小臣者は父兄をすみやかに軍に出しぬる爲と成るべし、扨又婦人の事に出たるも、板額巴の如く稀にはあれども、たとへ出たりとも、婦人出る程になる軍に大方勝利はなけれども、禽獸さへも他より來りて爭ふ時は、雌牝我雄牡の打るゝを見ては、只は居ず、雌牝相應に敵を打かむ事なれば、かなはざる時は本文にもいへる如く、腕のあらんかぎり一人づゝも敵を薙仆さんとたしなむべし、古しへは弓は武器の長なれば、本文へは云々書たれども、今我おもふに古しへ鐵砲あらば、婦人の微力にて、大の男も恐るゝ鐵砲にかぎれば、かならず小筒を持するならん、萬に一不足せる時は、常に心得たる婦人を狹間へ配り、鐵砲を打せんに、婦人の打鐵砲なればとて可寄哉、大の男も近寄かぬべし、又常に尺以下の短小の筒をひそめ持と聞ば、盗賊も恐るべし、扨斯如心得の妻ならんには、たとへ自分は左のみ用立ぬにもせよ、其產出したる男子は、幼年より右の仕込にて、成長すれば、武勇たくましくして、朝暮念佛題目淫聲好むあほう女の產出たる子とは相違なるぞ。

（完）

演壇

戰爭と女子

三輪田女學校教頭　文學士　三輪田元道

私が懷抱せる卑見は、往々母と同一なる點が多いのです、而して、それは、母が常に人に話して、往々世に公けにせられて居る事でありますから、私が繰り返す必要はありません、で、成るべく母と意見の違ふ點に付きまして、御話をする積りです。

△主義△

女子教育に關する私平生の主義は、其根底を社會主義に置いて、其リヤライス即ち實現を帝國主義に採るのであります、何だか矛盾する説の樣にも思はれますが、決してそうではないのです、即ち涙を以て、基として、其實現はドシドシ之を國家的にするといふのであります。更に詳しく言ひますれば、彼の慈善博愛、或は體育、或は人種の改良などいひまする社會主義的のものは、壯んに之を奬勵して、而して其實現は、國家的に推し進めたいといふのであります。國家の生存發達の必要といふ大なる制裁の下に、

其實現を求むるのであります。

私の女子に關する主義は、大概前に申した通りでありますが、扨て今日の如き戰爭時代に於いて女子は如何との漠たる問題の中で、特に私が感ずるものは左の三四であります。

△英雄の發生

日露戰爭は、十の八九は、日本の大勝利で終結するでありましよう、振古未曾有の大事件に斯く成功しまする事は、國家のため甚だ賀す可きことでありまする、併し、此に私共が頗ぶる心配でならないものが伏在しつゝあるのです。

一の戰爭が打勝たれる後には、必らず英雄が出來るものです、小數の大英雄が出來ざれば、必らず多數の小英雄が出來まする、而して彼等が、如何なる結果を社會に齎すかといふと、これは實に恐る可きものです、危險なるものでありまする、英雄の下には必らず其の犧牲となるべきものがあります、而して其犧牲の中で、尤も氣の毒なるものは、女子であります、御覽なさい多くの戰勝國民の歷史には、屹度英雄の跋扈が社會の風俗を壞亂して居ります、而して第一に女子を無視して居ります、玩具の如く仕て居ります、如斯せられて、其結果は、如何です、即ち家庭の紊亂、女子の奴隷生涯といふやうな最も恐るべく忌むべき大害が生ずるのです。

故に、戰勝後の女子は、甚だ危險且つ恐る可き運命を有して居るものでありまするから、此邊は社會具眼の士女が、大に注目を要すべき事と考へます。

△封建時代と女子

他の國でもさうでありまするが、特に日本の封建時代に、女子の地位が擧らなかつた、否殆んど玩具視せられて居たのは、何でありましよう、私は實に戰の爲であると斷言したいです。

封建時代は、切取り强奪して、自己の城を樹てゝ居たものであります。此時に於ける時代の俤は唯武夫でありました、而して其武夫の、功名手柄の下には、凡てのものが犧牲となるので、甚だしきは自己の人格を無にしても、其武夫の下に犧牲たることが、其名譽の如く考へられたのでありました、故に堂々たる戰勝の將軍は幾十人といふ妾を其下に置いたのです、彼の太平記などに出て居る高師直の如きは如何です、一人妾を世話したものには、金銀の引出物を與へたといふ風であつたではありませんか、戰勝後の社會には、幾多の高師直が出ましよう、而して淺薄なる女子は、却つて之を歡迎しましようよ、而して多くの立派なる婦女が、次第に惡風に染るのでありましよう、戰勝後は實に女子に取つて危險でありまする、已に斯くなりまするど、自ら女子の地位が卑くなりまして、自然に女子に威嚴が無くなります、さうすると、女子に關する凡ての事柄が、蔑視せられ、即ち女子の天地が打壞はさるゝのであります、然れども、斯くなりまするのは、全く其社會が戰爭といふものを獨り其武人の力のみとし、而して女子などは、何等の關係の無いものと思ふ間違つた考を有する結果です、而して斯ることゝなるのは、畢竟其時の女子が殆んど其生命の無いほど、無氣力のためでありまする。

△女子と戰勝

男子が勇しく戰ふのは、其源を女子と云ふ美しい優しい流に有するのです、女子の援助、女子の同情といふものがありませんならば、男子は決して潔よく外に戰ひ得るものではないです。

スパルタの女子が、其赤ン坊を背負ふて、軍門に士卒を送り『凱旋して御歸りなさい』といつたため、其武士が強かつたことは、普ねく世の知る所であります、スパルタが強かつたは、實に女子が武の精神を以て、男子を奬勵したからです。

男は内顧の慮があれば、決して外に勇しく鬪ひ得ないです、之を以て出征軍士に、最とも大切なることは、其内助たる妻君の賢良なることにあるのです、健げなる志の有る、而して留守中克く家内を守り得る妻君を有せらる丶軍人は、何等の懸念を家に殘さず、いと元氣よく外征に出でらる丶さうです、這回の日露戰爭に於きまして、日本の女子が、如何に役立つて居りますか、私は格別理屈がましくいふのではありませんが、其の出征軍士の妻君の決心、赤十字社特志看護婦人達の熱心、或は出征軍人家族慰問婦人會の活動の如き各女學校若しくは夫の髮切村の美談の如き、女子が軍士の精神に刺擊者となつて居りますことは、洵に少々でないでありませんか。

然るに戰爭は克てり、而して其手柄は凡て軍人及び男の方に歸せられ、女子は、奴隷的の境遇に推し落さる丶といふことがあるやうになつたならば、這回の戰爭は、女子に何等の分前をせないことになるのです、然れども過去多くの戰爭は、皆女子に分前する所少くして、男子の跋扈が、女子を哀しい情け無い境遇に落したのであります。

△布哇などの例

戰勝後、男子の跋扈は、女子を以て先づ其犧牲に供するとであるが、此結果は恐るべきもので、社會の體が腐るのです、即ち風俗壞亂と共に恐る可きものは、黴毒の流行であります、男子が女子を無視する

社會には、必らず黴毒が流行するのです、然れども、一旦斯る悪病が流行するときは、其社會は、外美なるも、内は已に腐つて居るのです。

布哇や其他未開なる人達の社會の人が可い脳を有たない、或は健全なる體力を有たない、随つて文明に遅るゝのは、何であるかと詮索し來るときは、多くは黴毒のためぢやといふことです。亡國といふものは、必らず體から來るので、それは黴毒などから來るのです、而して黴毒は主として男子の不品行が其の原因であります、豈に恐れざる可んやではありませんか。

△女子の決心

前に一二申しましたるが如く、戰爭後の社會の女子には、洵に恐る可き敵が、其前に現はれるのであります、故に徒らに戰勝に醉はないで、靜かに女子の將來を考へて、其地位を打壊されないやうに、今日から心掛る必要があります、而して、私は其準備として先づ左の二項を重要なことゝ思ひます。

△貴族的傾向を去れ

何處の女子でも、貴族的の傾向はありますが、中にも我國の女子は、其遺傳、即ち女の地位が無視せられてあつた遺傳のためでもありませう兎角美しく着、嗜しく、食べ、樂に暮らすといふ大名風になり易い傾向があります、自分で生活も、人情も、何も知らないで、唯旦那樣を大切に拜して、其下に柔しく仕へて、而して、人形の如く、衣飾りたいといふ風があります。

此風俗が、洵に惡いのです、これは全く女子自ら女子を愚にしたのです、然るに普通は之を高尚なるこ

と丶心得て居るのです、中等社會の女子で、生活の困難を知らない家に育つたものは滔々として此惡風を競ひ、否らざるものも亦、無理算段して此風を成しつゝあるのであるが、識者の眼より見れば、實に笑止千萬の次第でも、御當人方は、之を以て高尙で文明的で、貴婦人たるものゝ本色ぢやと心得て居るのであります。

此間も、或る女子が、日和の可い暖い、それは布子一枚で散歩が出來る日に、毛糸の手袋を穿めて居りますから、私は之に冗談半分に『貴孃は此暖いのに』といふと其人は平氣で『斯うせんと掌が太りまして、握手する時體裁が惡いですから』といひました、斯ういふ人が甚だ多いのです、これが、抑も女子自らが自分を玩具の如く心得、女子は交際社會の花、其花たるや形のみの花とのみ心得て居るからであることが分るのです、これであるから、男子は直ちに女子を唯形體の醜と美とで、其良否を判斷し、即ち女子は直ちに男子の或る卑しい心を喜ばしむる玩具であるやうにせらるゝのであります。

△勞働は神聖なり

男女二人で一家を造るが如く、社會も國家も男女二派の力で出來て居るのです、然らば男子が其固有の力で活動して、功勞が積むと、同時に、女子も爾うせんければならんのであります。

然るに、女子が額に汗を流すを嫌ひ、胸に心配をすることを好まない結果は、凡ての仕事は、男子の手のみにて成功したるが如くなるのです、而して女子はこれを恥辱とも何とも思はないで、怡々として男子の下に歸服する、これが則ち女子の地位の無視、即ち女子の墮落を意味するのであります。

多くの學者と、達見者とが云つた如く、勞働は神聖です、勞働すれば健康なる體力が得らるゝのです、

或る功績が舉るのです、女子が、男子に負けない決心を以て、女子に適當なる仕事を勉強したならば、其體格が人形の如くなる氣遣はありません、又男子から無視せらるゝやうなとにはなりません、久しい間日本の女子が、其地位を男子に無視せられて居たのは、畢竟皆間違つた考へで、貴族的生活を好んだためであると斷定したいです、美しく衣、嗜しく食べ、樂に暮すのを人間最上の事、女子の名譽といふ樣な間違つた考へを有せられたためであります。

然るに、日本今日の女子が尙多く這般の考を有せられて居るのは、洵に慨嘆に堪へないです、やがて戰勝後の社會になりました曉に、女子が如何なることゝなるか、實に思ひ遣らるゝ次第であるから、願はくは女子たるもの、猛省を願ひたい譯であります。

（文責は記者にあり）

軍人家族婦人の職業に就いて

阿多廣介

女子の品格を發揚し、獨立の位置を進むるに就いては相當の職業を求めて、相當の收入を得、己の費用を自ら辨じ、進では家政を助け、子女の敎育に費し、夫と共に一家の榮昌を謀らざるを得ないといふことは、屢々唱道した處であつて、歐米諸國の婦人の品位と信用と權力とが、敢て男子に劣らざるのみならす、却つて男子をも凌ぐやうであるといふことは、皆樣も御承知の通りであるが、之れは即ち女子敎育が

進歩して、婦人も相當の職業を有し、單に男子の勞力のみに依賴せぬからでありましよう、我が邦に於ても下等社會に於て夫婦共稼をするものや、又養蠶地方等に於て、女子の職業の盛なる處にては、確かに女子の權力が男子に劣らぬのは、明白の事であります、されば一般に女子の職業を奬勵するは、必要の事でありますが、殊に今日の戰時に當つては、女子に職業を授くるの急務を感ずる次第である、なぜなれば既に滿韓地方に向つて出陣したる我が兵數は、數十萬人で、是等の人は主として現役若しくは、豫備の人であるから、家族の係累は比較的少ないかも知れぬが、後備兵として招集され、若しくは招集されんとしつゝあるものは、既に豫備の年限を過ぎた人で、父母あり妻子あり、一家の柱石として、職業を司つて居た人である、されば此等の家族は一家の監督者即ち主人たるものが、留守に成つたのであるから、生計は元より、一家の監督者を失つたので、其れに代はつて、柱石となるべきものは、即ち其の妻君である、然るに其の妻君たるものが、敎育もなく、又一定の職業も無かつたならば、一家の家計は非常な苦境に沈淪し、子女の敎育は放任されなければならぬ、現に如此人が大多數あるだらうと思ふ、就いては、軍人援護會や、愛國婦人會や、町村團體等に於て、出征軍人家族の救助に就ては、出來得るだけ盡力せらるゝならんが、其の有力なる團體たる軍人援護會ですら、今日まで集つた金額は、百四五萬圓で有つて、其の利子を以つて、支辨することであるから、一年間十萬圓しか今日の處では、支出は出來ないのであるが、猶此の外の團體より救助する處のものも、段々あるにしても、中々一家を支持さるゝ丈けの救助を支出するといふことは、六ヶ敷からふと思ふ、よし又相當の救助を受け得らるゝ丈けになつても、人の助けに依つて、一家を支持するといふことは、實を云へば、其の家の恥といはなければならぬ、何となれば、夫は身命を擲つて、國家の爲め奉公の赤誠を盡すのに、其の家族は爲す事もなく、人の救助に依つて、僅かに糊

口を濺ぐといふは、實に恥かしき次第ではありませんか、廉潔なる軍人が、此等を聞いたならば、實に斷腸の思ひをなすであらふ、況やまた其救助が足らずして、父母妻子が路頭に迷ふと云ふ事に成つたなら、如何に忠勇決死の我が軍人とはいへ、謂ゆる後顧の念に堪へずして、幾分士氣を沮喪することが無いとも限らない、然れば其の家族たる婦女子は、豫じめ此の際に處する覺悟がなくてはならぬことであるが、從來我が邦の婦人の境遇から見れば、かゝる心得あるものは、實に少數と思はれる、それで今更俄かに相當の職業を見習らはせやうとするのは、恰かも盜人を見て繩を綯ふが如きものであるけれど、此度の戰爭は何時まで續くか知れないから、今より身分相應の職業を見習ふのも、決して遲くないのみならず、後來の爲めに、此の機會を以つて、相當の職業を修練すべきことである、且又子女たるものは、未來の爲めに、大に學習をしなければならぬ、親たるものは、今日己の境遇に鑑みて、前轍を蹈まざるやうに、子女の教育に就いては充分に督勵して、教育費の如き決して惜んではなりません。

さて女子の職業に就いては曩きに女鑑紙上に述べました通り、女教員の如きは最も適當であるけれども、皆悉く教員たるを得ないに依つて、他に職業を求めんければならぬ、或る團體に於ては、女子に洗濯をさせ、相當の賃金を取らしめて居ると聞きましたが、其れも惡くはないけれども、實に微々たる仕事であるのみならず、後來は洗濯業の如きは、機械力を使用するやうになるから多數の人は要らなくなる、それで有力な團體の如きは、更に多くの職業を啓發しなければならん、差當り女子の職業として採用して居る處は、看護婦、電話交換手、停車場の切符賣等で、追々採用して行く樣であるから、此れ等の如き女子にして事足るものは、此の際成るべく女子を採用する樣にしたいものである、其の他我が國に於ては、まだ女子を官吏に採用することはないけれども、後來は女子にして、事足るが如きものは、可成官吏も、女子

を採用するやうになりたいものである、其の他諸會社、銀行、大なる商店などでも、可成利用するやうにしたいものである。

さて女子が如此職業に從事する道を開かるゝやうに成つても、女子にして是等に、適する德義と體力と學力等の修養がなければ、如何に採用せんとしても、出來ないから、今後の女子教育に付いては、夫等に適する教育方法を父母たるものは勿論、學校等に於ても、大に施設せなくてはならぬことゝ思ふ、普通教育を授くれば、已に父母並びに學校の責任は足ると云ふが如きは、今日、我邦婦人の境遇に於て適當とは思はれぬ、少くとも、普通教育に於ても、或る職に付いての趣味を喚起し、其の技術の一端位は、何はして置かなければならぬことゝ思ふ、其他女子の獨特の手藝即ち編物、造花、刺繡、機織、養蠶、製糸の如きは、その職業として適するのみならず、此後は今等の製作品を大に外國に輸出するやうに、奬勵しなくてはならぬことであるから、如此技藝の趣味を感ずるやうに、學校等に於ては、常に注意しなくてはならぬ。

また出征軍人に就いては、兵卒は僅かに、一日六錢五厘の小使錢を以つて、一身を捧げ家族の生計の如きは顧みずして國家の爲めに盡しつゝある事なれども、將校は、夫れ〳〵一身は元より家族に對しても、手厚き支給あるに由つて、別段に不自由は感せざることゝ思ふ、されば其の家族の人達は、おのれ一家に不自由がないからといふて、安閑として衣食すべき場合では無からうと思はれる、何故なれば、其の夫たる將校が戰功を建てられるのは誰れの力かと云へば、即ち率ゆる處の兵士の勇氣と服從とによりて、恰も手足の如く成つて、働くによるものと思はなくてはならん、然れば今日の將校以上の人の名譽と勳功とは、實に其の率ゆる處の兵卒の力であるから、其の妻君たる人は、夫の率ゆる兵卒の家族に對しては、恰かも

夫が兵卒を愛撫すると同じ同情を以つて、兵卒の家族の救助を援護しなければならぬことである、勿論一般の人も出征軍人の家族救助の道は、種々講ぜなければならぬが、將校の夫人がたに於ては、一層の同情を以つて、盡さねばならぬとおもはれる、即ち師團長、旅團長、聯隊長、大隊長等の夫人は尚ほ留守家族の隊長たる心持ちを以て、部下家族を救護せられなくてはならぬ、而して此等の家族を救護するに就ては、或ひは金錢を以つてし、或ひは物品を以つてするで有らうが、それらは、適當の方法ではないと思ふ、何故なれば、人は人に助けられると云ふことは、人格を損ずるのみならず、依頼心を生じて、獨立心を失ふものである、俗に一日乞食をすれば、一生涯其の味を忘れられぬといふが、即ち己の勞力によりて、生活するよりも、人の助力によれば、樂して生活することが出來るから、自ら骨折つて働かうといふ勇氣を沮喪せしむるに至るものである、現に地震や火災、其の他の天災の爲め不幸に陷りしものに、金錢物品を惠むことは、屢々あるが、其の結果は、單に懶惰を奬勵するといふことになつた例は隨分少くないのである、夫れで此の家族を援護するに就ても、可成種々な職業を授け、其の收得により、生計を立てるやうにしたいものである、また其の子女にして、未だそれに從事する丈けの技能なきものには、可成教育して其の技能を授くる如き方法にて、救ふやうにしたい、東京市に於ては、一つの勸業場を組織して、家族を救ふといふ噂があつたが、是等は實に適當の方法と思はるゝにより、是非立派に成立たせて、其の摸範を示めし、全國に普及する樣にしたい、かの軍人援護會の醵金せし金額の如き、可成此の如き組織に投資せられんことを希望に堪ない、此は單に今日の急を救ふのみならず、永遠國家の裨益となるのであるから、此の機會を利用して種々の方法により、女子に職業を授くるの施設をなすは、我國の急務である事と信じます。

（をはり）

麻疹と種痘

弘田醫學博士

麻疹は一度煩ふと二度は致さぬ病氣で、大概小兒の時に病つた人が多いから、大人には自然罹る事が無いと云つても宜い位であります。

病氣の性質は非常に傳染爲易く、流行性感冒の樣な工合に、一家の内に一人發生すれば必ず他の兄弟に傳染つて、免れる事は極めて稀である、流行性感冒と違つて居る點は、流行性感冒は何回も罹るが、麻疹は一度罹つた者には感染しない。

麻疹に罹て難澁をするのは咳の出るのと、咽喉や、鼻が惡く成る事で、一體此病氣は極危險な病氣であつて、小兒は之が爲に肺炎を發して、殪れて仕舞ふやうな恐れがあり、又鼻から耳へ病氣が移つて耳の病氣を惹起したりする事が屢々ある。

而も最も怖るべきは此病氣が發する時か或は其の病後に結核が起つて來る事であります、古來、麻疹とは人の熟知して居る病氣であるから、自然人の耳に慣れて怖れない樣に成つて仕舞つたのであるが、之は以ての外の義で、重體に陷らせずとも濟む場合にも、取扱ひが輕忽なために、重い容體に成つて取返しのつかぬことが屢々あります。

斯う云ふ事は人の母と成つて居る人は、餘程注意しなければならん、病勢の強い時分には熱もあるし、咳も澤山出たりするから誰も注意して居るが、熱も散じ咳も殆ど出ないと云つて宜い位になると、大概平癒した

ものと思ふ人が多いが、之が抑々失策を起す多くの原因に成つて居る。凡て傳染病は病勢の輕重に係らず、全治した後にも容易には身體の血液が、發病前のやうに回復しないものだから、當分の内は身體の抵抗力が著しく弱つて居る、夫故外觀は全治した樣に見えても內實は却々爾うで無い、其時分に平日の通な取扱ひをして、早く新鮮の空氣を吸はせた方が宜からうと云ふ樣な事から外へ出したり、又身體が不潔であるから早く湯に浴れやうと云ふ樣な事をする人があるが、之が甚だ惡い事で、爲めに麻疹を再發したり、麻疹でなくとも氣管支加答留を強く起したり、又たは肋膜炎を起したり、其の他種々の重い病氣を惹き起すのであります。

此種の出來事は麻疹の流行毎に數次實見するのであつて、其都度種々注意するけれども、母親達の耳には容易に入らぬと見えて、何時も同じ手ぬかりがある、麻疹が發したら母親は注意をして、病中は勿論、病後と雖も充分長く保護をしなければ成らぬ、何の家でも沐浴を急ぐのが第一に宜くない、入浴は何時でも出來るから而う急ぐには及ばぬ事と思ふ。

どうせ一度罹るものならば、麻疹は幼年の時に罹つた方が善いと云ふ事を人が申します、大人に成つてからは概して幼年の時よりは病勢が強く成ると云ふ說がある、或る點までは理屈があるが、併し麻疹を小供にさせると云ふ事は餘程考へなければ成らぬ事であつて、流行の時期に由つて順良なる麻疹と、性質の惡るいのとあるから、其邊も餘程注意をしないと、却つて大患を殘す事になるから、第一に小兒の其當時の體質は麻疹に罹つても堪へ得るや否やと云ふ事、又其當時の流行の麻疹は性質が順良なるか否かと云ふ事を聞糺さなければならぬ、只一も二もなく一度煩た方が利益であると云ふ點にのみ注意したのでは誠に危險である。極く極端の例を擧げると、私共の小供は麻疹に罹つて居るからと云つて、殆ど平素の風邪

の樣に思つて、醫師にも連れ行かぬと云ふ事が、下等社會ばかりでなく總べての事を心得て居らるゝ人にもある、斯の如きは以ての外の話であつて實に危險千萬である。兎に角一の傳染病であれば、輕症にもしろ、醫師の監督を受けて看護すると云ふ事は最も必要であらうと思ひます。

次に種痘の事をお談し致しますが種痘の時期に就ては種々說がある、大體に就て云ふと何時種ても差支無いのである。日本では多く春と秋とに於て種る樣ですが、只期候が好いとか或ひは地方なんぞで都合が好いと云ふ樣な點から定めたのであつて、別に春とか秋とか種痘の爲めに善い時期であると云ふやうな事は無い。

時期と云ふ事に就いてお話をすれば、小兒の健康の狀態を見る事が一番大切である、即ち、其小兒の健康が其當時種痘に堪へ得るや、否やと云ふ事を確める事が、一番肝要な事であります。

尙一ッ注意すべきことは、其當時麻疹とか、インフルエンザなどの流行して居るか、などの事も能く察して、若し右の樣な病氣が有る時であつたら、延ばした方が宜からうと思ふ。

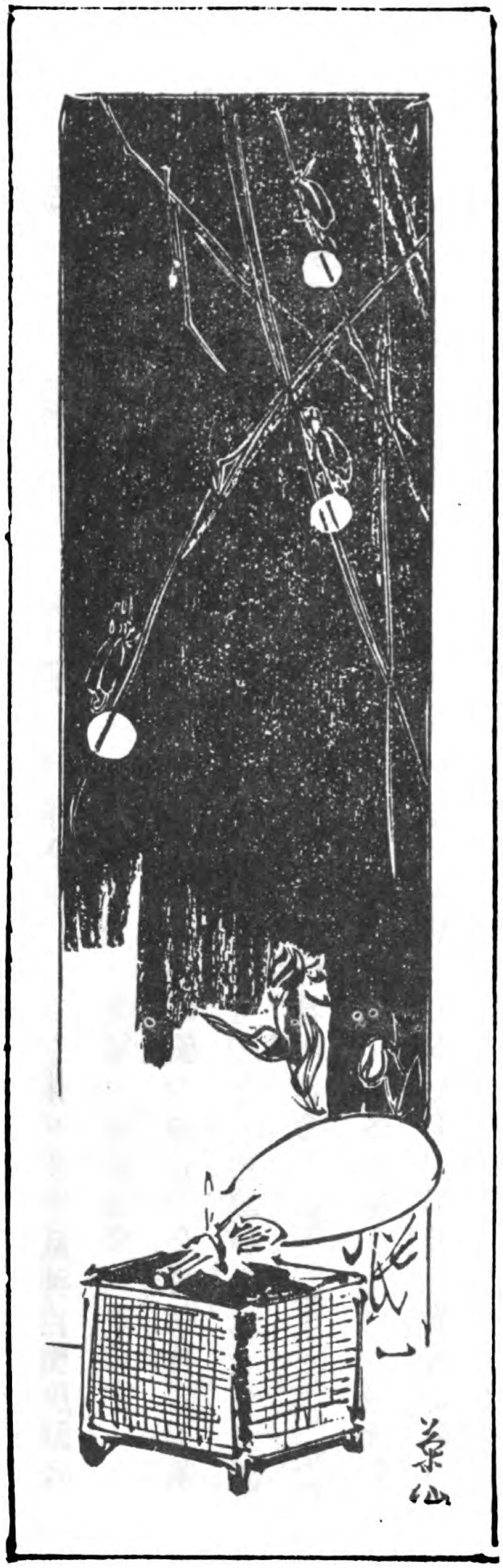
一年の中で夏季は汗の出る時であつて、殊に小兒は種々の病氣に罹り易い時であるから、盛夏の時は見合せた方が宜しい。

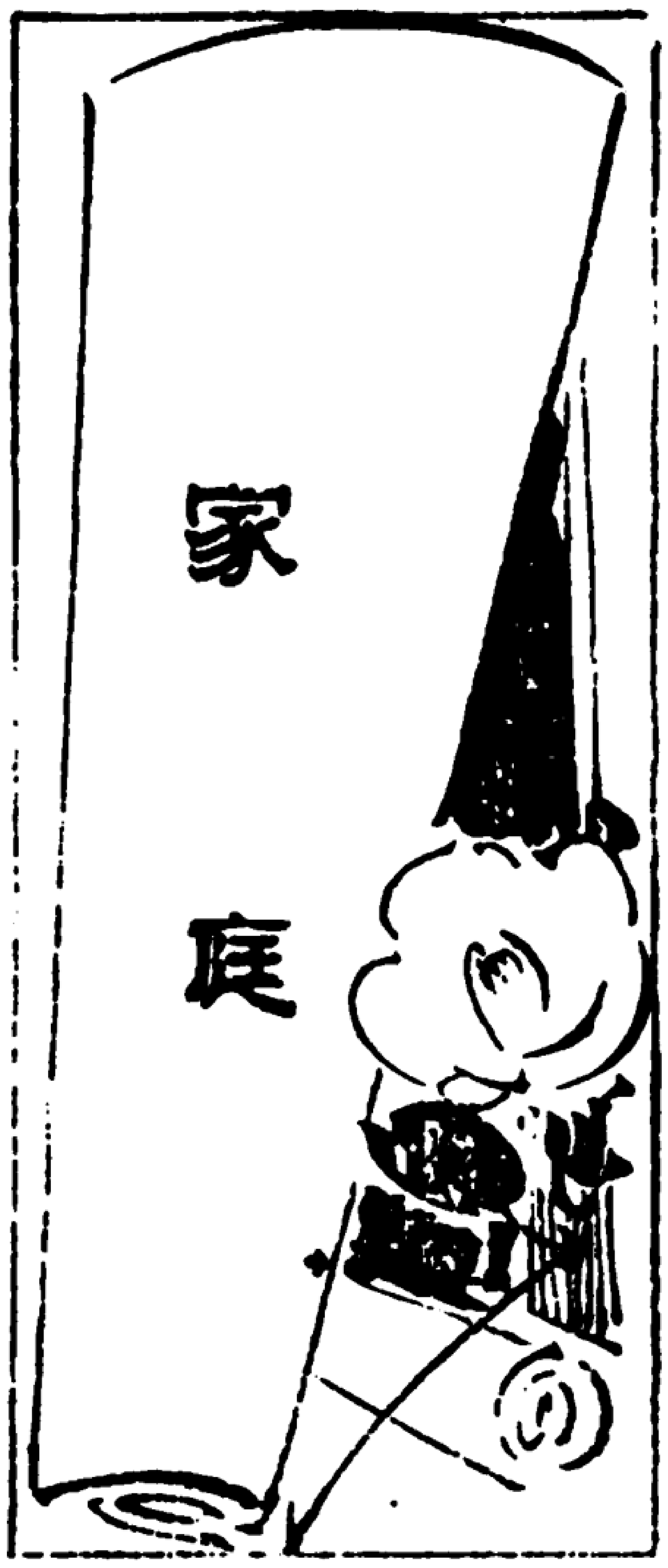
小兒が健康な場合でも、齒の生へる時分は注意するが宜しい。何故と云ふに齒の生へる時分は、小兒が種々の疾病を惹き起し易い時であるから、此時は成るべく避けるがよろしい、併し右は總べて天然痘が流行しない時であつて、若し天然痘が流行し始めたと云ふ場合に於ては、總べての條件は取り消さなければならぬ、何故と云ふのに此時の問題は、若しも猶豫をして居つて天然痘に罹つたら、どうするかと云ふ重大なる問題が起つて來るから、其場合には大概なら種た方が宜しからうと思ひます。

初生兒には何時種ても善いと云ふ事に成つて居りますが、或る論者は生れて直ぐ種ゑる方が宜しいのみならず、種ゑる方が寧ろ相當であると云つて居ります、其說に從ふと生れた以上は何頃何時天然痘が流行るかも知れないから、直ぐ種ゑた方が相當である、之れは却つて小供には危險が無いと云ふ事になります。

私も或る年の天然痘が流行り始めた時分に、生れて二週間或ひは十日位の小供に種ゑて見たけれども、何の危險もなかつた、少數ながら私の實驗に依ると、極く小さな小供でも、種痘から起る熱などは强く無いやうに思ふ、寧ろ私の種た場合には熱が低かつた、けれども之れは素より少數の實驗であるから確たる事は云はれないのであります。

（をはり）





長岡騎兵少尉と細川子爵母堂

菅原雅輔

○○○○華族中隊　定州占領に嘗て勇敢なる戰鬪して、陸戰第一次の捷利を博した近衞騎兵黑川大尉の談話の一節に『一時幹部の斃れたる時、我中隊の幹部は僅に新參の少尉二名を殘すのみとなつた、我中隊には南部と長岡との二華族ありて華族中隊と稱して常に他より揶揄せらるゝ傾向なきにあらざりしが、その二華族少尉は偉功を立て、揶揄せし連中に對せんとし竊に期する所ありしやに見へた、而して二少尉は殊に勤務にも熱心で自ら他の龜鑑となる點なきに非ず、實に好箇の尉官である、長岡少尉は擦過傷を負ひたるも聊か介意せず、南部少尉は激戰中に在りしも部下と共に一兵を損せず、武運目出度歸隊せり』とあります。

さて無遠慮に云つたら、今日華族の子弟は柔弱なもの、無能なものと、相場が極て居て、偶々世の耳目にとまる行爲があると、曇華の花が咲たやうに、或は愛猫が子鼠を捕へたやうに、ちやほやと持囃さるゝが現情であります、多數の華族はその祖先は尋ぬるまでもなく、何れも馬上、或は槍一筋で家を興した方に外ならんので、その子孫が武を忘るゝとは沙汰の限りであります、所で今度定州の功名者南部伯や長岡子の如きは、祖先を辱かしめざる珍らしい方々で、滔々たる華族社會の定圏を逸して、斯くまで天晴れなる行動に出られ祖先の面目を顯はされたには、必ずその素がなければなりません、是れ長岡子に付て先づ一條の紹介を致すの所以であります。

○○○○長岡少尉　少尉は名を護全と申して、九州熊本の舊藩主で、古來武門の名家たる細川家に生れ、今の細川侯爵の實弟に當り、出でゝ叔父なる長岡家の養嗣子となられたのであります、實父故護久侯在世の頃より、夙に武官たるべき敎育を受けられたので、學習院在學中は、皇太子殿下の御學友にて、明治廿七年に東宮職出仕仰付られましたが、翌年辭して專ら士官學校入學の爲にその豫備として各學科を出精し三十五年首尾よく入學、三十六年卒業の上、近衛騎兵聯隊見習士官となり、本年二月十二日騎兵少尉に任ぜられ、翌日直に出征の途に上られたのである。

○○○○○○
母堂宏子の方　少尉が幼にして已に乘馬や、射擊の技に長じ、前途有望の少壯士官とまで稱へられ、年齡僅に二十有三の初陣に、天晴れ功名されて一門の名譽を揚げられたのは、偏にその實母たる細川家の後室宏子の方の家庭敎育の與て力あることであります、されば巴御前を母として朝夷奈と云ふ立派な勇士が出來、又楠氏の子に小楠公のあつたやうなもので、取りも直さず、宏子の方は少尉の母堂として活きた女の鑑であります。

○○○○○○
宏子の方の出生　佐賀藩主にて、明君の聞へ高かりし鍋島閑叟侯の姫君であつて、嘉永四年の誕生で歲十八の時、細川家に入輿あつたのであります、細川家が維新の變や、熊本の亂や、西南の役に際して、幾度か難局に立たれて、無事に經過されたのは常に夫人の內助の功少なからざりしに依ると申すことであります。

○○○○○○
やまとごゝろ　『こと國に三とせをへてもわすれまじわが日の本のやまとごゝろを』是れは宏子の方より一條公爵へ嫁がせられし愛孃悅子夫人が、公爵と共に、任地佛國へ赴かせらるゝを贐けされた詠草であります、後室が家庭敎育の方針は、この一首の和歌で伺ひ知ることが出來やうと思はれます、聞く處では細川家の家庭敎育は、總て宏子の方の指揮に出でゝ、先祖以來の嚴重なる家風によつて、武士的精神を涵養せられ、男子には軍人的素養に留意せられ

女子には和歌書畫などを以て、只管御國風に品性を修養せしめられるのであります、其故軍人志望は唯に長岡少尉一人でなく、故護晃氏は陸軍に、護立氏は海軍へ何れも志ざゝれ、又悦子一條公爵夫人及び故歆子孃は何れも、和歌に堪能で、書畫の技に長ぜられ、その心情の高くして慈善に富ませられてゐることは、舊藩士どもの常に敬服せる處であります、換言すれば男は武に、女は文に、それ／＼一家の風格備はりて、喚發しては忠良なる義勇奉公の武人となり、又高潔なる貞良淑徳なる夫人となられたのであります。

○○○○母堂の品性　常に神佛を崇信して何事によらず、身を以て人を導かるゝなど、何れも人の摸範たるべき高潔順良な行を以て滿されて居ります、毎朝五時と云ふに起き出でゝ、書齋に安置しある神佛を拜せられ、朝食後は夜來堆積しある書信の往復を濟ませられ、午後には裁縫を勸められ、時に書畫を翫ばるゝを唯一の樂といたされて居ります、平生深く觀世音を信仰せられて、よく觀音像を畫き、又觀音經を寫さるゝと云ふことであります、長岡少尉が、名譽の負傷の翌日、家令の富禰氏へ宛たる信書の内にも

(前略)手袋は彈丸貫通致候も、手は僅か傷け申候、至て輕き事故、決して御心配無之樣暮れ／＼も御願申候、去る二十三日も危險に遭遇し、又々昨日此の危險に遭遇致し候得共、此の如き有樣にて、誠に仕合致候、是れ全く平素御母上樣の御信神の御蔭と存候、何卒宜敷御禮申上の程願上候(下略)

以て宏子の方が、神佛信仰の如何に厚きかゞ知れます、世に宗教心の徴弱なる婦人は、宜しく三たび思を玆に致されんことを願はねばなりません。

母堂が氣根の強きことは、實に驚く計りであります、邸内の池中にある蓮から、蓮の蔓陀羅を製せられましたが、その眞中に釋尊、右に文珠菩薩、左に普賢菩薩を、しかも極彩色で織出されてある、これを織

出さるゝには、態々機杼を館に据付けられ母堂自ら二ヶ年を要して仕上げられたとのことであります、『妾もかう見えても忙がはしいよ、子供に手紙を出したり、孫の爲に縫ふ針仕事もするし、中々大抵ではないよ』とは戯言でなく、眞實細川侯爵家の後室が其日課を申されたのであります、世の中に苦しき世帶の中から、贅澤に家婢などを使ふ婦人には善き訓でありませう。又母堂が下を思ひやらるゝ情の厚きことは、『先方で出て行くは格別、一旦使ひしものは此方より暇は取らさぬ』との御心掛けでありますから、一度細川家へ事へたものは、何れも精勤を樂しむの風があります日外も北風寒く雨さへ降り出でし折、母堂偶々その寒天に、十數人の雇夫が庭前に草を摘んで居るさまを窓より眺められて『嘸寒からう、酒温めて取らせよ』と命ぜられたこともあります、その慈愛に深きも推して知ることが出來ます、故猷子孃が侍女千代の病に臥せる由を潛に知り給ひし時、己が心地惡しゝとて、醫師を招かしめられ、醫師見舞ければ、自らは早や癒へたり、千代が顏色すぐれぬやう見受けたる程に、序ゆゑ見舞ひ呉れよと、この優しき心情も偏へに母堂が教育の感化ではありませんか。



封建的女性の典型　今日の婦人が兎角差出がましき振舞を苦々しきことに思はれ、勸誘し來れる婦人問題に關して、大抵取合はれないのでありましたが、熊本出身の井上未亡人、安場未亡人、淸浦夫人、佐々夫人等の發起である熊本婦人會が、屢々誠實に主意を訴へて、やつとの事で會長へ仰いだとの事であります、常に近親の女性に戒めらるゝには、

女は女たるべし、今の女は外形のみ文明を飾り、更に精神の修養を顧みず、女は内に在つて其盡すべき、本領を全ふすべし、殊に近來の婦人は、動もすれば功を己れに收めんとする風あり、婦人は能く内に働いて其の功を夫に歸せしむる心得なかるべからず、一家の光は、是れ夫の力なりと知るを要す、

と云ふにあつて、是れ誠に日本婦人の心得であります、さてかく出でゝ交際場裡に跳ね廻ることは、好まざるも、去りとて尋ね來るものに對して、面接を拒まるゝやうなことは曾てなく、否な力めて面會せらるゝ方であります、若し差支のある場合などには取次をして『只今手離し兼ぬるから、暫時お待を願ふ』と慇懃に挨拶せられて、さて後に應接せられます、その身分ある人を迎ふるも、舊藩士の御機嫌伺ひに參るも、同じ取扱ひであります。

是に依て見れば、細川家々庭の健全は實に羨ましき次第であります、華族社會の珍とする計りでなく、眞に日本家庭の摸範でありませう。

長岡護美子の挨拶　或人が長岡少尉の嚴君護美子爵へ少尉の負傷を御見舞申上げたら、子爵は欣然として『イヤようこそ御尋ね下された、伜の負傷は如何にも名譽の儀で、實に本望である、華族で今回の陸戰に與つたは、南部伯爵と伜であるが、華族たるものゝ國家に貢獻すべきは斯る時である、彼の南阿戰爭の如きは、英國の貴族は、先を爭ひて從軍したとのことで、誠に斯くあり度いことである、伜は幸に活潑の方で騎馬を能くして、兼て戰爭に赴くを希ひ居りたれば今度の出陣は頗る滿足であつた』とい

はれた、この母あり、この父あり、長岡少尉の功名いよ／＼偶然でないと申すことが顯らかであります。

（完）

村田陸軍少將夫人の露國談

菊池雪子

汽車道のけぶりに霞む櫻花はゆら／＼とゆらぐお堀りの水に影をみせて、折から小鴨の二羽五羽、一羽ならんで羽ばたきしては、むつれゆくのに、長い土手には誰れの心づくしか、土筆の一面にのびやかに生へて居りますので、都の子も里の子も、アレといふまにたゝ活動寫眞を眺めますやうに、汽車は市ケ谷を通り過て早くも四谷停車場に止まりました。四ッ谷通りを左に折れ、仲町に閑雅な邸宅を控へて入らつしやいますのは、則ち村田陸軍少將でございます。

先づ取次に出られました方は令孃琴子、天性艶かなお顔にすゞしい眼ふつくりと前髪を出して、房々した髪を束髪に結んで、此方へと記者を一室にお通し遊ばしました、廣々とした二室を過ぎて、奥の客室には土佐繪の金屛風、小床に雛の可愛らしい器、床に掛物、花瓶彩色の配合よく、中央には螺鈿の小臺の上に巻煙草入が載せられて、お庭の木立は若葉萌え出で、やはらかな綠色を、しづかにあゆむ春の日に映じて、春風が嫋々と室内を訪ふのでありました。

茶縞紬の綿入に藍氣鼠縮緬のお半衿黒繻子の帶を太鼓に結んで、中番のお品のよい丸髷綑を記者に勸めながら、御挨拶遊ばした少將夫人千代子は今年四十六のお齢とは承りましたが、さすがに天然の美はずつとお若く見へさせます。御眼やさしく、口付愛嬌づいて、美しい齒の間から漏れる御言葉はやさしくて、しかも恭謙人を待つといふやうな御樣子の柔和なお方でございます、其の御話を其儘こゝに記し

ますと、

留學中

主人が佛蘭西に留學を仰せ付けられましたのは、十九年の三月でございました、村田と申します名は私の姓でございまして――、ハイ兩親が存命で居りました頃私一人の子でしたから、主人を養子にいたしました、父の名は正、母は筆子と申しまして暫く駿府の方にお仕へ申して居つたこともございますが、東京に參りましてからは、此處にばつかり居ります、留學でございますとか、隨行でございますとか、始終もう主人は歐洲に行つて居りますことが多うございます……イエもう馴れましたから淋しいなどゝ思ひはいたしません、三十年の四月英國女皇陛下の六十年祭に閑院宮樣がお出遊ばす折にも、隨行いたしました、三十二年の五月から、昨年の一月までは、露西亞の公使館付で、彼方に參て居りましたが、急にお呼び戻しになつて歸國て參りますのを手前共一向存じませんでございましたよ、あのやう〳〵梅田の停車場に着きましたとき、今度佐世保の要塞砲隊に轉任されることを自分も承知いたしたさうで、手前共には大阪の親類から報知せて參りまして、始めて存じた譯でございます、さういたしますと、あなた三週間の休暇を貰つたと申しまして、

任地に赴く

前に宅に參りましたが、宅に居りました間は、珍客があちらからも、こちらからも澤山でございました、それに主人は私と異ひましてまことにお話ずきでございますから、露國の面白いお話しなどいたして居りましたが、内の者には話して聞かせます間もなく、出立いたします日になりました。

クロパトキン大將の接待員

昨年クロパトキンが本邦に漫遊致しましたとき、主人は接待掛を仰せ付けられまして、同行に所々を見物してあるきました……とお話しの最中に、先刻より何やかと御もてなし下さいました令嬢は、敏くも大きな寫眞を記者の前にお持ち出しになりました、

話はとぎれず、夫人は記者に此人がクロパトキンなんでございます……、其の右方には當家の御主人少將が座を占めてお出でした、そうして數人の露人がクロパトキン大將の左右に控へて居られました。

肥大な露人

あの露西亞と申す國は、大層お寒いんださうでございますが、此の寫眞で見ますと、皆んなあなた、ぶつ〲とよく肥つて居りますから、何んだかお寒い國のやうには思はれませぬ。

露國男子

お酒は強いのをたんと戴くさうでございます、主人も彼國に居りました時は、強いお酒を上手に進められまして、迷惑いたしたこともございましたさうで、一般に露西亞の人は、強いお酒をどん〲飲みまして、それで身體には障りがないんでございますから、生れ付き丈夫なんでございませう、お寒い國でございますから、弱い赤兒は育ちませんさうですが、また死亡りましたからつて、左樣悲みもいたしませんさうでございます。——矢張丈夫に生長なる人は、皆こんなにぶつ〲肥太つた人ばかりでございませうよ。

露國女子

此時琴子孃はあの母樣茸狩のこともございましたね……夫人はあー左樣でした、其れもございましたが……と記者に對いて、何んでございますよ、露國の婦人方は、大抵お酒を上るさうでございます、それで男子の方に、お酒を強ひますのも、大層上手なものなさうでございます、茸狩もございまして日本のやうに即席料理でいたゞきますさうでございます、其の時などは格別日本のお醤油をほしくなりますが、露國に參つて居りますのは、小瓶でも餘程お高いものなさうでございます。

夜會好きな國人

冬になりますと、毎晩彼方の夜會、此方の夜會と招待狀が參りまして、厄介なものだとよく主人から申て參りました、夜分のお寒いことは何んとも申さ

れません、厚い毛の衣類を着て出かけますが、風の冷めたいとは、身體が切れますやうでございまして、髭髯にはいつぱい氷箸が下がるやうな嚴寒でございますが、お寒くなりますほど夜會も盛んになりますさうでございます、それで冬を交際の時季といたして居ります。

風呂

冬になりますと内庭に風呂のやうなものを造つて置きまして、其中に雪をいつぱい掻き入れて火を焚いて解かすんださうでございます。

露國の暦

夫人は茶菓白酒を記者にお進めになり、御辭退申ましても、令孃とともに懇に『どうぞ御ゆつくりなすつて、又其の内に思ひ出しながらお話しいたしませう、主人が宅に參られました時は、聞きます間がございませんでしたが、露國から報らせてよこしてくれましたことでございますから、忘れました事もございます』令孃を指して『お前もなにか知つてお出でせう』令孃は時々語をお交へになりましたが、玲瓏としたお聲で、露國の暦は、日本よりか十三日遲れて居ります、六月の十日頃になりますと、日が長くなつて、午後九時半頃、一寸夜になつて朝は一時から日が出ますから、ランプの儉約にはまことに妙でございますけれど、冬になりますと、午後の三時か四時頃から、燈火を付けなければなりませんのですから、矢張差引勘定同じになつてしまうと父から申て參りました。

ネバ河

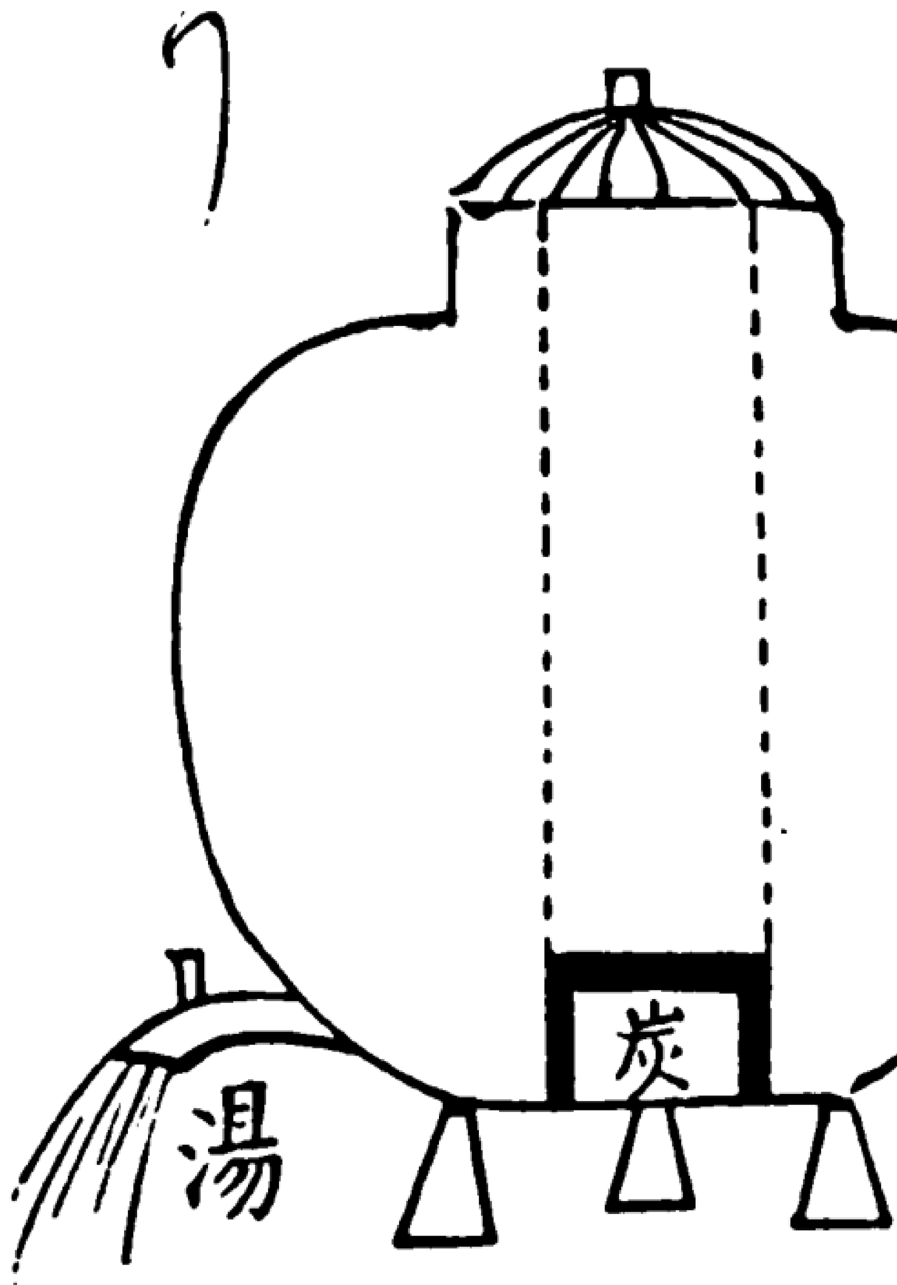
華氏の寒暖計で二十度まで下降ますさうで隨分お寒うございますと、夫人は言葉を續いてネバ河は氷結つて仕まいますから、都の中を馬に引かせます、橇に乘つて毛の帽子と、毛の外套に包まれまして、往來いたしますさうでございます。

茶を好む露國人

露國では皆んな茶を好んで朝晝晩と三度に飲みますが、硝子のコップに入れて、飲む習慣なさうでご

ざいます、お湯を沸かしますには、サモワールといふ銅古のやうなものを用ゐますさうで、其の形を主人が筆すさみに此通り書いて送られましたと、夫人はあたゝかなホームの主人公の、手紙の一端を記者に拝見することをお許し遊ばしました、餘り珍らしい

「サモワール」器は鉄にて造りたるものなり



形でございますから、記者はゆるしを得て寫し取りました。

ノエル祭

十二月の二十五日は、ノエルの祭と申まして、子供のある家では、大きな杉の枝に、お菓子だの玩具などを結び付けて、日本で丁度竹に短冊を下るやうにいたしまして、夜分になりますと、それに蠟燭を澤山點火まして、懇意なお友達を招いで、お茶やお酒を上げる習慣がございますさうです。

夫人も琴子孃も誠にさつぱりと輕くお話になりますから、記者は思はず露國の寫眞繪端書などを見せていたゞきまして、長々お邪魔いたしました。

琴子孃も令妹糸子孃(十八才)も軍籍にある許嫁の方が定まつてお出になりまして、令姉は竹内砲兵中尉、令妹は村田砲兵少尉で何れも御出陣遊ばしたさうでございます。斯うも一家軍籍にあつてしかも砲兵で入つしやいますれば、夫人の光榮は紗に包まれた瑠璃のやうに、輝いて居らつしやるのであります、

夫人は軍國多事の此頃であるからでもございませうが、萬事質素にしてお出遊ばします樣に拝見しました、お召物も地味な方で、赤十字社の篤志看護婦人會にもきらめかしてお出になりませぬ、夫人は極く着實なお方で輕卒な振舞など露程もお見受け申ま

せん、一心に繃帶を作つて入らつしやいましたところなどは、誠に感心致しました。

記者はお暇いたしませうとしましたところが、夫人と令孃は來客もございません、今日は別に用事もないのでございますから、御緩りと遊ばせと、丁寧にお止めになりまして、御辭退の出來ませんほど、御引止めなさいましたが、夕日も名殘惜しげに斜にかゞやく頃ともなりましたから、記者は深く謝意を述べまして、お庭を通りますと、前栽の若緑はしたゝるばかりで、何となく床しさを感じました。

電燈より明るいランプ

梅の舍主人

水素の性質の輕いものであることは、彼の風船玉を見ても善く分ることとですが、若しまた、酸素と云ふものと結び付くと、燃える働きを起すもので、此の働きをランプに應用すると、ソレハ〳〵慘じい光を採ることが出來るものであります、此の强度の光をランプに仕掛けたものをドラモンド燈と申します。

ドラモンド燈

ドラモンド燈は、其の發明者ドラモンド氏の名に緣みて附けたので、第一圖に示やうな仕掛であります。

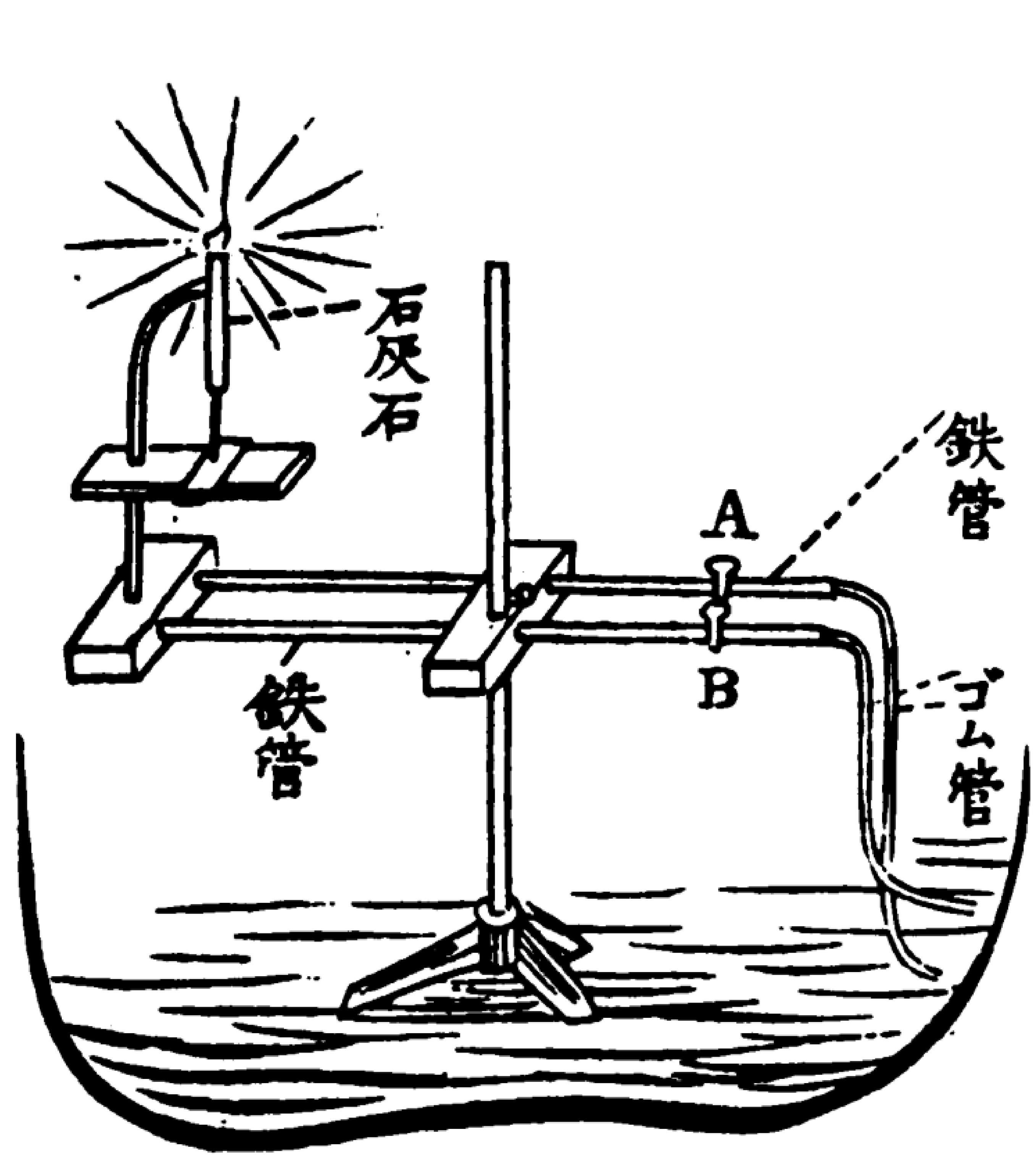
裝置

全體は鐵を以て造られ、ＡＢの二つの管が一方に於いて一處になるやうに裝置されて居ります、シテ他方のＡの口からは酸素を送り、Ｂの口からは水素を送るのであります。今酸素と水素とを盛んに送り込めば其の出口の所で此の兩素が結び付て燃え出します。其時石灰石を採つて少し隔てゝ其の光を受けると、前申したやうに非常な光を發して、瓦斯燈や、電氣燈の光りなどは、丸で顏色否光色を失ないます。

効用

偖かやうに強い光のランプでありますが、未だ實用の上に廣く應用されて居ませんけれど、近來では活動寫眞や幻燈などを寫し出す時のランプに用ひられて居ります。

第一圖



以上は水素の性質に就いてホンの概畧を申し述べたに過ぎませんが、餘りお話が混雑しましたから、其要點を摘まんでケ條書にすれば、

水素の性質

一、空氣より遙かに輕い瓦斯體であること。

二、無色無臭の瓦斯體であること。

三、酸素と結び付くと燃えること。

こゝに一言御注意を申し述べますが、此水素は單獨の場合では、決して燃えるものでなく、必ず相手のおかげで燃燒するのであります、此の實驗は甚だ手輕に出來るものでありますから、家庭のおなぐさみまでに其方法を申し述べます。

實驗の方法

小さい筆立のやうなガラス管に、水素を充て（水素は輕いもののゆゑ之を取り扱ふ時は何時も倒まになす）蠟燭に火を點して、其の下口の端に遣る時は、其の周邊に忽ち火が燃えたちます。所が其の蠟燭を、ズット管の上方に押し入れるや、否や、蠟燭の火は、直樣消え失せます。そこで再び其通り蠟燭を下口の端に下ろすと、又々蠟燭は燃え出すのであります。若し之を度々繰り返すと、蠟燭の火が燃えたり消えたりして、中々面白い現象が表はれます。先頃私の所へ去る方の奥さんが二人のお子さんを連れて參られました。其折、御馳走に此の

實驗を御目にかけましたが、皆さんが大層お喜びになつて、爾來私は此のお子さん等に大人望で珍世界と云ふ稱號を拜領いたしました。

ソハ兎も角かやうな現象は、如何なる道理に由て起つたのか。已に水素の性質を了解したからには、略明らかなことでありませうが、彼のガラス管の下口に蠟燭を遣る時は、內なる水素と空氣中の酸素と互に結び付て燃えるのであります。是れが前に申した水素は、相手のおかげで燃えると云ふ道理の實現したものであります。所が水素單獨のみの處、即ちズツト奧の方に入れると消えまするのは、水素は獨りボツチでは燒えることが出來ぬと云ふ證據でありませう。

皆さんは、最早水素とは何なものかと云ふとは、略お分りになりましたと思ひますから、是れより此の水素と云ふものは、どういふ處に存在して居るものか、彼の風船玉やドラモンド燈に使用した水素は、何れから把へて來たのかと云とをお話し申します。

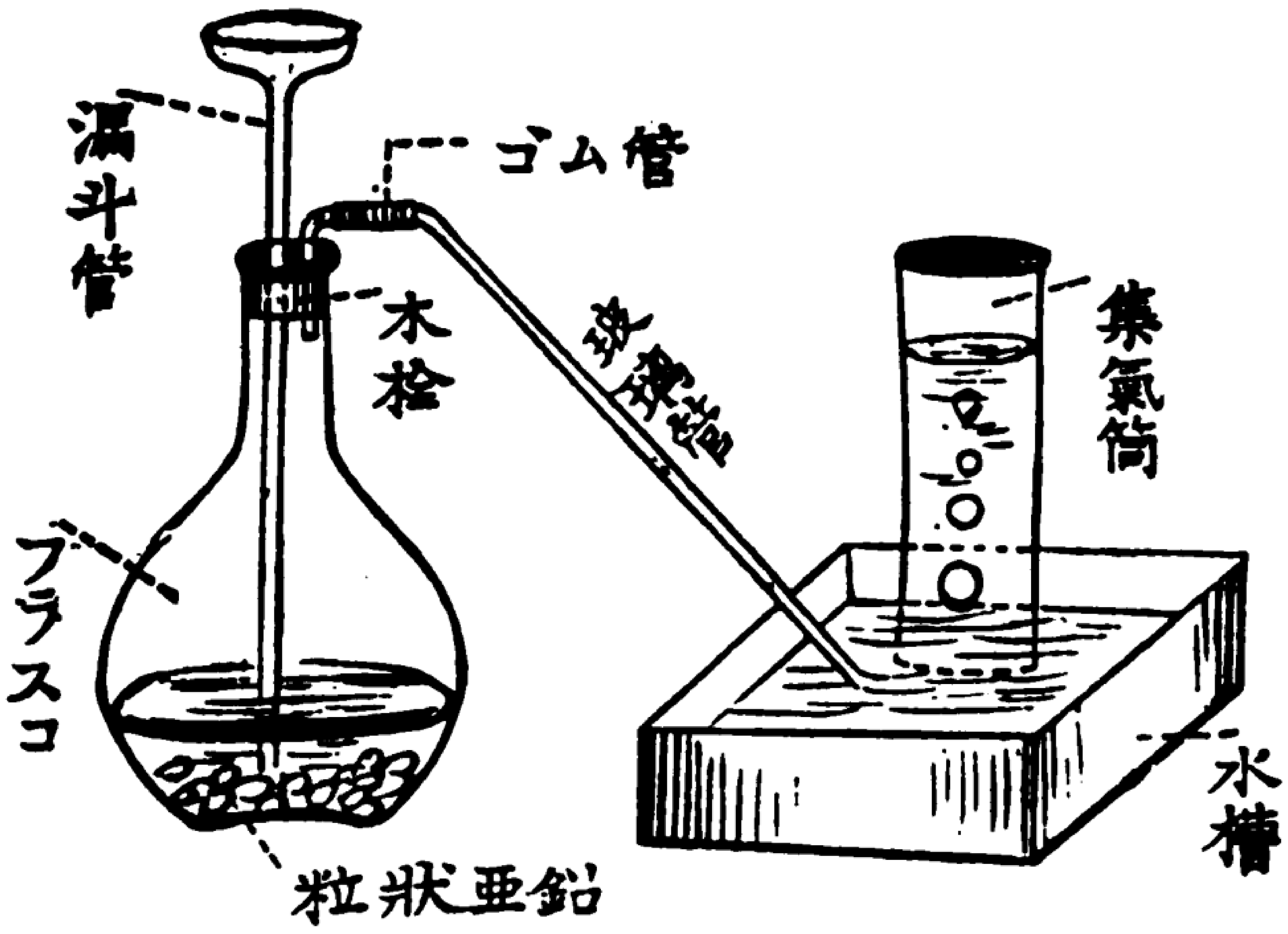
水素の所在

石油が未だ善く製せられず、自然のまゝで、地中から湧き出るものは石腦油であることは、已に御承知でありませう。此の石腦油の出る所には、一種の瓦斯が立ち上ります。越後の國は名高い石腦油の產地ですが、此の地方では細い棒などで、孔を穿つと、中から一種の瓦斯が出て來て、其れに火を附けると善く、燃えるのであります。其れ故、此の瓦斯を細い竹竿などに導いて、ランプの代用にしたり、煑炊などにも大層都合が善いさうです。此の一種の瓦斯と申したのが即ち水素が自然に存在して居るので、之を燃やして、ランプや薪炭の代用にするのであります。尤も此の瓦斯は水素ばかりではありません。色々の混合物がありますが、水素は其の重もなものでありませう。かやうに水素が、他の瓦斯と結び付かず雜つて居る塲合、六ケしく申せば物理的に存在せる塲合を遊離して居ると申します。又た水素と酸素と結び付くと、燃えると申しましたが、かういふ

働きを化合と名づけます。

水素は、かく地上に遊離して居りますが、學問の力を藉りて之を拵へると甚だ手輕に出來上り、其の上何程でも貯へ置いて、思ふまゝに使用することが出來るから、之より水素の製方に就いて研究いたしませう。

第二圖



水素の製方

トタン即ち亞鉛を熔かして、ポチ〳〵と水中に滴す時は、ツブナリの亞鉛が出來ます。之を粒狀亞鉛と名附けます。今此の粒狀亞鉛を第二圖の如くフラスコの中に入れ、少々水を注いで後更に漏斗より流酸を少し加へて御覽なさい。見る間に、はげしい熱を發して一種の瓦斯を發散いたします。其の時、この瓦斯を集氣筒（瓦斯を貯へ置くガラスの筒）に導いて、之に火を點ずると、青い色の焔が燃え立ちます。此の燃える瓦斯こそ即ち水素で有ります。

實驗上の注意

化學の實驗の際には念には念を入よとの俚言を、一時も忘却してはなりません。假令少々なり粗末に流れるやうのことがあれば、飛んだ失敗を招くものであります。今水素を拵へるに際したならば、フラスコの中の空氣が、十分出切た後でなくては、水素に點火してはなりません。所がまだ不馴の人々は、僅かに水素が出始めると、嬉しさの餘りか、物好き故か、直ちに其の水素に火を附けたがるものですが、ソレコソ飛んだ危險を起すものであります。水素の拵方は此の外色々ありますが、此の實驗などは最も普通のものであります。繁雜を恐れて、其

の他は略し置きます。唯序に申し上げて置きたいのは、

還　元

即ち化學の働きで化合した物質が、更に元のものに還ると云ふことであります。例へて申さば、錆びた鐵、言葉を代へて言へば酸化鐵と云ふものを取り、之を鐵の管に入れて熱した後、そこへドシ〳〵水素を通ずると、容易に其の錆を落すことが出來ます。金屬の錆は何れも此の方法を適用して、其の錆を除くことが出來るのであります。かやうに鐵と錆とが分れて、又各々元のやうな物質となることを還元すると申します。

還元の理

此の問題を説明しやうとするには、先づ前に述べた酸化鐵の成立を明らかにするのが一番分り易いのであります。此の酸化鐵と申すのは、鐵と酸素とが結び付たので六ヶ敷申さば、此の二つの物質が化合したので有ります。所が、前に申し述べたやうに、酸化鐵が激しい熱を受けて居る處へ、水素が這入てまゐりましたので、仲善しの酸素と、水素とが一つに結び付て水と云ふものを拵へ、鐵は仲間外れにされて、お氣の毒にも唯獨りに成たので、即ち酸素と水素とが化合して、鐵は遊離されたのであります。ソコデ此の酸素とは、ドンナものかと云ふことが、更にボンヤリして居るので、靴を隔てゝ痒きを掻く思ひが有らふと存じますから、其の性質製方などを一言いたしませう。

酸　素

是れも家庭のお慰みとして中々面白い材料で、然かも至て手輕に出來ること故、御實驗をおすゝめ申します。ソハ先づ一つの試驗管を取り、其の中に、少量の細末にした過マンガン酸カリウムと云ふものを入れ、アルコールランプで、其の管底を熱すると、一種の瓦斯が發散いたします。其の時マッチに火を附け、急に之を消して、餘燼の未だ消滅せぬ中に、其の試驗管の口に近づけ、中から發散する瓦斯に觸

れしめると、マッチの餘燼はパット小い音を立て、再び點火いたします。ソコデ再びマッチを消して、瓦斯に觸れしめると、又々餘燼は燃え出します。もし之を幾度も繰り返すと其の瓦斯の有らん限り、マッチが代る〳〵燃消えて面白い現象を表はします。個様な働きを有する一種の瓦斯を酸素と申します。何と簡單な方法出來るではありますまいか。此酸素は空氣中には多量に存在する故、金屬などを永く空氣中に放置して置きますれば、此の酸素が結び付て錆を生ずるもので、是れを名附けて酸化と申します、シテ又、酸化鐵が鐵と酸素との違つた物質となるやうに、一つの物が分れて、他の二種以上のものとなることを分解すると云ふのです。

偖酸素は前述のやうにして拵へるのでありますが、此の外にも、其製方が澤山ありますから、序に二つ三つお話いたしませう。

第一、赤色酸化水銀（赤色酸化汞とも云ふ）を細い硬質の試驗管に取り、極めて強く管の底を熱すると、酸化汞は熱の爲めに黑色を呈し、同時に水銀と酸素とに分解して、水銀の上部は小さいツブツブになつて、試驗管に附着し、酸素は發散いたします。若しマッチなどの餘燼を管の口邊に遣ると、直ぐ燃え出します。

第二、鹽素カリウム即ち皆さんが咽喉カタルの時に、うがひ藥になされる鹽酸カリに過酸化マンガンと云ふものを混ぜて、熱を加へると、矢張酸素が容易く發散いたします。此の方法は酸素を拵へる方法の中で、一番簡便であります。

實驗上の注意

過マンガン酸カリウムは、紫黑色を帶べる固體で、又過マンガン酸カリ若しくは過マンガン酸ポタシウムとも云うて、一つの毒物であります。それゆゑ實驗の際は、丁寧に取り扱うて、假初にも手指などに觸れてはなりません。

赤色酸化汞で、酸素を採る時の試驗管は、普通のものではいけません。赤色酸化汞は至て強い熱を加へ

なくては分解をせぬものゆゑ、極硬い試驗管の然も可成細いものでなくては、其の成績が宜しくありません。

試驗管の底を熱するに通常はアルコールランプを使ひますが、火熱が左程強くありませんから、ケ樣の場合にはロシヤランプを使ふと甘く行きます。此のロシヤランプと云ふのは、矢張壺の内部にアルコールを入れて置くのですが、其口の所を細くしてあるから、之を熱すると、アルコール蒸氣は、其の細い口から噴き出るので、之に火を附けると、中々强力の熱を起すものです。それ故ガラスの管などを曲げるにも、之を使ふと善いのです。

以上申し述べた處をくゝつて見ますれば、

甲

一、水素は酸素と結び付く時は、燃燒すれども、單獨の場合に於ては燃えぬこと。

二、水素は石腦油の中には、自然に遊離して居ること。

三、水素を製するには、粒狀亞鉛に、少しの水と硫酸とを加へること。

四、還元とは、化合せる物質が分解して、更に元の物に還ること、

乙

一、酸素の特性は燃えるものなること。

二、酸素は金屬と化合し易いこと。

三、酸素を製するには、赤色酸化水銀を强く熱すること。

四、又鹽酸カリに、過酸化マンガンを混せて熱を加へて製すること。

終りに一言いたしたいのは、是れまで申し述べた中に化學上の言葉、即ち學語として大切のもの、例へば化合とか、酸化とか、還元とか、分解とか、遊離とか云ふやうな言葉には圏點を附して置きましたから、永く御記憶を願つて其の上此の學語の意味を間違へないやうに希望いたします。

猶モー一つ申し上げて置きたいのは、化學といふものは餘り世の人に歡迎されて居ないので、殆ど等閑に附せられてありますから、一口に六ケ敷うるさい

學問であると言はれて、嫌はれものになつて居るやうでありますが、少しく御研究になつて見れば、強ちさう見くびつたものでない、否な中々興味の多いもので、僅かに水素や酸素のお話を申し上げたばかりでも、素人眼を驚かす位の事は容易であります、ソコデ只水素や酸素位な話ではとのお考もありませうが、此の一つのものは化學の大部分を占領して、しかも其の土臺となり、礎となる要素でありますから、十分に御研究を希望するのであります。

椎名大尉の未亡人を訪ふ

韓國咸鏡道利原偵察の任務を果し、金州丸にて、元山へ歸航の際、新浦沖にて量らずも露艦に遭ひ、降服を迫られたるに肯んぜず、終にその擊沈する所となりたるも、猶甲板に部下一中隊の兵士を整列せしめ、敵に對して一齊射擊を試み船體次第に沈沒し、終に胸を沒するに至つて射擊を止め、潔よき最後を遂げて、日本男兒の本領を發揮したる所謂椎名中隊の中隊長步兵大尉椎名三藏氏の未亡人ぬい子(二十五)は大尉の叔父なる芝區南佐久間町二丁目十八番地青谷德兵衛氏の令孃にして、大尉とは從兄妹の間柄なり一昨年一女子を擧げしも、不幸にして昨年三月死亡し、今は子なし、ぬい子は當時德兵衛氏の宅にあり、記者は大尉戰歿の報傳はりたる翌日、直に未亡人を訪問したるに、未亡人は先頃來僂麻質斯に罹り、永らく病床にありとのことにて、父君出で來られ、病床にても差支なければと、直に離れ座敷へ請ぜられたり、未亡人はヤオラ身を起し、快よく記者に面接し、父君も母君も、共に來りて座につき、交る〲大尉の身の上につき、暫時物語る所ありたり、ぬい子は天晴れ勇士の未亡人たるに恥ぢず、少しも亂れたる樣子なく、徐ろに口を開きて、左の如く物語られたり。

『良人は士官學校を卒業しましてから、佐倉の聯隊に少尉で居りましたが、丁度日清戰爭の終りに臺灣土匪討伐に從事したのが始めての戰で御座いました、臺灣から歸りまして間もなく、大阪の師團へ轉任しまして、今日まで、彼これ七八年大阪に勤めて居つたので御座います、今度も有難いことには、先發隊に選拔されまして、眞先に出發が出來るとて、二月の十五日に、喜び勇んで韓國へまゐつたのでございました、それから私も二月の末に大阪の宅を纏めまして東京の方へ歸り、父の所に一緒に居る樣にいたして居りますが、生憎その頃から、僂痲窒斯に罹りまして、一時は中々熱も强う御座いまして未だに斯うやつて臥つて居りますが、最早此四五日前から、大分氣分もよろしくなつたので御座います、實は良人も出發する時はとても生きて歸へれるものではない、花々しく戰死をするからなどゝ申しまして、私を勵まして居ましたが、まさか海の上で打死しやうなんかとは夢にも思ひませんでございました。』

と未亡人は伏目になりて、

昨晚十時過になつて、新聞の號外が出ましたので直に見ますと、姓名も官職もはつきり書いてありまして、これが公報なのでございませう、私は夢を見たやうで暫らく本當とは思ひません位で御座いました、そうする中に、大阪の御懇意にして戴いた御方の方からも、大阪の新聞の號外にありましたと見えて、電報で知らしてくれまして御座います』

次に未亡人の父君德兵衛氏は語つて曰く

『三藏も、今度は死神に取りつかれて居つたと見えて、戰となれば、きつと死ぬ〳〵と始終言ふて居りました、昨年の五月兄の精藏、即ち三藏の父が亡くなりました時、會葬のため三藏も歸省しましたが、其時の事で、三藏が申しますには、來年は、きつと戰爭がある、私は死ぬかも知れないから、よく顏を見ておいてくれと申すのです、そし

て又母に向つても、暇乞をして、御母樣戰爭になつたら、私は死ぬかも知れない、事によつたら之れが御別れだらうなど〻緣喜でもないことを繰返し、繰り返し申して歸りました、果して之が永の別れになりました國元の母も、今朝電報を打ちましたから、今頃はさぞ驚いて居ること〻思ひます、さア之れを御覽下さい此間の手紙で、夏服の事を申して來ましたから、夏服に夏帽子靴下など種々荷作りしまして、實は今日出す筈にしてあつたのです。」

と荷作りせし箱を指し、無限の感に打たれをる有樣に、記者は實に同情の淚を禁め能はざりき、德兵衞氏は更に言葉を繼ぎ

三藏も大尉や中尉は、眞先に打死するものだとは始終云つて居りましたが、今度は船の上で、アーいふことになつたので、思ふ存分に働くことも出來なかつたらうと、おもはれます、同じ死ぬのなら、陸のうへで思ふ存分敵を斬捲つて死なせたう御座いました、併し部下の兵士があれほど天晴な働をしてくれたのは、三藏のためには誠に名譽の事です、之れが戰地で病氣で死んでしまつたのなら、夫こそ犬死ですが、私も之を思へば實に名譽の戰死だと娘を慰めて居ります。』

聞く所によるに、大尉は取立て〻いふべき道樂嗜好なく、出征中、未亡人および岳父に宛てたる書信は仁川および元山より三四回屆きて、該地の景況を詳しく報じ越したるも、いつも軍事に關するものなく只朝鮮內地の風土人情等目に觸る〻ものは、悉く細大報道し來り、いつも書信の冒頭に、征露第一信、第二信と記し、末尾にはいづれも此手紙は保存するを要すと申し越したる由なるが、其征露通信も、第四次迄にて今は絕筆となれりと、因に大尉の甥太郎氏は現に野戰電信隊工兵伍長として、戰地にありといふ。

種痘に就ての注意（續）

痘苗製造所　佐藤信直述

前述べた通りで、痘苗問題と云ふものは一國の衞生に就て考へなければならぬ問題であります故に、政府は民業粗製濫造の弊を防ぐ爲めに、官立といたし善良なる苗痘を製造して、臣民の健康を保護しようと云ふ目的を以て、明治二十八年閣議の決裁を得ると同時に、帝國に於きましても滿場の賛成を得て、官立痘苗製造所を設立したのであります、又私共が同僚と民間の痘苗を數多く前年集めまして、試驗をして見ますると、一として黴菌學上の要求を充たすものがない、其重なる缺點と云ふものは、製造する人に於きまして、黴菌學上の素要が無い爲に、痘苗一人分中に、數千乃至數萬の黴菌を含くんでをる、此の黴菌は無害のものでありまするならば、大した害はありません、常に一種の病原黴菌でありまして即ち化膿する一種の黴菌があります、此の黴菌の多くありまする時は、種痘の力を弱くする計ではなく、屢々小兒の健康を害し、甚しきに至りましては、種痘の爲に生命を失はしむることがあります、私の申すまでもなく、一個の痘疱の内に、化膿する黴菌が發育したならば、生活物の生存競爭で、痘苗の原因物たる菌體は充分に發育することが出來ませんければ、即ち不完全なる痘疱が出來るのであります、甚しきに至りましては、痘疱と云ふより、寧ろ膿疱と云ふ方が適當なものがあります、此の不完全なる痘疱、又は膿疱と云ふものでありまするならば、前述べました萬國衞生會に於きまして、議決されました樣な効力を現すことは出來ない、從つて免疫の度は勿論、免疫の期限も短くなるし、免疫の期が短く度が弱くなりますれば、天然痘の流行する時に犯される人が多數でありますから、豫防にならない、爲に市町村の個人に御注意をいたしますことは、早くから膿を持て來る痘疱と云ふものは、決して完全なるものでないと云ふことを、特に御承知おきを願ひます

凡そ種痘用痘苗と云ふものは、製造後に於きまして黴菌學的の檢査を遂げて、其内に病的の黴菌がなく無害の黴菌でも少なければ、之を用ふると云ふことにせねば、國民の健康に偉大の關係ある種痘用痘苗として、發送が出來ない筈であります、市町村の個人諸君如何であります。民間の私立製造業者に於きまして、果して總ての知識を有する醫師及獸醫を雇入てをりますか、又黴菌學上の智力を有する醫師が一々之を檢査してをりますか、私は第一番に、此點に疑を容れてをります、又市町村の個人諸君に御考を願ひますることは、僅々二錢五厘の廉價の痘苗を以て以上の述べました如き完全なる注意を行ふことと、又利益を得ることが出來ましうか、利己の爲には行ふべき注意も行ふことが出來ない、只に痘苗製造事業計りでない廉價を以て競爭すると云ふことは其品質の不良となるは一般の原則であります。又其他世間にて許する所によりますと、不良なる痘苗の効力を强めるために、衛生學上に於て危害があるとして退けられたる人化痘漿を加へて、世間を瞞着すると云ふことがあります、此の說の起りまするも、價格の競爭と品質の粗惡と云ふ點から考へて見ますれば、無理ならぬことであります、故に私は同僚栗林傳吉君と共に取調べましたものに、之を證明することが出來たことがあります、此の樣な事があるに至りましては、危害も亦甚だしと云ねばなりません、斯く申しますれば、官立痘苗製造所は、如何でありますかと質問を起す方もありましう、官立の製造所に於きましては、創立の當時、殊に明治二十九年と三十年の如き、天然痘が流行して、殊に戰爭同樣多忙を極めた場合、或は多少缺點もありましたのでありませうが、今日では官立痘苗製造所は、技術部と庶務部が、充分熟達したる上に於ては、痘苗其のもの、効力は、人體にも、犢體にも、試驗をして其の發痘の完全なると云ふことを確むると、一方に於ては黴菌學的に試驗をいたし、病原となるべき黴菌は勿論、無害の黴菌でも殆んど無菌に近い完全なる痘苗

であると云ふことを確めたる後、責任を以て發送するのであります、斯の如く差異がありますから、公衆衛生に從事せらるゝ市町村及個人に於きまして充分痘苗の良否と云ふことを撰定して、政府が實際監督してをる痘苗製造所の痘苗を使用することを御勸申すのであります、殊に種痘と云ふことは、事業及經費とも傳染病豫防法第二十一條に規定して市町村の負擔に屬すると云ふ爲め政府に於きましては、收支相償はざるにも係はらず痘苗の價格と云ふものを、尤も廉にいたしましたのであります、故に痘苗を使用する市町村及個人に於きましても、政府の意を充分に御熟考あらんことを希望いたします。



第三痘苗の使用法及接種の方式に於て欠くる所がありと申しまするのは、種痘醫の技術に亘りますが、其前に於て既往より使用しておきました人化痘漿と、今日の牛痘とは使用する上に如何なる差別のあると云ふことを一寸御話いたします、人化痘漿と云ふものは稀薄透明で、不純粹のものでありますから、反應と云ふものが強く、即ち周圍は赤くなること多ければ、炎症の強き爲であります、從ふて熱も高き樣に思ひます、又人化痘漿は諸般の傳染病、殊に梅毒、丹毒、癩病、結核、其他傳染性膿疱疹等を植付たりして、知らず識らずの

間に小兒の健康を害されてをりましう、之に反し牛痘苗殊に近年内務省痘苗製造所に於て製造する痘苗は、犢體繼續法にて、調製したるものにして、之に石炭酸〇五、％乃至〇、八％の割合にて加へ、早きは二十四時間遲きは一週間氷室内に入れ置く時は、無菌即ち化膿菌を有せざる痘苗を得るか、時として化膿菌を有することあるも、一二個の黴菌聚落より、外に見出すことが出來ない痘苗であります、殆んど純粹痘苗でありますから、消毒を能くいたして、接種する時は、小兒に危害を加ふることが少なきものであります、故に痘苗を使用する時には、衛生上定められたる所の分量を種ゑなければならぬ、即ち五人用の痘苗は五人に用ゐ、決して五人以上に用ふることが出來ません、然るに各地方に於て種々取調べをして見ますするに、五人用の痘苗を、二十人或は二十五人に種てをると云ふ有樣であります、甚しきに至りましては、乳汁を以て稀薄したり、「グリスリン」を加へ、或は水を加へたりして、四十人乃至五十人に用ふる實例も、私に於て伺ってをります、即ち五人種るべしと規定されたるものを以て、十五人以上五十人に使用した場合ありとしたならば、所謂使用法の其當を誤て居るので、完全なる成績を得ることが出來ない筈であります、又私は熟々考へて見まするに、斯樣な誤の起るのは、接種法に欠點あるが爲めであります、明治三十年より、内務省痘苗製造所は、牛痘苗を接種するには、切種と云ふ改良の方法を用ふることに、本所は内規を設けて居ります、且つ痘苗木筒の包紙にも、切種に因るべしと書てありますことは、私が申上る許りでもなく、既に開業醫師は其方法に改善せられなければならぬ筈でありますけれども、然るに多數の醫師が其方法を取りません故に、吾々が其鼓吹をいたしてをります、獨逸國に於きましては、千八百九十六年規則の内に決して刺種を行ふべからず、切種法を用ふべしと發布されてあります、我國に於ては、此の切種法を行ひまするには、内務省防疫課長及私の意匠にかゝ

る接種刀を以て、五厘乃至一分の長に、十字形か若くは單條に皮膚の表層を淺く出血しない程に切りまする、其切りましたところへ痘苗をして、接種刀の平面を以て擦り付けると云ふのが、正しき方法であります、但し舊來の種痘針で種痘しましても、熟練なる技術者に於きましては、能く發痘するかも知れませんが、特に御注意を願ひまするのは舊來の種痘針は、人化痘漿と云ふ稀薄なるものを、接種したるがため、今日の牛痘苗には、不適當な器械を以て接種すると云ふことは誤を生ずる基であります、之が爲め善良なる痘苗も發痘しない樣のことがあります、故に我が內務省に於ても遠からず種痘施術心得書を改正する日があるだらうと思ふてをります、斯樣な譯でありますから、市町村同業者及個人に於きましても、我が國をして文明の域に保たんと思ひます精神がありまするならば、須らく文明的接種法即ち獨逸法に改良すると云ふことを國家の爲に希望いたします。

（完）

家政學資料（續）

磯部　武者五郎

（八）使用財産の購入

使用財産は即ち家具什器のことにて、之を購入せんとせば左の心得あるべし、

現金にて購求すること
必要の生じて後に購入すること
時の相場を心得て購求すること

又預め目的を考へて、其の物品を撰定すること必要なり、其の目的とは、

日用品
來客用品
贈與品
装飾用品
娯樂用品

是なり日用品は外見を問はず、品質の丈夫なるを撰

び、來客用品、贈與品、装飾用品は、價高くも、外見の悪しからざるを撰び、娯樂用品は娯樂の種類に依るべけれども、身分に應じ、餘り無駄にならざる適當の品を撰ぶべし。

（九）使用財産の管理

使用財産を管理するには、先づ第一に其の配置の場所を定め置くを要す、而して配置の場所を變更せざるを更に必要なりとす。

家具什器は、一の帳簿を作りて、一々之れを記載し置くを最も肝要なりとす、此の帳簿は、家具目錄と名け、左の分類に依りて、其の部分々々に屬する家具を記するなり、而して家具什器には、一々番號を附し、其の所屬の部門を明記し、何時にても目錄と對照して、點檢することを得る樣に爲し置くべし、其の部門は、大畧左の如く分つべし。

一手許用具の部（座敷、居間室、小兒室、客室用具として室に依て分つも可なり）
一賓客用具の部
一装飾用具の部
一衣服用具の部
一飲食用具の部
一臺所用具の部
一書籍文房具の部
一造作用具の部

此の區別法は、極めて小身代の家の家具につき區別せしものなり、富豪の大家に至りては、其の區別一層密なるを要すべし、或は各室に依て區別し、或は祝日の用具、宴會の用具、又は主人、奥方等人に依りて區別する等のことあるべし。

臺所用具の如く、其數繁雜なるものは、一々番號を附する必要なかるべし、只其の數を記せば可なり、記入法の例は、

家具目錄

手許用具の部
一桐圓火鉢　何室戸棚　何番　壹個　價格金何圓

一桐用箪笥　何室　何番　壹個　價格金何圓
一手燭　何室　何番　壹個　價格何十錢

臺所用具の部

一鐵製大鍋　幾個　價金何圓
一小皿　幾枚　價金何圓
一大皿　幾枚　價金何圓
一土瓶　幾個　價金何十錢
一茶瓶　幾個　價金何十錢

此の如く家具全體を詳記し、使用財産の價格を知り新に購入したるものは、直に目錄に記入し、若し毀損して棄てたる家具什器は目錄を抹消すべきなり。次に家具の取扱ひにつき畧記せんに、大畧左の諸項を心得べし、

一貴重の品は箱を作りて藏むべし、
一金屬器具は濡れたる儘藏むべからず、
一陶磁器類は一々紙又は布にて包み藏むべし、
一塗物は新調のものは數日間風に晒し、又は米櫃の中に入れ置きて漆氣を去り後に用ふべし、
一塗物は使用して後能く洗ひ、拭きたる後更に乾きたる布にて丁寧に拭ふべし、
一陶磁器は熱湯にて洗ひ、硝子具及び塗物類は微温湯にて洗ふべし、
一飲食用器は極めて清潔に取扱ふべし、
一茶碗、箸、飯櫃等を洗ふときに、他の肉類を盛りたる器具を同一に洗ふべからず、
一家具什器の汚染、毀損は速に修補すべし、

（十）金錢の出納

金錢の出納は、主婦自ら爲すことを要す、下女等をして取扱はしむる時は、或は間違等の事あるべし、而して其の出納したる時毎に、直に帳簿へ記入することを要す、若し直に記入することを怠りて、後に至りて記入せんとせば、或は其の額を忘失し、或は出納せる事柄が曖昧になりて、遂に計算上に不都合を來すとあるべし、故に其の記入を怠らざるを第一の要件なりとす。

(十一)金錢の種類

我國に行はるゝ金錢即ち通貨の種類を知り置く事、亦家政學上一の要件なり、我國に行はるゝ通貨には貨幣と紙幣とあり、其名に數種あり、左の表の如し、

- 通貨
  - 貨幣
    - 本位貨幣(金)
      - 新金貨
      - 舊金貨
    - 補助貨幣(銀)
      - 白銅、青銅、
      - 鐵錢、
  - 紙幣
    - 政府紙幣
    - 銀行紙幣
      - 日本銀行發行
      - 舊國立銀行發行

又金貨には、二十圓、十圓、五圓の三種、舊金貨には十圓、五圓、一圓の三種あり、銀貨には五十錢二十錢十錢の三種、白銅貨には五錢、青銅貨には一錢五厘の二種、鐵錢には寛永通寶の二厘、一厘、文久通寶の一厘五毛とあり、此の外に元の銀貨の五錢、銅貨の二錢とありて行はる。

金貨の價は五圓の金貨は潰ぶしても、五圓の價あるものなり、銀貨以下は其の價少きものにて、五十錢の銀貨は潰せば三十錢位の價となるなり。

銀貨以下は、其の通用に制限ありて、法律にて定められたり、即ち一口の支拂に、銀貨十圓以上を出すこと能はず、白銅貨及び青銅貨は一口の支拂に一圓を限りとせり。

貨幣の目方は左の如し

金貨一圓	純金二分
同　五圓	同一匁一分一
同　十圓	同二匁二分二二
同二十圓	同四匁四分四四
銀貨十錢	銀七分一八八
同二十錢	同一匁四分三七七
同五十錢	同三匁五分九四二
白銅五錢	白銅一匁二分四四一
銅貨一錢	銅一匁九分〇〇八
同　五厘	同九分五〇四

刺繡

菊平糸縫ひ方

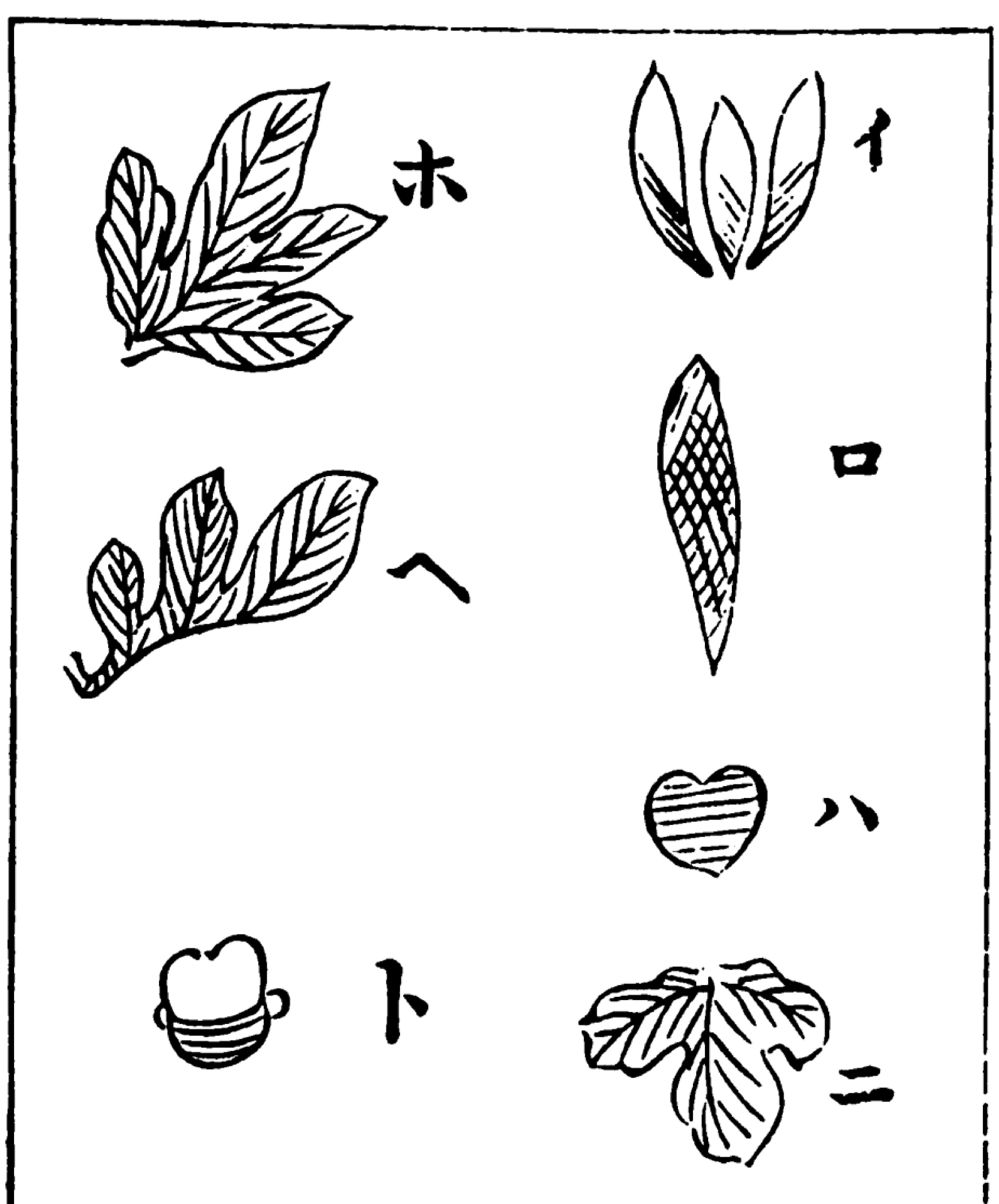
上村百與子

菊も矢張り花から縫ひはじめます、花の縫ひ方は木綿糸練習と同じ事で御座いますけれども、白と時色と縫ひ分けます。是は花瓣の中餘まで、白かまにてイ圖の如く縫ひ、後を時色で縫ひます。中心に花瓣のよく集らぬもので有りますから、よく注意して初め針を長く致します、花瓣が出來ましたらば、其花瓣の上にたづなよりをかけます、是は白かま二すが時色二すがにて甘くより口圖の如くかけます、是は白と時色とにて縫ひました處の餘りはつきりせぬ爲で有ります、半開の蕾も矢張白時にて時色と縫ひ分けまして致します、此の蕾の糸は開きたるを縫ひました糸より、一段濃いのを用ひます、是にもたづなよりを掛けます、小なる蕾はハ圖の如く縫ひます

之も濃き時色を用ひます、葉は草色の極く濃きと其れよりも、すこし淡きと極うすきとを用ひます、其極濃き物にて一二三と縫ひ、四五と次の色にて縫ひ小なる葉七八九とを一番淡きを用ひて縫ひます、其縫ひ方はニ圖の如く縫ひます、是は一より四までを此の縫ひ方に致します、五はホ圖に示したる如く縫ひます、形はきれて居る樣にほつて有りますから、きれない樣に縫はなければおかしな物が出來上ります、六七の葉はヘ圖の如く矢張りつゞけて縫ひます、極少なる葉は野菊の小なる葉と縫ひは同じ事で有ります、枝は青茶かま糸で、普通に縫へばよろしいので御座います、萼は大なるは、野菊を縫ひましたのと同じ事で有ります、小さはト圖に示したる樣に淡き草色で縫ひます、終りに開きたる花に三圖に有る如く白きかま糸にて、二三針出しまして、其中眞を横に縫ひます、是は眞中がよく集てすきが御座いませんければ、いりません、是で初めの平糸縫ひの練習は終りました。



九
七
五
六
四
八
三
二
一



イ
ロ
ハ
ニ
ホ
ヘ
ト

友禪染の圖按

又仙子

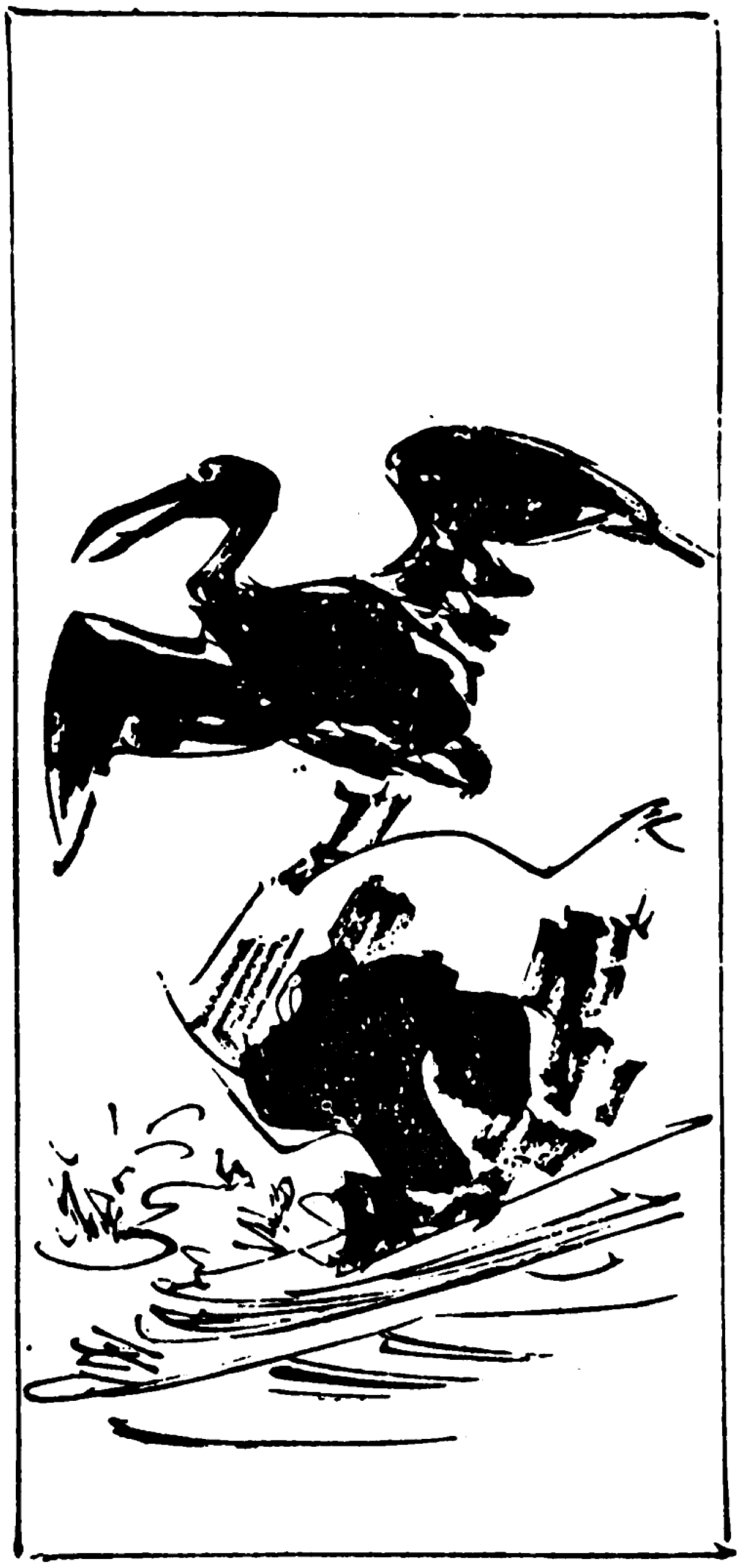
前號に續いて雛摸樣の事を記すつもりの處、その摸樣の種別に就ては、一々圖樣を掲げて、解説いたされば、會得の出來難きもの故、之は重ねての事として、並には友禪染の事を載すると共に、挿圖の上より染模樣の事をも記しませう。

此友禪圖按は、筆者始めより何物に應用すべしとの目的にはあらざらんが、元來筆者は染模樣の意匠をなすが職分故、此圖の組織、また配色ともに友禪染に適當して居るものである、此圖の匠みは如何と申せば、櫻樹を輪廓のみになして、中を縞線に描かれしが、最も目の着けどころ、次に筧の水と共に露の玉を置かれたも、此節縮緬友禪に金銀の箔置きをなすことの流行に適ふて見ゆ、又樹の向の地を、矢筈飛白の朱柿の兩色にあらはせしなど、別に新案にもあらねど、陽炎の趣きを模したるもの丶如く、染物として、見榮ある意匠として、可なりと申ませう。

染物の意匠は、圖按よりも、第一に色の配合が肝要なるものと、私は經驗して居ります、如何に圖按の奇拔なるにせよ、新妙なるにせよ、孰れも配色の按排宜きを得ねば、寂に過ぐるか、不調和に終るかを免れぬ事である、殊に流行の色など應用するに於ては、決して圖按ばかり新奇に奔りては、調ひ難きこと概ね然りと申して宜しい、近き譬へが、藤と山吹を模樣にせんに、是等は双方の花の姿勢の調和せぬ上に、花の色も幷べて共に見榮なく、又枝葉とて、匠みに乏しきは、即ち配色上より來る不調和の故と見ねばなりませぬ、全體山吹などは、模樣として不向きなもの、畢竟色に變化なく、花葉とも趣に乏しき故である、斯樣な次第にて、模樣の考按をなすには、都て配色上より割出し、又流行色の適當するやうに匠まねばなりませぬ。此節の流行色は、何であるかと申せば、先づオリーブ色、譯して松葉の色を地色とするが一番多くあります、冬物には、其色の濃きところ、夏物には其色の淡味なるもの、と加減して用ゐられます、此色は

緋、黒、藍、紫、等の色と交へて、孰れも調和わしからねと、又藤色、空色の如き、時候によりて嫌ふべき物ならず、冬も夏も通して差支なき地色なればならんかと思ひます、現今の染模様は、此圖の如き際立し強い色のみによりて、意匠さるゝもの、早く申せば、其織物の配色とも申すべく、圖案に温雅の趣を含ませたるものを取處といたされます、其一斑を御承知なされんとならば、現に三井呉服店の陳列會にある西村總左衛門、廣岡伊兵衛、などの出品を御覽にならば會得せらるるでありませう。

偖友禪の圖案は、近頃強い色の配合を専らとする事になりました、此強い色はと、申せば黒の處へ朱を添え、臙脂紫と青色を幷べ、又藍鐵色に金茶色を配ると云ふ按排のもので、繪畫の色彩とは全く異にして、暖冷反對の色を求めて配合する遣方であります、夫故自から地色の淡き物となりては模樣だけ派出に眼立ちて厭ふべき筈なれば、大抵の地色も濃きをもて馴染好くするが今日の流行と申すのである、例せば紅葉などを曲線に寫し之に朱黒の二重輪廓をとり、中の彩りは臙脂紫、又は藍鐵色などにて、濃淡二重に色を施すので、御承知もあらうが、五重の塔また山門の彫物に彩れる濃淡の塗り方を雲繝彩色と申すもので、夫に類して作



る圖案が、即ち温雄なものとして迎へられて居ります、此圖の描筆を見ても、暈繝彩色の趣なるを覺りたまへ。

皆樣は如何に想ひ玉ふか、之が現今の流行なればとて、必ず何人にも迎へらるべしとは申せぬ、是より以上に進んだ好みもありませう、流行は旦暮に推移するものなれば、皆樣の日頃研究に基きて、更に變つた圖案の匠みはありたきものと思ひます、從來の模樣と申すものは、甚だ纎弱に陷り、而も繪畫の範圍にのみ狹められて、動もすれば同じ似寄の色彩に苦心して、眞の模樣の意匠は發達せぬ事にありました、然るに世上一般は、模樣意匠の振はぬを研究せざるべからざるの聲、漸く高まりて、既に強い色の圖案も斯く現はるゝに到りました、私の存じますには、征露の意氣益々壯んなるに於て、一般の人氣すべて雄大に傾くは明かなる次第なれば、自から模樣の意氣一層豪勁となりませう、從來の小規模なものは、是より忘られる樣にならうと思ひます。

模樣は友禪染に拘はらず、都て藝術上、時代の變遷によりて、強柔精粗の差別あるは、自然の定數と申すもので、室町時代に唐物渡來して、清洒の意氣あり、裝飾上極めて寂ある幽しきもの行はれしが、元龜天正の活達にともなふて、桃山時代の華麗を盡すものとなり、德川に至りては、衣裳の模樣までも纎巧なるを選むと申す如き、當時の人情に伴はれて種々の意匠を改むるもの、現に暈繝彩色の強きものありとも、之をば未だ明治式と稱へられませぬが、私共まで圖案の事を兎や角申すやうになりましたれば、更に是より我が國威の發揮によりて、始めて明治式と申すもの表るべく、次で友禪圖案も皆樣の研究に伴ふて著しき進化をいたさねばならぬと私は信じて居ります。

東京府第一高等女學校教諭市川源三著

高等女學校用 國史教科書

(文部省指示濟)

全一册
菊版總クロース
定價各金五拾錢
郵稅金六錢

●本書は文部省教授細目に據り、著者多年の實驗と豊富なる學識とを以て、高等女學校及び之と同程度の女學校の教科書として編纂せられたるものなり

●史實中特に女子に關係し若しくは、女子に教育上裨益多き事項を記載することを勉めたり。然れども之が爲めに歷史の本旨體裁を害するが如きことは毫もこれなきを期せり。

●されば本書は一般女子用教科書として最も適當のものたると同時に又た古往今來本邦女子が歷史中如何なる部分を働きしも又働くべきを知るに於て餘師あらん。

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

S.A
電話本局四八四
体操器械
遊戯品一切
東京
安藤商店
神田

實驗 牛乳日本料理（第三回）

清水鈴子

▲ミルク揚げ

まづ馬鈴薯をよき程に取りてゆでまして、それを笊の如きものへあげたらば、皮を去り摺鉢にて擂りますする、斯く擂りました馬鈴薯がとゝのふたら、それに兼て用意して置く鹽とウドン粉若しくばメリケン粉とを加へ、牛乳にて凡そ團子にできる位の柔かさになし置き、又別に蓮根、薩摩芋、セリ、ミツバの如きものゝゆでたるを細かく切りて普通の揚げ物のやうに適宜に取り、それを前の馬鈴薯にてなる可く細長く饅頭のやうに包み、又極く薄き衣（ウドン粉）をその上に掛け、上等の油なればヘット油を用ゐて揚げるのです、これは牛乳が主とならないので唯馬鈴薯に鷄卵を用ゆべき處だけを替たので、風味をよくしたばかりでありまする。尙その中味に上等なものを用ゐやうとならば野菜の代りに、獸肉を用ゐるのでありまする。

▲玉葱

これは簡單なもので、唯玉葱を煮るに牛乳を使ふだけの事でありまする、然しどう云ふものか牛乳はよく味噌とは調和まするけれど、醬油とはのらないイヘ醬油では味噌などの風味がでないのでありまするから、醬油で煮る所はすべて食鹽を用ゐます、この玉葱の煮やうも醬油でなく食鹽を用ゐ、食する時には胡椒のやうなものを振りかけます、又一つ少し手數をかけてやる方法は、玉葱を油でいためて置いて、更に鹽（醬油にてもよろし）スープなどに牛乳を混じたるものを入れてよく煮、煮上りたる時皿に盛りそれに肉を細かく切りて煮たるものなどを添へて出すのでありまする。

▲冬瓜のうま煮

兎角牛乳は流動體ものでありまするから、他の固體のものゝやうにそれを主として食べることはできないのでありまする、であるので牛乳の料理と申すと丁度酒の料理、醤油の料理、味淋の料理と云つたやうな具合でありまする故に、何だかをかしく聞へまするけれど、私の申すのはつまり牛乳を用ゆる料理と云ふ意で、味淋を使ふ料理と云ふ意義と些とも變らないのでありまする、さてこのうま煮を申せば、これも至極たやすい仕方でありまする、冬瓜をたい牛乳で煮るだけで、それに鳥のソボロをかけると一層妙である、下地には醤油の方が宜しい、南瓜をかくしても又結好です。

▲ツミイレ

よく人が致しまするツミイレとて、ウドン粉を水で溶いたものを、つゆの中へ入れて食べますが、そのウドンを溶くに水を使はず、全く牛乳ばかりで解いて汁には何も入れず鰹節を用ゐぬものも一寸よろしい、煮上つたウドン粉は普通のより、舌當りがよく滑かで、溶けるやうな心地がいたします。

▲菓子(一)

何菓子と名づけませうか。ウドン粉と白砂糖とヘツト油又は胡麻油とを用意し、まづそのウドン粉を餘り固からず柔かならずに牛乳で砂糖を加へて程よく溶きます、溶けたらばそれを饅頭のやうにこしらへ、前の油で揚げ、狐色になつた頃鍋より出して西洋紙のやうなものゝ上にのせるのです。

▲菓子(二)

今度は上等の新粉と長芋とを用意して長芋は皮を剝いて摺り下し、それに以上の新粉と砂糖と又別の牛乳とを混ぜて器の內でよくこね合せ、それから又別に餡を造へて團子ほどに丸め、これを前の新粉に包んで蒸すのです、蒸す時間は十五分か二十分位でよろしい。

新刊書目

六合雜誌（第二八〇、一號）三田四國町日本ゆにてりあん弘道會
中央公論（第十四年第四號）本郷區西片町 反省社
慶應義塾學報（第七十六七號）芝區三田四國町 同發行所
成功（第四卷自一至六號）本郷區弓町一丁目 同雜誌社
平民新聞（每號）麴町區有樂町 同新聞社
婦女新聞（每號）牛込區東五軒町 同新聞社
戰時評論（一號）府下荏原郡品川町 國民評論社
東京經濟雜誌（每號）京橋區彌左衛門町 同雜誌社
音樂之友（第六卷第一號）府下下巢鴨村 樂友社
東京感化院月報（第三十二號）豐多摩郡澁谷村 東京感化院
商家の友（第二十五六號）京橋區南鍋町 時事新報社
時好（辰の五號）同市日本橋區駿河町 三井呉服店
學校衛生（第十一二號）同市下谷區櫻木町 同研究會
日本婦人（第五十三四號）豐多摩郡澁谷村 帝國婦人協會
裏錦（第百卅七、八號）神田區北甲賀町 尙絅社
ほつま（第二十九號）備中國淺口郡吉備村 金光中學秀眞會
をんな（第四卷四、五號）麴町區下二番町三七 大日本女學會
中學科講議録（第二學年第一、二號）大日本國民中學會
東洋哲學（第十一編第四、五號）同市小石川區原町六 東洋哲學會
婦人と子供（第四卷第四、五號）本郷區湯島 フレーベル會
正教雜誌（第五卷第四號）神田區東紅梅町 教要社
體育（第百廿四號）神田區仲猿樂町 日本體育會
愛國婦人（每號）麴町區下二番町 同發行所
國學院雜誌（第四、五號）麴町區飯田町 國學院
近畿評論（每號）京都市 同評論社
新聲（每號）東京市神田區錦町 同社
婦人世界（第卅四、五號）大坂市南區末吉橋 浪華婦人會
音學新報（第二號）東京市神田區淡路町 音樂新報社
大八洲雜誌（卷之二百十三四）神田區三崎町 大八洲館
大日本婦人教育會雜誌（第二六三、四號）麴町區永田町 大日本婦人教育會

新刊概評

▲新女訓（尾上柴舟述） 結婚前後の女子の戒むべきこと、心がくべきこと、などを最も平易に記したるものにて、たとへば女大學に改正を施して恰も今の女子に適當せしめたらむが如くなれば朝夕熟讀玩味して常に戒めとなさんにはその益少なからざるべし予輩は今日の女子に向つて徒らに高尙なる書籍を繙んよりは寧ろ斯る平易にして實行に必要なるものを讀まんことを勸むるものなり（定價貳拾錢神田錦町二新聲社發刊）

▲朝鮮評論 朝鮮釜山港に於ける邦人の發刊するものにして、社說、論說、評論、人物月旦、史傳、文苑等ありて休裁備はりたる小雜誌なり（定價一册拾二錢韓國釜山港西町一丁目朝鮮評論社發刊）

▲戰時評論 宣言の結論に曰く戰爭の目的は遂せざるべからず最後の經營は善くせざるべからずと實業家の寫眞數葉を挿みたるによりてもその期する所を知るべきに似たり（每月二回一册定價十錢荏原郡品川利田新地國民評論社發刊）

▲法律上の婦女（判事樋山廣業著） 公法上の婦女、私法上の婦女、國際上の婦女の三編に分ちて法律上に於ける女子の心得べきことを簡單に說明したものなれば女子の一讀し置くべき必要あるは勿論なるべし（定價五十錢京橋區銀座四元々堂發刊）

女學校

日本女子大學卒業式

記者

日本女子大學第一回卒業式は、今茲四月九日を以て擧行せられぬ、これぞ日本の女子が、始めて大學卒業てふ名擧ある冠を、その頭上に戴きたる最初の日にしあれば、將來女學の愈々發達すると共に、此日は長く記臆せらるべき紀念日なるべし。

旭日旗を交叉したる學校の門前には、空車の轅を列ねて幾臺となく控へたる、來賓の多きことも推量せられて、今日の式の如何に盛大なるかを示せるにも似たり。

玄關には靚裝したる幾十の令孃達左右に分れて、來賓を迎へられ居たるが、此時は早や式の始らんとする頃と覺しく、幾百の男女來賓は打連れて、續々式場に向はれつゝありき、余は名刺を一令孃に渡して其儘式場へと赴きたりしが、見渡せば大學部卒業生百二十名を前列とし、附屬高等女學校卒業生を後列として、教員及び來賓諸氏は、其の左右に居並び、後方には生徒の父兄保證人の席ありて、總員千五百人にも上りたらむと思はれて、さしもに廣き式場内も、猶ほ狹きを感ぜざるを得ざりき。

やがて喨朗たる洋樂の音の、場の一隅より湧き出ると共に、一同起立して、「君が代」は合唱されぬ、次で學監麻生正藏氏の諸般の報告は明瞭に演了せられ次に成瀬校長は、沈着鄭重なる態度を以て、光榮ある卒業證書を、各部の總代人に授與されしが、此時「感謝の譜」は高等女學校卒業生一同によりて歌はれにき。

次に成瀬校長は再び式壇の上にあらはれて、告辭を

述べられしが、其要は本校建設以來茲に三年の歳月を經て、初めて第一回卒業生を出だせしは本校の深く名譽とするところ、而して、諸孃は則ち本校の總領娘なり、其の光榮又大なりといふべし、との意を前置として、卒業生の家庭、社交等に於ける責務の極めて大なると、其の理想を實現するの困難なること等、縷々數萬言を陳べられたるが、其言適切にして、卒業生將來の心得となるべきもの丶みなりしかば、一同みな謹聽して、時間の較々長かりしをも覺えざりき。

校長の告辭了るや、年頃十六七許りと見ゆる端麗なる一女子は式壇の下に進めり、これぞ高等女學校卒業生總代門田駿子孃といふが、謝辭を述ぶるにぞありける、次に大學部卒業生總代として、丹下花子孃の謝辭ありしが、文辭の流麗なるに加へて、聲音恰かも珠を轉がすが如く、師の恩を謝しては、訣別の哀みを叙べ、卒業の榮を喜びては、將來責任の重きを感するなど、讀み去り讀み來りて、愈よ妙境に入り、人をして覺えず、耳を傾けしめ、適れ時代を飾る未來の才媛かなと、最と頼母しき心地せしめぬ。

それより西園寺侯爵の演說あり、言語明快にして、聞くべかりき、續いて千家東京府知事の祝辭代讀、久保田文部大臣の祝詞朗讀あり、了りて大學生一同起つて、「卒業式」の歌を唱ふ、茲に揭ぐるは、則ち其辭なり。

其一

なさけの露のかゝらずは、　この下草の今日の日を、
教への親の御惠みは、　あゝいつの世か今更に。

其二

ふるさと人に父母に、　逢ふ嬉しさの明日よりは、
なれし學びの友どちに、　別れむ事の今さらに。

其三

さらば師の君恙なく、　よさきくおはせ萬代を、
教への庭の花紅葉。　榮ゆく蔭もいや深く。

其四

學びの友よいざゝらば、　別れむ後も諸共に、
うけし教へをしるべにて、　世の浪風は荒くとも。

是にて式全く了りたれば、階上の成績品展覽室へ案

内され、陳列の造花、繪畫、裁縫などを一覽して、運動場に行けば、其處此處に天幕を張られ、生徒の手製にかゝる美事なる洋菓は、其内なる机の上に並べられ、珈琲、紅茶など勸めらるゝまゝ、飲み且つ喫ひながら、場内を眺むれば、今を盛りに咲き揃ふ櫻花の蔭に、今日卒業の榮を擔へる女學士や、將來同じ光榮を負ふべき生徒達の三五隊を爲して、或は漫歩しつ、或は來賓を接待しつゝ、右へ左へと飛交ふ姿の氣高くも、また愛らしくて、圖らず三十分間餘もこゝに止まりにき、やがて校長學監諸氏に挨拶して校門を出で、車を飛ばして歸途に就き、江戸川端を過ぐれば、兩岸に滿開せる櫻花は、夕照に輝きて、恰も今日の式を祝ふが如くなりき、大學部卒業生の氏名は左の如し。

卒業生姓名（姓名の上に○を附したるは撰科修業生）

家政學部卒業生

石井嘉久（埼玉）　茨城てい（北海道）
井上しづ（京都）　石澤信井（北海道）
稻荷靜枝（京都）　井上禮（福岡）

井上秀（兵庫）　出永澄（熊本）　石原千代（愛知）　原その（佐賀）　友近サト（愛媛）　○奥宮加壽（高知）　○小原ちせ（千葉）　和田トク（島根）　片柳とし（東京）　芳田リヨ（奈良）　○玉木直（新潟）　中村常（岡山）　村上マツ（靜岡）　藏田ユキ（山口）　山本福（宮城）　松本美登（熊本）　松山スゞ（鹿兒島）　藤田のぶ（千葉）　小杉きみ（三重）　手塚カネ（栃木）　佐藤伶（千葉）　喜田節（香川）　鹽谷浪路（群馬）

岩田靜（京都）　稻村さと（埼玉）　井村のぶ（茨城）　林ヨネ（栃木）　大浦つろ（京都）　小笠原スエ（長野）　太田朝（長野）　輕部せい（茨城）　金子萩野（福岡）　田崎千代（茨城）　丹下ムメ（鹿兒島）　長澤八重（山形）　○上關とみ（岩手）　工藤眞十（長野）　前田カツ（佐賀）　松浦のぶ（山形）　松崎艮（千葉）　藤林しつ（兵庫）　後藤愛（宮城）　齋藤えな（宮城）　淺野ゆき（東京）　宮崎千代（山形）　平井セン（岡山）

本山　鶴（大阪）
杉野喜代（三重）
須田ちゑ（宮城）

合計　五十五名

國文學部卒業生

○板倉うめ（東京）
飯塚貞子（福島）
今井しづ（岐阜）
岩根みゑ（北海道）
稻葉しん（茨城）
井上タミ（大阪）
橋本八重（東京）
服部さよ（廣島）
服部ます（福島）
畑　幸（大阪）
細谷はま（群馬）
岡田きやう（香川）
大桐彰子（岡山）
大前もと（兵庫）
吉見キヨ（愛媛）
吉村キヨ（廣島）
吉由すな（岩手）
田中とし（東京）
高松田瀬（長野）
田中友惠（愛媛）
丹下　花（鹿兒島）
辻内まん（大阪）
中村貞代（宮城）
中安親子（東京）
中内春惠（高知）
○村上まさ（愛媛）
村上かめ尾（岐阜）
椿宮ナミ（福島）
窪谷さと（茨城）
栗原　照（埼玉）
山下たみ（兵庫）
山田智慧（埼玉）
藥師院たつ江（奈良）
前川ふき（長崎）
松田麻惠（北海道）
藤村初子（東京）
藤沼　留（栃木）
深澤くに（兵庫）

○藤原千代（岡山）
小橋三四（靜岡）
高坂よし（長野）
小林つぎ（福井）
河野まつ（熊本）
明石靜江（兵庫）
青木　龍（栃木）
櫻井文子（東京）
佐藤　葆（千葉）
木下喜久（長野）
木下きくに（山口）
木野村かよ（神奈川）
木村一千代（滋賀）
菊地はじめ（岩手）
淸水マン（愛媛）
廣川なか（新潟）
弘田由己（高知）
平山千重（長野）
瀨野　信（福島）
鈴木壽家（東京）
鈴木きみ（山形）

合計　五十九名

英文學部卒業生

岩井　信（愛知）
野中トミ（佐賀）
松田げん（北海道）
阿部高野（德島）
三宅冬次（山梨）
正田　淑（栃木）

合計　六名

日本女學校卒業式を觀る（四月七日）

一記者

時間は少々後れたれど、折角の御招待を無にするで

もあるまいと、本郷行きの電車に飛乗つて學校の一丁許手前の曲角で下りますと、何となく、近邊の市街が賑やかで、馬車の煙、人車の塵の少からず揚れるのを見ました、千人近い女學生を教育する學校の卒業日の事であるから、招待を受けて參觀する、貴顯紳士や、生徒の父母、兄妹や、さては此の近方の有志者などの後れ馳せに參校するものゝ少なくないことが知られました。

さて校門に入りますと、受付の準備が整うて居て、下足から、外套のお世話までを、うつくしい可愛い孃さん方が、なさつて下さいまして、それから式場へと案内されましたが、式場の大廣間も、中央の生徒席を除くの外は、左右前後みな參列者を以て塡塞されて、殆んど立錐の餘地もない程の有樣で、ヤツトの事に一の空席を探し當て着席することが出來ました、此時は已に卒業證書の授與式は了んで、校長の西澤之助先生が、熱心に演説せられて居る最中でありました、平日ですら、勤儉質朴を以て婦人の最も貴ぶべき事と、敎へて置いた位であるから、況して有史以來未曾有の日露大戰爭の今日にあつては、別して勤儉を重んぜねばならぬ、質朴を主とせねばならぬ、若し此時此際吾が生徒にして、絹布でも着た人があつたなら、決して其まゝに見過ごすことは出來ませんと、案を拍つて堂々辯ぜられましたが、熱心面にあらはれて、繼ぐに涙を以てする程の有樣でありますから、一同アツト感に打たれた樣子が見受られました、惜い事には記者は只だ此時演説の一節を聞いたのみで、全班の高説を承はるの榮を得なかつたのは、實に遺憾に堪へません、それから、來賓土方子爵の祝辭朗讀があつて、次に根本博士の演説は例の支那古代の女敎を基として、婦人の心得となるべき事共を述べられましたが、古稀以上の頽齡でもつて、銕鐵のやうな體格に、雪白の結髪を戴いて、音吐朗々四方に響き渡らん計りの勢ひであるのには、吾々壯者は、兎ても及ばないと感じました、次に職員總代下田義天類氏の祝辭が了むで、卒

業生總代の答辭がありましたが、正面の校長始め左右の來賓又並居る職員に向つて一々恭しく禮儀をして、徐ろに答詞を讀み上げられたる時の態度の落付加減、さては讀方の巧合など中々よく出來ました、次には昨年頃ろ卒業された方の式辭がありました、是れも上出來で、感服致しましたが、兩孃の姓名を伺ひ洩らしたのは殘念であります、次に唱歌がありまして、是れで式は全く終結を告げました。

數百人の生徒は、みな同じ黑木綿の紋服に袴を着けて、一人も異つた服裝をして居られぬのは、如何にも潔よくて見晴れが致しました、何處の學校にいつても、こんなに服裝の揃つて居るのを見たことはありません、これは確かに此校の美風の一つであつて、平生の薰陶如何も察せられまする、願はくは此の美風を何時までも傳へて、他の女學校の手本とも致したいことゝ思ひます、式中は卒業生を始めとし、生徒一同は、起立づめでありましたのは、此校の規律の如何に嚴粛であるかゞ察せられるのでありますが、記者が參列してからでも、一時間近い間でありますから、式の初めからは、少なくも二時間以上であつたと思はれます、此の長い時間を起ちづめとは、聊か氣の毒に考へられるといふ譯は、二列三列以下の左右兩端の來賓に面して居ぬ人達は、少々手足を働かす位のことは出來やうが、前面の一列と、左右兩端の人々は、向ふを見詰めたまゝ、身動きどころか、眼を動かすことすら出來なかつたのは、何んなに、苦しいかゞ察せられます、何れにしても二時間以上の起づめは、纖弱き妙齡の女子に取りて、少しく嚴格過ぎるではありますまいか、今後此點は最少し寛やかにせられたいことゝ存じます。

それから展覽室に入りますと、裁縫や、刺繍や、繪畫までを見事に陳列してありましたが、一番目についたのは、筆跡のすぐれて美事なことで、色紙短冊に認めてあるもの丶中には、よどみなくさら〳〵と書れた巧合など、餘程熟練したものと見へるのが幾個もありました。

休憩室には、中央にビールの樽が据てあつて、其の左右の卓上には生徒手製のサンドイチや、お菓子や、林檎や、ビスケットが、出で居ります、お美くしい上品な令孃達が十人許で、ビールを下さつたり、お菓子の折を下さつたりして、それはそれは御丁寧な待遇で、無作法な男子の來賓が、ビヤホールにでも行た樣に、ビールの御換りなど丶、空いた洋盃を態と差出しますと、その令孃達が、吾れ先きにと直ぐに別な洋盃に、ナミ〳〵とビールを酌むで、それをお盆に載せて、お給仕をせられるので、御手製のサンドイチは云ふまでもなく、ビールまでが一層旨く戴かれました。

女子語學校及寄宿舍

菊池雪子

筆の序でに一寸茲に記して置きたいのは、此間小石川の或女學校に參りまして、寄宿舍參觀を求めましたところが、何方にも御斷はり申して居りますからといふ譯で謝絶致されました、男子なら兎も角、女子の參觀を許されないとは、どうも不思議なことと思ひましたが、全體此の學校は、子妹を有つて居られる父兄方にも、一切參觀を許されないものとすれば、往々差支のことは生じますまいか、何もそんなに究窟にせられずとも、事情の許すかぎりは參觀を許されて、寄宿生活の有樣をも、世に公けにせられた方が、宜しからうと思はれます。

此の學校とは正反對で、築地明石町の廣い通りに向つて大きな煉瓦造りの女子語學校といふ和漢學をはじめ、佛語、英語、獨語を敎へて居るところがございます。

校長及敎員

校長はマダム、サンドミチールといふお方でございまして日本に滯在なさいますこと二十餘年、最も

一の女尼さんの團體の頭に立つてお出になるのでございますが、貞德を誓つて一生を子女の敎育に献げて居られますことは、前々號に御紹介申しました女子佛英和學校の女尼さん方と同じことでございます、佛英和學校のは、白衣の婦人と申て、白いものを頭にも肩にも纏ひ、語學校のは黒衣の婦人と申て、黒い衣を頭より蒙つて一見不活潑のやうでございますが、世を遁れた修道女といたしましては誠に優美なものでございます、佛國婦人二名が佛語を敎へ、英國婦人四名が英語を敎へて居られますが、獨語希望の生徒がありますれば、其國の婦人がお敎なさるさうでございます、又洋琴、繪畫(油繪)も敎授されて居ます、年頃は廿五六歳から五十五六歳迄の方々でございまして、中には伯爵の令嬢もおはすとの事でありますが、修道女となりましては、高貴の方も、普通の人も平等でありまして、殊に謙遜せられて、家柄のよい人も、堅くそれを包み隱して居られる相でございます。

校長の意見

記者はサン、ドミチール校長に面會いたしましたが、記者の參校をお悦び遊ばして、幾年間佛語を學びしかなど、尋ねられました、學生の時代と世に立つて社會の人と交はつて行く時とは、餘程變つて居りませう、世の中は恐いものであります、人はよく目前ではよいやうに云つて置いて、陰に廻はつてわるく云ふことがあります抔と嘆ぜられました、この言によりて校長の御意見は眞實の女子を養成したいと云ふ望にあるのでございませうと、合點いたしました、折柄來客を報ずる鈴の音が遠く響きましたので、校長は室を出で、彼方の客室に赴かれました、それから、

敎室

を拜見致しますと、二百五十名を收容いたされる敎場でございますが、現在の生徒は七十五名の總數でございます、年少の生徒數は至つて僅少でありま

して、同年輩の處女方が多うございます、教場の中は整肅で、規律が嚴正で、教師は一段高い處に教鞭を採つて居られました。

教員

國語教師としては、大和田健樹氏、習字には小野鵞堂氏、日本畫には跡見玉枝氏、高等女學校科程と飜譯の教師として四名の本邦人が居ります、其の内英語のよく出來る方は文部省の教員免許狀を有つて居られる深澤あい子氏といふ方でございます。

專科

專科は國語科、習字科、和洋裁縫科、英語科、佛語科などでございまして、それ〴〵生徒があります。

補習科

國語、漢文の補習科は一ケ年で終り、英語の補習科は三ケ年にて卒業になります。

寄宿舍

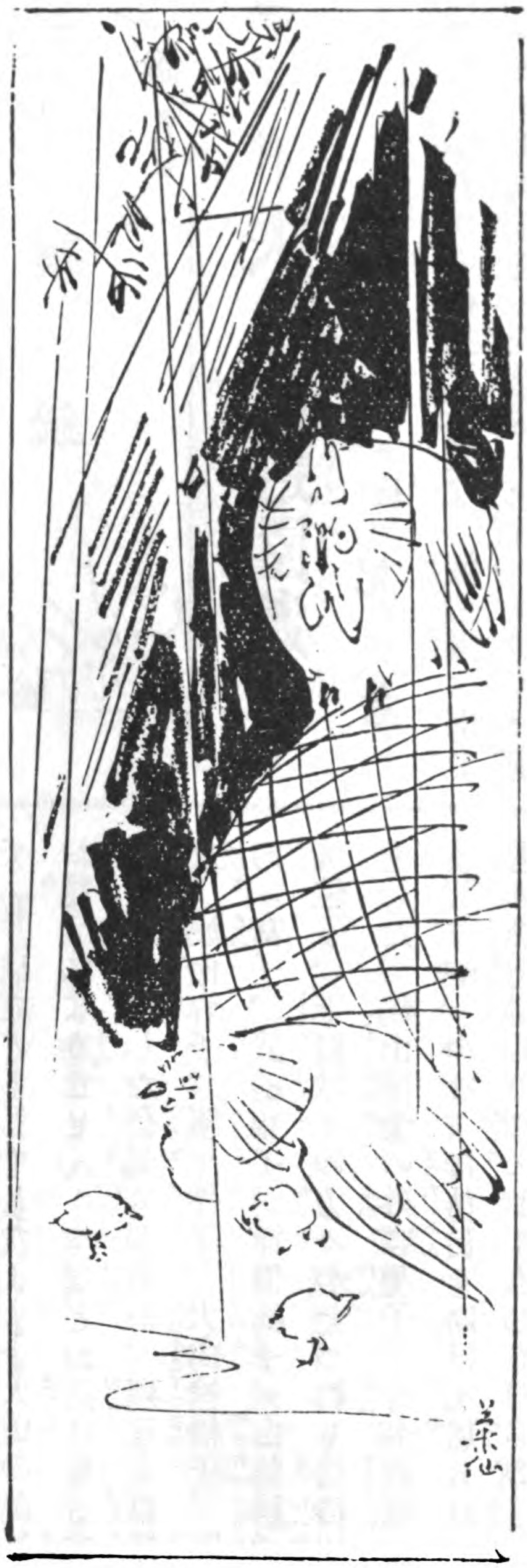
寄宿生は十四五名もありますが、三四名づヽで一室を有つて居ります、其室は疊を敷かれた日本風の室であつて清潔に掃除され、琴など飾り立てヽございました琴、茶、活花、禮式の教師が參りまして教授は當分此室にていたされますさうでございます、又有益な雜誌を取りますことは寄宿生に許されてあります、時事を報ずる新聞も讀むことが自由なのであります。

寄宿舍の規則

冬季は六時、夏季は五時半に起きて、衣服を着代へない前に、室内の掃除をして、七時十五分に食事をはじめて、八時に授業に取り掛り、四時に授業盡く終つて、茶菓を食べ、三十分間遊んで六時半夕餉の時まで、復習や明日の課程を學んで、九時三十分

に寢に就くのでございます。生徒の室に並んで、教員の寢室がございます、また年少の生徒は皆な同じ寢室に休んで、教員が付添うて居られます、但し年長の人でも、寢臺を望むものには、自由にいたさせます。

寢室に花瓶がありましたが、それに彩色を施したのは、本校生徒の手際なさうで、其の外油繪などの作品を賣つて、上り高五百餘圓を赤十字社に恤兵費として寄附されたとのことで、教員方は申すまでもなく、生徒方の心掛まことに感心でございます。深澤孃が勞を取られていろ〳〵記者に紹介なさいましたから深く謝してお別れを致ました。



雜録

マギー夫人歡迎園遊會

一記者

四月廿七日小石川の砲兵工廠裏なる後樂園に催されたるマギー夫人歡迎の園遊會は來會の貴婦人令孃三百五十餘名ありまして盛會でございました、此日朝から濃霧に包まれて居つた空が、ともすれば小雨ふりそぼちて、まことに心もとなうございましたが、晝頃になりますと、雨だけは晴れました、會場に入りますと、鳩山夫人春子、濱尾夫人作子、三輪田眞佐子刀自の方々がお出になつて居て、萬事を指揮して居られました、それから續々發起人の方々が來られて、今朝は降りましたが私は晴れると受合ひましたよ、――會員の方から連りに電話が掛るので私は立どうしでしたよ――大山の奥さんはまだお見えになりません――などお話になる内に、十名ときこえました發起人の方が、殘なく打揃はれました、鳩山春子、濱尾作子、大山捨松子、岡部抵子、高木富子、武田錦子、津田梅子、山脇房子、三輪田眞佐子、下田歌子の方々がいづれも接待掛でございました、鳩山博士の外に男子の方が數名お出になりましたが、やはり接待員を助けて居られました、記者も鳩山婦人の仰によりまして、接待員のお手傳をいたしたのでございます。

園の門前と、門内に卓子一個づゝ置かれまして、門外に於て姓名を帳簿に記し、それから門內、そこに鳩山博士が始終控へて入らつしやいました、同夫人は、輕快に彼方此方を立ち廻つて、時々は此處にお立寄りなされ、一人々々に紀念品をお渡しになりました、銀製の國旗の交叉したものに、裏には歡迎

といふ文字を彫り付けてございました、これが今日の目的、マギー夫人歡迎の意を表はすのでございます、今一品のハンケチには、日露戰爭根據地の地圖を摺り付られたのでありました。

開會の定刻は三時半でございましたが、二時ごろから集まりました夫人令孃方は、紋付を召して、花々しい出で立ちでございました、さながら若い芝生の上に、櫻の花瓣を散らしたやうに、彼方の葉櫻の蔭、浮橋のほとり、池の汀に三々五々隊を組んで、親しい間柄の笑聲、久しぶりでお目にかゝつてねー向ふに入らつしやる風通お召の方はどこの奥さん?、紫の洋服召してる方は鍋島さんの奥さんでせう、近々に京都の赤十字の篤志看護婦人會へお出になるさうです、ー御一緒に入らつしやる、綠の洋服の方はどなた?先生しばらくと下田歌子女史に進んで挨拶に行く方もございまして、女史もなか〳〵おいそがしうございました、後では、お奇麗ですね…お若いことね、あの肥つた方は、三宮夫人です、もう一人の外國婦人は、北島さんの奥さんよ、などさゝやきの聲も大分盛んでありました。

マギー夫人來たる

三時半ともなりますと、やがてマギー夫人は八人の看護婦を伴れて、醫學博士高木兼寛氏と發起の夫人方に導かれてお出なさいました、マギー夫人をはじめ、一行の方は、皆な眞白の看護服を着まして、頭上に白いボンネット(日本の看護婦さんのよりはずつと小形)を戴いて勳賞を三ッ四ッ五ッ六ッと胸に澤山燦めかし、優しく愛嬌のあるおもゝちで、除々に歩を運ばせて、名も高い後樂園の庭内を歩いて參られました姿は、最と淸く、最と氣高くて、記者も暫しは感嘆の情を禁じ得なかたのであります。

夫人は、姿のよい、愛嬌のある、美しい顔の方で入らつしやいます、夫人の肖像と申て新聞に擧げられましたのは、實際よりはよほどきつく出來て居ります、全くはあれよりもずつと美麗な、數倍も優し

い威嚴ある中にも、何んとなく天眞爛熳な性質のやうで入らつしやいます、他の八人の方も、男子を壓倒する樣な勇ましい業をせらるゝには似ず、武骨な樣子はいさゝかもございません、誠にすなほな、にこやかとした方ばかりで、其の中に、浪風すさむ海原を越えて、同情を以て日本國まで渡られました勇氣を隱して居らるゝかと思へば、何となく尊く感じました、マギー夫人の外は、エル、ビ、キング。ミンニー、クック。アデリヤド、マツコレス。エリサベス、クラーツ。メリー、クラツトウヰン。ゼニーブ、ラツセル。ソフイヤ、ニユウエル。アデル、ニーブなどの方々で、マギー夫人はアニタ、ニユーコム、マギーと呼ばれるのでございます、夫人が此度慈善事業として、また我が國民を愛する點に於て、渡來なさいました、その勇氣は勿論感ずべきことでございますが、婦人の好む華美な服裝を擲ち、あでやかな帽子を小さな、ボンネツトに代へて、質素な白衣を召して入らつしやいますのは、中々に人目を引くので、頭髮を幾層高く結んで花を挿み長い裳を後に曳いて、立派な裝束で臨席いたされますよりは、數倍もたふとく思はれました。

挨拶

マギー夫人は、會員が半圓形に、小芝の上に整列いたして居りますところに、小石傳ひに八人の方々と一所に御出なさつて、親しく御挨拶なされました、會員も一同御挨拶をいたし、津田梅子女史が總代になつて夫人と一行の方に、歡迎の意を述べました、此時夫人をはじめ皆さんが、滿足な顏をして居られました。

答辭

マギー夫人は、側に入らつしやる高木博士に、通辯の勞を取られることをお賴みになりまして、つと禮をなさいまして、簡單な答辭を述べられまして、それから米國の男女看護人のことに就いて、話

を始められました、高木博士は非常に英語に達者なお方であつて、一々通辯なさいました、前以てのお斷りには、私が通辯いたしますとき、よく人はあいつは先きで言つた通り云はない、間違つた事を云ふ抔と、お呵をうけるのでありますが、どうも御存知の通り、外國語を直譯して申すと、まづうございますから、私はそれで意譯にいたしますのです、博士はまことに淡泊な愛嬌ある肥つた方で入らつしやいます、マギー夫人のお話を概括て申ますれば、

私は親しく戰塲に出で、負傷者を看護いたしたことはございませんが、政府から撰ばれて、看護婦を指揮いたしたことがございます、又私と同行して此處にお出になつた方は、戰地に出で、實地に試みられた資格のある人々でございます、御國と露國との間に、此度開戰いたされましたごとを聞きまして、私共の同國婦人が、御國に參つて看護を手傳ひたいと願つた者が、六百人もございましたが、其の內より私が同行八人を率ゐることに、政府から命せられましたる次第でございます、私共の國に於いて、看護婦の嚆矢につきまして、少々お話しいたしますが、抑も往時は戰地に赴くに、看護夫を採用しますが、婦人は一人も使用されません、ゆゑに看護する者は、男子に限つて居つたのです、所が看護夫と申せば、皆な無教育連中ばかりでありまして、或る程度以上は役に立ちません、然るに婦人に教育を施して、看護法を學ばせましたところが、男子よりは、遙か高尙な、しかも適當な看護人が出來ましたので、漸々其數が增して、婦人の方が大多數になり、却つて男子を敎育いたすやうになりました、そこで始て婦人が看護に適當であることを承認られて、現にスペイン戰爭の時にも、私が婦人方を率ゐて、從軍いたしたわけでございます、御國の赤十字病院の完備して居りますのは、實に歐米無比でございます、米國は眞似することが上手で、早く開化いたしたのでございますが、御國はまた米國

のうは手に眞似が上手でございますから、ますます著しい進歩を見るでありませうと信んで居ます。

マギー夫人は聲音爽かに辯舌流るゝやうで、まだ止むやうすもございませんでしたが、撮影の都合もございましたので、お話をきり上げられました。

紀念の品

春子夫人は、紀念品をお盆に乘せて、話の終るを待つて居られましたが、やがてお話の終つたとき、先づマギー夫人に小さな桐の小箱と、紙包を上げました、他の婦人方にも同樣上げまして、直に小箱を開いて、其の中から彩色を施した、銀製の日本帝國の國旗を交叉したものを取り出し、マギー夫人と、他の婦人方の胸に付けて上げましたところが、皆さん非常に滿足された樣子でありました。

寫眞

池の邊りに並み立つて、三百五十餘名の婦人方は早くも撮影されました、寫眞師がもうよろしうございますと、一禮して知らせましたところが、口々におやもう取れたんですねと、美しく裝ふた婦人方がゆるやかな春の大空に、燕が飛びかはすやうに、アチラコチラと歩みながら話し合ふところを、早くも活動寫眞の設があつて、撮影に取り掛りました、高木博士は、皆さんどうか圓形に小芝の上をお歩きなすつて……只今寫す活動眞寫は、サンルイの博覽會にやるのでございます、ドクトルマギーはこなたに向ひておあるきなさい、さあゝなたも〳〵と、同行の婦人方をせき立てゝ歩ませました、博士の滑稽に物を仰せられますのには、解頰せない方はございませんので、寫眞の上に却つて一入の光彩を添へられたことゝ存じます、高木夫人も愛嬌ある方で、微笑を湛えて入らつしやいました、種々の方面から數種に寫眞を取りましたが、其の間、始終高木博士は英語でお話になり、又日本語でお話になり動作を緩急になさる巧合が實に面白うございます。

リチャードソン夫人の談話

マギー夫人が同情を以て、日本國に渡來なさいましたと畧同時頃に、英國からはリチャードソン夫人が、參られました、尤も同夫人は個人的好意上お出なさいましたのでございますが、とは云へ一婦人が、萬里の波濤を犯して日本まで參られた勇氣は、まことに感心なものでございます、リチャードソン夫人は、黒い服を付けて居られました、日本の夫人方が大勢集會されたのを見て、喜びの色を表はして居られましたが、何處となく打沈んだところがありました、一寸日本の婦人方に話をしたいと申されまして、高木博士は又通辯の勞を取られました、夫人は恭しく禮を述べまして、



私は此度一人でお國まで參りました理は、私の國（英國）にも戰爭が起りまして、私の夫も戰地に行きましたが、數月前果敢なくも戰場の露と消え失せまして、伜は今尙從軍いたして居ります、大切の夫は失くなります、伜は側に居らず、私は悲しさやる瀨なく、日本と露國と戰端の開かれましたことを聞いて、私は正義のあるお國に、いたく同情を寄せまして、及ばずながら赤十字の業でも、お手傳いたしたいと存じ、遙々海を渡つて參りました次第でございます、お蔭で私の悲哀の心も、漸々薄うなりましたので、一寸皆樣

に御挨拶かた〴〵一言申上ます。

婦人の心は東西同じでございます、リチャードソン夫人の感情極まつたお話には、並居る日本の婦人方は何れも同情の涙を注がれて、互に夫人の身上を私語て居られました、經驗のない記者も夫人の心を忍んで、そゞろ哀れを催しました、夫人はよく佛語をお話になるやうですから、折があれば帝國ホテルに夫人を訪問致したいと存じて居ります、赤十字の篤志看護婦人會にリチャードソン夫人は毎も必ず出席なさいます。

休憩

小舟一つを浮べた池に、土橋が懸けられてあります、其處を來賓に續いて、揃ひも揃うた夫人令孃方が、渡られました、下田歌子女史は手づからお菓子の折を幾重にも高く積んで、持つてお出になつて、集つた方々に一々配當なさいました、除々に小山を登つて、寂しい徑を過ぎつて參りますと、來賓のために天幕を張つた休憩所、會員のために、所々に腰掛臺が備へられて、コーヒー、牛乳、チョコレート、西洋菓子、菓實など隨意に取られる樣に用意してあり、又一方には茶を煎じて、望まれる方に進めて居られました、胸襟を開いた話し聲、笑ひ聲が所々に起つて、誠とに愉快に見えました、鍋島侯爵夫人はお立ちになつて入らつしやいまして、お明きの茶腕を自らお運び遊ばした御謙遜には、實に感じ入りました。

閉會

六時頃常よりも早う闇くなりまして、會員は歸途に就き、マギー夫人と一行の婦人方は、發起の婦人方と語を交へながら、落つる瀧の下を浮き石傳ひに、若葉したゝる樹木の陰を踏みて、白衣の姿を飜へされつゝ歸つて行かれました。

マギー夫人を訪ふ

（口繪參觀）

菊池雪子

マギー夫人は佛語に巧で入らつしやるといふことを聞て居りますから、赤十字社の篤志看護婦人會の時、東郷博士の御紹介を願つて、お目にかゝりましたが、當日出席された方々に對面の急がはしい折の事ですから、簡略のお話のみいたしましたのみで、夫人の家庭、嗜好、米國女學生の生活、日本婦人觀など、委しく承る餘裕がなく、ほんのお近付きだけのことでお別れいたしました。

婦人は、日本の都市の廣い事や、清潔な空氣を充分に呼吸することが出來る事などを語られましたが、記者は更に其の寓居なる眺望佳絶の愛宕館に、一日お訪ねいたしたう思ひまして、電話を以てまづ夫人の在館や否やをぢ尋ね申たところが、十時頃までにお出下されといふお返事がありましたから、急ぎ車を飛ばして出かけまして御濠の邊を參りますと、青柳の下、葉櫻の蔭に、幾百の兵士が並み立つて居るを見ましたときは、あはれ戰地に艱難を甞めて居る將卒方の身上が忍ばれまして、春は來ても花も咲かず、鳥も歌はない修羅場に、冷めたい露の草枕、勇氣勃々として、たゞ勝利の報を公に聞こえたいばかり夢見て居られるであらうなど想つて、女の身の果敢なさを打喞ちて行きます處に、忽ちけたゝましい號外の呼び聲が車をかすめて、影もはや見えなくなりました。それから、

愛宕山

に上りますと都市の過半を眼下に瞰下して、暮れ行く春の潮のゆるやかに打寄せる海原を前に、近くは品川沖、遠くは房總の山を、淡墨に畫かれたやうな絶景に面して得も言はれぬ好風景であります、此の好風景は東雲の白みて、日のさし上るときから、

小判のさゝ波を殘して、紫の雲の中に隱れてしまふまで、マギー夫人方の眺覽に供して居ると思ひますと、何となく一種の感懷を催ふしました。

マギー夫人

客室に一人腰うち掛けて、夫人のお出になるのをお待ち申ましたが、程なく夫人は輕く歩を運ばせて、客室にお出になり、溫雅な挨拶をなされて、近く椅子に寄られました、クレーム色といふ薄茶の上衣に、濃き鐵色の裳をはき、首のあたりを黑い天鵞絨のリボンにて結びて、長く垂れ、髮は前髮を少し出してS卷のやうに結び白魚のやうな左の藥指には、金の結婚の指輪と、いま一つ寶石入のとを、燦めかし、つと左手を机上に翳して、小首を傾け、記者を見入る樣は、愛嬌と親切とが溢れんばかりでございました、眼は精神の鏡と申ますが、夫人の眼光は内心の英氣を表はして、猛き虎も自から近づかんほどの柔和に包まれて、それがため、却て一層光彩を添へ、眉毛は一直線なりに、末が圓うなつて、怜悧の質を示して居り、薄き唇は、二つの花瓣が風に玩ばれたと思ひますときには、金鈴の樣な聲が其間から發し、さてまた儼と結ばれたときには、犯すべからざる威嚴が、自然に備はります、精神といひ、容貌といひ、かゝる美くしいサンパチックの婦人に記者は殆んと始めて遭遇ました、夫人も始から記者の願を何にても聽き容れて下さつたのは、以心傳心とやらの作用ではあるまいかと、少々己惚心が起りました。

夫人の居間

眺め見わかぬ愛宕館の二階、眺望の最も秀でたる處は、夫人の居間と寢室とを兼て用ゐられて居るのでございます、記者は豫て夫人にお尋ねいたしたい數點の事項がございましたから、先づ今日訪問の意を述べたところが、夫人はようこそお尋ね下さいました、種々のお話も致ませうし、又兩親良人などの

寫眞もお目にかけますから、私の居間に入つしやつては如何と、仰せられまして、やがて記者を導いて階を上られました、蝴蝶が翩々風に舞ふやうに、夫人が梯を一歩々々上るごとに、裳の裾は黄金色に飾付きの小さな靴に纏ひまして、實に優美の趣がございました、室の戶が開かれますと、寢臺の側に卓子と、其の周圍に三個の椅子がありました、夫人は記者に椅子を勸めながら、父君母君及び良人の寫眞を取り出してお見せ下さいました。

邸宅

米國なる夫人の邸宅は、廣大にして負郭の閑靜な所にございますさうで、私は建築學を學びまして、自分で建築圖を引いて建てさせた家でございますから、まことに氣に入つて居ります、正面は入口でありまして、內部は斯樣になつて居りますと、今一の寫眞を出してお見せになりながら、この暖爐の左にある車は、昔私共の祖母が、綿糸を紡ぐに用ゐたものでございます、次ぎに懸けてある服裝は、良人と私のとでございます、良人は、印度の事を研究して居られます、この椅子は、印度から持つて參つたのでございます、入口から左の方に見える窓は、私の書齋で、側に小さく見えるのは臺所でございます、二階の右に窓ある所は、良人の書齋、其次は娘の室、端の緣が付いて居りますところは小供と兒守の居る所で、三階は下女室にいたしてあります、と一々寫眞に就て、說明せられました。

室內の庭園

種々の草花を植ゑ附けて、美しき窓も飾られ、天井よりは、珍らしい苔の類が、さながらギルランドのやうに垂れて居ります、夫人はその寫眞を記者にお見せになつて、私は折々趣好を替へて、この庭園を裝置いたしますと、語られました、夫人が美をお愛しなさる心の優しさは、これで明白であつて、遠征萬里の方面から觀察を下して凜々たる男ま

さりの女丈夫とのみ思ふのは、誤つて居ると考へます、歐米婦人が室内の裝飾といひ、服裝といひ、美術思想に富んで居られまするとは、今更申すに及びませんが、マギー夫人の如きは、拔くべからざる凛然とした精神の中に、美的の觀念が頗る盛んである方だと存じます。

夫人の御兩親

お父さんは大學の敎授で入らつしやいます、前文部大臣菊池博士とは友人で入らつしやるとのこと、お母さんは柔和な深切なお方であることは、お寫眞でお見上げ申ました、兩親の宅は近所にございますから、此度私が日本に參つて留守いたしましても、小供の世話監督を承知して呉れましたから、心置きなく渡來いたした次第でございますと、言ひながら、さすがに慈母の情の一村雲が、胸のあたりを掩ひましたやうに御察し申しましたが、さすがはマギー夫人、直にいと快活にお話を續けられました。

マギー博士

良人はサンルイの萬國博覽會の調査に取りかゝつてから、始終多忙で居られます、其れ故夜分遲く歸宅いたすこともございます、私も度々良人と同伴いたして、調査に赴いたことがあります、私はマギー家に嫁して後、醫學を學びました、結婚をするには、國の方では互に知り合つてからいたすのが、習慣でございますから、良人も結婚前に、私のところへ度々參られました、打連れて二人運動にも、芝居見物にも、出かけました、良人は私を愛して居られます、國の夫人方は、八百屋などに買物に、自身で出かけますが、良人は私のさう致すことを好みません、其れ丈の時を他の有益な事に費やすのを望んで居られますから、下女を買物にやりまして、自分は參りはいたしません、私が看護の婦人方を連れて、日本に參りましたことに就て、良人は大層自慢いたして居られます、と何も包みかくさず

語られました風采は、實に天眞爛熳で、天津少女の面影を宿して入らつしやいます、お話は質朴で愛嬌づいて記者は思はず夫人を見上げながら、夫人が日本にお出になつたことを、御主人が御自慢遊ばすは、御尤でございますが、まだ〳〵理由がございます、私の思ひますには、夫人は學者で入らつしやいます、また愛嬌ある方で、其の上に美貌で入らつしやいますから、ムシウル、マギーは夫人をお愛しなさるのでございませう、と無遠慮に申上ると夫人はゆるい微笑を湛へて、ちと頬に紅の潮を漲らせて入らつしやいました。

夫人の學識

夫人は大學を卒業して二十三才で、マギー博士に嫁れました、國語の外獨逸語、佛蘭西語を巧にお話になりますので、時々混ずることがあると仰られました、それに就いて面白い話がございますと、お話しかけになりました、或る時獨逸の人に向つて、或物を指して、これはどういふのですかと、眞面目になつて佛語で尋ねまして、先の人が驚いた樣子を見て、始めて氣が付きましたことがございます、度々どうも佛を獨に混じ、獨を佛に混じますことがございます、又私は語學の外は醫學、幾何學、建築學を好んで修めましたと云はれました。

夫人の勇擧

米西戰爭のとき、看護隊を率ゐて參りましたが、私は看護婦を指揮いたし、其れ〳〵其役を配當いたすので、自分は戰地に臨んで、手づから負傷者を看病いたしたことはございません、連れて參つた他の婦人方は、戰地に赴かれて、實地看護に手を下されますから、經驗ある方々でございまして、兵卒と同じ食物も戴きます、また草の枕で夜を明すことにも馴れて居られるのでございますから、長く日本に居られますが、私は多分三ヶ月も經てば歸國いたすことゝ存んじます、近々皆さんを連れて廣島に赴

きます、朝鮮にも大抵參ります、日本に參りたいと志願いたした看護婦が六百人ございました、其の中私が撰ばれて頭になつて、他の看護婦方を連れて參ることに定まつたのであります、同行の婦人方はみな私を信用して居られますから、私が連れて行つてくれますならば、參りたいと勇んで參られましたので、若し私が行きませぬと申ましたならば、皆さんも參られなかつたのでございます、私は同行の看護婦人を撰ぶのに餘程苦心いたしました、志願者は澤山ございましても、親兄弟を養ふ義務のある人は日本に連れて參りましても、後の累がございまして、家族の生活上にも關係をしますと故、幾分か財産がありまして、相當の生活が出來、家族の系累がなくて、後に報酬など、戴かぬとも宜しい方ばかり連れて參りましたのでございます、と夫人がお話なさいます中に、同行の婦人方は、夫人の室に晉づれて禮をいたして、次の室に參られました、其の内一人は帽子と縮緬のしよいあげを持參なさいまして、黒の鹿の子と小豆色のとを、夫人のお目にかけて、撰擇を求めて居られました、夫人は小豆色をお取りになりましたが、これは帽子の飾に遊ばすのであらうと思ひましたから、日本の品をお好みなさいますかと、お尋ねいたしましたところ、夫人は愛嬌を溢らして、左樣好きでございますと仰せら



れました。

米國女學生の生活

一般に、米國の女子は、六歳に成れば、小學校に通ひ、十四歳で卒業し、それから十八歳まで高等の教育をうけ、二十二歳で大學を卒へるのでございまして、裁縫手藝などは、十二歳から學ばせます、私の娘は當年十四歳になります、二歳になる男の子もございますがこれには守婢を付けて參りました、女學生は年頃になりますと、男子の訪問を受けて、意氣の投合する人と、散歩にも、芝居にも行きなどして、それから結婚をするのでございます、授業時間は九時に始まりまして、四時に終はります、正午まででは、十分位の休息時間がございます、尤もこれは高等女學校以上の學校規定なのでございます。

米國の家庭

通例、朝八時に食事いたして、主人は役所其他の勤め先に出かけ、晝食は自宅の近い者は、家に參つて食事いたしますが、大概は町の飲食店で濟ませまして、六時頃に歸宅して、晩食を喰べて、家内一同寄つて談話し、また運動などをいたします、主人の留守中、主婦は家に居りまして、家具の整理、主人小供の必用品などに注意いたして居ります。

日本婦人と米國婦人との區別

そのお尋ねに答へますのは、些と六ケ敷うございますが、私は日本の婦人方は、極く親切で柔和で入らつしやると存んじます、手前共の國の婦人方は活潑な方でございます。

夫人の渡米心を起された動機

記者はいま一つお尋ねいたしたいことがございましたから、先づ夫人に前以て失禮と思召すなら、どうぞ御免遊ばせ、夫人が御深切にも、日本に此度お出になりたいと思召遊ばしたのは、如何なる動機で御

心を動かされ給ひしか、といふことをお尋ね申すと、夫人は徐ろに口を開いて仰せられますには、米西戰爭の時は、米國一部のみで戰爭いたしたのでありましても、私は看護婦を連れて渡西いたしました、此度お國と露國の戰爭は、一部分に行はれるのではございませんで、日本全國の人民に關することでございますから、同情を以てお手傳に參りました次第でございます、と仰せられました、それから夫人がお見せ下さいました御家族のお寫眞を拜借いたし、又記者にと下さいました夫人の看護服を召した肖像を、大切に戴き、記者のと交換いたすことを約束して、猶種々と珍しいお話を承りまして、夫人がお書き遊ばした雜誌を頂戴いたし、猶夫人が女鑑ができましたらば澤山下さい、米國に送りますからとの事でしたから、悦んで承諾いたし、御暇乞をして歸途に就きました。本號の口繪に出て居ますマギー夫人の御一族及び家屋庭園などは、此時夫人の手づから記者に貸して下さつたのであります。

蒙古の概畧

内蒙古喀喇沁王府内　河原操子

蒙古之位置（分界　廣袤　人口）

蒙古は、支那本部の北方にある大部落で、海に遠い高原です、其地形は東西に廣く、南北に狹く、北緯凡三十七度の甘肅省、衞縣の西南、黄河の北岸より起り、五十二度十分の貝克穆河の北水源に至り、東經凡八十六度の齋桑湖の東部より始まり、百二十七度の呼蘭河と、烏蘇里江の會合點に終つて居ります、其分界、北は阿爾泰山脈を以て露領に接し、南は長城により、支那本部に界し、東は嫩江水域を以て、滿洲に界し、西は甘肅省及び伊犁に接し、其面積は、日本の三四倍ありますが、人口は僅かに東京と大阪を合せた位に過ぎませぬ、畢竟氣候の寒冷なのと、耕作の出來ぬのとで、人間の生活に適せぬ地が多いからでありませう。

地勢

●山脈● 西南より東に亘れる崑崙山脈と、西より北を充たして居る阿爾泰山脈とを以て、全部の地勢を組織し、山勢は概ね西南から東北に向ふて居ります。

●河流● 海に遠いばかりでなく、河流の大なるものが、極めて少う御座ります、其巨川と稱し、舟楫の便ある者は、東部及び西北部にあるのです、其中流域の大なる者は色楞格河（北部の諸水を集め、西伯利亞に入り貝加爾湖に注ぐ）で、克魯倫河（東北流して、西比利亞の境に入り、東流して終に黑龍江に入る）西遼河、喀木河、札克干河等がこれに亞ぐ者です、西遼河は一名西喇木倫といひ、内蒙古中の巨川です、東遼河は一名赫爾蘇河といひ、内蒙古に於て西遼河に亞ぐ者で、右二川は内蒙古の東部で、合して滿洲に入り、遼河と稱し、諸川を合し、南流して牛莊の西を過ぎて、遼東灣に注ぎます。

●湖澤● 河流の小い割に、湖澤に富み、其大なる者は、多くは西北部にあります、即ち青海部に在る青海、科布多にある烏布薩湖、伊克阿拉薩湖、克勒穆思湖、唐努烏梁海旗にある庫蘇克爾湖等、又東部蒙古に於て大なるものは、呼倫湖貝爾諾爾湖等です、貝爾諾爾湖は一名布伊爾湖と稱し、蒙古と滿洲との界に跨れる一大湖で、東北より西南に至る百五六十清里、東西約七八十清里あります、尙東部には小湖なれど、鹹鹽諾爾とて、其湖畔一面に鹽層をなし、盛に鹽を產する者もあります。

●沙漠● 沙漠は殆ど其全土の半分に及び、東部より斜に西南に亘れる中央の土地を占め、海面を拔くこと凡四千尺、東西凡三千四百清里、南北は千二三百清里より、二千清里に及び、地勢は概ね平坦で、四邊天に接し、一望渺漠として際限なし、沙漠の氣候は夏日は炎熱燒くが如し、冬期は沍寒凜烈にして膚を裂くようです、沙漠中に絕えて大樹の生じませんのは、常に大風の多いによりませう、蒙古語で沙漠のことを「マンハ」といひます。

氣候

氣候は、土地が遼濶で、地勢の高低も亦一樣でありませんから、自然不同がありますが、概して寒熱共に酷烈で、空氣は大層乾燥して居ります、土地は一帶に高原で、本部支那より、大層高かう御座りますから、氣候著しく、本部支那で春花爛熳の候、蒙古では川澤堅氷を結むで居る處が多いのです。

物產

前に申ましたやうに、其大半は川も谷も少い沙漠地で、耕作も漁獵も出來ず、大抵牧畜を業として居りますから、羊、駱駝、牛馬及び其等の毛皮の外には物產はあまりありませむ。

風俗

長城附近より興安嶺の間は、漢人種の住むで居ります土地が多く、至る處に村落を設けて、耕作に從事し、或は鑛山を採掘して、生計を營むで居ります、此邊の家屋の構造は、床下に坑を設くる等、總て寒國的に出來て居りますが、外觀は、北京、天津邊の家屋と大差はありません、併し內蒙古の北方から外蒙古に參りますと、皆天幕の內に住むで、游牧して居るのです。

長城の附近の食物は北京邊と異ることがありませんが、遠き方に行きますと、日常の食物は獸肉で、魚鳥肉は汚物として食することが極めて少く、野菜類は少しもありませむ。

衣服は、冬季は一樣に羊皮を製した支那樣の服を着け、夏は、木綿類を着ます、蒙古人の衣服は、一衣萬用で、時としては布巾手拭の代りとして物を拭ひ又は風呂敷の代用として、物を運搬致します、例へば、木炭などを運びますのに、自分の着物の裾に入れてすると申す風です、國の風俗とは申ながらまことに奇態で、若し日本で斯ういふ風に致しましたなら、直に發狂者といはれませうが、清潔といふ考へ

のない蒙古人から見ましたら、何故日本人は、布巾だの、手拭雜巾風呂敷など丶、面倒に區別しておくのであらうと、不思議に思ふ位でせう、そして始めから破れる迄、洗濯をせずに、其まゝ着て居りますから、汚物と塵埃とで、黑色に光つて居ります、其不潔なることは、實に御話外で御座います。頭部は、男子は喇嘛僧を除くの外は、皆支那人の樣に、辮髮を蓄へて居ります、女子の頭髮は、南部北京に近き地方は、滿洲婦人と同じく、長さ一尺余の笄をさしこれに中央から、左右に分けた髮を、巧に卷きつけ、紅、桃色などの、大きな花簪を三四本挿して、奇麗に飾つて居りますが、一般には、中央より左右に垂れ、辮髮となして、之に富者は金銀環を附し、又珊瑚眞珠を飾る者もあります、騎馬は男女共に大層巧で御座ます、盛裝した婦人達の男子と同樣に、駿馬に跨り、疾驅する有樣は、まことに雄壯です、游牧民は一般に懶惰で、自ら奮て事をなす氣力に乏しく、男女の別なく、飲食を善くし、談話を好み人に遇へば先づ新聞の有無、家畜の安否を問ふのです、若し新聞を聞き込むことある時は、道の遠きを厭はず、直に馬に跨り、親戚知己の間をふれまはるのです、例へば某部落へは、他國人が來たとか、かくかくの他國人が、幾人如何樣の物を持ちて、何れの方に向ふたなど丶、其の流布の早いことは、電信にも劣らぬ位です、又蒙古は、安寧を保持すべき機關がありませんから、彼等は自身に保護の策を取らなければなりませむ、彼等の番兵とも頼みますのは、其飼養の犬ですが、蒙古の犬は體格が非常に大きく、毛が厚く、性質頗る猛烈です、一戸に二三匹より、六七匹飼つてあります。

宗教

蒙古人の宗教は、唯一喇嘛教で、現今最も盛に行はれ、男兒三人を有するものは、其内の一人乃至二人を、喇嘛僧になすといふ習慣で、上王公より下野民に至る迄、皆之を崇信し、吉凶禍福之に依賴し、祈

禱醫治等總て喇嘛によつて行はれて居ります、此宗敎は、今の淸朝の祖、康熙帝が、淸國を一統して、蒙古を版圖に入れられた時に、布かれたもので、其宗旨は、妻帶を禁じてありますから、これがために蒙古地方の人口は、年々大層減じて參るさうです。

敎育

蒙古は、其昔世界に大名を轟かした成吉斯汗の出た程の土地でありますが、今は支那の所屬になつて、人民は多くは游牧を專らとし、男女少壯より皆牧畜に從事して居りますから、或一小部を除くの外は、學校などを設けて、子弟を敎育することはありません、彼等は敎育の何物たるを知らず、人智開けず、敎化行はれず、まことに氣の毒なる有樣で御座ます。

道路

蒙古より支那本部に出ますには、總て喜峯口(東)次に古北口、獨石口、張家口(西)の四つによります、

此道路を、康熙三十一年に、各部落の遠近を量り定めましたもので、進貢朝覲皆此道により、北京に參るので御座ります。

米國婚姻事情

(米國婦人の御幣擔ぎ)

うまのかみ譯

一、嫁入日の吉凶

【月曜日】此日に嫁入すれば金持となる、

しろかねも黄金も玉も手に入りて
殘る寶は兒にしあるらし

【火曜日】此日に嫁入すれば健康になる、

すこやかに病なきこそ世の人の
こよなき幸と云ふべかりけれ

【水曜日】此日に嫁入すれば萬事心に叶ふ、

世の中の秋をも知らずもち月の
思ひ足らひてすむぞうれしき

【木曜日】此日に嫁入すれば意地惡き夫にあふ、

思ほえず踏み入る山の山おろし
烈しき人にあふぞうたてき

【金曜日】此日に嫁入すれば損をする事あり、

持ち來にし黄金白金いつしかに
のこり少くなりにけるかな

【土曜日】此日に嫁入すれば天運めぐり來らず、

さりともと思ひしかひもなみだ川
浮む瀬もなくなりやしぬらん

此他基督復活祭前四十日間の悲みの節に嫁入をすれば、必ず後悔することあり。

二、嫁入着物の吉凶

【白　色】嫁入着物は白き着物を撰むべし、

色々に色はあれどもまじりなき
白きが色のもとにしあるべし

【灰　色】灰色の着物にて嫁入すれば遠國に行べし、

打つれて雲井遙に行く雁の
玉づさにだに音づれよ君

【黑　色】黑色の着物にて嫁入すれば、自ら夫の家を去るべし、

今ははやよその垣根とへだつれど
昔すみれの花ぞゆかしき

【赤　色】赤色の着物にて嫁入すれば、自ら此世を厭ふに至る、

うつせみの世を味氣なみぬば玉の
夜見の國邊へ急ぐ君かも

【綠　色】綠色の着物にて嫁入すれば、人目を耻づ、

何すとかさばかり人をへだつらん
其袖垣のいとゞつれなき

【青　色】青色の着物にて嫁入すれば正直なる夫に出會ふ、

如何ばかり嬉しからんといのりけん
詐りのなき世にもすむかな

【眞珠色】此色の着物にて嫁入する人は繁忙の身となる、

打寄する波間にかつく海士をとめ

いとまなき身となりにけるかな

【黄　色】黄色の着物にて嫁入すれば夫に耻づる心起る、

きゝ知らぬ人こそわらめ朝夕に
見つる君だにやさしかるらん

【焦　色】焦色の着物にて嫁入すれば市街地を離る、

人多き都をおきて何すとか
寂しき野らにやど求むらん

【紅梅色】紅梅色の衣にて嫁入すれば沈淪の人となる

かくばかり浮きたる世にも住みながら
沈み入るべく物をこそ思へ

三、附　言

◎前記の日の吉凶と着物の吉凶とは、確なる本文より飜譯しました者で御座います、決て私の作りごとでは御座いません、因て其本文は編輯局まで差上げて置きますから、御望みの方は御覧になつて、然るべく存じます。

◎此本文は米國に於て古くから申し傳へました者で特に第二の着物の吉凶の方は、一篇の流暢誦すべき詩になつて居りますので御座います。

◎文明國なる米國に於て、かゝる御幣かつぎを見る事は、誠に不思議の感を致します、併し飜つて思ひますれば、東京市民は日本國内に於て、最も開化した人民で御座いませう、其開化した人民が、却つて地方の人民よりも、御幣かつぎがひどいでは御座いませぬか。

◎此事に就きましては未だ申上たい事がございますけれど、今は之れだけにして置きます。

五月雨

笠木鴛里

今日もまた、降りや暮さむ五月雨のけしきは、なべての人々、さてもいまはしさ、わびしやと、只一言にすげなうさげすめども、さばかりとは覺えで、なか〳〵に取るふし〳〵の面白きながめも趣味も多か

らんものを、さりとはいとほしゝよ。

夜來の雨の降りつくして、軒端の雫かぞふるばかりになりたる明がた、山里の景色ながめやりたらんはそもいかに、野べの遠かた峰のこなたより、若葉を蹈み巖を越え、長閑に立ちのぼる雲霧の姿は云はずもがな、青葉の蔀山の枕に、夢まだ深き賤が伏家より、一條二條立ち迷ふ炊烟あはれなるに、苗代小田の蛙の聲、またも降り來る雨かと驚かれ、簑笠三つ四つ見えがくれするも、いとをかし、柳のかげ行く小川のながれ、傾きかゝる丸木の橋、さては四邊をめぐる山のたゝずまひなど、最とあはれなり。



庭園の景色また一しほ趣味ぞ多かる、灰色の空よりかげもしどけなく降り來る雨の、木立のあたり優しき歌に餘念なき折から、そよとの風に裾まくられて恥かしげに、なまめかしう、うろ／＼する樣のあどけなさ、又彼の無骨極まる松が枝の小さき葉末ごとに、幾萬となく、すがりては落ち、落ちてはすがり轉々と玉の顔ばせもたげて、睦れ遊ぶ樣は、松も今更ぬれて嬉しきなんど、歌ひ出んかと危ぶまるゝぞかし。

水草清き池の面に烟ぶるが如き薄網張り、小波たてゝ魚を捕へむとする惡戯ものもあれば、慌てゝ軒端を逃げ損じ、雨垂石に頭を打ち碎く哀れのものもあり、いともやさしきは菖蒲石竹なんどの惱める花の顔ばせを、柔かく洗ひ淸むるになむ五月雨の心

もおもひやられて、いみじうあはれ深から羨ましくこそ。

若夫れ小雨瀟々として、燈火暗き寝屋の裡、花橘の香をしめて、昔おぼゆる歩路をたどる手枕に、山杜鵑の二聲ばかりおとづれて、さ夜更けがたに行きもせば、

昔おもふ草のいほりの夜のあめに
　　涙なそへぞ山ほとゝぎす

てふ古き歌人の心地にもなりなむものを、あはれ大方の人心はや。

若葉の露

中川愛氷

雨ひねもす、若葉の色すゞしくなりて、花にうきたち心も、いつしかしづかなる軒の雫、硯にうくれば、何を思ふともなきよしなしごと、文机にのべし白紙の、反古になりゆくも心なのわざならむかし。

雨の日

あめの日のつれ〴〵には、音もしめれど琴をかなでむもよし、爐にかよふ松風をきかむもよし、露ながらの花を手折りて活けむもよし、三十一文字に首をいためむもよし、よしさらば、花と、茶と、歌と、琴とについて、いさゝか筆にいはせむ。

瓶中の花

貧しき人に金を惠まむより、貧しき人のために花を植ゑむに如かず、金はたま〳〵人の心を腐らすることあれど、花に心を穢せし人はあらざるべし。野に咲ける花、山に咲ける花、やれ垣に咲ける花、流れの水に添ふ花、それ〳〵に風情あり、それ〳〵に色あり、それ〳〵に香あり、故に花なければ、世は眞葛ケ原となり終らむのみ。

むかしこの花の一枝を手折りて、佛に供へしやさしき人のこゝろより、花を挿す工夫始まり、花ゆゑに數寄者の心は苦まされて、いろ〳〵の花形を考へ出

すに至り、はては風情さま〲の花を、見るも胸わるき流儀などいで來り、花塚に花のうかばれぬことも多かるべし。

生花とは讀むで字の如く、四季折々の草花を、一瓶の中に樂む藝なり、我が好む花を、我好む振に挿して、我目さへ喜べは、我心さへ滿足すれば、我だけはさし支なし、他人に見せむには、他人の馳走にせむには、花の振に、花の趣に、一工夫あるべきことなり、其工夫より生れたる振といひ、趣といふは、やがて法といふむつかしきものとなり、侚骨の折れたるものを傳といふ、其法といひ、傳といふもの、もと風流の模型なれば、專賣特許などいへる品の、製法などゝは異日の談にして、廣く世間に傳はること、工夫せし人の本意なるべし、然るに斯道を敎ふる人、やゝもすれば其の本意を忘れ、月謝の外には法なく、目錄の外には傳なきが如きは、慨かはしき至りならずや、而して此法といひ、傳といふものも工夫せし人にて、それ〲多少の相違あり、玆に於て流といふことはじまり、あるひは池坊、未生流、遠州流等十餘派の流儀あるに至れり、然れども同じ高根の月を見るらむにも、分けのぼる麓の道は、撰ぶ人に任せむのみ、さわれあまり惡路はたどりたくなきもの也。

生花を敎ふる人、偶には習ふ人も、時代といふことを忘れて、着付は被布に限る如く、花の道具は頭陀袋に入れたき如き風俗あり、それも年老ひたる人ならばまだしも、若き人の見ぐるしきこと云ふばかりなく、かゝる人の手に成りたる振、趣、自然にいやしくなりて、花の天眞を失ふに至るを見る、すべて風流はわざとならぬところにありたく、強ち被布を着ることを、頭陀袋を下げることをあしとのみは云はず、わざ〲乞食の眞似をするに當らぬことを、一言し置くなり。

生花を學ばむ人は、まづ四季の花卉を、瓶に收むべきものと否とをしらべ置き、水のあげやう、枝のためやうを分類して研究し、花の出生を會得して、花

の振に及ぶべし、流儀などゝは其の花形をのみ彼是いへるにて、千篇一律を氣恥しくも思はぬが、宗匠といへるものゝよし。

釜の湯

釜は人の嗜みて喫むものなり、この作法を茶の湯の道といふ、むつかしき理屈はなきこと也、閑靜なる座敷に、行儀よき人の居並びて、炭手前あり、濃茶薄茶の手前あり、菓子の味は甘く、茶の匂ひは芳ばしく、釜には松風の聲あり、炭の燃え崩るゝ音之に和し、心は清み氣は霽る、半日半夜の閑あらむ時は斯る境にてこそ遊ぶべけれ、予はこの上に品行を說かず、禪味を論ぜず、願くは茶を點つる人となれ、茶を喫む人となれ、所謂茶人てふ人間の廢物となるなからむことを。

されど、さゝがにの糸のいぶせさも、物を耐え忍ぶ敎へ種ともなりて、茶道も今は作法の上に貴ばるゝやうになりしは、何よりの事なり、さればふつゝかに荒々しき人も、斯道に遊ばゝをとなしく、物を取扱ふにも見ざまよくなり、又主客の禮節、たとへば夜會に主人手燭を携へ出で、客を迎へ、燭を石上などに置き、禮して退く、客は燭を取つて、庭の木立など見る振して、わざとなく主の歸る道を照らすなどやうの心づかひ、禮の實にかなひて、此意をめぐらさば陰德なるべし、さるに俗流の弊害得がたきを求めて、金錢を費し、或は其の產業ならぬ人も、黠智あれば、これをもて利を得るに及び、心ざまよからずなりゆくもまゝ見ゆ、高貴の家に茶を翫ぶことを禁ずるがあるも、子孫華奢に及ばんことを慴るゝなり、利休の言葉とかや、

　釜一つあれば茶の湯はなるものを
　　よろづの道具このむはかなさ
　釜なくば鍋湯なりともすきたまへ
　　それこそ茶の湯日本一なれ
　かくいへばある道具をも押隱し
　　なきまねをする人もはかなき

よく／＼味ふべきことなりかし。

他は知らず、われは何にまれ物の新らしきを好む、此殊に食の器は新しきに限る、されど古き器を强ち捨つるにも及ばず、歴史の上よりして、持ちし人をなつかしく思ふ情と、今新しき器を古くなれるまで大切にすべしとの心掛よりして、また新しきもの丶みは用ひず、千の利休が淚の柄杓の由緒を聞けば、其の苦心は常に之を用ふる人の心に浮ぶなるべく、かくの如くにして、古き器は貴く、古からねば貴からぬにあらず、よき話こそあれ、ある人茶に遊びて、苔むしたる石の手水鉢を愛し、召仕へる男に、水かへさせけるが、その男、主人の喜べる苔を殘りなく洗ひ捨てたるに、いたく打驚き、かゝる亂暴をいたしてはとうち腹立てしに、男は答へて、さきに此石を見れば、蚯蚓、蜒蚰、蝸牛など苔をよすがに宿りしかば、口をも嗽く手水鉢にと思ひて、能く淸めたるなりと、其の人茲にて思ふやう、彼のいふこと理に當れり、我古びを好めるは僻めりと、これより古器の潔からぬをさとりて、遂に茶道を廢したりと、事あまりに極端にて、茶道を廢するにも當らねど、また味ふべき事ならずや。

さて茶を學ばむ人は、順序よりいへば、水屋の整理茶道具の飾り付、炭の手前、濃茶、薄茶の手前といふが一通り也、然るに敎ふる時は恰もこれを反對に行く也、三年學びて何事を覺えしかと、可笑しきが大方の常といふも過言にあらず。

軒の松風

雨にはしめらずとも、心ひきたゝねば、音もさえぬを、何事のおこれるにかと、胸をさわがするもあれば、糸は古びずとも、折からの爪ざわりに切れたるを、何事をしらするにかと、心おちゐぬごときを、琴はすましたものなり。

我を買ひかぶらせたまふと琴やいはむ、其の音色にて罪をつくらぬは琴なり、されどかなづる人をいかに見むかはとは、立入りたる世話なり。

音樂は人の心を樂ましむるが、第一の功能ともいふべきに、悲しき曲をきゝてうれしかりしと喜ぶも

をかし。
音樂は鳥の聲、虫の音にかへて賞翫し、心を洗ふものなれば、苟も人として、音樂をたしなむほどの風流はほしきものなり。

雨の日に三筋の糸はなまめかし、さらぬ限りはつり合はず、雨一しきり琴の音其の間を縫ひ、さては峰のあらしか、松吹く風か、筧より落つる水のしらべか、ゆかしとは何時の頃より歌ひはじめけむ。

斯る消息をこそ琴には聞かましけれ、さるに朝夕琴の音になづみて、この働きを知れる人々の催しにて成歡驛とか、何とかいひて當時の戰爭を歌ひたるを聞きたり、勇ましからざりしこそ、琴は其の本分を守りたるなれ。



琴の事を歌ひては、どこまでも昔の人の耳は高し、小督の曲、長恨歌などそぐはしゝ、いくさにても、源平の花やかなるある一ふしの如きは差支なけれど喇叭の音に進軍する今のいくさを、琴の糸に歌はせむとは、さてもいたはしや。

花の如き姫君、薙刀取りて戰場に向ふ圖、また凜々しからざるにあらねどそれは昔のこと也。

琴を學ばむ人、これまで聞馴れたるあやしの節を美しきものにかへて、どこまでも、軒の松風、庭のやり水、しづかに清き音をきかするにつとめよ。

三十一文字

『三十一文字並べしはこれ歌になる、これは誰

にも出來べかりけり」とは、所謂歌の名人を罵りたる歌也、今の歌に新派舊派などありて、あたかも漬物の如く、舊きは味くるひ、新しきは胃を損ふ、いづれにしても、口にして健康を害するが多し。

歌は歌ふもの也、歌ひたければこそ、定家卿ほどの歌匠が、百人一首の歌に、そこ〻見ただけの歌としては惡しくもしたるがあるなれ、されど千載の後三歳の幼兒にすら、一讀一誦せらる〻ものとなりたるを思はゞ、調の高き事歌の第一等なるべし、今の所謂舊派の歌人はこれを學ぶ、されど調高からんとして、極めてひく〻、趣向はもとより尋ねるにところなく、恰も骨を忘れし海月の如く、所謂新派の歌人は調は磯節にも及ばず、趣向木に竹を接ぐ如し、以上の固まりたるを今の歌匠とは心細からずや。

歌と俳句とを混同しては話は杜絶なり、まして俳句體にもならず、狂歌としては趣味うすく、蜀山兀たる的散文を三十一字にして、之を歌と思へとは、今の新派の歌人も無理を謂ふもの哉。

山河草木を詠じてさへ斯の如し、況んや詠史に於ておや。

詩にても、歌にても、詠史ほどむつかしきものはあらず、殊に短歌にては一きはむつかしきにや、古來詠史の歌少からざるも、僅に其因緣の地名位をほのめかすのみにて、譬へば一つの歌を、敦盛にも忠度にも流用し得べき、又上杉謙信を詠じて名ある『からぶみの道の奥まで極めけり弓矢にのみはたけき君かは』の歌の如きも、謙信を詠ずる歌として素より差支なきも、軍人にして漢書を讀める人には、誰にも融通するを得べし、か〻る詮鑿をして、始めて詠史の大歌人と仰ぐべきは、故税所敦子刀自なり、今其の歌六つばかりを紹介せむ。

梶原景時

梶の葉のしげり〳〵て星月夜
鎌倉やまぞくらくなりぬる

大江廣元

濁るとも清むとも底のしられぬは

大江の水のこゝろなりけり

楠正儀

吉野山花を見すてぬかりがねの
北に向ひし名こそをしけれ

光武帝

うちかくる浪間のあしにさはらぬや
大うなばらのこゝろなるらむ

韓退之

都へと行く旅ならはふりつもる
雪にも駒はつながざらまし

徐世賓

雲の上にすますなりても世を照す
影はかはらぬ片われの月

世界八景

愛氷生

八景の見立誰に始まりしか、いかなる眼鏡より撰びしかを知らざれども、かの瀟湘八景、我朝の近江八景などは人に知られて、いかめしき詩歌、淡墨の山水畫とともに、塀障にものせられたるが多し、されど日暮の景に取る所多かりしものか、歸帆、暮雪、晩鐘、夕照などのみにて、朝陽の景を撰ばず、殊に耳に訴ふべき晩鐘を景中に數へしは、少し詮鑿家の難ありさうにて、七景は霧にかくれてといふ俳句ます〳〵無理ならず、後人摸擬の弊、その地の眞景に準せず、雁聲を聞かずして落雁と詐り、海なきを歸帆になやみ、無理に數を合せて樂めり、是れ己が箱庭的の美を手本として、强て山容水色の自然美を規せんとするに似たり、またかたはら痛き事ならずやされど我は八景好にて、是迄金澤八景とか、近江八景とか、或は蜻蜓八景、豫州八景、貧乏八景、書生八景とか、詩に歌に既に二十餘篇をものせり、今また友人蘆舟氏に揮毫を乞ひて世界八景を畫にし、之を壁上に貼りしに、三寸の鞋底、天下四海を蹈破するの感あり、既に畫あり豈歌なかるべけんや、と呻

め始めたれど、何を云ふにも鼻の先の奈良の大佛を昨今漸く拜みし位にて、身にしまぬサハラの夕風、心の空にのみ見るヒマラヤの雪、何とよみて天眞に迫るべき、大膽の境を超えて、無鐵砲の寢言、殊に三十一文字の窮屈なるをや、されど能因法師は足戸庭を出でずして、白河關外の秋風を吟じて得色あり、是れ詩人天地の寛なる所か、

東大寺晩鐘

御佛のみ名とゝもにぞひゞくなる
奈良のみ寺のいりあひの鐘

喜望峰夜雨

船いくつ待ちしみさきにかゝれども
月かげくらく雨そゝぐなり

長城秋月

はてもなき砦のうへにかゝりけり
かばねてらしゝ弓はりの月

太平洋歸航

名にも似ぬあら波わけてかへりゆく
船のとまりやうらやすのくに

佐和羅斜照

塚のうへに夕陽のかげも匂ふなり
佐和羅のはらのくれわたるらむ

墨西哥灣晴嵐

島山もさやかに見えて墨西哥の
いり江きよくも風わたるなり

比摩拉暮雪

見わたせば下つ國はら暮はてゝ
雪なほしろしひまらやの山

密悉眦落雁

天の下ふたつだになき大河に
落來るかりもかぎりなからむ



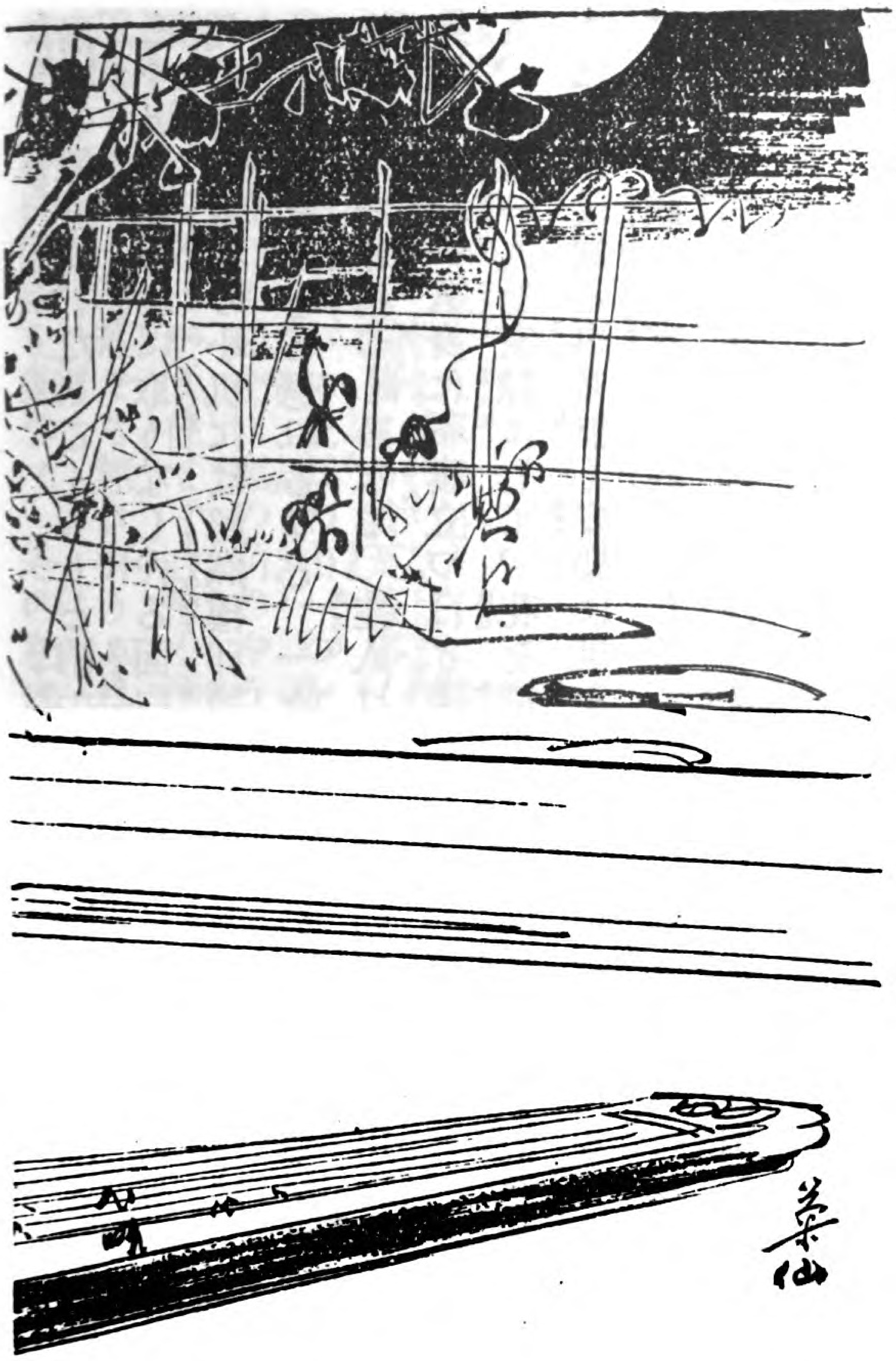


利久箸

幸田露伴

呉竹の根岸の里も人家おひ〳〵に建ちつゞきて、折掛け籬のぞんざいなりしは、いつしか建仁寺籬の見よげなるに換り、藁葺よりは瓦葺多くなりまさり、酒屋豆腐屋へもおさんが遠路を走らで濟むやうにはなりたれど、猶さすがに上野の山一つを隔て丶市中とは物靜かに、馬車の塵埃もおのづと少ければ、浮世の慾にいきり立つて額上に鹿の角のやうな青筋を出さいでもと濟ましかへつた何不足無い人の、朝夕を長閑に、花よ鳥よの噂ばかり仕て、心憎く住みなせるも少からず。外面はわざと皮つきの椎の門柱に片開きの板戸、風雅でも無く洒落でも無き有りふれたる構へを見せながら、内部は何といふ事も無くごみ〳〵と繁く植ゑたる雜樹に眼前を劃つて、その奥は吃驚するほど美麗に纖巧な、ちんまりとした家作り、最明寺といふ突

揚扉の彼方は、たゞこんもりと梢から露でも滴れさうなほどに茶庭のしつとりとして、上野谷中の森つゞきをも眺望の中に取りなしたる面白さ。床には宋人の筆の五言の詩をかけ、青磁の香爐、玉の一輪插、時代のある紫檀の小机には超然樓印譜置かれ、茶壁の隅柱には、ちと仔細らしけれど堆朱の柄の麈尾と胡文明の如意鉤との懸れるなど、一々因縁のつかぬものも無い室の中のありさま、黄金が化けたといふのみにもあらず結構づくめなる、主人は六十餘りの白髯の見事に雪のやうな翁、撰好みがむづかしいので婿取り後れた歟一人身に不審立つほど美しい二十二三の女兒と、たつた二人暮し、臺所使ひ一人、小間使ひ一人、小僮一人を家隷にして、花を惜む春の暮は歌に心を悩ませ、月を愛づる秋の夜は琴に興を遣る其等よりほかには爲る事も無く安樂に世を渡れる風情、傍觀にも人柄好ましく見えぬ。其の離隣りは手廣に住みなしたる或巨富の別莊なりしが、近頃持主變りて、新に移り來しは、これも今の世に聞えたる豪家の若き主人、病氣勝なる身に算盤沙汰もうるさしと弟に店は讓つて終つて、萬般事足る一人住、茶に凝り謠曲に凝り碁に凝つて遊興三昧に日は送れども、おのづから品格よく生れついて色賣る女の媚を買はず待合の沓脱に下駄を踏み込んだことも無いほどの堅人、娘を遣りたし妹を貰つて欲しとの云込みは煩いほどあれど、氣位の高さに其も嫌、これも好かぬと、何の談も纏まらで月日を過し來たるが、此里に移りての第三日目、梅の花の香は籬を隔てず、一樣の春の色は家々に到る頃、偶然隣家の優しき爪音に心の止まりしが、それより後は、夏木立の闇きが中に夕月の光を見る心地して、折々籬越しにちらりと見る彼の娘を床しみ、住居の體裁といひ親子の容態といひ、所望しても嫁に呉れようとは云ふまじけれども、事と品によりては、家は弟に與つた事なれば、我は吾が財産だけ持つて彼家へ入つてもとまで思ひ込めば、忍ぶとすれど色に出て、茶の宗匠の和休といふが早くも見て取り、自分は彼方へも疾から出入りして知れるよしにて、家柄



の惡からぬ事より、人物の好い事、生活の豐なる事、親類の更に無い事まで、好い事づくめの談をするに、知らぬ前でさへ心の惹かれしものを、まして彼の容貌の上に胸の中も優しく、學問は蝦茶仕立でこそ無けれ、源氏伊勢にも一トわたりは渡りて、書は千蔭樣をのび〳〵と美しう書くと聞いては、その懷かしさに堪へかねて、急に然るべき人を賴みて貰ふか行くかいづれにしても緣の絲を結ばずにはと、平生は自己ほど高等なるものは無いやうな顏して、小野小町に言ひかけられても迂濶には返辭もすまじき權高の男も、性質が變つたやうに深くなづみぬ。和休は先方を知れるとはいひながら、餘り身分が無さ過ぎて安つぽし、誰に賴まん彼に賴まんなど、三十近い男だけに一人內々分別に苦む折柄、隣家は裏庭の花壇に主人が自ら培ひ立てたる牡丹の花の今を見頃と咲き誇れるに、招きての客か、それかわらぬか、昨日も三人四人の客あり、今日も四人五人の客ありて、茶のみには濟まず、仕出屋の御膳籠も入りて、臺所も平常よりは賑やかなる樣子なり。思ひある身には何と無く妬きやうなる氣の仕て、おのづから耳に入る



人々の聲音を聞ば、いづれも五十代六十代らしきに、さては皆主翁の友と心も寛しが、其翌日は霧の樣なる小雨音も無く降て風無き天のいと穩かに、若葉の濡色一トしほ美しく、眼馴し我が庭も趣き添はりて見ゆれば、自點の茶を味つて靜かにしめやかなる景色を賞するところへ、隣家より小間使の女の來りて、日も照らず風も吹かず塵鎭めの小雨も却つて宜しきに、見どころは無けれどいさゝかの牡丹の色は今といふ頃に候へば、御閑暇ならば御出下されますやうにとの口上なり。厭でも厭とは云ひがたきところを厭どころかは、進んでも行きたき思ひのすれば、二つ返辭に有り難きよしを答へて、さて着て行くべき衣服を彼か此かと男兒の癖に擇み迷ひたるもをかし。やがて彼方に到れば、世馴れたる主翁の挨拶、つゝしやまかなる娘のとりなし、香煎一つ出されても何となしに嬉しく、裏座敷の椽の障子を開け拂つて見せらるゝ牡丹の花のいろ〳〵の美しさも、生れて初めて見でもするやうに身に染みて尊く思はれ、主翁の髯、娘の髪、室の中の樣子、どれにもこれにも我を折つて感服し盡しゝが、その上に一盞と酒まで出されて、たゞ〳〵恐縮のほか無く悅び入りつ、見れば膳椀の好みといひ向皿の面白さといひ、盃洗も猪口も名の無いものは一つも無きに、噫有り難い、有り難い、此の翁殿は大晴男御ぢや、この娘はまだ斯樣いふ人の手で育つたのなれば、いとしや〳〵天晴吾が女房と定つた、と足の爪端から島田の元結の結びきりまでが氣に入つて、天の我が氣位を空しくせずして、かゝる佳人に値遇するを得せしめたるを私に謝しつゝ、應對慇懃に款待を悅び聞えて盃を執りぬ。酒も美し、椀餘の加減もよし、人物好し、器具好し、座敷好し、時節好し、下物の第一の花は牡丹なり、酌する人は深窓の美人なり、十二分に悅びて一二杯を傾けしが、偶然思ひもかけぬ物の香のしたるに心をつけて見れば、我が手にしたる寸長の杉の利久箸の尖端に色ありて、何かと眼を留めて糺すに、正しく本場の煉海膽の着きて一度乾きたるが今また復りて其の特有の香を放てるなり。

さては昨日一昨日の客の時用ゐたる箸を洗はせて今日また用ゐたるに、洗ひかたの念の入らで錦の裏の穢きを露せるなるべし、費を惜まば塗箸を用ひてこそ、清きを旨とするよりの杉箸を、いかに廉價からねばとて洗はせて二度使はせたる主人の心根見え透きて厭なり、一年の間新しき箸使ひ棄てゝ何程の費ぞ、洗つて二度三度づゝ使ふて何程の儉約ぞ、一膳の價をもて云へば高くとも五厘三厘の事にて、果敢なき物を惜みて人の心持を尚ばざる賤しさ、費を厭はゞ塗箸もよし、庭の隅の萩、籔の寒竹を折りても箸には成るべきを、これにて主翁の一切は知れたり、と今までの賞翫の心引かへて、其より碗の中のものも味無く、まさかに泥臭いやうにも思はねど、厭氣さしては旨からず、座敷の樣子を見ても塗箸で無いだけが憎く、娘のしとやかなる振舞を見ても、怪しい利久箸と誹し心になつて、匆々に家に歸りしが、其後今に至つても男は獨身にて、隣家とは往來もせざるとなり。聞けば白髯の翁は內々娘を遣りたき下意もありしとやら。

（をはり）

大和櫻

（一）

園田紅村

目に靑葉、山杜鵑、初松魚の此頃の季節。年曆には、尚入梅とこそ記してあらねど、吹き來る南の風は、生溫き暖氣を送りつゝ、高く、低く、吹き荒むのである。それに伴ふ雨の脚、早く、遲く、ザア〳〵と芭蕉の葉に注ぐ響、タラ〳〵と軒端を繞る音。

今日も朝未明から降りしきる雨。初めの程は、密雲濛々、大雨盆を覆すが如き有樣であつたが、午から

は、細雨霏々、煙の如く、霞の如く、室内の衣服調度までが水氣一杯。時折り雲間を洩れて來る晃々たる日影、裏店の籬に巣ふ蜘蛛のいに映して、白く、紅く、はた紫に輝くのである。

飯田町二丁目の掘り割り工事から、もちの木阪へ向つた通。とある小路を郵便局の方へ、一寸這入つた九尺二間の裏長屋。標札には山田信夫とあれど、男子の居るけはひも見えぬ。臺所の先で小兒の衣服を洗つて居る二十七八の婦人。これがお千代と云つて、此家の妻。衣服は、洗ひ洒した中形の單衣、肩の邊などは、形も見えぬ程に白くなつて居る。斯く窶れては居るもの丶、中肉中背で、色の白い、恰好の好い。裏店の神さんには、勿體ない位上品な女である。

お千代は、時々、洗ひ掛けた手を止め、鬱陶しい天を仰いで、太い溜息を吐くのである。折柄、ポツ〳〵降り出したのは、豆粒の如な雨。

『呀、まあ、又降つて來た、本統に仕樣がないことねエ』

と喞つ如に呟いた、折りしも、

『母ちやん〳〵』

と泣き乍ら走つて來たのは、子息の仙太郎と云つて、今茲が丁度六歳の腕白盛。追つ駈け來つたのは、餓鬼大將の淸公、手下の同勢、凡そ七八人を、引き連れ、手ん手に、柄物を提げて居る。窮鼠の如く、追つ駈けられた仙太郎は、路次の下溝の板に躓いて、泥濘の中へ打つ倒れた、之を眺めたる一同の追手は、雙手を擧げて。

『萬歳！ザマ見やがれ、探の忰、腰拔武士の子息、手前の如な、弱蟲の露西亞兵はな、此强い日本の兵隊樣にや、敵はねえぞ、コン畜生！』

と口々に罵りつゝ、隊伍を整へ、凱歌を奏して、引き上げた。此光景を目撃たる母お千代の腸は斷れ、胸は破るゝばかり、

『仙や、お前、何したんだね、此麼にまあ、衣服を汚しちや、仕樣がないぢやないかね』

と仙太郎を抱き起し、家へ連れ込んで來た。仙太郎は、唯潸々と泣いて居るばかり。

『たつた一枚しきやない衣服を、仕樣がないね。今一枚のは、お母さん今洗つちまつたから、他に着換は無いんだよ』

仙太郎は、漸く泣き止んだ、右手で眼を擦り乍ら、

『母ちやん、何故皆が、何所も私を、露探の忰だつて虐めるの？ 私何時も打たれて悔いよ』

お千代の目には、悔し涙が一杯である。

『オヽ道理ぢや、尤ぢや、これも皆、云ひ甲斐ないお父樣故………』

と云はんとしたが、急にせき來る涙を押へ。

『何あに、皆が、意地が惡いから、那麼に憎れ口を聽くんだよ』

『でも、何時でも、皆が手前の爺は、腰拔け武士だ、露探だと云んだもの。お父さんは、何處に行つてるの？』

お千代は、熱き涙を一雫、ポロリと仙太郎の顏に注いだ。

『お父さん？ オヽ那れはね、戰爭に行つて居るんだよ』

仙太郎は、嬉しげに頬笑んだ、而して肩を怒らした。

『然？ 戰爭に？ 刀で露西亞つぼうを斬り殺すんだね、母ちやん、私大きくなつたら、戰爭に行くよ』

お千代は、傍なる手拭を取つて、我子の顔を拭いてやつた、而して其手拭で以て、我顔を掩うて居る。胸に充つるは、千萬無量の思ひ。

『オヽ早く大きくなつて、汚れたお父様の名譽を……………イヤ何に、功績をして、金鵄勲章を戴くんだよ』

『ハア、私士官に爲るよ』

お千代は、仙太郎の濡れ衣を解いで、我羽織で其身體をグル〳〵と巻いて膝の上に抱いた。身體が温ると共に、仙太郎は、スヤ〳〵と睡つた、彼の魂は、今天國に遊んで居るのであらう。彼の薔薇の如な頰に少しく笑を湛えた。正しく彼は、日露戰爭を夢みて居るのであろう。赤帽の兵士が喇叭の聲朗らかに、疾風電光の如く、逃げ行く魯西亜兵を追ひ行くのである。然も一層活働の目醒ましきは、我父の信夫！お千代は、愛らしき我子の顔を瞬もせずに打ち戍つた、彼女は、末頼母しき我子の顔を見て、聊か日頃の憂き辛さを減ずるのである。せめて此子が十六七歳にてもあるならば、御國の爲に干戈を採りて、天晴譽を異域の天に上げさせたい者と、又も深き思慮に沈んだのである。壁の破れから窺き込んだ夕日影は、淡紅の光輝を放つて、二人の顔を照して居る。

（二）

『お千代さん、冗談ぢやないよ、今日は、何あつても貰らつて行くよ』

と云ふのは、高利金の横山甚太と云ふ、元はオイ、コラ〳〵的の巡査の果。僅かの俸給を爪の先に火を燈す如にして貯溜たのを貸し附けたのが、抑の起源で、今では、十数萬の身代を作り上げて居るが、斯る

學問修養の乏しき奴輩の常として、人情などは、藥にしたくも無いので、唯强慾非道の一點張、出すことなら舌を出すさへ嫌だが、取ることなら、親の口に這入つた食物でも、引き出さうと云ふ人非人。されば憐れなる貧民は、之に生血を吸はれて斃るゝ者其數を知らず。修羅道の餓鬼も此奴に比ぶれば、幾分か人間に近い位である。だから世人が彼を罵の甚太と呼ぶのも無理ならぬ事である。甚太は其剝げ天窓を撫で乍ら云つた。

『お千代さん何して吳れるんだ、佛の顏も三度だ、さう何時迄も待れるもんぢや無い』

お千代は、雀が鷹に追れた樣な有樣。

『はい、誠に申譯が厶ませぬが、戰爭が始まりましてから、世の中が、不景氣で少しもお錢が取れないもんですから、思はず御失禮を申し上げて居ますが、何卒今暫く御勘辨なすつて……』

『オイ〳〵お千代さん冗談云つちや困るよ、私道樂ぢや金貸しはして居ませんからね、戰爭があらうとあるまいと、そんな事にや構つちや居られないよ、私は一體露西亞の樣な大い國に向つて戰爭などする奴輩が惡いと思ふのぢや、露西亞が滿洲を取らうと、朝鮮を呑まうと、日本で彼是云ふのは、大きなお世話だ。御蔭樣で私などは、大枚二圓と云ふ金を恤兵部に献金させられて、今でも頭痛がする。それだから軍人の遺族から、ドシ〳〵吸ひ取つて、埋め合せなくちやならないんだ。早く、四の五の云はないで、返しておくんなさい。エ、初め五圓の貸金が、既半年經つたから、三十圓と云ふ大金に爲つて居るぢや無いか』

お千代は、餘りの事に憤然としたが、さあらぬ體にもてなして。

『それに又、良人も留守の事で厶いますから……』

と云ひ掛けたが、急に口を噤んで、首を垂れた、甚太は横目でジロリと見て、冷笑ひ。

『何？ 良人が留守？好く人に向つて、そんな事が云へた者だな。お前さんの良人は、逃亡兵士ぢやないか、露西亜と戰爭をする奴も惡いが、それを怖つて逃げる奴は、もつと惡い、それで世間へ顔向けが出來るの？ お千代さん』

お千代の目には、悔し涙が浮んだ、彼女は、寧そ自害でもして、此辱めを免れやうかと思つた位。

『ま、誠に申し譯ムいませんが、何卒お情けで、今少々で勘辨を願ひたうムいます。お母さんも、あゝして、病氣で、臥つて居ますし、それに、こんな子供も居るんでして、何も困りますから……』

強情の甚太郎、何と思つたのか。

『ぢや仕方がない、兎に角、今日は勘辨して上げるから、其代り明日は何あつても、貰つて行くよ、お千代さん！』

と云ひ棄てゝ、出で去つた、お千代は、茫然として其後影を見送つて居るのである、折から頑是なき仙太郎は、

『母ちやん、お錢を二錢頂戴、飴を買ふから……よ！ 頂戴てばサア』

（三）

『お千代！今來たのは、横山さんかい』

お千代の姑お石は、今年が丁度六十五歳、常不斷極く壯健の方であつたが、忰信夫が、豫備下士の身であり乍ら、日露の平和が破れて、師團の動員令が下る凡そ一ケ月位前、突然家出して、其踪跡を晦ました

ので、人から鼠探だの、腰抜武士だのと、評判されるのを苦にして、遂に煩つて、ドット重い病氣の枕に就いたのである、問はれてお千代は唯々、

『はい』

とのみ答へた、否此以上は答へ得ないのである。お石は、さも悔し相に云つた、

『妾斯んな悔しい事はないよ、今はこんなに冷落て居るけれど、山田と云へば、昔は、歴々の旗下、歩く時は、鎗を持せて、數多の供を召し連れた由緒ある家柄、又お前とても其通り、勿體なくも時の將軍樣へお手を取つての御指南番、小幡河内殿の娘。それに那の卑怯未練な悴ゆゑ……』

感極つて姑は、卒倒したのである、お千代は慌てゝ之を介抱するのである。

『お母さん！ こ、これ確かり遊ばせ——お母さん！』

『祖母ちやん、何したの？』

無邪氣なる仙太郎も驚いたのである。

『お母さん、さ水を上げませう、確かり…………お母さん！』

姑は、やつとの事で蘇生したのである。

『お、お千代、妾こんな悔しい事はないよ、こんなお國の大事な時に、卑怯にも逃げ隠れするとは……

……車夫馬丁から、小學校の小供迄が……ね……國家の爲めに、御奉公申す此時に……』

お千代の胸も破るゝばかり。

『お母さん！ 妾も悔しう厶います、あんな云ひ甲斐ない人を良人に持つて、近所の子供は愚、人非人の高利貸にまで恥しめられて…………お母さん、妾はせめて此子が居ないならば、寧そ潔く自害でも

して、汚れた良人の名譽を濯ぎたう厶います』
『オヽ、道理ぢや、尤ぢや、忰が臆病の其爲めに、罪も咎も無い孫の仙太郎までが、人にケナされるかと思へば……悔しう無くてなるものかね！』
末は只諸共泣き伏するのみである。
『母ちやん何故泣くの？』
お千代は、堪り兼ねて、仙太郎を我膝へ抱き上げた。
『仙ちやん〳〵！早く大きく爲つて、御國のお役に立つてお呉れ！』
次第に暮れ行く夕べの空。軒端の瓦斯が幽かに光を放つて居る、戸外は、寂として、簷端を繞る雨垂の音飢に鳴く蛙の聲。

（四）

『横山さん、後生ですから、何卒そんな事を仰しやらずに………』
お千代の眼は、早涙。
『だつてお前さん、人を莫迦にするのも、程があるぢやないか、だから今日は、是非此品を持つて行くから………』
と横山は、眼を逆立てゝ、姑お石に被せてある煎餅の如な薄い三巾蒲團に手を掛けて居る。
『だつて、一枚しきや無い其蒲團を、持つて行かれちや、病人が困りますから……そ………そればつかりは、此通り手を合せて、拜みますから、何卒勘辨して下さい』

『では、借金を返して呉れますか』
『はい、それは』
『それ、ご覽なさい、だから此品を持つて行くと云ふんだ、昨日然云つて置いたぢやありませんか、』
お千代は、泣かうと思つても、既涙も出ないのである、お石も唯涙にくれて居るばかり。
折から格子戸が、ガラ〳〵と開いた、つと這入つて來たのは、三十四五の恰好の好い婦人。仙太郎は、逸早く認めて。
『母ちやん！　他家の叔母さんが』
お千代も横山も共に驚いて振り向いた。婦人は、ご免と會釋し乍ら、座に通つた。
『其三十圓と云ふお金は、失禮でございますが妾がお返し申しますから………』
婦人の口調は、中々莊嚴である。お千代も横山も呆氣に取られて、横山は、覺えず　エー　と云つた。
『どなた樣か存じませぬけれど、難儀な所をお助け下さいまして、何とも御禮の申上樣がムりませぬ、が、遂存じませぬお方から、大枚の金子を戴く譯に參りませぬから、何卒それは、お納め遊ばして……』
と健氣にお千代は、云ひ切つた。打萎れた紅梅が、雪の中で、尚馥郁たる薫香を放つ如な風情。婦人は痛く感動した樣子。彼の横山は、横合から口を出して。
『お千代さん！　お前さんも餘程氣が利かないなあ、人樣の下さると云ふ者なら、何だつても遠慮することはない、………どうせ此金は私が戴くんですから、私にお渡しを願ひます』
と早手に受取つて靴の中へ入れた、婦人は微笑を含んで居たが、お千代は只呆れて居るばかり。
『妾が突然お家へ上りましたに就ては、嘸御不審でムいませうが、實は御良人樣の事をお知らせに參り

ました」

と婦人は、改りたる口上。お千代は身を切らるゝ思ひ。

『えゝ』

と云つたばかりで、差し俯いた。

『本統に豪い御良人をお持ち遊ばして、何より結構で厶ます事ね』

と云つた其口調は、實に皮肉に嘲弄的に、お千代の鼓膜には響くのである。

『はい、何ともお耻かしくて、申上げ様も厶いませぬ』

と云ふのも口の中である。

『實は、妾は師團の參謀長の妻で厶いますが…………良人が鳳凰城から、こちらの山田信夫様の事を委しく申して參りましたから、一寸お知らせに上りました』

お千代はギヨッとした、丸で青天の霹靂である。が最も驚いたのは、姑のお石、今までいと力なげに打ち臥して居たが、伜の意外なる消息と聞いて、急に頭を擡げて、凹んだ眼を瞬つた。

『まあ良人の身の上に關して、どんな事が厶いましたのですか』

とお千代は、せき込んで尋ねた、婦人はいと靜粛に、

『委しい事は、これをご覧なされば、能く了解ります』

取り出したのは一通の封書、お千代は、取る手遅しと披き見た。

『前畧我軍が九連城を攻撃する前夜の事なりき。我歩哨は、一人の支那人を捕へ、之を本營に伴れ來りて取り調べ候處。實に意外の事も候者哉、此支那人と見えしは、實は日本人、然も其心情の美し

さを敷島の大和櫻に比へつべき日本軍人にて、豫備下士山田信夫と云ふ者なりき』
讀み下して、お千代は、覺えず『えゝ』と云つた。
「彼は開戰の凡そ一月前頃より、沖禎助、横川省三の二人と、共に先づ朝鮮に渡り、それより服裝を變じて滿洲に入り、能く其地理を究め、敵情を視察し、遂に馬賊の群に投じて、鐵道を破壞し、兵食を奪ひ、大に敵を惱まし居りしが、遂に敵の捕ふる所となりて、哈爾賓に護送せらるゝ事と爲りき』
お千代は、始めて愁眉を開いた。
「お母さん、良人は、滿洲に行つて働いたんですとさ』
お石は唯嬉し涙にむせびて、唯々『まあ』とのみ云つた。
「然るに山田は、其護送の途中、夥多の金員を護衛兵に賂ひ、遂に釋されて虎口を遁れ、千辛萬苦の末遼陽、奉天より鳳凰、九連を經、鴨綠の流を渡りて、以て我軍に投じたる次第に御座候』
お千代は、覺えず。
「まあ　好かつた！』と云つた
『之が爲め敵情正確に相分り、我作戰を利せし事實に尠少に之れなく、其功績の偉大なる事、彼の西南役に於ける谷村計助に、優るとも劣るまじく候』
お千代は、喜色滿面。
「お母さん了解りましたか』
「あゝ、何て有りがたい事だらうね』
とお石は涙を、ホロ〳〵滴して居る。

『然るに雄々しき山田は、總指揮官を始め、各師團長等の之を止め給ふも肯かず、翌五月一日の戰鬪に加はり、痛はしや、蛤蟆塘の激戰に於て、敵の彈丸に其胸部を貫かれ、あはれ戰塲の露と消え申候』

お千代は、さすが悲哀の情に堪へぬ樣である、

『お母さん！　遂名譽の戰死を遂た想ですね』

と健氣には云ひ切つたが、何となく語氣に力がないのである。

『さうかい、嘸本望だつたらうね』

とお石も悲しげに云つた。

『山田氏の如きは、又と世にあるまじく候。士卒を憐むは、將官の情なり。昔或る將軍は、一兵卒の疽の汁を吸ひしに、聞く者皆奮つて、其人の爲めに死なんことを希ひきとか、去れば軍人の妻たる者は能く主人の心を體せざるべからず、されば此手紙着次第、早速其遺族を訪問して慰められよ』

『まあ、何と云ふ御心切な事で厶いませうね、庇蔭樣で私共も、今日より誠に肩身が廣くなつた樣な心持が致します』

此時戸外を大聲疾呼して過ぐる者がある、

『エ、號外々々、大勝利の號外！』

此れが實に勇しい戰勝國現下の光景である。

◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎

强慾非道の横山も、山田信夫の壯烈を聞いてから、己れの非を悔ひて善心に立ち返り、恤兵部へ五萬圓の金を寄附したとの噂である。

（完）



宮中月次御歌會御兼題（五月五日）

はまゆふ

田中光顯

その昔ひるかへしけるしら旗の
面かけみする須磨の濱木綿

同　伊與子

荒波のよする渚におもしろく
さきこそ匂へはまゆふの花

高崎正風

色も香もけたかき浦の濱おもと
雲井の庭にうつしてしかな

渡邊千秋

百重なす濱木綿よりも皇軍の
勝をかさぬる數やまさらむ

鍋島直大

若緑しけれるかけにはまゆふの
花そ眞白にさきそめにける

本居豊穎

濱ゆふに色おくれしと百重なす
波もよりきて花にさくらん

黒川眞頼

三熊野の浦のはまゆふ百重なす
波のよるにもまかひける哉

津輕承昭

よる波も靜かになりぬ三熊野の
浦の濱木綿さきいてしより

渡邊清

荒波のかへるをよきてほす網の
下にゝほへるはまゆふの花

小畑美稲

はな盛はまへ眞白にみゆるかな

うへ社木綿の名を負ひにけれ
北小路随光

ゆふしてをかけぬとみえて三熊野の
うらの濱木綿花さきにけり
梅溪通治

三熊野の浦のはまゆふ白たへの
花の色より名はおひにけむ
竹屋光昭

蜑人にかりとらせはや紀の海の
はまゆふいまそ盛なりける
前田利鬯

うちよする波に紛ひて三熊野の
うらわに白きはまゆふの花
藤井行德

絶間無くよせくる波と思ふまて
濱木綿さけり三熊野のうら
唐橋在正

波よする渚まてこそしけりけれ
熊野の浦におふるはまゆふ
水野忠敬

百重波うちよするかとみゆる哉
濱木熊さけるみくまのゝ浦
日野西光善

海人の子に問ひて社知れ三熊野の
浦珍らしきはまゆふのはな
千種任子

はまゆふの花の盛をみなからに
すなとりわそふ蜑の少女子
小倉文子

百重波よるかとみえて三熊野の
浦の濱木綿さかりなりけり
姉小路良子

年波のこえけむ數もしられけり
百重かさなる浦のはまゆふ
宮地嚴夫

百重波よるかとみえてふき上の

浦のはまゆふ花さきにけり
坂　正臣

しろ〳〵としらむ砂子路濱木綿の
花さへにこそ咲き續きけれ
近藤久敬

白妙にゝほへる浦のはまゆふは
よせたる波の花かとそ見る
小池道子

汐風の荒ひにたふる濱木綿も
霜かるゝ世は遁れさりけり
藪　兼子

波よする音もすゝしき蚉かやの
庭のはまゆふ今さかりなり
津守好子

しほ風の荒き島にもうつくしき
色こそにほへはまゆふの花
植松有經

やくしほの鹹き世そともしらさらむ
とはに榮ゆる浦のはまゆふ
小出　粲

はまゆふの花さくみれは三熊野の
浦なつかしき夏はきにけり
中村秋香

もろこしの浦の濱木綿重ねても
をりとりぬへくさける花哉
荻原嚴雄

このねぬる朝けの風の海ふけは
潮さきかをるはまゆふの花
小杉榲邨

みくまのゝ浦のはまゆふ色深み
幾重よせくる波かわらぬか
大口鯛二

磯崎にひとむらさける濱木綿を
波かけ衣ほすかとそみし
猪熊夏樹

三熊野の浦のはまゆふとし波も

幾重かさねておひいてぬ亂
千葉胤明

蜑の子かわかめほしたる磯崎の
岩間にさけりはまゆふの花
遠山英一

波の色にさきこそ句へ音にのみ
きゝし熊野の浦のはまゆふ
加藤義清

濱木綿の花おもしろくさきに皃
貝からしけるあまか門へに
鈴木小舟

初かつをうる聲すなりみくまのゝ
浦のはまゆふ今かさくらん
尾崎宍夫

三熊野の黒きいくりに色はえて
さくかけ清しはまゆふの花
須川信行

ところえて幾年波をかさぬらむ
紀の海面にしけるはまゆふ

田家　塙忠雄

浪よけの堤のかげに家見えて
新はりいそ田山羊のこゑする

牡丹

唐めきし寺のおくには石にそふ
蘇鐵のかげに牡丹花さく

友人の出征を送る

ふるへ／＼をたけびふるへ醜ロシヤ
ロシヤの地をくえはらゝかし

偶感

嘲られおとしめられて罵られて
歌人われはうたを恨みす

同

詩の神のさゝやき聞きて歌はなん
そしりあざけり耳に入れすて

歌の庭

正三位子爵 黒田清綱先生撰（代撰菊池武則先生）

親友

天

はらからも及はぬほとのまことある　友こそいとゝしたしかりけれ　本郷区森川町一番地　青木たま子

地

世の中にしたしき友はおほかれと　まことをかたる人そすくなき　陸前栗原郡若柳町　前田河千年子

人

故郷をしのふにつけて戀しきは　振分がみの友にそありける　小石川金富町十番地　辻岡ゆかり子

甲

むすほふる心のうちもうちとけてかたる友こそしたしかりけれ　松山　田村多豆子

なつかしき友と向ひつかたらへはよのうき事もわすれけるかな　三河　きく子

いさゝかも心へたてぬともかきははらからよりも親しかりけり　山口　村上操子

まなきたにあけやすき夜をしたしみの友とかたらひあかしつる哉　大和　栗山倹子

思ふとち汐干かりするたのしさになかきはるひもみしかかりけり　東京　山田婦美子

兄弟にあかしかねたるこゝろをもへたてぬ友とかたりあひつゝ　東京　渡邊初子

打解て問つとはれつおもふとちおもふかきりをかたるたのしさ　東京　渡邊名加子

年ふれとかはらぬ友のたまつさはあひみしはかりうれしかりけり　大和　栗山高子

何事も心のそこをうちあけてともにくらさんともそたのしき　東京　荒井千代子

ふるさとを思につけてこひしきは　ふりわけかみのともにそありける　上總　高石とよ子

たらちねの親にいはれぬことまてもかたらふ友のあるそうれしき　大阪　天野近尾子

そのかみのむかしおもへは今もなほひなあそひせし友そこひしき　東京　岩谷淺子

うきことも嬉しきこともへたてなくかたらふ友そ楽しかりける　東京　三好珍子

竹むまのたつなむすひしともかきはおいにしのちもしたしかりけり　秋田　細矢はる子

肥後　坂本義子

事しあれはたのしきも又かなしきもしたしき友そさきにとひ來る　肥後　佐々有鄰子

へたてなきこゝろの友と朝なゆふなはらからよりもたのもしき哉　朝鮮　小森田輝子

長き日もかたりあかぬはへたてなくむつひあひたる友にそ有ける　稲岡　山川敬子

ちよろつのたからよりなほ貴ときはこゝろ隔てぬ友にそありける　東京　林　艶子

憂きふしも嬉しき節も語りあふ友かきはかりしたしきはなし　山梨　樑　武子

ゆくりなく月のかつらをたなりしも親しき友のたすけなりける　東京　北林仙子

幼なよりむつみ育ちし友とちのへたてぬなかそうれしかりける　松山　山崎国子

黄金にも玉にもましてたふときはへたてぬ中のともにそありける　松山　上原のふ子

乙

はらからのそれにはあらぬ兄弟はこゝろのあへる友にそありける　東京　山田靜子

雁かれのつはさにかけし玉章はわか友人のこせしなるらん　新潟　白井久子

もろともに棹さす友のなかりせはうきよの海はさひしからまし　長野　山本直枝子

玉くしけあけくれあへる友なれはこゝろの底をかたるうれしさ　長野　小泉みつじ子

別れてもこゝろはかりはかよふなりしたしき友の水くきのあと　長野　小泉たつじ子

朝な夕なかたらひにける友垣のことはの花のかくはしきかな　伯耆　樋口鶴子

見渡せは我故郷のあなたより月昇る庭や友の忍はる

友君のわれを愛てくるみこゝろにいろれなき身もあるこゝちして　東京　小泉るい子

朝夕にとひつとはれつ友かきにさしへたてなきこゝろ見えつゝ　長野　山本𣜿子

おのつからしたしみくるゝ友とちそいろれなき身のいろれ成ける　東京　小泉よし子

よしあしを打ちあかしては語り合ふ友こそたのむこかけなりけれ　長野　中村さき子

世のなかに樂しきものはおほけれと古き友とちあふそたのしき　東京　小谷治子

わかれては又あふ事のかたけれは親しきともとなきあかしけり　三河　白井よし子

なか垣のへたてぬともとことゝりてあはすも嬉しかちいくさの曲　土佐　秋月廣江子

あはれさをかたりかはして友垣とわかるゝ空にほしのさゝめき　東京　木村よれ子

數うれはふりわけ髮のむかしよりはたとせ餘りかたりぬるかな　東京　荒井滿武子

中々にわするゝひまもあらはへに思ひそまさる君とわれとは　東京　荒井幾久子

まこゝろをむすひかはせし友かきのへたてぬなかそたのしかりける　東京　荒井あさ子

君ならてたれにか心うちとけんへたてぬなかのともそこひしき　東京　神戸すゑ子

たらちねやはらからたにもあかさゝる親しき友にあかすひめこと　陸前　前田河みさを子

かはらしなまなひの窓よりつらきよのうき橋渡りよみの國まで　下野　井上滋子

　和泉　篠原菫子

磨かれ玉なにゝかはせん情あるわか友ひとそたからなりける
東京 小松常子

交りは水の如くに誠心はそこひ知られす二なきわか友
神奈川 森田はな子

おもふことかたみにかはす友かきの別れて後そまさるこひしさ
三河 永井さい子

まなひ舍のまどに明暮かたらひしともはおいてもしたしかりけり
兵庫 飯島淳子

親にさへいはれとゝもに語るとは過世いかなるゑにしなるらん
東京 岩谷梓子

求むれと魚とみつとのまちらひはまれなりけりなあはれよの中
東京 山本茂子

したしみのこゝろは遠きうみやまを隔てしともにあひてこそしれ
岐阜 吉村せむ子

はらからも及はぬものはへたてなくあそふ學ひのにはのともかき
横須賀 岩橋花子

よの中にうれしきものは父母とへたてぬとものめくみなりけり
埼玉 横田音羽子

友垣のふかき心のさま／＼になすことすへてひとしかりけり
埼玉 横田秋子

おもふとち心のやまのおくにしも親しきみちのあれはなりけり
埼玉 横田やな子

何事もへたてなき身の世の常のふかきは友の心なりけり
石狩 小山かく子

別れきてはや七年の春ゆきぬ友老いたりな文の句長し
秋田 古瀬りく子

友かきのことのはくさのしらつゆはおきてもれてもみまほしきかな
肥後 徳永廣子

はらからにまさりてむつひ親しむは中垣ゆはぬともにそありける
肥後 佐々小琴子

朝夕につくすまことは友とらのともにへたてぬこゝろなりけり
肥後 徳永萬壽子

花の朝月のゆふへもしたふかなこゝろあひたるどもかきのなか
肥後 徳永多瑠子

百千里へたてなからもへたてぬは親しくたのむともにそありける
上野 櫻花子

みいくさにたちいてたまひしわか君は今はいつちに夢をみるらん
備後 木村佐智子

むつきより睦しかりし友とあひて問ひつとはれつ夜をあかしけり
秋田 伊東よし子

水ならてとひこむ人のなきいほもいとはてきつる友のまこゝろ
三河 しづ子

知る知らぬみちひき合ひて嬉しきはしたしき友の中にそありける
福井 平田そう子

古里のしたしきとものたまつさはひらくもおそき心地こそすれ
肥後 千々波橘子

うきふしも嬉しきふしもくれたけのつゑとたのむは友にそありける
横須賀 岩橋花子

よの中にうれしきものは父母とへたてぬとものなさけなりけり
愛媛 高橋藤子

よそなから心ひとつにたすけあひ憂き事わかつ友そうれしき
静岡 竹内みつ子

こゝろあふ友の都にましせまは只其ちへとこゝろおかる
東京 海老原信子

たらちれの親はらからにまさるともおとらまりけりこゝろ合の友
岡山 ふるた子

諸ともにこゝろあかしてかたりあふ友のまことの頼もしきかな
大阪 黒田代音子

[illegible]ちさとをしきたもとはわかつともおなしくも井の月やながめん
東京　松本嶋松子

親にさへかたらぬことをのこりなくたのむは友の中にそありける
大阪　池田英子

隔つれはたえてなつかします鏡くもらぬ便りきくそうれしき
東京　留　意子

うき事もたのしきふしも諸ともになくさめかたる友そしたしき
山梨　標　武子

月にくも花にあらしはあれはとて君とわれとはすゑかはらしな
松山　秀子

うきにつけ嬉しきにつけかたりあふ親しき友にしくものそなき
廣島　山香てる子

貧にやせ病にやせしこのゆふへなほ訪ひきますしたしのはわ友
東京　梅津せつ子

月の夜にはなのあしたにことよせてたのしきものはたまあへる友
茨城　細谷波子

かすかのゝ風にたもとをまかせつゝわかなつみにし友そこひしき
東京　椎野秀子

かたらはん言はもなきにけふもまた隔てぬなかの友そまたるゝ
東京　敷島うた子

月花を見るたにさひしわかとも、わか如われをおもふとおもへは
東京　清水派流美子

はらからに明しかれたる事すらもたかひに語るとものうれしさ
東京　篠田すゞしろ子

追　加

まこゝろを互にゆひしともかきのへたてぬ中そたのしかりける
熊本　日高かす子

かはらしとこゝろにゆひし友垣のへたてなきこそ嬉しかりけれ
熊本　田代綾子

友といふ友はあれともはらからにまさりてむつむ友はこのとも
熊本　田代鶴子

はらからのそれにもまして親しきは心へたてぬ友にぞありける
熊本　猪原みさを子

たからてふ寶はおほき世にしあれと親しき友にますものはなし
大阪　桝田益子

月花にあそふはかりはなにかせんふかき情けのなからましかは
茨城　鈴木ふみ子

へたてなき友ありてこそ世のうみのあらき波路もしのきゆくなれ
福岡　中島武子

雪螢おなしまとにてまなひてし友はおいてもしたはしきかな
伊豫　吉冨貞子

うきふしもたのしきこともかたらひて竹馬の友そたからなりける
長野　岡田千穂子

心からとけて結ひしともかきの親はらからにかはらさりけり
津　榊田みよし子

よき事もあしきもともに語らひてへたて心のなきそうれしき
豐橋　服部蔦子

花鳥をめつるこゝろもひとしくてけにしたしきはうたの友なり
東京　山口こと子

たらちれも其はらからのそれよりも慕しき友そたのしまれぬる
東京　林　環子

うらはへて涙にむせふときにこそ親しき友のまことをそしる
長野　富田眞子

うきふしもたのしきふしも打あけて語るそ友のまことなりける
東京　高橋しふ子

月花にまして樂しくおほゆるは親しき友とかたるなりけり
北海道　中西くろ子

うれしきにまたかなしきにしのぶかな交りふかく契りてし友

郭公

天

わしひきの山河堤朝ゆけは
うの花かくれなく郭公
東京京橋区釆女町　森　まさ子

地

福井市佐佳枝中町　平田そう子
一聲を月にのこしてほとゝきす
いつくの里になきて行らん

人

長野縣北佐久郡南御牧村　小泉みつ子
ひらさめの晴れゆく空の月かけに
はつ音さやけきほとゝきすかな

甲

東京　辻岡ゆかり子
遠征の靈をしのひてつく〳〵と物おもふ夜になく時鳥
山形　香澄露子
たちはなのかをるあたりをよもすからすきかてになく時鳥かな
大和　栗山高子
夜ふかくもひとこゑもらすほとゝきすゆめにきゝたるこゝちこそすれ
東京　山田靜子
一聲はそらにのこしてほとゝきすゆくゑもしらすなりにけるかな
長野　山本直枝子
きのふ聞し聲なりなから今朝はまた耳あたらしきほとゝきすかな
朝鮮　小森田輝子

一聲を雲にのこしてほとゝきすゆくゑもみえぬさみたれのそら　肥後　佐々有鄰子
五月やみくらまの山のほとゝきすみやこの空をかけてなくなり　肥後　千知波橘子
ほとゝきすおのか五月のそらはれてこゑもさやかになきわたるなり　備後　木村佐智子
三日月のほのめく空の雲間より一聲もらす山ほとゝきす　東京　荒井満武子

乙

さみたれもやう〳〵晴しくも間より月もろともにほときすなく　東京　荒井幾久子
おほろ夜に待あかしたるあけの月いつくの空かほとゝきすなく　東京　荒井千代子
さみたれのはれしこよひは月さえて夢かうつゝかなくほとゝきす　東京　荒井こう子
いそきつゝすきてゆくらん郭公いま一とこゑもきかまほしさに　京東　荒井あさ子
さみたれの雲間もいつしか霽そめてはつねゆかしくなくほとゝきす　東京　神戸すゑ子
いさこゝにとゝめてきかんまつちやまはつねうれしきやま郭公　東京　神戸きく子
橘ののきはにきなくほとゝきすくもゐにたかくなきすてゝゆく　宮城　前田河千年子
郭公なくこゑきけはみいくさのかちに入りぬるわか世をそおもふ　下野　井上滋子
ほとゝきす庵にうれしきひとこゑはうの花かきのゆきに消えゆく　和泉　福原董子
夕つき夜さすや岡へのやまゝつにほのかになのる初ほとゝきす　呉　和住千鶴子
月かけはかをる若葉のひまもれてほのかにきこゆ山ほとゝきす

高野山すきのあなはのうへにきてやまほとゝきすなかぬ夜もなし
大和 栗山俊子

我せこかいくさのさためいかならんこよひの月に鳴ほとゝきす
新潟 白井久子

いつ方をさしてゆくらんほとゝきす闇の雲路をなきわたるなり
神奈川 森田はな子

夜をかされまつとはしらて郭公いつこの里になきかはすらむ
東京 村上美千代子

ほとゝきすしのひかれてや靖國の神かきちかくなきわたるなり
東京 渡邊㓛子

すみ染のゆふへをくらき我やとをなきてすきゆく山ほとゝきす
東京 渡邊名加子

なか〱にまてはやなかぬ郭公まどろむゆめの中やすきけむ
東京 山田婦美子

あり〱となき父君をみしゆめのさめつる夜半にほとゝきすなく
播磨 藤澤秀子

やまてらの墓はらつきゝひはおちて夕鐘ほそくほとゝきすなく
長野 上野よし子

今宵こそ明とも待ため郭公幾夜あへなく我れや歸らし
伯耆 樋口つる子

ゆかしさにしらす〱もきにけるを鳴れ止むるほとゝきす哉
東京 小泉よし子

さみたれの空もいつこか晴わたり雲井はろかに鳴く郭公
長野 小泉たつじ子

我いほはやまにむかへる窓もちてたえす聞なるほとゝきすかな
長野 山本基子

きく度にとよみにし君はありにきを初れもきかすやまほとゝきす
東京 小泉ろい子

（上原のふ子の歌に続く）

松山 上原のふ子

山にのみ常はこもれるほとゝきすこゑのさつきは庭にすまなむ
山口 村上操子

繋きけはうれしきものを郭公いつよりまつをうらみそめけむ
松山 田村多豆子

ほとゝきすまちてきく夜の嬉しさは玉に聲あるこゝちこそすれ
東京 山本茂子

もろこしの空にしなのれほとゝきすかちつゝけたるみ軍いはひて
大阪 天野近尾子

ほとゝきす鳴ゆくかたをなかむれは月ものそきぬ森のこなたに
横須賀 岩橋花子

さみたるゝこよひいつこに宿すらんよ只なくなり山ほとゝきす
兵庫 飯島淳子

ひと聲はなかなかつらしほとゝきすこゑの行末いつこなるらん
東京 岩谷梓子

玉くしけあくろもまたて箱根路やせきのとすくる山ほとゝきす
東京 岩谷淺子

一聲はやまひこかはたほとゝきすまくらの山になきてゆくなり
東京 青木たま子

よひ〱にまちわひにけろあかつきのゆめちになくか山ほとゝきす
埼玉 横田晉羽子

時鳥去年の此ころ鳴ぬるをことしの卯月いかにしてまし
埼玉 横田やな子

時鳥鳴しはいつこ曉のゆめのうちにも夢心ちして
石狩 小山がく子

かとてする君を忍ふか時鳥目にこそ見えれ一聲泣きぬ
東京 三好珍子

まとあけて新ふみうりを待よはの空にひとこゑなくほとゝす
肥後 德永萬壽子

一聲のさたかならぬは立はなのかをりにむせふやまほとゝきす

夕まくれつましたふらん遠近にこゑさみたる、やまほと、ぎす
肥後　徳永多瑠子

さらてたに青葉小くらきわか庭を聲さやけくもなくほと、ぎす
肥後　徳永廣子

立花のかけふみならす風ひとのたもとにかよふやまほと、ぎす
肥後　佐々小學子

月にうらみ雨にかこちてほと、ぎすうれしの森にこよひなくなり
三河　しづ子

ほと、ぎす雲間にさゆる月かけをしたひてそとふやまもとのさと
秋田　伊東よし子

あり明の月かけいと、うすらきぬ山ほと、ぎす今かなくらむ
熊野　樋口はつ子

さみたる、今宵いつこに宿るらんよた、なくなりやまほと、ぎす
横須賀　岩橋花子

陰とめてしけみの中のほと、ぎす聲はあをはにやとささりけり
播磨　本多宣子

そらみ、かかけはあらすて時鳥あめこほれ來ぬゆふくれあはれ
よみ人知らず

ふりてやみ晴れてまたふるあめのまのあはけき月に鳴くほと、ぎす
土佐　秋月廣江子

きくたひにいよいよあはれそはりけり啼音露けき山ほと、ぎす
肥後　岡山登壽子

軒ちかき若葉に來啼ほと、ぎすきくもす、しきゆふつきのそら
肥後　秋吉輝尾子

まつあをきあかしの浦に雨はれて虹さすあたりほと、ぎすなく
三河　白井よし子

山烟の夢の秋風身にしみてかへるゆふへになく時鳥
埼玉　横田秋子

東京　小谷治子

まちあかす夜半そをほけれほと、ぎす今宵はなのれしのひれの聲
陸前　前田河みさを子

更くるまて文のはやしをわくゆけはやみをもてらす山ほと、ぎす
長野　中村佐喜子

咲きにほふ花たちはなのほと、ぎす音さへかをりてなくそなかしき
東京　三浦せい子

山はたのからくれなゐのふり出て雨になくなりはつほと、ぎす
福岡　山川敬子

卯の花のつゆにやとりし月かけをすきかてになく山ほと、ぎす
岡山　ふるた子

なか聲にたもとしほらん人おほしこ年はかりはしのひれになけ
東京　海老原信子

きかむとも思ひもよらぬ此ゆふへ我宿ちかくなくほと、ぎす
廣島　富樫てるよ子

ほと、ぎすまつよ久しくなりぬれとまたひと聲の音つれもなし
郁子

夏の夜のまくらになのる郭公た、一聲のめつらしきかな
静岡　竹内みつ子

村雲にすかたはそれと見えれともこゑはさやかに鳴ほと、ぎす
山梨　標武子

一聲はゆめかうつ、かしらくものたえまにきゆる山ほと、ぎす
東京　薫子

むすほる、思ひになやむ雨のよるやまもと遠くほと、ぎすなく
東京　北林仙子

夏ふかきあをはの山のほと、ぎす聲もさやかにおちかへりなく
松山　すみれ子

ほと、ぎすほのかに名のる聲すなりまつちのやまの曉のそら
松山　匡子

もの思ふ身にはあられとほと、ぎすなけは哀れにおもほゆる哉

松山 山崎秀子

眠もあはて亡き人しのふ暁になきて過るよやまほとゝきす
愛知 藤村一子

ほとゝきすいま一聲をきかましとあふけは月はくもゐはるかに
山梨 標武子

ゐなかやのともしひきえて降しきる雨に哀れやほとゝきすなく
下毛 井上なほ子

わかむらはたゝひとこゑにすき行ぬいまたか里の初ほとゝきす
東京 金原玉城子

たまくしけ明方ちかくなりぬらんふた聲三こゑなくほとゝきす
東京 高頁子

横雲の明わたりゆくおほむらにひとこゑたかくなくほとゝきす
東京 高留意子

たちはなの花ちるさとの夕くれにこゑもかなりて啼ほとゝきす
東京 松本松子

ほとゝきすあかつきに鳴くひと聲は夢かうつゝかさみたれのそら
東京 河合象子

ふりいてゝ今そなくなるほとゝきす初ねの里のむらさめのそら
博多 渡邉某女

よ深きにあつまちにたつ兄をおくり船まつそらにほとゝきすなく
東京 三坂鏡子

たちはなのかを慕てやほとゝきす日毎にきなくきかくれの宿
東京 田中とし子

あねいもとことのしらへに興そへぬ空晴れやかになくほとゝきす
東京 大枝庸子

みしかよにね覺て聞はかつらきや高まのよそになくほとゝきす
大阪 黒田代音子

夏きぬとくもゐになのるほとゝきすきくそうれしき葉櫻のかけ
横濱 中澤かしよ子

久かたのくもゐになのる郭公かけは見えねとこゑのきこゆる
東京 椎野秀子

ひと聲のゆくえやいつこほとゝきすたゝ月かけのまつに殘れる
出雲 高橋依子

みやひをのけふのまとゐにほとゝきす一聲をたにきかせてしかな
水戸 細谷波留子

ほとゝきすむなしくひとよ明しけり今ひとこゑのきかほしまさに
茨城 細谷やす子

人はみなかなしといへとなかこゑをうれしと聞けはわかやとになけ
東京 林艶子

うの花の香りこほるゝこの夕へ山ほとゝきすつきになくなり
東京 敷島うた子

ほとゝきすさやけき夜半の一聲はいくその人のゆめにかよへる
東京 清水派流美子

はるさめをしはし松まの木たちよりなきてすき行く山ほとゝきす
長野 岡田千穗子

追加

ほとゝきすたかくなのりし一こゑにさむるも嬉しあかつきのゆめ
東京 山口こと子

此ころは老のみゝにも聞えけりしのふか岡になくほとゝきす
東京 林環子

小夜更けてふみ讀む窓におもほえす聞くもうれしきほとゝきす哉
東京 大江春子

さみたれにうみしこゝろも晴る迄うれしくも鳴山ほとゝきす
津 神田みよし子

聞けは又あはれもよふすものなから初音またるゝほとゝきすかな
三河 河合ぬひ子

わかやとの柳にかゝるみか月のかけもほのかに鳴ほとゝきす
東京 篠田久子

夜をこめて待乳の山のほとゝきすまちしかひあるあけほのゝ聲

東京　篠田すゝしろ子

まちわひて今はとねぬるまくら邊に夢かあらぬか鳴ほとゝきす　熊本　田代艷子

言の葉の多きはうしとほとゝきすたゝ一聲をもらすなるらん　熊本　田代綾子

有明のつきかたふきぬやまのはにひと聲なのるほとゝきすかな　熊本　日高かず子

一聲のさためはあらしなちかへりなちかへりなけ山ほとゝきす　熊本　猪原みさを子

世のうさを白雲ふかき山里にすめはそはやくきく時鳥　大阪　桝田鎰子

我かさとの森の若葉はしけりあひやまほとゝきすなかすも有かな　伊豫　吉良貞子

あて人のさらせる布かうの花のかきれさやかになくほとゝきす

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

藤花を贈る詞

天

にくき雨に侍らずや、かく降りつゞきては今日もまた御いでの程覺束なうといとせめて口惜しう候かな、かくてはかの藤の花もあたら近きうちにあせ散らんを、かばかり美はしう咲きそろひしさまを、一度も御歌袋にのこされずば、花もいかばかり殘りをしからめと、うつし心もなくて直ちにおり立ちわけてながき二房を撰びて御贈りまゐらす、ぬれつゝ折りし心づくし思しやり給はらば、この御かへしには例の御妙吟にこの寫生畫こそねがはしう候、よく深しとな笑はせ給ひぞ。

わなかして

土佐香陽立田邑　秋月廣江子

地

わが庭にさきたる藤の花、二房三房おくりまゐらす、行春を惜む折から、佐保姫のうしろ髪とみらるゝも可笑しや、もし、文机のよそほひともならば、望の外のさいはひになんはべる。

新潟市上大川前通七番町　白井久子

人

肥後國菊池郡隈府町　東　小夜子

胡蝶の夢のいまださめぬまに。花もいつしか散はてゝ。さびしさやる方なく。若葉のかげをうちながめ。すぞろ春の行へを思はれけるをりしも。池の邊の松が枝にかゝりてさきにほへる。紫の色香ゆかしき藤波の。水面にうつりていとゞうるはしく。日ごろ人にへり下り。つゝしみの心ふかきは。世に高きほまれを得るからに藤花にくらべて殊更に。ゆかしく思はれける。かゝるをむげに過さんも心もとなしとて。かねて心あへる友と。藤見の宴をなんひらきける。されど親しき君のおはさゞりしは。いとゞあかぬ思のせられて口惜きことよとかこちしが。御母君の御不快とて今日のむしろにくはゝりたまふことのかなはせざりしを。せめては今日の面かげのみにもと。兩三枝まゐらせぬ。あはれ病み給へる。御母君ともろ共にめで給はば。こよなううれしかるべきことにこそ。

梅雨中日記の一節

天

吳市二川町四丁目二百二十八番地武智方　和住千鶴子

今日もまだ五月雨降り續きぬ。軒の玉水音ましていふせさいはんかたなし。手にせし業もうみはてゝ。例の物の本など取り出でつ。をやみなき空のいみじう暗うなりにければ。障子あけ立ち出れば。外山は朧に打烟り。翠黛薄くけはひせし遠山の頂のみほの見え。庭もせに梢の若葉茂りあひ。折はへきなく時鳥に葉末の露ぞ玉と散る。卯の花の下枝は波の下草とぞなりぬ。あかず眺むる折しも郵便の一聲手に取りあへず見れば。ことさへぐ。からの海原遠き沖つべよりの玉章にぞありき。みもてゆく軍人のたゞならぬ苦心思ひやりては落つる雫の降る雨のそれにも增て。いと悲し。日の本の皇御國は四つの時。風に雨に時をえて。をり〳〵此眺めをかしなんど語らふめれど。古里遠き外國に君の爲國の爲命を捨て向ふつはものゝ

身をし思へば怠りし身の、いと、心苦しうなん。いざや勉めて此人々に國民の赤き心を表さんと又も手にする靴下の糸。かにかくと思ひし隙にいつしか日影傾きぬ。さつき闇の夜はさらなり、風ふかば雨降らば、彼の人々の上にのみ思ひは走せて短夜に結ぶ夢さへ圓かならず。今宵は一しほ哀れまさりぬ。あゝ征衣の袖五月雨にうるほひけむ。

地

麴町三番町八十三　石川薫子

六月十日雨　五月雨の幾日も降り暮して只文の數々繰返し居ればにや、何となく世に遠ざかる心地ぞせらる、午後より中野、箕浦其他來客多くして今日も亦あたら一日を暮しぬ。

六月十一日雨　昨日の雨未だ晴れず益々降りしきりぬ、旱天の雨は更なり、草木の花咲きて果ては實を結ばんも皆此恵なり、さはれしかく降り續きては氣もそゞろめいる心地せられぬ。午後姉君の許を訪へば、能くこそ來りし緩く雨に氣もめいりし折よ、いざ琴を奏せん亂こそ時に合ね、など興じ語りつ樂しき一日を暮らし夕刻まかり出でぬ、雨稍々小止となりぬ。夜十六夜日記を讀み湯浴などはてゝ九時半寐につきぬ。

六月十二日　けさ曇れる雲なくなりて空いと清く雨後の青苔殘雫を拂ひ池の蓮は翠扇を開き、菖蒲の紫いや色深し、久々に晴れ出しことゝて氣も心も涼しくなりぬ、來客多し、家庭雜誌、女學雜誌はては古き女鑑など取出してひねもす讀み暮しぬ。

人

奈良縣山邊郡二階堂村字井戸堂　水川富榮子

隣の老翁が米搗く音に夢醒むれば、今日も梅雨の音しほ〳〵枕に通ひぬ、やをら起き出でゝ薄暗き障子の陰に朝餉を了へぬ、今日は亡き母上の日なれば、花など差換へ申さめと獨ごちつゝ木鋏持ちて庭に下りぬ、

草深き所ろの事とて美しき花とてもなし我れはあまりの花なきにあきれつゝあるにふと見るに垣根の下に今を盛りと咲き亂る花菖蒲を見出だしぬ、何はともあれこれにても進せばやと、しづかに剪とり佛の前に行き花をかえ申しぬ、のち隣村の或る友の許訪はむと七時すぎ立ち出づ、笹のそよぎに梅雨の音滋くなりぬ、我が村の神社を通るに鳥居前の宮守の家にてもしばし雨をしのがんと、いそぎ行き見れば、常になく閉されて淋しさ云はむ方なし。友の村に入れば一構の瓦屋あり。幼な子の襁褓干したる納屋の軒下には雨に濡れたる鷄の餉を拾はむ氣もなきにや歩み得せで佇むさまいと哀なり。やがて友の家を訪れしに折りあしくも外出し給ひつる後なりしかば、その妹君に言づてしてそこを出でぬ、それより家に歸へれは姉上は佛の御餉とていそしめるにや、厨の柚味噌の香洩れぬ。御餉をたうべて後用なきまゝに小椽に出でゝなにくれとなくあたりの景色を眺め居りしに折り柄なつかしき友よりの手紙とゞきければあまりの嬉しさに直ちに返しの文をしたゝめて送りぬ。亡き母のいたく愛でゝ朝夕に水かひし牡丹も亡ぬしを喞ちてにや、いつもよりいと早う花落ちて今は見る影もなくなやみたる姿、今更に口惜しき極みなり夜に入りては人の聲も聞えず只時折りに一ぎは音立てゝ降りしきる雨のみ夜半の庭に訪るゝなれば、淋しさいやまして母戀ふ思ひのみぞいやまさる佛に御燈を點じて形見の品々ひろげ見るほどに、夜はいたう更けて、御燈の光身に沁むやう漸々細り來りぬ、隣りの室には時計の音もとゞまりぬ、あはれみじかき今の夜や。

藤花を贈る詞

東京　篠田すゞしろ

あかず見し櫻の花も、名殘なう散りはてゝ、四方の眺の淋しき心地せらるゝ今日此頃、窓の文机に身を寄せて、春の行衛や今何處。せめては名殘の松の葉もがな。と力なげに庭の遠近眺むれば、あな床し、昨日かも一房二房匂ひ初めぬと見し池の藤波、枝も重げに花さきみてり。吹く風に片靡きして汀の松の下枝に紫深き波うちよする樣は朝夕に見なれつる我が庭ながら又更に珍らしう覺え侍り。今は春の名殘を惜しむ心もうち忘られて、とばかり守らひ侍りしが一人にて見むも、さすがに、あかぬ心地の侍れば、友垣の隔てぬ君に先づ一枝折りて參らす。心あるあまが袖とも見そなはし給はゞ花もさこそは、はえあらめ。されど君よ紫のさめ易き方になゆめ／＼倣ひ給ひそ。こ紫の濃き交りをなむ尙末長う祈り參る。尙池の心深く匂へる樣も御覽

せさせ奉らむに暇あらせられなばいろとの君とおとづれ給ひれかし。
先はそへかきまであら〳〵かしこ。

福岡　中島武子

昨日。某の山に。蕨取りに。まかりたる歸るさ。松に。かゝれる藤浪の。いと見捨て難くて。あはれ。家づとに。一枝もと思へと。天雲の梢高くて。詠め居る折しも。山がつのきかゝりたるに。かくと。告ぐれば。いと安き事なりと。するすると。打上りて。數多折り下すを。足れりと。呼べど。耳にも入れず。折りて與へたるが。かたぐる許り侍るを。捨つるも。惜しと。肩の打こるも。忍びつゝ、家路に歸り。直樣。根下をこがし。水深く。投じ置きたれば。今朝は。見まがふ許枝ものびのびて。打萎れたる花の。いきいき敷、なり侍りたるを。日頃。たしなみ給へる御手に。かけさせ給はらんには。花も。一入の色こそ。增すらめと。一枝。御覽に入れさす。ここにも。器の數々。とり出して試み侍らんとす。

東京　松澤まつ子

今日の野遊びに、君のえゆき給はぬよし承はりては、何となう氣も進まざりしかど、何子の君にせちにそゝのかされてあくがれ行きぬ。げに霞のとばりもやう〳〵ひらけゆく晩春の景色を眺めては、そゞろ物悲しう思ひつれど、又よく思ひ返せば、まこと榮ある勤異して、今や靜に靑葉の床に入らんとする、其處に〳〵、え云はぬ平和の光のみちみつを、深く味ひ侍れば、いとゞなつかしう思はれつ。又しても君が上思ひいでられて、遙に其方の空を眺め入りしに、あなや、天女が天下りましますらんか、紫の雲の棚引けるに、打おどろかれ、走りゆきて見やれば、あらず、是れや春の名殘に咲ける藤の花にしあれば、遂に胡蝶のゆめをおどろかして、一枝手折り侍りつ、風にあてじと袖もて掩ひ、いそぎ〳〵家に持ち歸り侍りつ。今しも。水そゝぎしに、一入生々し侍るを、一人のみめでん事のあたらしう、是は今日の遊びにもれ給ひし君を、なぐさめまつらんとて、其まゝさゝげ參らするになん。あはれ、御文机のはしに置せられ、ゆかりの色を、なかしとみそなはし給はゞ、花の喜び如何許りかと思ひやられ侍りぬ。かしこ

熊本　田代艶子

桃櫻も、いつしか名殘りなうなりぬるに、哀れを分つものもやと、庭面のあたり、さまよひ歸りしに、今迄は心にもとめざりし藤の花の、ゆかりの色の、初咲やさしう、老まつがえに、かゝりしさまの、心にくければ、いかで、かれてよりゆかりに匂ふ紫の、おとゞも色も、なつかしとて、したひ給へる君にこそと、思ひ侍りしかど、さり事かゞさせ奉らんも、心なきわざなれば、かくは、此花をして、驚させまつるになん、あはれ、口なしの花ならねば、君が學びのひまの、御心やりの友ともなれ、とはおのれのみかは、花も其心にてこそ。かしこ

岡山　ふろた

過つる日、訪ひ給ひし折は、未だ芽ごもり居りし庭の藤、春のふくるに、後れで、昨日今日、眞盛となり、池のさゞなみも、ゆかりの色に、にほひ居り侍りぬ、常ならば例のごと、樂しき會合開き、此花の爲めに、一日を費さんを、時節柄さる事もと、今年ばかりは、思ひ止まり侍りぬ、されど花も、君が妙なる爪音を、始めとし、數多の君のさま〳〵なる、筆の花を、見まつらで、さだめし、本意なくや思ひ侍らん、せめては一枝づゝを手折りて、おくりまゐらせばやとて、かくは持たせ上るになん、恤兵寄贈の品、御調への爲め、ゆる〳〵弄び給ふ御暇、なきをも、とくより、承知し侍れど、たゞ御茶めし給ふ、ひまに、なげ入れさせ給へ、　あなかしこ

熊本　猪原みさを子

夏木立ち日に〳〵茂りて、吾庭ともおもほえぬまでなりぬ。外山には松蟬のせり〳〵と鳴初めて、文讀むこゝろもおこたりがちにて、いつもはおもしろき物語り、さては双紙も押しやりて、庭先を見やれば、小高松が枝の藤波しないなかく咲きこほれて、其樣いはんかたなく、「藤咲くや松の小末を高機に、たれまつ人のみけしなるらん」と、千蔭翁のよまれしも、いつの世の今比にやあるらん、とそゝろに昔そ偲はれて、あたら此美しき花を、ひとりみるはをしとて、下奴にたのみて、も

つともよきな採りてよとて、二枝なえつれは、文は拙なけれとも、途心のうつくしきは、此藤の花にもなとらめやとて、聯詞なも書添へぬ、此四五日うち、千代子文子様も、其外の人々も、誘ひあはせてき玉へよかし

鏡なす庭の小池の道にたにきみまつかえに藤の花さく

大阪 桝田益子

心なき春雨に、あはれ櫻は雪と、散りぬる物から、紫匂ふ雲の立ゐのいと床しうて日頃やよけんと、母君諸共に物し侍りしに、あひにあひたる盛にて、晴れたる空に濃き紫雲の、打棚引るは曙の匂ひも、啻ならじかし、獨り見賞やしなんも、あたらしく、せめては葉末の一枝なこそと、手折侍るなあはれ知られん、君のみ前に露ながら、御覧ぜさせ侍る。そも此藤や、咲く花の下に隠るゝと、詠め給ひし藤ぬしの、時めき給ふ其上は、いさ知らず、是は大日の本に御稜威な、かゞやかせ給ふのみかは、唐し迄も打靡け給はしゝ、豐公の御世の盛に、あひて世に高濱の、松の響と四方に、聞えたる野田の玉藤とこそ、言ひ傳へ侍るなれ。近き頃は、かげ藤とか、あらぬ名おふせて、愛かしこより、ゆかりの色な尋ね來りて、見賞す人いと多かんめり。色濃き時は、めもあやなる物から、光る君の思ひ人の、御名にさへ掛られて、あやしう情けな匂はせ。貴人のみけしの綾にも、口惜からず。大徳のみ衣に、はた雲にまがへ、涙によせつゝ、懐かしの草よと甚じう、らうだくもてはやさるゝなん、めでたう思ひ給ふる。風のまに〳〵、打靡ける、長きしなびの面白きに、ま白なるは何にか譬へん、言ひ知られず、珍しうこそ。かう、口さがなう聞えさせんは、やうなき海人さえつりと笑はせ給ふらんかし。誠や、なつかしげもなう、花の思はん程も、いと〳〵やさしうなむ、かしこ。

今もなほ、古根ながらに、浪華江に、
なごりは野田の藤波の花、

和泉 福原菫子

美はしくなかめし櫻の花も、なつかしく聞きし、百々鳥の春もはや末葉になりもて行きて、折からにとひくる人はなけれど、ひとりわが宿の池の汀の梢に、たなやかにかよわきさまして、艶なる色に、咲きそめたる藤花の、いひ知らずなつかしければ、春の形見にと二枝三枝手なりて、紫のゆかりなつかしさ、君のもとに、久しうさきにほへとこそ、おくりまゐらす。

石狩 小山うばら子

藤の花もこの二三日がほど、見頃なるに、おとなふひとの影、まだ見えぬことよとおもふ、折から來合せし花見客の一人、テーの君と申すがお出なきも道理、ユーの君は四五日前より悪性の感冐に犯され、衣なかつぎて打ち臥しゐ給ふとの御事、扨もお氣の毒なる事かな。

花の香、其長き短き、色の濃き淡き、見る人の樣々なる夫のごと、變りなけれど、いつも美しとのみ見し藤の花の、今年のみは我眼に物足らぬ心地せり、さりとて君が御姿の見えぬためにも非じ。

われは田舍人なる鄙しき花もり、君がいたつき耳にすとも別に慰めむすべもなし、今我目にこれぞ美しと見し花の一枝な伐りて進めぬ、あはれ君が病床の眺めともなれかし。

氣にかゝる藤一枝の見舞哉。

お笑ひに供せんとてかくなん。

肥後 徳永廣子

梅櫻はちりにしものな今になほながめつきせぬは山里になん侍る。なりから里童等あまた。山深く尋入て。手なりし藤の花。半開きしものな。めづらしさに花かめにさしてながめ侍るに。おのがまにまに白き紫なかきしなひの花房にあれば庭につくろひし花よりもはるかにまさりてうるはしくと見え侍る色香ゆかしく花のながくのびらかにしづけくなびきつる風情。うるはしき御心にもなぞらへていといとなつかしくも覺はへる。かくて一日二日はおのがまゝにすぎにし花には。侍れど。今一日の後ぞ眞盛にはなりなんものと見え侍るまで。御起居の御なぐさみにもと。一枝二枝來るな見そなはせ給はば。いかばかりうれしきおもひになん侍るおなかしこ。

肥後　佐々有隣子

今日は熊本縣社。藤崎八幡宮の藤祭といふ祭典なれば。中かきゆはぬ友ふたりみたり人力車をはせて社頭につきはべりぬ。春日のどけき空のけしきいはんかたなきに。鷲は木末に囀り。神樂のしらべは笛鼓に和ぎてなかし。社前にいかきゆひて。しめひきめぐらしたるは、いはでもしろしき藤樹になん。此の宮しろの大神の此地に鎭座ましまず時。勅使のもちたまひし藤の鞭を。紀念として。社頭にさしたまひしか。繁茂りたりしかば。此の藤花ざかりの十三日を嘉祭となして。今年の彌生の中旬にも執行ありけろ。師の君にも御參詣とはおしはかり侍れど。藤のしなびの一房を。社務所にこひて。御もとにまゐらす。花かめにさしたまひ。めでたまはらんことをこひのみ奉になんあなかしこ。

北海道　森　よし子

花散りはてゝより、幾日にも候はねど、物の淋しきことといふばかりなく、若葉のかげ打ながめては、はしなく春の行衛をおもはれ候折しも、此處なろ池のほとりの松がえにかゝりて、覺束なげに咲出候藤のさりとか我れありと言はまほしけなるさまをかしく候を、家主の心もほこらしげに思し召すらんは恥かしけれど、一枝手折御目にかけ候、これをしろべに春の餘波はいかゞとも訪ひ給はゞ嬉しかろべく下におもふ處なきにも候はず。あなかしこ

羽前　諏訪なつ子

折ふし移り變ろこそ物事に哀れなれと、兼好法師の書かれしも實にさろことになん。花よ胡蝶よと長き日あかずあくがれしも、早いつしか過ぎ去り候て、世はなべて青葉のみと相なり候へど、自然の神のめぐみ中々につき候はで、今日しも我家の後園に咲き初めたる紫の藤花、吹く朝風に桃づきて池の水鏡に容をつくらうなど、いとゞく可笑しうてなん。

そが中にていとも大きやかなろ二ふさ三ふさ差上げ申し候まゝ、御笑ひ下され度く候。

いづれ、二三日後は眞盛りと存じられ候あひだ、其節は何とぞ御出で下され度待上げ候。かしこ。

上野䑓　櫻　花　子

青葉の木陰風なつかしき、時節に候處、我が君には。先頃よりのおんなやみ、其後は御伺ひもいたさず候ひしが、御こゝちいかに。渡らせられ候や、心もとなく。お案じ申居候。さて。今日は例の日曜日に。折柄の。好天氣にて。常なれば。君と共に、手をとりかはしての、そゞろあるき。なすべきに。それもまゝならぬ。後からたどりとて一人の散歩も興なき事と。かこち居り候ひしに。折よく。例の。梅子竹子の君の御來訪にて。相變らず。野外散歩いかにと。そゝのかすに。催されて。午前十一時より立ち候。それにつけても なりあしき御病みを。たれもく。くちをしがり候事にて候。先づ藤山に至りしに。松に枝さしかはして。さきにほひたろ。はなのさまは。更にもいはず。をちこちの。ながめ。たぐひなく。霞をわけては。流ろゝ利根川のけしき。など。ゑにも文にも。つくしがたく。いかで。このけしき。見せ參らせば。御養生の、一くさとも。なろべきものをなど。とりぐに。御うはさ申候。兎角すろ中、夕風肌に冷かなろにおよんで。歸路に付き申候。今日の印にもやと。藤花ふたもとばかり。御目にかけ候。先は。此のふしをだにと。一筆申上候。余は御目もじの上にこそ。かしく

肥後　東　津代子

いぶせきむぐらの宿に。若葉のかげをのみうちながめて。わびしさに堪かたき今日しも。かたらふ友もがなと。うち案けろをりから。親しき友のもとより藤の花見ころなろまゝ。まげてもといひおこせたろいといと嬉しくて。直に訪つれぬ。やり水の流れ石のたたずまひもわざとならじいと心ゆくかぎりなり。廣らかなる、池の邊りにゆひ渡したろ棚に。今を盛とさきにほへろ藤なみのそよふく風にゆうゆうとなびくさまも。うろはしくえもいはれずおぼえて。姿のみながむろも本意なうあれは。御わたりへも見せまほしうて。二三房こひうけぬれ

ばまゐらせつ。文机のほとりの花がめに。活させられ。御なぐさみの一端ともなしたまはゞ。妾のよろこびのみか藤花もいかばかりか本意ならん。

呉　和住千鶴子

いつしかと待ちし櫻もうつろひて、見渡す野べは青葉のみ茂りあひぬるを、いかに眺め給ふらむ。こゝもと常ながらいぶせき庭のも、花ちりてよりは、一しほ、荒れまさるのみなりしを、ゆくりなく、けさ目とまりぬるは松の老木にかゝる藤波のいとをかしう下ゆく水も染まんばかりに侍るものから汀になりたち袖ひぢつゝ一枝手折しまゝ送り參らす。御園生に植ゑさせ給ひつる百草のゆかしきには及ぶべうもあられど賤が伏屋の木がくれの花と、また、おもむきも侍らんに、あはれ玉の机のかたへにしばし置かせ給ひて一度だに、みそなはしたまひてよ。さあらんには、花のこゝろもうれしからん。はた、妾も待ちゐし初聲のそれにもまして、いかばかりかは嬉しからまし。

神奈川　森田はな子

あやめふくころ、ほとゝぎすの初音こひしきこのころ、ゆかりのいろのゆかしくさきそゐひたる、この花、知る知らぬあまた蝶のくるふ數より多くめでつるものあるを、いかでとはせ給はでおはすや、このまゝまちゐて、みどころ、失はんも、口惜しきわざに侍り、かつはめでたき言の葉ももらし給ふらんなと、うちよする波おもひ立ち、君の黒髪のやう、なかく、したたりしをえりえりて贈りまゐらす、君の御手に、ならば、花も一きは榮あることならん。

君がためいろをも香をもなつかしき
ふちのころもををりかされつ

山梨　標　武子

終日、ふりくらしたる、雨、名殘なう、はれ渡りて、日影、うらゝかに、青葉に、やどる、露の、おのづと、消ね行き、日の御光の、いよ〳〵かゞやき渡る、心地よさ、云はん方なう。見受けらるゝを、君には、今日此頃、如何おはし、給ふらん、あまり、御無音に、過ぎつるは、何卒御許し、賜はり度賴上候、扨て庭の藤浪やう〳〵咲きそめ、いと〳〵珍らしく候まゝ、御宅にもと、思ひ立ち御無沙汰に、かこち、一枝差上參らせ候まゝ、あだに、見過し給ふなよ、日頃の御手並にて、さしかへ給はゞ、花の面目、いかばかり、なるらん、必ず優しき面に色香つゝみて面はゆげに頭をやたれ、いよ〳〵つゝましく、君が机上の、友とかしづかん、かと存じ候まゝ、御いたはり給ひてよ。かれて御承知にや、候はん、づれとも、古への、某式部が、面かげさえ、やどし、萬づの花の、色香の美しきをほこり顔に、先をあらそひ、人なきふるまひあるは、いと〳〵心苦しき、樣なるを、ゆかりの色を、もちながら、露たかぶる、けはひなう、ます〳〵、つゝましう、せらるゝ所、君が日頃の御性行にも、似通ひはべれば、如何とらして、進ぜましう露しけき、庭ふみわけて、一枝參らせ候かしこ。

東京　木村よね子

若葉がくれに昨日今日ひもとかせし、白藤の一もと、今しも君に參らせんとするになん、君よあはれといとしみ給ひてよ、花はゆかりのそれなられど、變らぬ色をばあかず愛で給へ、なつかしの君に參らせて、又幾春の榮えをば、文のたよりに待ちなんものを、君よいたがらせ給ひて、雨にも風にも心置き給へや、はかなき名殘は又ゆめか、思へば一昨年の春の暮小雨そぼふる朝ぼらけなりき、師の君の病あつしときゝて、訪ひまゐりしに、折しも今朝は少しう心地よしとて御手水めさせ給ふ程なりしが、清けにかき掃はれたる御庭のたゝずまひなど見そなはせ給ひ、長椅子此所にと彼の御椽に出させ給ひて、しばしやすらひ給ふほど、つれ〴〵の折にもありしとて、いたうよろこばせ給ひて、親しき御物語などをさせ給ふに。早や涙ぐまれてはかばかしう御答へもえ聞えまつらざりしに、例の御聲さわやかに歌誦し給ひける、露のあはれはこれ此白藤になん、まからんとする程家人に仰せて、下し給ひしなり、ゆかしの色は年々にかはられど、そをめで給ひつる師の君は今はた何所、やむなき事にて明日は古郷に歸らん身の、せめてはみ墓にだに別れまつらんに、一枝をりてさゝげんかとはせしが、

いなしにこはよし無き事なり、なさけを分ち給ひしは我も此花も又同じきを、傷つけんは罪ふかしとて止めつ、されば君よ同し流れにいそしみて、汲みかはすあはれは變らざりしを、今日よりは君の手にうつし參らせんとて我惜しき名殘もこれにたくへつ、君よいとしとめで給へ、花よ主かはりたりとてな恨みそ。

長野　小泉みつじ子

雪か雲かとあやまたれし、櫻花も咲くとせし間に、かつ／＼散り果てゝ、みづ／＼しき若葉のみどり、茶色は匂ふ若楓、夏なほ淺き野山の景色、〔今ひときはに候はんを、伏家にのみ、引きこもり居りたらんには、如何に惜しき限りならんと、幼き小供ひきつれて、志す野あたりへと、まかり越し候ところ、さすがに、霞の衣ぬきかひしものから、うらゝかなる空の、もてはやさるゝに、若葉の中より、咲き出し、つゝぢの花の色香ゆかしく、そことも知らずなく郭公もうらめづらしくて、日頃心のむすぼれもとくる心地して、とり／＼あかぬ眺めの内にも、藤の花のゆかり色濃く、山松にまつはりて、ふさ／＼しう烟れるやうに、風になびける其の氣高き姿の、一入目にとまりて愛でうつくしみつゝ、此處に、一日を暮し、今しも家に歸りつき候、せめては、君が色も香もある、言の葉だにたまはりたく、はた野遊びの土産迄でにと、小供して此の藤の花一枝御目にかけ候まゝ、花の姿とりつくろひ、あはれ一日なりとも、文机の上にさし置れ下さらば、姿はもとより花もいかばかりか幸多く候はんにかしこ

東京　村上美千代子

春の名殘の藤の花もやうやううら紫の波を立つる頃と相成申候就て手植の庭の藤こぞよりは花も房々しう咲き出で候、一人もて遊ばんも本意なく花の心もさこそあらめと存候まゝ二枝三枝手折り參らせ候花の心くませたまひてあはれと思召され候はゞ、常々敷嶋の道に優れをはします君のこと故何卒歌一首添へさせ給へや又御活花の料になしたまはらば花も姿もこよなう喜ばしかるべく候かしこ

東京　金原玉城子

春におくれて殘る一木やあると友とちいさなひて　おもはぬかたにわけいりしにみやまのかひにいとおほきやかなる常磐木のこすゑにむらさきの雲のなひくやうなるをちかうなれば　ねもいはれすかぜにかなれるはしなび長く咲とゝのひたるふぢなみの　花になむありけるいかでひと枝もかなといふ程にともなへるひとのはしりのぼりて殘りなくと折とるは猿のやうにてをかしくなむさて　ふくつけうもたせ歸りつればけふの山狩のしるしにすなはち便にものして　奉るになむ

青葉路わけにし山のかひありてつとにさゝくる花をえしかな

麹町　石川薰子

庭の藤花咲き出で候はゞ是非に一枝と宣ひしは實に昨日のごと覺え候に、けさしも立出で見れば青葉綠の隙より、紫の名殘優しき幾房となく咲き亂れ候藤花、こぞの不出來に反し、今年は事の外心を込め候爲にや、近年になき上出來にて房も長く香も高き心地せられ候取敢ず最も長き房、三枝五枝御目に懸け候、御机の上になりと御さし給はり御覽ぜさせ給はらば花と共に姿の滿足如何斗り、眞垣を超えて咲く花の遣れの細き流に影を寫せし樣、何と形容すべき言の葉も無之、あたら一人見むも中々に口惜しく、あすあたり正に見頃と存候へば、何卒々々御ばゞ樣御同道御出かけ遊ばされ度、藤花も共に御こしを待入る樣に候、此文書き終へ候折から、そよとの風吹き候て、一片花の散り申候、是も又御許樣の御越しを待てる花の心ならめと、わざと封じ込め候、あはれ君を待てる姿と、花の心を憐れび玉ひ、早々御越し給へかし余は御まのあたりにと申殘し候。可祝

栃木　加藤春香子

爛熳たる萬朶の花は無情の風に誘はれて、若葉の綠やうやう深く、鶯の聲さへ力なげに、聞きなされ、そゞろあはれを催さるゝ此頃しも、御許君はに如何御いそしみ遊ばされ候か、陰ながら御勉學さこそと羨ましう存じ上候、扨も暮れ行く春の名殘にとてや咲き出でにけん、あや藤波の瀧つ岩根にかゝれる樣、さながら紫の雲の下り居るかと、しまるゝ風情、あたら愛づる人もなくて、夜の錦に終らんことの口惜

しく、せめて一二枝なりとも君の御許にと、よべ打ち降りし、小雨の露ながら手折りて參らするになん。

榮枯盛衰定めなき世の中に 此の花何時迄か榮えん、嗚呼春老いて人生の榮それ幾何ぞ、我等青年女子今にして務めずんば、又いづれの時をか待たん、今此花を贈り奉らんとするに際し、思ひ出づるよしなしごとをしも、禿筆を呵しつゝかくなん。

山形　香澄露子

くもりがちなる、今日此頃の空を如何に御覧ぜさせ給ふらむ、さて、つゆふかみ草のいほりをたつぬる人もなき、我が庭の木々の梢の青葉に成り行くなど、何となく、さう〳〵しく、覺え侍るほどを、池のほとりの松がえにかゝりて咲出侍る、藤の花うらむらさきも色そへて、家主の心を思ひてや、などきこゆるも、恥しけれど、我獨ながむらむも、あたら惜しく侍れば、一枝手折りてもて、參らするになむ、いかでゆかり、なつかしき御あたりに、ついさし給はゞ、我のうれしさのみかは、花もさぞや本意と思ふらむかしこ。

美作　廣石操子

山の端も霞の衣ぬぎかへて 緑涼しき若葉のかげ打ながめてはすゞろ春の行衞思はれ候 其後母君の御いたつき如何渡らせられ候か 伺ひ上げ候先つ頃御誘ひいたせし大橋の藤見御母君の病怠らせ給ひし折諸共にと思ひ居り候ひしが可愛き君ちやんにそゝのかされて 心さす方に參り候處廣らかなる池の邊りにゆひ渡したる 棚に今を盛りと咲き匂へる藤のそよ吹く風にゆら〳〵と打なびく樣いと艶に美しく一人眺めんも本意なく 一枝手打りて御目にかけ候まゝ 御床の邊りに活けさせられ病み給へる母君と共にながめさせ給ひ 御慰みの一はしともなしたまはゞ私のよろこびのみか花もこよなき面目とぞんじ候かしこ

松山　南青子

四方の眺めはいつしか青葉と變り果てたる 今日此頃我庭の池のほとりなる 老松にまつはりて 自づから千代しめがほに匂へる藤なみこそ中々に捨てがたき風情なれ、此花よゆかりの色、優雅なる姿なりとてかれてよりみ心やさしき君には此上なうめで給ふればいかで〳〵君ならで誰にかとおもほえつゝ一枝手折りて參らせ侍るをあはれみ情こもる御居間のうちに留められ 朝な夕な御慰みの友ともなし給はれば此花の喜びやいかに、花紫の色さへも一きははえまさゞらんかしあなかしこや。

東京　辻岡ゆかり子

其の後御心地如何におはします、少しは、おこたらせ、給ひしにや、御有様伺はまほしう。扨こなた、庭前の藤花、昨日今日のけしきに催されて、今を盛りと咲揃ひ侍りぬ。思ひ起す去年の春よ、この花陰に圍居して、くさ〴〵の御床しき御物語の末君が、御心ゆきたる御言の葉は、床しき花の上にかゝりて、いかばかりうるはしさを添へにけむ、その折の御歌よ、はた、いかに花の心をときめかせつらむ。深き〳〵去年の契を、忍び出でゝ、今年はわきて、ゆかりの色麗はしう、おとづるゝ風もなきに、ゆら〳〵と、打なびくは、懐かしき君を、招かんの心にやと、いと〳〵、床しさ、懐かしさに、たへかねてなむ。色香知らせ給ふ御わたりにと、手折りて、參らす。御心地常ならずおはせば、御文机の上にこそは、かたかられ、せめてもの、御心やりにも、なし給はらば、花も、いかにうれしう思ひ侍らむかし。あなかしこ。

出雲　高橋依子

青葉繁る、昨日今日、君には、去年美術のわざ終へて、故里に綠色こき錦を、かざり給ふとの御事、いと悦ばしく、さながら、我身迄、君が餘光にうち榮えて、肩身廣き心地なされ候、指折かぞふれば、君が東都へ思立給ひしは、十歳前にてお在せしに、其節、若葉の蔭にて行末の事ども語合、我身運つたなく、學の道にも、えのぼらぬ事の口惜しくたゞ君が業終へて歸り給ひなば、たらはぬ處を教へ給はれと頼みまゐらせつる折から、咲き亂れたる紫のゆかりの色濃き藤の花を、心計の餞別にと頭にかざし參らせつるを、月日は矢の如く行きさりて、はや十歳の春秋回り來たる、今日、藤も當時よりは末繁り常磐なる松の緑の

内に咲きかゝれるは、さながら、紫の雲の棚引が如く、君が美はしき筆にうつし給はらば、如何に面目をほとこすらん、さはなくとも取敢へず、二本三本持たせ參らす、何の見處もおはされど、昔に變らぬ己が心とも思召給はらせて、文机のすみにても、挿みおき給はゞ花も、こよなき面目になむ。

松山　匡　子

其後は、如何渡らせ給ふらむ、拟も、君のいます、懐かしの都、離れて、片田舍にわび住ふ身には、語ふ友もなきに、さらでたに、日をふる雨に、淋しう暮し侍れば、君の上のみ、いやまし懐かしう、忍ばれてなん、誠に、勝山城の姿撋の色ならでは、見る影もなき、渡りには侍れと、後の庭なる藤棚、春の名殘を止めて、上なき色に咲き出で、かの、大君を助け奉りし、藤房卿には、あられども、松によりかゝりて、雨を厭へる風情、えもいへず、またなく哀れに思ひ侍れば、獨り眺めむも本意なう堪へかねて、手折ぬれば、御ゆかりにもと、一枝まゐらするになむ、去年は、君と共にて、此藤棚の下に、遊び暮し、はては茶よ菓子よと、さわぎし事のありつるよと、そゞろ思ひ出られて、いよゝ君戀しう柴の戸たゝく、雨の雫にも、もしや、君の音づれ給ひしにはあらずやと、むれとゞろかせしも、しば〳〵にて、侍るを、せめては、此藤の花に、その上の事思ひ浮ばせ給ひて、我が身を哀れと思し給ひなば、そが夜我が夢のいかに嬉しかるべき、あはれ、片田舍の、此藤が、母なるゆかりの宿、あたにのみな、見すて給ひそ。

梅雨中日記の一節

岡山　ふ　る　た　子

六月七日、火曜日、今日はと、思ひ頼みて、起き出づれど、細雨濛々晴るゝべき、けはひなし、嗚呼また〳〵と、つぶやきつゝ例のごと朝のつとめを終へ、晝の支度に、かゝらんとする頃より、少しく晴れ初めければ、あなうれしと思ひつゝ、晝飯をすまし、少しく閑を得てそこらちらされたる、新聞、手にするや、俄かに、車の音、門前に、とゞまりぬ、あなと思ふ間もなく、入り來りしは、絶えて久しくあはざりし同窓の友、某の君なれば、互に喜びあひつ、奥の一間に請じ入れて、心隔てなく、越し方行末の事ども、語らひ、或は喜び、或は驚き、或は笑ひ、時の過ぐるをも知らりしが、長居したり、いざ歸らんと、云はれて始て心づき、強て引き止めたれども、なほ用事あらばとて、またの逢瀨をちぎりて、歸り去られたり、共に送りて、門に出づれば、空よく晴れ渡りて、いと〳〵心地すがすがし、夜に入りて、母上の、單衣物を縫ふ、午後十時、明日も天氣よかれと祈りてふす。

青森　木村いち子

今日もまた降りつゞく五月雨の空、薄墨を流したらん如く一面に雲滿ちていつはれぬべきけはひも見えず。わびしさいはん方なし、さらぬだにいぶせき賤が草のいほりの、そう〴〵しさいはん方なし。「今宵こそは郭公よりおくれず」といひおこせる友のあれば、いとうれしうてまつほどに、あまり久しければ文机により文などゝりいだしつれづれをなぐさむる程に、いつしかまどろみてゆめの堺に入らんとす。折しもふとなのる一聲、いとうれしうて氣もさへ〴〵として目もさむる心地せられぬ。彼の友にこそきかまほしうてなん。いと口惜しう、折しも人の來るけはひしければ、いとうれしくて立出で見れは、のきの若竹にさつとふきくる風のいとうらめしうてなん。

東京　山　口　琴　子

ことしのはるもやゝすぎて夏めくこゝろに成りぬるは夢のまにいつしかおくりてさつきのけふとなりぬるにうきさみだれの降にふりつゝ古きのきばもくちやせんとくりかへすそのくりこともこゝろの奥をなぐさめかぬるに雲はれやられば なきたらちれにさとされし昔のことも思ひしられてしばし袂の露けさもところせくなん。

　ふりはへてをやみなければさみだれにいとゞぬれそふ袖の上哉

ほしあへぬころになん。

熊本　田　代　艶　子

降りつゞきし梅雨、尙やまず、梅の實なられども、ほと〳〵うみはて

たり、とふ人もがなと思へど、此雨なれば、そもかひなし、裁ぬふ業も心すゝまれば、いでや、女鑑の派遊なりともと、文机によりそふ、さらぬだに、おくれがちなる心の駒の、雨の音にや、おちけん、なか〳〵に、えすゝまず、はては、物うくて、窓おしひらけば、眞垣の卯の花雪の如く、昨日の宵は、はや一むらの新竹とかはれり、何れも雨になやむ風情、いとあはれなり、

雨はやう〳〵小やみとなりぬ、軒近うあやしき音の聞ゆるに、何やらんと見れば、石に雨垂の落つるなりけり、あゝ思へば、幼き折に、物の文にてよみける、雨垂、石を、うがつを見て、悟りし人の、いそしみきとかや、あはれ、今は、我身なりけり、はづかしともはづかしや、いでやと、心をとりなほせば、思もかけず郭公の、血になくはつ音只一つ。

横須賀　岩橋花子

六月十五日　昨日も今日も降り暮らしたる、梅雨の空のいと詫しく、女鑑讀む折柄、しと〳〵と降る雨の音の中に郵便てふ聲のしければ、行きて受取れば、あな嬉れし、東の都に學び給へる、夏子の君の文なりけり、嬉しくて、心も空なる様の、をかしとて、傍へに縫物し給ひける、母上の笑ひ給ふもをかしかりき、夜九時頃まで習字してふすあはれ戰地に御在す兄上の、雨降る今宵は如何にし給ふ、砲聲彈雨の中にや居給ふ、或は外套片しきて、異國の野に果敢なき夢や結び給へるとそゞろなつかしく門出の折にの給ひし、言の葉等思ひ出で、泣きぬ、願はくば武士の務め能く盡しませ。

十六日　今朝珍らしくも空晴れ居たり緑の若葉いよゝ茂りて、露を宿し、雀の聲さへ聞えぬ、午後より、園子の君誘はれし敬子の君訪ひぬ、いと喜び給ひぬ、我が庭の花菖蒲盛りなりとて導かれて池の邊にゆく、實にや花は盛りなり、清う澄み渡れる水に緑の葉映すじとなう立てる間に、紫と白きが見ゆる風情、えも云へず床し、〃の品定めとり〳〵なして樂しかりき、この夜里の景色細々書きて返り事す、新月淡く空にかゝりて小田の蛙の聲おもしろかりき。

東京　篠田すゞしろ子

五月三日　梅雨の名に背かず昨日よりの小雨倫いぶせく降り續きぬ。庭の椿もあさましき迄色あせて今は見る影もなし。唯文机の一輪さしのみ稍々見處ありけ なりしをそも又やかて硯の海にちりはてゝ殘る青葉の淋しげに見ゆ。折りも侍女のあはたゞしく入り來たるを何ぞと問へは今届きたりとて女鑑を示せり。散りにし様にもいや勝る媛達の言葉の花に心とかれて軒の玉水の音も耳に入らず、日ねもすこの書を友として徒然も覺えず樂しく暮らしつ。

五月七日　晝すぐる頃藤子の君おとつれ給へり。板屋の軒も朽ちむ斗りの梅雨に時鳥の初音を尋れむ心も出てす、ひたやこもりに暮し侍りしが今日はぜひにと思ひたちて君がりおとなひぬ。梅雨百首は如何になとの給ふ。己も暮しかれたる折柄とていと嬉しくてさるは兎にあれ久々にて合奏を試みむとてそれよりしばし心ゆく斗り調へ合せたり。早晩雨は名殘なうをやみて軒のしのぶに夕日のかけめづらしうさしそめぬ。

熊本　猪原みさを子

あらかねの土も、融くるはかりに照るてふ水無月の、昨日も今日も降りくらし、親しき友を問ひもせす、とはれもせすて閉籠めて、たゝ書のみを繙ふれは、樂くはあれと又苦しさかも。かくも思ふかまゝに吾れのみは、道ある世に學へとも、ますらたけをのはらからは、荒鷲の羽風鋭き強國を、脅や懲らせの畏き大詔の、下りければ、かれて身命を大君に捧けて、御國の楯と仰るゝ益荒武男等は、高麗唐土に駒並めて、銃執り持ちて立向ひ、世にあらひたる醜男等を、滿洲の野に打撲し、いつかうらるの山嶺に、光輝く日章旗を、靡さんはまのあたり、ゆけやすゝめと勇むなり、大和男子もきのふけふ、時知る雨に閉籠めて、ひろくもあらぬ天幕の内に、甚は雄々しく可笑敷も、又勇敷く語りつなんも、小夜更けて人こゝ靜まりてのち、夢もむすはん故郷を、思もへはいかにかなしかも、可愛妻子や大恩ある、足乳根の老先短き父母を、此世に又もあふことは、浮木の龜のそれよりも、扨も六つかし世の中と、歎てることもありつらんと、女心に比較へて、思はすこほす

一撃、又なみだ雨のたれならん、喑てかひある世にあらし、雄々敷猛く勇ましく、凱旋いはひの日をまたむ、あすより天氣も晴れよかし。

肥後　德永虞子

ふりつゞきたる梅雨に。空もいとくらうなりて。四方をかこみし山さへ。水霧の中にみえつかくれつ。日日ながめくらしゝ。庭の氣色も青葉にしたたる雨雫。ほとほときこえてしめりがちなる。閑に獨居の裁縫は。永日の事とていとさびし。軒の玉水の音にさへ驚かるゝはいく度かは。訪人もなきをうらみかこちて。ひたすら雨雲に喑郭公をのみまちにしか。郵便といふ聲は。いづこよりならんと受取みれば。東京の伯母君の小包郵便物にぞありける。取手おそしとひらきみれば。日ころ心にかゝりし。討露戰史の一部になんありける。數度の大海戰にけつし隊のけつ心唯烈なる面影さへ紙上にあらはれて讀も見るもいさましき戰爭の目にうかび心の底に畫がきつゝありけるが。こひしき友さへ音つれ來ければもろともに、感涙に袖のしめりて露けきを。いかに思ひけん。郭公一聲いとあはれ深くおぼえぬるまゝ。日記中の一ふしをしるすになん。

羽前　諏訪なつ子

淫雨霏々として連日にわたり、誰問ふものもなく、日ねもす遣悶に苦るしむ折り柄、見しき友二たり三たり音づれて、梅雨てふ題のもとに和歌をものして互撰をなしぬ。富子様三票、妾二票しかして美津子様及び芳子様おの〳〵一票なりき。かくて我等は喜々として簷滴の音だに耳にせず、永日の鬱情を散じやりにき。

肥後　佐々有鄰子

梅雨ふりそめてより。五日六日は心もしめやかにて。書よむにも手習わざにも。世塵にまじはるよしもなくして。いとどうれしかりしか。今日このころは。六月十一日の入梅より。うつりうつり日數つもりて梅實もうみはて。唐櫃の衣裳には。カビといふもの生出て。濃紫も炭あせて。見るかげもなく。黃金のごとき山吹色も白銀の裳とならんとす。あなとさけびて母君に啓すれば。笑ひたまひて季節の豫防をなしたまひぬ。

十日二十日とふりくらしたる梅雨は。七月の二日の日となりにけり。鷄の八聲ともろとも。父公の嚴命により臥床をいづれば。東天紅の喑音さやかに昨日の空にひきかへ。晴わたりいと嬉しや。くりやの所にいたり見れば。婢人は。かまどのもとに立はたらく。はした女に。教たまひ今日ははんげ生なり。鄕里の習ひなれば。近隣のたれかれをまねき。燒酒に素麵とをとりそへて。客人に饗すべしと。父母の公よりの命なればとそのたまひける。妾も書齋にのみ在べきならねば。客殿の塵うちはらひて。人來を待ち侍りぬ。

肥後　岡山登壽子

六月十八日　つれつれなる五月雨の空なにとなくものうく雲のゆききのみながめられぬ。をりから京なる友のもとより消息きたる。とる手もおそく開きみれば。いつにかはらぬゆかしきことの葉なるに。いと此ころのわびしさをなぐさめられて。寒紅梅の春をむかへしここちぞする。

十九日　昨日の雨すこし小降になりける。をりから音づれ給ふたれかれの君。四方やまのはなしにうち興じつゝ。此ころのうさも雨とともにはれて。時のうつるもおぼえざりき。

二十日　今日はめづらしく空のけしきうら〳〵と晴わたりて。わくがごとき蟬聲に心もすずしくなり。五月雨の名ごりなくみえぬればいとうれし。

肥後　秋吉輝尾子

ふりつゞく梅雨にのきの玉水草木の露。みるものごとにしめりがちなれば。うかれ出んよしもなく。每日家にのみわびしき日をおくる。母君は妹のあき子と共に。家庭新聞をよみ給ひ弟吉彦は降しきる雨をしのぎて歸しげに。尋常小學校よりかへり來て校長のかたられし話などかたらへば一家いとにぎはしくなりぬ。日は暮かかりていづこの舘の

音もつげ渡りそぞろにあはれを催しぬ。なりしも郭公の一聲雲井はるかにきこゆるもゆかし。夜にいりて千代子君のはした女つれて。とひ来られければいとうれし雨夜のしなさだめしてふくるまで興しぬ。五月雨ふりつゞて。梅實のうみはてし日記の一節にこそ。

石狩　小山かく子

ひき殘されし菖蒲草の二もと三もと、淋しげに生ひたる泉水の此方には、紫陽の花咲きそめしが、よべより降り續く雨に、香やは失せけむ露を重みいと憐れ也。

　長かりし梅雨月の一夜かな。

朝餉食うべ終れば、友の君一人訪れ給ふ、嬉しさに喜び迎へ書齋にて、正午までくさ〲のこと語りかはす何となう日の短き心地してけり。思へば邦に國難あり、幾萬の貔貅太刀とりて、とつ國人と爭ふ今日此頃、太平の御代の民のごと、我等朝夕枕を高うして、おのがじゝ其務めにいそしみ得らるゝも、わが大君の御惠みよと思ひ出では、甲斐なき女性の身なりとて、などか一日をも空しくすごすべき。

　しこ草の茂れる野邊に狩りくらす武士あはれ梅雨のふる。

かくて午後は裁縫の業に、われを忘れつ。

山梨　標　武子

十三日　おき出れば五月雨一入ふりまさりて、長春の花のみ、所得顔に、心の色にそめなして、變られど雄々しくてなん。あはれ、戰地にまします兄上、よべの月をや、御らんぜられ故郷の老ひにし父母の君の、御上にや思ひを運ばせ願ふらん、國家のためつくし得らるゝ身こそ、幸多きなれど、仰せ給ひし御心のほど、いぢらしくてなん〱、されども、人情の常、たれか故山を忘らるべきやは。さるを心ありてか無きが、無情の雲は、月と我との間をば、さえぎりしよ、我が上なき樂となんする、月は逢ふ事だに、能はすなり、こよひもたのみがたくて、いとし〱口惜くてなん。あまり御なつかしさに、出征の節、寫させ給ひし、御姿取出してながむれば。滿面の笑顏、あゝ此笑顏、實に國の柱とたのむ、軍人の心根はこの笑顏にこもりつゝあるよ。又も見得らるゝか、はた能はざるか、天運にこそよれ。目をつぶれば、戰場の光景まぼろしに、あらはれ出で、しばしは夢うつゝの、心地して、ひらき見れば勇ましき、御姿のみ。折しも五月雨ふりまさり、ほとゝぎすちぎれ〲の雲間に消え失せぬ。

何とて用事なかりければ、文机により日をぞ暮しぬ。

十四日　よべの名殘の、夢よりさめ、床をはなるれば、雨いよ〱止みにけるよと、天を仰げば、降りみ降らずみさだめかたくてなん。盥漱して、はるかに戰場に向ひ合掌し、我軍人の健全ならん事を念じ、文机によれば思ひ浮ぶるは、友の身なり、あまりつれづれなるまゝに、よしなき事を書きつゞくれば、我身ながらをかしくてなん、又もふりしきる雨、深けれどもあえてうらむにはたらず、自然のうつりかはりにしもあれば、四季のかはりありて、花咲き蝶まふ時もあれ、又木々の葉は散り。又は落ちあはれ深き眺めも、あかぬ時もあれつれつれを催ふす時もあるなり。人生とても榮枯盛衰は、定めがたく今日ありて、明日をえしらぬ、人生のはかなさ、軍人はましてさなり、之又自然ならめ、かくふりしきる雨も又然らずはあらず。終日かゝる思ひに、日を暮し、雨はいよ〱ふりまさりぬ。

東京　小松常子

五月三日曇りがちなり。

四日暮つ方より雨降りぬ 此夜は宵節句とて 書生の身なれば心ばかりを祝ひぬ。

　たらちねはわがはらからを祝ふらむ幸くありねと故郷の空。

五日雨止ます。故郷の空のみ眺め。そゞろに父母君の教訓を思ひ出ると共に家に有りし日我をいつくしみたまひし兄君の旅島より壯健なり若し我が希望の地に達せば 花と散らなん、 とのたまひし言の葉忍ばれ今の彼の地にて野に伏すらむなと聯想し、 つれ〲なる折から友來り此夜は金曜會なればとて教會に行きぬ。

牧師の貴きみ教へに一家の整理は飾置よりも 老幼を大切にするにて知らる一國の文明は 電流電車の便又市街の繁榮なるにては 知るべか

らず例へば電車に乗らむとする壯年者の老幼をたすけ乗らしむる道德者多きかと、教育の盛なるとにより此の事小なりと雖も大事は微に生ずといふ語を悟りぬ又曰く中にも女子教育尤も大切なり女子の氣品を高尙にせざれば實の文明に達するを得ずとの語耳に止まりぬ、あはれ愚なる身は學びの道と職かはん。

東京　木村よね子

五月二十一日朝曇晩雨

昨夜の雨の名殘未だこちたきばかり庭木のそぼちたる、こまやかなる緑の、自からあせもやせんと心もとなかりし程。母上の又降り出でぬ間にとて、櫻草のいみじきばかりを取り入れ給ふ、手紙三本（妹春子への學費に添へて祖父君への時候伺、友人なる許に）等認め終りて縫ひさしの袴手にしたるに「號外〳〵」あはたゞしき聲は漸く近つきぬ。末の弟吾がと飛び行きて一枚求め來つ、これ時事新聞〇〇〇占領の報なりけり、かつは嬉しく、かつは又死傷者の多きにいたはしき心地せられて、かくては此所は〇〇の何方に當る、是より或軍は何方面に向ふならんなど、さま〴〵に一家一集ひになりて、机の地圖を取り出すやら、日清戰爭記を持ち出すやらで、朝の一時は中々のさわぎなりし。

和泉　稲原菫子

雲にくもそひ小止みなくふり續く五月雨に、けふもたえて音なふ人のなければ、軒の玉水の音のみ友たるのみ、かきくらしいとゞ心結ぼれしが、はしための差出すけふの新聞の、いつもながらのわが海陸軍の勇ましき記事を視ては、中々に心もとみに浮立ち、さては、出征のいろれの君をさへ、こもごも思ひ起され、異國に心をはせる折柄時計の音十時、俄かに人の罵りはせちがふ音の聞えけるに、何事ぞとゝへは、河川の堤きれ、野道に時ならぬ川のいで侍べりし物から農夫の、木々土表を手にして足を空にかけ侍るなりと。梅雨の頃のいまはしさ。晝過る頃は雨もやう〳〵やみて、めづらしく日影のさすは、中々に嬉し、わきて夕べには、ほのめく三日の月に、ほとゝきすの一聲、あはれになつかしかりしか。

出雲　高橋依子

尼寺の、看經の聲しめやかに、もれて里の男が水せく聲も、今日此頃は聞こえずなりぬ、菴にあきて椽に立ち出れば、岩にむすこけの緑に黄にさま〴〵なる色の、いき〳〵と生ひたる、いかなる美の神のものし給ふ業なるらむと、見惚るほどに、清子君成られしとの事に、驚きてかへりみれば、ほゝゑみて立てゐましぬ、此頃のつれ〳〵に堪かねてこしつるとのことにて、思はず話は進みて、暫は軒の玉水の音も聞こえず。

松山　泡子

小止みなき五月雨に、はや幾日を過しけん、晴間なき雲のみ恨めしう、果はいふせくて、そゝろ氣も消えぬへうこそ、けふもひれもす垂れこめて、縫ひ殘りの衣服とうてつゝ、つゝり行針のあゆみにも、うみ果て、語ふ友もがな、と思へとも、しのぶに傳ふ、軒の玉水ならでは音なふ人もなきに、堪へかねて、窓押しあくれば、雨もいつしか晴れて、西山に夕やけいと赤し、あれ、嬉し今夜は月も清からめ、いで腰折なりとも物してと、樂しき思ひ、小さき胸に横はりし甲斐もなく、又降り出す雨の足、あゝ、今夜も物を思はするかと思へば、何となう世の中の事にも、遠ざかりぬる心地そ、せらる、やむ方なくて燈火の許に文開きし身は、いつか書も閉されて、思ひは走る、已往の感、はた、將來の想ひ、はては、金州丸の撃沈、……扨も憎きは露國人なる哉、哀れなるは憤死せし金州丸の忠荒雄よ、と思ひつゞくればむれんの涙やる方なし。

夜は更けぬ、四方は寂として聲なく、眠れるが如き天地間、只雨の音のみ、折々聞ゆる、犬の遠ほえ、いと物凄し、あはれ、今夜此頃、遠征に出にし軍人、遺族の雨洩るわらやの思ひやいかに、

松山　南青子

降りつゞきぬる梅雨の、いぶせさに、家にのみたれこめつゝ、暮したる、早茲に數日、庭の梅の實と諸共に、或心さへもうみすてけるを、いかにせむ、昨宵の雲行にては、今日こそ晴れ渡るらめ、さらば氏神

の社に詣でん、友や訪はまし、などゝ、嬉しう思ひ構ひしも徒なれや、今朝もまだをやまぬ雨に、瀧のやうなる軒の雫昨日に變らず、門の小川は水かさいやまさりて岸をも打越えんとする樣なりけり、あゝ此頃よ、山川に沈みし朽木さへも、世に浮び出づるとぞきくを、あはれまことの埋木如き身は世に花も咲かせず此まゝ朽ち果てぬらんか、あな甲斐なき我身なる哉、と口惜しき事、限りなく思ひやられつゝ縫かけの衣取り出てゝ針を運びつ漸く午つ頃仕立終りぬ。

午後あまり徒然なるまゝ書齋の窓の文机によりそひて古への文ども繙けばなかなかに心慰むるよすがともなりて、面白き心地ぞせらるゝ、折しも學び舍より歸りし弟の父上のみ前にて、日露戰爭の樣を物語り初めぬ、あはれ思へばみ國の爲に眞心を盡さるゝ軍人たちは、わびしきとつ國の野に、雨の日も風の日も露いとひ玉はぬものを、あゝ安らかなる家に籠れる我、などて、年々の例なる此梅雨をわびしいぶせしなどゝ、云はるべき、さらば明日よりはひたにつとめはげみてんと日頃徒らにのみ過したる身の、いよゝ改めし心の程を、後日の爲にしるし置かばやと思ふものから、日記帳のうちにかくなん。

汐干狩

采蘋女史

花開きて風雨多しといへど今年は我國民の襟度にも似てしづ心なき風も無く色わするほどの雨もなくて殘花春寂寞とはげに昨日今日の四方の眺め也誰が發議ともなくて明日の日曜は汐干狩といふにこゝ學校寄宿舍の今宵は大騒ぎとなりお臺所の方には今日の割烹主任文子様派出なる銘仙の綿入に黒繻子と更紗縮緬の帶を引掛けに結び襷甲斐〳〵しく木鉢を前に煑染めたる干瓢を揃へ俎に載せて、きるの役澄江さんは御飯に（無論賄ひより炊きてよこせしなり）酢をうちて團扇もてさます役海苔焦がす人醤油こぼす人其の番ならぬ人も手助ひて見事（とも云はれねど）にお重詰は出來たり上が海苔卷のお鮨下が口取一體女學は御料理は不調法に成り勝の者なれどようした物にて一室十何人居る中には學問の方はいつも二の町にても天性割烹の好きな人が必らずありて斯う云ふ時には賴まずと天晴やつて退くるものなり其の代りに日頃の鬱憤は此所に伸びて得意さうな忙しさうな事と云ふものは、されど不性なる側の人は手を袖にして明日御馳走に成る事なれば甘むじて氣焔を吐かせ置くのみかは、どうしても何々さんには叶はないわなどと甘き言をいふ黒川さんは何として此樣な可嫌な襟にしたまひしぞ私のをさし上ぐべし掛け換へたまへなど云ひて遠慮なく云ひ親切にも蒔繪の手箱搜すもあり髮洗ひつくろひし緣近く出て梳づる人明日一日遊ぶのなれば物云はず人に耳も借さず机に向ひて勉强する人みな溢るゝ斗の心の中の樂しみ

なり招魂社の梢淡きわたりに銅盤を懸たらむ如き入日の影、嬉し、明日の天氣思ひやられて

四月十八日八時寄宿舎をいづ師の君の御居間に參りて行てまゐるべければの御挨拶みな嬉しげなり同行は舍監斯波ぬしを初め大きなる人五六人幼なき方四五人許りいつのまに聞傳へ給ひてか英語の先生隈川ぬし御家族をさへ伴はせて此所に賑はしう加はり給へるまして嬉しく車列ねて芝汐留へと急がす丸屋に暫し息ひて支度調へて橋の邊より船漕ぎいづ塵ばかりの雲も無く春の海長閑にて風ゆるやかに吹き舟脚輕く行く身は只飛仙に成りて虚空を行く心地もする哉漕出たる時は只此船と今一二艘のみなりしを蒼海原に出て三の臺場わたりに着きぬれは江口神崎ならなくに傳馬船荷足船の舷摩る斗りに漕き集ひて各か自々船の舳に棹高く立て日の丸の旗あるは手巾ある は羽織等をさへ捧けたるは興に入りては元船遠くなるも知らて貝拾ふ處女等の歸さ迷ふまじき目標なりけり房總の山は水の泡のやうに霞こめて波立たぬ海面にさまてみえさりし白雲の影のみ動き海苔篊朶のひしと樹て到ねし中に何にかわらむ魚の躍りたるも愛らしまあ此海苔？と目をみはりての給ふは鶴子樣そうです共、船頭の〇〇てすと隈川先生の戯らるゝにア、可厭だとは幼き人々の一齊に叫び給へるにて我同志も打笑ひたれと晝餉の設けの上のお重は少しも手の附かさりしそ可笑しきまだ潮の全くは干ぬに船の上にて暫し待つ幔打まはし鳴物を乘せ聞知らぬ俚歌唄ひ女子すら面赤う醉ひ老たるも若きも同し染色の手拭なとに顔包み頸に卷き、職人めきたる男の白い物こちたく塗りたるか不束なる手振に舷を踏轟かして酒をし過しつれはか足下も蹌踉と舞ふ底のみるめも如何わらむ潮今落たりとて我も〳〵と海におり立つ赤きリホンを結ひ垂れし髮は肩よりたれ長き袂の波に濡るゝも知らす忘れ貝砂交りに握みては本意なしとつぶやき蛤虹螺の大きやかなるを探り宛ては水底の白玉得たらむやうに嬉ぶ只三時間斗りの面白さは殆と夢中にてありきさる程に舟人の早く舟に乘り給へ今日は思の外に潮惡ろしといへと遊ひに心入れて何斗りの事かわらむ今暫しなと云ひてのみ在る中に貝拾ふ友の三人二人と少なくなり潮はたし踵を沒膝を浸すに心惶遽しく濡たる裾を絞り冷たき手足

拭ひあえず爭ひて船に乗る質に潮も滿ち風さへいて舷打つ波の音すさまし我如く遊にて後れたる人は波にぬるゝもさてはよし五十斗りなるやつやつしき老夫の子にや孫にや九つ斗りならむ男子の手を引き扶けて腰切りの襦袢只一重にて春猶寒き海原に水深く浸り貝拾ひて籠重たけにあさりしがさし來る潮に歸り後れて歩まむとすれはみを深くみるみる子の胸部まてさしくるに子は泣き出し親も困して共音に泣きしか情ある獵船の通りかゝれるに辛うして救け乘られつ

あなや如何にすらむ此船よせてと周章騷きて痛かりし胸も是に落居たりかくても拾得し籠の貝は命と共に拾んともせぬは哀彼か命を繫く糧の代なれはなるへし歡樂盡きて哀傷生すとかや船の中みな打しめりたり沖への方は眞机あけて房總の山今そ分明にみえて舟人の繰る棹苦しけに船の動く事鞦韆のやうなり是れ位の波に醉ひて蒼き顏したまふよ寶丹にても參らす可きか背推し參らせむ兩三年の中には洋行する積りと宣ひしは抑誰樣の事にかと勢はりつ慰めつ漸く水馴棹さしとむる所に着きぬ來かけには似す髮は亂れ衣も濕濡り今はいふせきさゝえ等籠に滿てたる貝と倶に包みて午後五時に寄宿舍に着きぬ、留守し給へるは森田ぬし林ぬし廣き座敷淸う掃ひて窓の下に花瓶据え遲櫻の大きなるを挿し歌よみて色紙に書き等して居給へり莞爾やかに我等を迎へて如何はかり今日の汐干の面白かりしそ。こゝの長閑なりつる一日も云ひ知らぬ樂なりき湯も立ちてありいざ浴して來たまへ燈の下に木の茗煮て互に談合はん等のたまふ友情温きものなりけり隈川先生は途中より別れて歸り給へり先つ斯波ぬしに悦を述へて師の君に家土産の貝を奉らむとす

短文

雨の夕暮

熊野　白蘭女史

かりにも他郷に身を寄するもの誰か故郷を思はさらむ戀しき垂乳根懷かしき姉妹懷はしき友垣の月日送れる空を誰か仰ぎて戀はさらむ況してしと〳〵と雨の訪つれ軒の玉水靜かなる夕暮心細う鳴く鳥の聲れぐらにと急ぐその姿など見てはいとゞ心の亂れ來て垂乳根の君や如何に同胞やいかにとそゞろに思ひを故郷に馳する折柄あはれを添ふる遠山寺の鐘の聲低う永うひゝき渡る今日などて我心狂はさらめや。

山又山川又川幾つとなうへだてし雲井の彼方に戀しき故山はあるな

らむ雨降る日風吹く夜我が父母は遠く吾が身の上を思ひ給ふらむ吾が成業の日を指をり數へてまちまさむ吾れ故山を離れて早や三年になりぬ去年來りし雁はいつしか歸りぬれどおのれは空しく時のみ過ぎて故郷に歸るの日又豫期しがたき也あはれ何時の年何時の日にか戀しき故山の地を踏み得可きや。

思ひ去り思ひ來れば吾れと我が身のふがひなさに眼閉づれば父母の御面影手に取ることくにてあはれ優しく滋愛深き御言の葉今にも洩れなむ心地するに思はず故郷の空を伏し拜む膝の上に露か涙かはらはらと。

雨はいつしか止みて山の端よりまとかなる月はのぼりて雨後の我庭をいと美しう照せりあはれ月は故郷とかはりなけれど今日はながめん勇氣などかあらむ笑める月はさながらわれを嘲けりておのが業ならぬをかこちし我が涙のそれのごとき葉末の露を照らすと覺えては。

古戰塲を見ての感慨

東京　石川薫子

古道苔滑かに古松老杉一山を擁して晝猶幽暗なるが如し思へばこは是れ戈、劍、矢叫びに、あらゆる悲慘を極し古戰塲！　敵弾雨注の只中に劍を揮ひ、敵を目掛て猛く突入り幾多の人血と幾多の人命を味ひほふりし劍！　思ふて此に至れば我知らず冷き汗は肌を透しぬ、處定めぬ虫の音も千載の恨を抱て眠れる士の叫びかと聞え、往昔の盛事轉た夢の如く浮び出ぬ、噫矣今や我千萬の同胞は世界の仇、平和の仇を打こらすべくあらゆる悲慘と辛苦とをなめて居るので有るア丶戰爭………。

春庭

肥後　千々波橘子

梢の花はとくちりて青葉のいろとなり侍れば、楓の若葉は今を盛りに庭にしげり。立ならぶ松さへいろにいづるかと思ふばかりなるに。つつち椿もおとらじと咲にほふなるに。口なしのいはぬ色なる山ぶきは暮ゆく春ををしみがほなるもをかし。あすは終日おもふ友達をこゝに集ておそびなばいかに愉快ならまし。

暮れ行く空

東京　松澤まつ子

綠の髮を切り下げた若き婦人、手には櫻の一枝を持つて伏目勝に、ふと其足がにぶくなつた時、無情なる風さと吹きて、其手にせる櫻を三ッ四ッ五ッはらはらと散らした。すると、婦人は何を思ひ浮べたので有らう、見る見る、目にはあやしの露が宿つた。さはれ、やつれし頰の邊りにえ云はぬほゝ笑みを浮べつ。さて、暮れ行く空を打あほぎて、其さゝやかなる道をいそぐのであつた。

一夜の夢

樋口つる子

岩谷淺子様は常からあなた樣の御文才を慕つて居ります者此節はとんと秀麗なる御筆の跡を拜しませんのでほんとに物淋しく如何遊ばされたかと絕へず心に思て居ります詩想高き君の樣な御方に御交際が願はれたらまあどんなに嬉しい事で御座りませう。ついこの間淺子の君に逢ふ事が出來て記者樣初め懷しい皆樣に逢ひ終りに三好珍子の君とも青葉の蔭にて手を取りつゝ愉快に歌がたりせしとはあはれはかない机上のゆめであつた。

短歌

折にふれて

土佐香陽立田　秋月廣江子

うたへ君此の時この日女とて御軍祝ふ歌ながらずや

友のおくつき

長野　上野よし子

白うめをたむけて君のみなよびて只ひとりなくおくつきのもと

同
おくつきにみたびとひきてみなよばゞ夢かあらぬか君が聲のする

春野　栃木　茂山春香子
長き日もまだあかなくに傾ぶきぬ花よこてふよあすなちぎらん

故三浦中尉　大阪　長野悦子
わたつ海にみはしつむ共ふじのねのたかきいさをゝ誰かあふがぬ

卯花　肥後　宗方儀子
空の海に星は見ゆれど卯のはなのまがきの山はくれやらずして

螢　播磨　藤澤秀子
淵あみして心すゞしきゆふまぐれ軒のあな田にほたるとぶなり

玉川にて　東京　三好珍子
駒とめてむかしをしのぶ袖の上にこがれ花ちる井手の玉川

夕落花　同
夕月のかげふみながらうたおもふ袖にほはせてちるさくらかな

海邊を散歩して　三河しづ子
島やまはかすみの中にうつもれてあまのふれうたいそへにきこゆ

日露の戰爭をきゝて　肥後　千々波橘子
いとどひろき野原の露も朝日かげさすにまかせてきえやはつらん

夕落花　肥後　岡山登喜子
入相のかねのひびきにさそはれてみ空しづかにちるさくらかな

首夏風　大和　栗山俊子
きのふまて風ないとひしみよしのゝよしのゝ山は夏めきにけり

川邊花　大和　栗山高子
すみた川よするさゝなみ心せよさくらのはなはいまさかりなり

熊本縣三所の官幣社に征露宣戰奉告の勅使參向式な
遙に拜み奉りて　肥後　佐々小学子
春風にきらめきわたる日の御旗たちむかふあだはつゆときえゆく

肥後　佐々有鄰子
日のぬきの北の國中のしこくさは御旗のかぜになびきたれふす

禁中郭公　播磨　本多宜子
大君にきこしめせとやおもふらん聲もゆかしくなくほゝときす

花菖蒲　和泉　稲原菫子
あり明のつきかげうかふ池みつにほのぐみゆる花あやめかな

知人出征騎兵に送る　下野　井上滋子
のろこまのひづめにかけて仇野のしこくさ倒しかへりませきみ

同　砲兵に送る
まごころをこめしおほづゝいつ發にてきの鐵壁ふたへやぶらん

箱崎八幡宮に詣て　熊本　かず子
數ならぬ身のねぎこともみいくさのみかちをいのる外なかりけり

萍
池の面に生ひそふ波のうき草のたねはかけひの水やまくらん

日露開戰につきて　石塚　栗原はま子
天地をわがものが性のあらわしながりて手捕らんもろこしのはら

ますらをがほこをそろへてしこ草の露うちはらふ時はきにけり

廣瀨中佐　三河　しづ子
水そこにしづむともよし君が名は御代と共にもくちせざりけり

川山吹　同
神風のいすゞのながれそこきよみ匂ふゆかしやまぶきのはな

征露　千葉　野口喜多子
つゆの國うてや朝日のひかりもて武勇すぐれしわがますらをよ

折にふれて　横須賀　岩橋花子
しべりやの荒のにおふろしこ草もみ國のかぜにかゝるゝぞうれしき

東都の友を想うて　伯耆　樋口賀代子

此文の教ふる徳にふみてこそまことの道の關は知るらん　肥後・徳永眞壽子

暮春

ちる花の名殘をなしむきのふけふこゝろつれなく春そくれゆく　肥後 徳永純子

はかなくも青葉にかはり花ちりてつれなくくるゝ春をしぞおもふ　肥後 板坂惟子

雨中早苗

田子の袖しづくひまなきさみだれの水せきいれて早苗とるなり　肥後 田尻成子

朝時鳥

我まつと誰かつげけん朝とこをおとつれてなくやまほとゝぎす

やまとたまてふ文字を折にしてよめる　長野 山本民年女

やまとなるますら猛雄かとつ國とたゝかふ毎にまづかちにけり

題しらず

我もまたおの子にあらば鋒とりてみ國のためにあたやうたなん　長野 小泉みつじ子

山家烟

遠山のかけのいほりにたつ煙りいかなる人の住家なるらん

名所蛙

時きぬとすたく蛙のもろこゑにせかれてよとむ玉川の水

河邊柳　井澤てい子

色添ひてふかきみどりのみなそこになみよる河の青やなぎかな

同じく

河風は吹きな散らしそ青柳のみどりのなみはあや敷ける見ゆ

海軍中佐廣瀬君　こと子

もの〻ふのつかさとなりし廣させの波音たかくなもひゞきけり

暮春　東京 敷島うた子

ゆく水にあやもみとりを織りなして川そひ柳はるたけにけり

寄竹懷舊

ましまさは朝夕共にくれたけのたのしきふしも見るべかりしを

海軍戰死者　山梨 標武子

君がためつくしはたししもの〻ふは龍宮あたりにかたりあふらん　同

月夜の藤

さきそへていよ〳〵たるゝ白藤のあしもとさえて月たほろなり　同

首夏藤

はるすぎてなつにもかゝる藤波のながき花こそなほさかりなれ　三河 鵜野くわ子

池鯉

池のおもにおふるうきもはすむ鯉のひれふるたびに打なびきつゝ　同

新樹

春秋にいとひしかぜもなつかしなさくらかへての若ばさすころ　豐橋 木多きさ子

初時鳥

ほとゝぎす初音さやかに聞ゆなりうのはながきのゆふ月のそら

今様

白百合　下野 井上滋子

浮よの風にちりひぢに　染ぬこゝろの白ゆりや
花のか高くつゆおびて　立るすがの床しやな

まごゝろ

箱のご殿にまちゐます　小雛のそばにさくらちる。
少きあるじは水くみに。　いま飯たきて進らせん。

菫　長野 上野よし子

俗歌たかくしづのをが　馬おひのぼる山みちに
優しく清くうなだれて　何をかおもふ花すみれ。

初夏　大阪 黒田代音子

廻る月日にたゆみなく　春はいつしかくれ竹の

若葉しげりて夏はきぬ　ほとゝぎすさへ音連て

東京　三好珍子

枕に鈴のひゞきくる　新ふみうりの聲高し
露營の火をおもひやる　戰の揚のゆめさめて

ほとゝぎす

五月雨はるゝ空みつゝ　まどより西の月まちて
しばしまどろむ手枕の　夢おどろかすほとゝぎす

山梨　標武子

螢

いさらを川のさゝやきに　岸べに出し螢火も
さすが闇路やしたふらん　月のひかりにうすれゆく

松山　ゆかり子

亡き友の寫眞のうらに

櫻かざしてもろ共に　遊びし友は今いづこ
あゝうつし糸の一片に　やさしき姿はなけにけり

東京　辻岡ゆかり子

雨中牡丹

胡蝶の夢をさまさじと　そぼふる雨を身にうけて
匂ふ心もふかみぐさ　露おもげなる風情哉

折にふれて

露のまゝなる花あやめ　手折りて君が庵とへば
内よりもるゝ箏琴の　さても床しきしらべ哉

東京　春野花子

日比谷公園にて

親をつれたる少女あり　子の手ひきゆく母もあり
比日谷の春の夕まぐれ　そゞろあるきの數々に

○

紅もゆるなかにまた　一群しろき白つゝぢ
同じ盛りの花ながら　めづる人こそ變りけれ

水戸　細谷はる子

菜種の花もさかりなり　胡蝶の戀も清けなり
姉と弟ときみが代を　歌ひ行くこそ樂しけれ

○

一聲高く名乗りして　過ぎつるものは時鳥
征夫の夢の成り破れて　現に故郷しのぶ草

篠田すゞしろ子

雨中挿苗

うの花くたしふる雨に　聲しぼりつゝ賤の女が
田うたひまなく千町田に　植うる早苗のうるはしさ

横須賀　岩橋花子

野の夕

もすそを拂ふ夕風に　菜種花散る小山田は
畑守る人の影もなく　咽ぶ蛙の音のみなる

歸雁

櫻花散るゆふまぐれ　海山とほき故さとの
父母戀ふる折柄に　雁の一つら過ぐるかな

伯耆　樋口つる子

失題

霜も雪をもしのぎつ　廣野ににほふ梅の花
折られながらも咲振の　諂ひなきぞこゝちよき

親の子を思ふ

木の葉交りに時雨ふる　夜半こそ進め我手業
眠る稚子の笑顔にも　我が夫君のしのばれて

大阪　黒田代音子

出征軍人を祝ふ

めでたきけふのかしま立　征衣をはらふ風きよく
のぼる朝日も麗らかに　君がかど出や祝ふらん

藤花

肥後　千知波橘子

花はいつしかちりはてゝ　木末さびしききのふけふ
若葉の山をながむれば　みどりしたゝる松がえに
棚引わたるむらさきの　雲かとみねて藤なみは
春のゆかりの色ふかく　千代もあせずてさきかゝる

夫の出征を

常陸　栗原はま子

君がため　御國につくす
時をえて　いでますいもが
たまの緒を　なかくもがなと
ぬばたまの　我くろかみも
ながしけり　しかはあれとも
我せこよ　死すべき時に
死なずんば　死ぬるにまさる
恥ぢありと　いにしへ人の
昔の榮を　心にかけて
くれ〳〵も　敵にうしろを
見するなよ　進みすゝみて
茂りあふ　しこのしこくさ
なぎはらへ　たとへ御身は
しへりあの　廣野の露と
消ゆるとも　名をしみせんに
とゞろかし　いく成代の
末までも　人のかゞみと
仰がれよ　立田の川に
紅葉葉の　散りて流るゝ
末みても　錦とひとの
見はやさん　よしや吉野の
山さくら　花は散りても

香をとめて　みそら清くも
天照らす　雲の上まで
つたへあけてよ

反歌

梓弓ひきかへさしと我せこが
むかふかどてのいさましきかな

大塚里子

海軍中佐廣瀬武夫君

武士の神にうたはれて
史の光をそふる君かな

金州丸遭難を聞て

あらわしの羽風に消しますらをが
うらみはふかし北の海原

櫻花のさかりに靖國神社に詣ければ數多の兵士が軍馬をならすを見て

武士の駒のりならすさくらの上に
ふたひらみひらちるさくら花

高谷いち子

親友

つくろはぬ言葉のうへにへたてなき
友の誠はあらはれにけり

ひが事をかたみにいさめいさめらるゝ
思ふとちこそ嬉しかりけれ

高谷花子



○皇后宮御懿旨

我皇后陛下が常に深く軍人家族の救護事業に御心を勞させ給ふ趣は豫てより承り及ぶ所なるが此頃愛國婦人會長閑院宮知惠子殿下の御伺候あらせ給ひし節も同會の近狀に關して種々御下問ありしを以て同殿下には曩に同會へ對し御下賜金ありし以來一層の盛況を呈し全國各府縣支部の如き互に會員の增加と救護の普及に一大競爭を爲し居る有樣にて支部役員たる婦女等は各自費を拋つて奔走盡力しつゝありて其結果極めて良好なる旨言上に及びしに陛下には殊の外御滿足に思召され尙ほ身分の高下を問はず多數の會員を募り以て軍國に盡すべき婦女子の本分に遺憾なからしむべき旨御沙汰ありしやに承る

○兩女王殿下の御芳情

常宮周宮兩女王殿下には去月十三、十四の兩日品川停車場前なる御用邸に御微行あらせられ御園内の高所より驛内の模樣を御覽あり十三日は同驛に居合したる陸軍大尉澁谷周藏幷に驛長荒卷虎熊の兩氏を園内に召して拜謁を仰付けられ且つ御手づから御菓子を下し賜ひ又十四日は午後より雨を催せしかば御健康の程如何あらんとて佐々木伯爵より切に御歸殿を乞ひ奉りしかど遠く征くべき者の身の上を思へば斯ばかりの雨は物かはとて御聽入れ遊ばさず折しも二時頃にやありけん新聞號外の聲微かに聞えて御園の崖下を慌しう走り行く人の影さへ御目に止まりければアレ求めよとて特に數十枚御買上げに相成りペトロパウロスク沈沒、マカロフ提督の溺死とあるは時に取りての吉報なれば折から通り合はしたる兵士に分てよと御仰せありければ井口少佐は感泣して世

にも有難き御趣意の程を部下に傳へ一同御園の外に整列して皇室の萬歳を祝し奉りけるに續て少佐へ御菓子の賜ものあり兵士はいよ〳〵感激して下賜の新聞號外は扁額に仕立てゝ永く家寶となすべき旨一同申合ひたりとなん

○一枝の櫻花

（伏見宮と愛國婦人會）

花は散るに床しく人は命の捨て所義に勇む敷島の大和健兒が出征を送るには櫻花こそよけれと去んぬる頃より意氣天を衝くなる軍隊輸送の途京都の停車場を通過の折には同所の愛國婦人會は櫻のつくり花に香しの歌しるせし短冊をつるし慰め贈りしは天晴軍國婦人の業として芽出度次第なれ

さる程に竹の園生に榮えめでたく四民の儀表に抽んでゝ某師團長の職をとらせ給ふ陸軍中將伏見宮貞愛親王殿下が去日御出征の途すがら御由緒深き同地に御立寄り相成り更に翌日御發車あらせられしに際し一の床しき物語こそあれ

初め殿下の御出征を聞くや愛國婦人會京都支部にては例の櫻花を宮に献け奉るに一決したれど其頃はまだ開花の時期に早く思ふ櫻の花なかりしより所々を搜し索めて圖らず嵯峨は渡月橋畔山田病院の庭に早咲の櫻ありと聞くより同會幹事は直に院主文友氏を訪づれ其旨を詳さに語り告げしに院主も宮殿下に献上するは身の光榮なりとて快よく諾ひ枝振よきを切り取りしもなほ滿開には間もあるより半井醫師方の温室に置きしに心なの櫻木も殿下御出發の當日には一枝に滿ちたる花蕾開きければ會員の喜び限りなくこれに和歌を添えて贈りまゐらせしに殿下の御喜悦斜めならず御容さへ常にましていと麗はしう拜し奉りし

其の後東本願寺の連枝日野尊寶師が法主代理として軍隊慰問の爲めそれの地に向ひし折節御滯在中の殿下を軍旅の御宿にとひまゐらせしに殿下には種々の御物語あり特に京都愛國婦人會が心づくしの櫻花に短冊添えたるやさしき贈物には殊更御感深かりし由

に承はりしとぞ

○一位局下賜の御守

中山一位局の徳篤くして御情のやさしさは今更申す迄もなきことながら此度の戰役には一方ならず心を出征軍人の上に注がれさまざまの御惠も最多く聞えたる中に此程沼津の御別邸に在して旅順港閉塞の事に與かりたる七十七士の一人一等機關兵士屋勝太郎氏が勇ましき働振を聞かれ其靜岡縣人なるによりて殊に心にとゞめられ同氏の父梅吉が駿東郡淸水村長濱にあるを招かれ御守の錦の袋を下賜されしかば老父梅吉は嬉し涙に咽びつゝ一兵卒なる勝太郎が働きに斯程までに御心をよせさせらるゝかと御惠の篤きを伏し拜みて罷り出でけるとなん

○軍人家族授產婦人會

出征軍人の家族にして生計に不如意のものあるを憂ひ之が惠與賑恤の途を圖らん爲め這回芝區內有力家の夫人等共同して軍人家族授產婦人會なるものを組織し二三職業を撰びて軍人家族中希望の者に此職を與ることゝなせりと云ふ其發起者及會則は左の如し

發起人（いろは順）

子爵 伊東祐亨妻 伊東美津子
服部三樹之介妻 服部文子
岡田治衛武妻 岡田靜子
高橋新吉妻 高橋鈴子
男爵 黑木爲楨妻 黑木百子
江副廉藏妻 江副熊子
齋藤專藏妻 齋藤專子
男爵 淸浦奎吾妻 淸浦錸子
男爵 森村市左衛門妻 森村菊子
男爵 千家尊福妻 千家俊子

軍人家族授產婦人會規約

第一條　本會は陸海軍下士卒の家族にして生計不如意の人々に職業を與ふるを以て目的とす
第二條　本會は軍人家族授產婦人會と稱し當分の內授業場を麻布區廣尾町百三十七番地に置く
第三條　本會の撰擇せる職業は洗濯業、裁縫業其他簡易の業務とす
第四條　本會は發起人及び贊成員に於て事業維持費を償ふ程度迄醵金し別に汎く寄附金等を募集することなし
第五條　事業を與ふるは婦女子を主とするも場合に依りては男子にも及ぼすことあるべし
第六條　就業者は芝區內居住の軍人家族を先にし員數に不足あるときは發起人會の決議に依り他區より募集することあるべし

第七條　本會は就業者に渡すへき賃銀の幾分を郵便貯金若くは銀行貯金と爲し置き相當利殖を計るものとす尤其額は本人と協議の上之を定む

但貯金通帳は本會々計に保管し印形は本人各自に所持せしめ家計上其他須要の場合にあらされは之か拂戻を請求せさらしむるものとす

第八條　賛成員は發起人二名以上の紹介に依り加除するものとす

第九條　本會に左の職員を置き發起人中より撰擧す

庶務主任　一名
會計主任　一名
現業主任　一名

第十條　本會の成立は戰時中にして戰局終了に至れは一旦解散するものとす

第十一條　解散の場合には第七條の貯金は各就業者へ全部交付すへきも可成之を消費せさる方法を講せしむ

第十二條　本會解散の場合に於て收支計算上剩餘金を生したるときは發起人會の決議を以て就業者に頒付するものとす

第十三條　就業者に於て幼兒携帶の爲め應分の勞働を爲し能はさるときは其情狀に據り就業時間中本會に於て特に其幼兒を保護することあるへし

○軍人援護會

軍人の家族及び遺族救助を目的とする軍人援護會は其の創始以來日尚は甚だ淺きに拘らず　上には皇后陛下の御嘉賞と有栖川親王殿下の御提撕あり外には義勇なる在留米國人諸氏の賛助あり殊に米國人諸氏は其本國に聯絡して大に本會を賑はさんとの計畫あり其着々として發展しつゝあるは吾人の大慶する所なり

國民は此狀態に感謝すると共に進みて自家の本會に對する任務を盡すに力めざるべからず

○軍人援護婦人會

横濱萬治病院の看護婦西村てつ子同事務員飯島つる子の兩氏發起となりて軍人援護婦人會なるものを組織し出征軍人家族の困難者を扶助慰問する目的にて寄附金を募集する由なるが右寄附金は一口金五錢なれども一人にて幾口申込むも差支なき由而して實行を期する爲勤儉節約を旨とし左の各項を確守する由

戰爭の終局迄絹衣を新調ぜざると
三食以外の間食をなさゞると
酒類煙草を禁すると
止を得ざる場合の外乘車せざると
自ら結髮する事

○出征軍人家族慰問會

毛利公爵母堂安子を理事長に推し各婦人會役員等の發起に依りて組織されたる出征軍人家族慰問會は會員已に千餘人に達し本部を麹町區永田町一丁目十九番地大日本婦人教育會内に置き諸般の調査を了したる結果東京市内の出征軍人八千九百五十人の内貧困家族千四百餘戸に對し本月より相當の補助をなす筈なりと因に同會は各區に委員若干名を置き出征者の家族を戸毎に訪問して其生活の模樣等をも親しく調査する由にて出來得る限り各貧困者の事情に適したる慰問並に補助の方法を講ずる由なるが是等婦人の慰問に對し各軍人の家族は何れも非常なる滿足を表し慰問者は爲に一層の熱心を以て此事に從事しつゝありといふ

○黒髮を截りて看護婦志願

彼の山内一豐の妻が綠の黒髮を斷截り馬匹を購ふて良人を出陣せしめたる其操にも比へつべき健氣なる婦人こそ現はれたれ深川區常盤町二丁目四番地家田伊太郎(三十)と云へる者豫備二等水兵にて先頃召集せられ妻およね(二十)は其後惜氣もなく黒髮を斷ちて身を謹み居たるが女ながらも國家の爲めに赤心を盡さんものと覺悟し一昨日其筋へ向け特志看護婦の志願に及び跡には老母おいと(六十)と養子喜八(十)の兩人殘り居るも深川區奉公會にて月々七圓宛を給與するより生計にも格別差支へなければとて昨今其筋の許可を待ち居れりと云ふ

○上崎未亡人の水雷艇獻納計畫

廿七八年の役威海衛攻撃に其名を轟かしたる六號水雷艇乘組上等兵曹上崎辰次郎氏未亡人雪子は亡き夫が志のありし所を忘れじとて專ら子女を教育するの傍ら神田表神保町十番地に煙草屋を營みしよりこゝに七八年今回日露の事起るに及び諸方に婦人の恤兵救助會等の設けあるが中にも雪子は全國の婦人の

賛成者を求め向ふ三年を期して軍艦一艘を政府に献納せばやと計畫せしが小笠原長生子が口添へありて水雷艇ならば上崎兵曹にも緣故ある事なり餘りに大なる望をするよりは此方がとの言葉に今は夫々賛成者募集の準備中なりと流石は軍人の未亡人と聞くもの皆感じあへり

○英國婦人の看護婦志願

英國の西ボールマウスのトルナー孃ボルクスのアール、グリフス孃ヨークシヤイヤのフロスト孃グラモーガンのエム、パスユル孃の四名は過日日本赤十字社へ同社看護婦に採用せられたき旨申込みたる由なるが四名とも公使其他當該官吏の手を經由せず一個人としての申込みなれば同社にては目下其採否に就き詮議中なりと

○實踐工藝兩女學校卒業證書授與式　去月一日午前九時より開かれたりき今其模樣を概記せんに先づ定刻に至るや本會よりの招待に應じて參校せられたる卒業生の父兄保證人を始め教職員卒業生修業生一同樓上の假講堂に會し先づ君が代の唱歌にて式を開き校長の訓諭的告別詞實踐工藝卒業生總代の謝辭朗讀（各一名）修業生總代の祝辭朗讀あり次いで卒業生一同の告別の唱歌修業生一同の卒業生を送るの唱歌等にて式は閉ぢられたるが下田校長の演說は言々句々皆肺腑より出で慈愛の熱情自づから言外に溢るゝものありたるを以つて來賓教職員を始め生徒一同送るも送らるも皆一樣の感に打たれ左ながら眞の親子兄弟の訣別れを惜むが如くなりしとぞ當日は本會樓上樓下に兩校卒業生の製作品を陳列して縱覽に供したるに皆非常の好評なりき

○綠綬褒章授與　苗栗廳苗栗一堡嘉盛庄胡阿應の養祖母徐友妹は其の善行誠に表彰すべきものあるを以て本月四日賞勳局より綠綬褒章を授與せられたるが其辭令は左の如し

資性温順善く舅姑に事へ妙齡にして夫を喪ひ舅姑交々再醮を勸むるも固く貞節を守りて之を肯はす一意奉養家政を經紀し其後舅姑疾に罹るや寢食を忘れて側傍に侍し看護療養到らざる所なく其前

後相踵て歿するや慟哭悲哀人をして感動せしむ爾來節約を主として益々家業に勵精し追弔祭祀一も缺くる所なく克く一家を支持し養兒孫を撫育する等志操の堅き四十七年一日の如し鄕閭擧な其篤行を稱す洵に奇特とす依て明治十四年十二月七日勅定の綠綬章を賜ひ其の善行を表彰す

○マツクリーン女史の手紙

我が水兵の母を以て名ある英國のマククリーン女史が目下米國に滯在中なる我が某海軍將校を通じて我が水兵に與へたる三月二十五日付の手紙左の如し

現役に在る三萬のスイヘイへ

遠く朝鮮、滿洲、支那に在る我が愛する小供等よ我が心は日々汝を慕ひ我は精神に於て汝等の中に住む戰爭は殘酷なる分子にして吾人が愛しては日々善なれかしと祈る人々の尊き生靈を惜氣も無く奪去るものなり日本に漫遊せよといふ親切なる汝が招待を受けし以來我は激動を覺えぬ未だ汝等に手紙を出すには至らざりしかど我は倫敦駐在海軍武官を經て汝が親切を容諾し英國各島內到る處の幾多の心と手とを動かして我が愛する小供の爲めに祈り且つは我を扶けて日本に對する吾人が愛を物質的の形を以て表顯するに於て上帝が善しと見給ふ可き準備をなすことゝなれり然り我は三十の物品を日本に齎さんとす我は富まずと雖も而かも尚幾百の友は日本に對する我が主義勞働を愛し且つ歎稱するが故に我は恰も部下に命令を發する提督の如し何となれば彼等は凡て美しき袋を縫ひ以て我を扶くることを好み又此外幾多の友も此の紀念旅行の紀念として美しく綴れる書物を我に贈れり

我は未だ汝の如き親切を知らず我が友は汝の爲せる手配を聞く度に驚きて歎息せざるもの無し勿論今日は斯くの如きことを語る可きに非ず我は目下此のこと並に日本に就き大に筆を執りつゝあり遠からず世間に發表せらる可し

全英國は日本に對し同情を表す是れ驚く可きことなり吾人の陸海軍は水兵兵士としての汝に對し只一箇の意見を有するのみ「凡て勇敢にして恰當なる人」

是れなり我は親しく多數の將校並に其夫人を知るが故に我は我が言ふところのものを知る我は勇敢にして然かも親切なる人を愛し殊に過去に於て戰ひ今亦戰ひつゝある人とを愛す(中略)汝等は既に得たる鴨綠江幷に旅順口の大勝に對し祝賀せられざる可からず我は將校兵士に依りて日本が受けたる損失を悲み屢々疑ふらく我が愛する小供將校中右にいふ國家の爲めに戰死したるものあるにあらざるやを余は彼等に對しては再び天上に於て相會せんことを希望し殘餘のものに對しては武運目出度勝利を齎らして恙なく歸來せんことを希望す汝等の中苟くも聖書を有するものは詩篇第九十一章及び第百七章を讀み身心二つながら之を上帝の保護に委す可し上帝は汝等の身邊にあり彼を信頼するものゝ祈りを聞き玉ふ彼は天地萬物の造主にして彼の心は母のそれにだも似たり「我が子よ汝の心を我に與へよ」といふ
余が大準備成るの日汝等は再び日本に歸來し正當なる勝の結果を樂みつゝあらんことを希望す
神よ常に汝等を守り玉へ我が愛する小供等よ

汝等の愛せる母　　エム、マックリーン

○横濱女學校規則の改正　私立横濱女學校は規則を改正し從來の學科に更に造花科を加設すること本科第一學年に入るべきものは年齡滿十二年以上にして高等小學第二學年修業若くば之れと同等の學力を有するものとし第二學年以上に入るべきものは各學年相當の學力を有すのものとすること技藝科第一學年に入るべきものは年齡滿十三年以上にて高等小學第三學年修業若くは之と同等の學力を有するものとし第二學年以上に入るべきものは各學年相當の學力を有するものとす但し裁縫科若くは割烹科のみ專修せんとするものは此限りにあらずとすること等なり

○實踐工藝兩女學校の擴張　帝國婦人協會下田歌子女史設立の該校は澁谷村に移轉後作法教場及び和洋料理研究所を設け本月中に寄宿舍も竣工の筈にて此際各級生徒を募集し造花刺繡科は無月謝入學を許す由

（以上五月十二日締切）

	歌	文
七月	軍人 避暑	七夕祭の記 出征軍人の首途を送りて
八月	夏海 述懐	盂良盆の日祖先の墓に詣でゝ 出征軍人の家族を慰問する文
九月	初秋月 閑居	夏季休業中の事を記す 志を述べて親しき友に贈る文
十月	山家霧 電信	仲秋月を觀ざるの記 出陣中の父君(若くは兄弟)に贈る文
十一月	風前紅葉 烟	天長節 秋季運動會
十二月	歳暮 杖	家庭日記(三日間) 歳の暮に故郷の母君に贈る文

定價

一册	前金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半年分	前金壹圓拾錢
拾貳册一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁 三十二行	金八圓
一頁 六拾四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割増の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に壹錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附ありたし

明治三十七年五月三十一日印刷
明治三十七年六月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊秦一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋 特八八番)

日露戰爭の正紀

幸田露伴監修

討露戰史 第貳編

定價 金四拾錢 郵税八錢 ● 菊版洋裝綴美本參百餘頁

◉ **口繪** ● 我陸海軍の四皇族 ● 當局の三大臣 ● 征露軍の首腦 ● 時局の將軍 ● 東洋艦隊司令長官マカロフ中將と敗殘の旅順艦隊 ● 浦鹽市街 ● 軍神廣瀬中佐并に其の遺墨

◉ **目次** ● 戰と詩歌 幸田露伴 ● 戰爭觀 阿多廣介 ● 嗚呼廣瀬中佐 水主青眼

◉ **旅順浦鹽大海戰記** ● 吾が艦隊五たび旅順を攻撃す ● 吾が艦隊六たび旅順を攻撃す ● 浦鹽斯徳の大砲撃 ● 吾が艦隊四たび旅順を攻撃す ● 七星門外の戰 ● 博川江畔の戰 ● 定州南門の戰 ● 旅順口敵艦の全滅 ◉ 附錄

開戰前後内外の形勢 ● 總論 ● 歐米の外交 ● 列國の局外中立 ● 露國の海陸軍備と作戰計畫 ● 開戰後露國の形勢(其二) ● 開戰後列國の評論(其一) ● 開戰後露國の形勢(其二) ● 日本人の露清韓引揚げ ● 日進春日兩艦の回航 ● 韓國の形勢 ● 清國の形勢 ● 西比利亞及滿州の形勢 ● 露國の通牒に對する我國の辨妄 ● 捕穫船の審檢 ● 軍資金の充實 ● 恤兵及び軍人掩護 ● 韓國特派大使 ● 帝國議會

◉ 本戰史の**特色**は**記事明確順序整正**恰も**歷史戰記**を繙くが如く**錯雜混亂**を讀んで要領を得ざる**雜誌類**と其撰を**異**にするは**第一編**を讀みし**各位**の熟知せらるゝ所也

發行所 東京京橋區築地二丁目 **國光社**

大本營參謀本部、大藏省、農商務省、司法省、鐵道作業局、各府縣廳、裁判所、郡市役所、警察署、各學校、會社銀行、本願寺、御用其他一般ヨリ續々御注文アリ

内國通運株式會社編纂

新式

大日本里程地圖

（縮尺四拾萬分の一 分割四拾壹枚壹部）

用紙舶來上質厚物●堅牢美裝總クロース金文字入●印刷鮮明三色刷●脊皮クロース　巾九寸長一尺三寸　帙入
巾一尺三寸　長一尺八寸　▲見本入用の方は郵券貳錢を送附せられたし

二種同價 **壹部正價金參圓五拾錢**（送料）東京大阪兩市內無料其他帙入參拾錢洋裝貳拾錢臺灣帙入五拾錢洋裝四拾錢

本圖の資料は三百年來繼承の歷史を有する內國通運株式會社が現に全國に有する幾多の機關に就き調査審定せしものなれば正確無比と云ふべし　**特色其一**は人車馬道車不通道車馬不通道の三道を朱記區別し一々里程を明かになし加ふるに郵便線路を附記して旅客の來往貨物の運輸に空前の便益を與へたるものなり　**其二**は各地重要の物產を圖中に表記して地方物產の所在とこれが集散の系統を知らしむるにあり　**其三**は地方行政廳は勿論專賣局支局稅務監督局稅務署稅關特別輸出港郵便局電信局銀行鑛山兵營溫泉海水浴神社佛閣名所古跡城墟港灣燈臺等三十有餘種の記號を各々其の所在地に附記して一目の下に重要の地物を知悉せしむるにあり　**本圖の製圖**は多年斯業界に堪能の譽ある專門技師に託し之を圓錐式に法り開展製圖せしものなれば世間普通の地圖と自ら其の撰を異にせり

本圖は內國通運株式會社が第五回內國勸業博覽會に出品して朝野官民の間に歡迎せられたる著名の地圖にして更に昨年四月以來增補改訂に從事し刻苦經營漸く稿を脱したるものなり故に交通運輸上又は旅費計算上必要缺くべからざるは論を俟たず官公衙及各學校陸海軍人銀行家保險家辯護士醫師修學旅行者等常に一本を備へて携帶に便ずべきものなり

發行所　東京市京橋區築地二丁目（電話新橋特八八 二六九三）　株式會社 國光社

大取次所 東京吉川弘文館●大阪市合資會社積文社●大阪市盛文館●新潟縣長岡目黒十郎●名古屋市川瀨代助●名古屋市星野松次郎●長野市西澤喜太郎●仙臺市東北書籍會社●山形市牧野德太郎●秋田市成見清兵衛●福井市品川太右衛門●富山市田中書店●金澤市宇都宮源平●熊本市長崎次郎●鹿兒島市吉田幸兵衛●横濱市田沼書店●前橋市換乎堂●千葉町多田屋支店●水戸市川又銀藏●宇都宮市內田濱吉●靜岡市吉見義次●甲府市大塚明正堂●大津市島林書店●岐阜市玉成堂●弘前市今泉本店●札幌富貴堂書店●

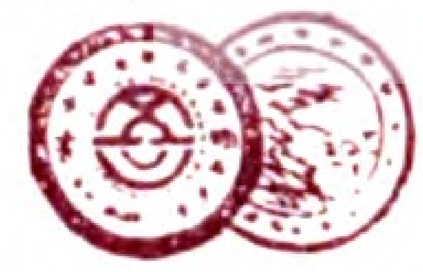
第五回內國勸業博覽會

銅牌并に褒狀受領

壽美禮
おしろい

登録商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい



壽美禮おしろい

● ねり製（定價 大罎 二十錢 小罎 十二錢）

水製（定價 大罎 二十五錢 中罎 十五錢 小罎 十錢）

ヴワイオレツト水製

錫栓附乳白硝子罎入



すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟𨉷等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生せず御肌へを清々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

● 皮膚艶白劑壽美禮あらい粉 ●

綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢

罐詰 六錢五厘　袋入 壹錢

● 弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

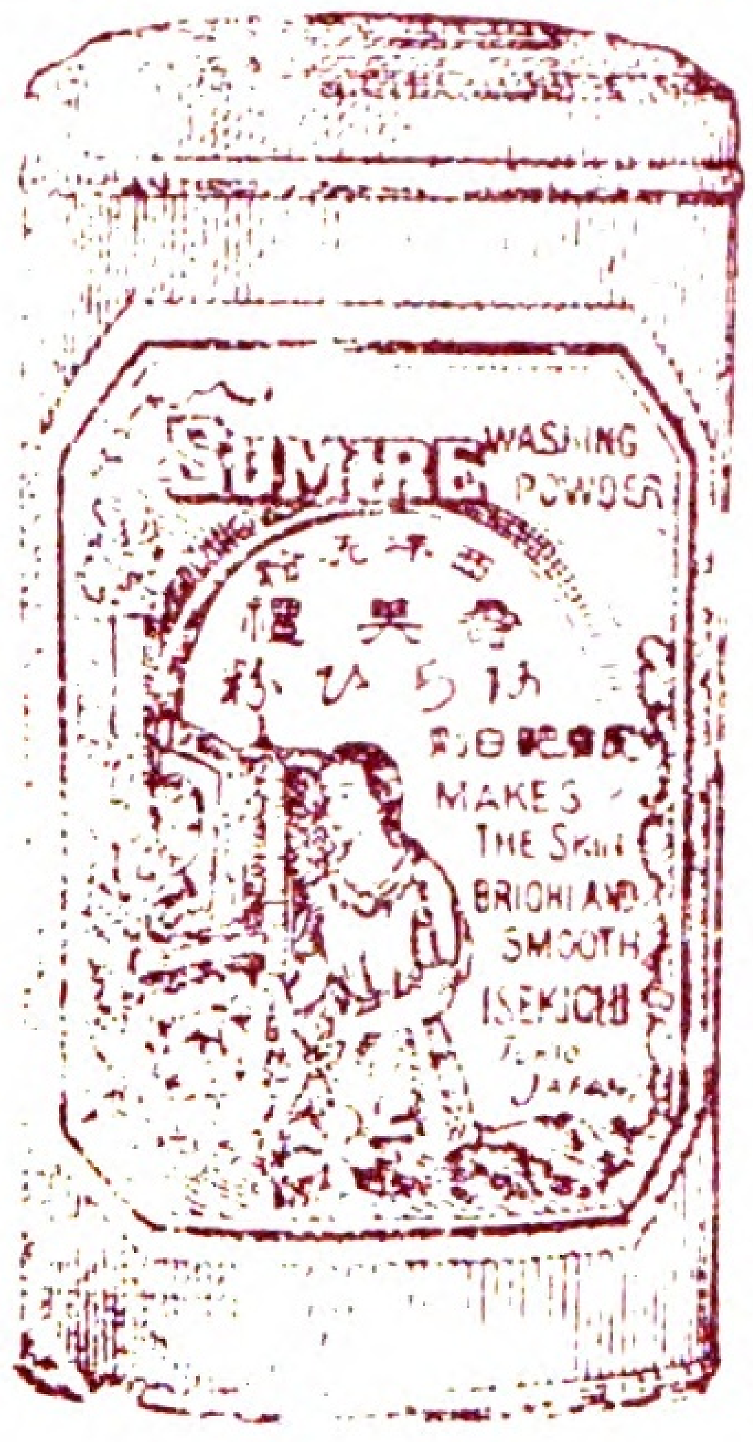
● 常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

● 使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登録商標

洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHING POWDER.
壽美禮あらい粉



製造本舗

東京東兩國（兩國橋際）元町

伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

明治三十七年六月一日發行　毎月一回一日發行　第拾四年第七號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光印刷